

加古川地域のちから

～安心・安全を創る～

— 「熟議 2015 in 兵庫大学」 報告書 —

2016年3月

兵庫大学・兵庫大学短期大学部

目次

| | |
|-----------------------------------|-----|
| はじめに 「熟議 2015 in 兵庫大学」報告書の刊行にあたって | 1 |
| 第1章 「熟議 2015 in 兵庫大学」実施計画について | 3 |
| 第2章 熟慮の段階 | 19 |
| 第3章 議論の段階 | 29 |
| 特別寄稿「場」が若者を育てる | 58 |
| 第4章 熟議への意識と地域の課題 | 59 |
| 第5章 熟議が高校生に与える影響 | 91 |
| 第6章 熟議が大学生に与える影響 | 115 |
| おわりに 今後の熟議の発展のために | 147 |
| 資料編 | |
| ◇「熟議 2015 in 兵庫大学」開催結果 | 156 |
| ◇当日速報 | 159 |
| ◇熟慮関連資料 | |
| ・自己認識シート（事前） | 163 |
| ・熟議の進め方 | 164 |
| ・熟慮の段階 | 167 |
| ・事前アンケート | 177 |
| ・寄稿 | 181 |
| ・資料集 加古川地域の力 ～安心・安全を創る～ | 183 |
| ◇高校生に向けた研修資料 | 207 |
| ◇事後配布物 | |
| ・事後アンケート | 210 |
| ・自己認識シート（事後） | 214 |
| ◇学生事後研修資料 | 215 |

はじめに

「熟議 2015 in 兵庫大学」報告書の刊行にあたって

兵庫大学・兵庫大学短期大学部 学長 三浦 隆則

「熟議 2015 in 兵庫大学」は、本学の熟議としては4回目の開催になります。第1回(2012年)は、文部科学省との共催で、「地域社会における生涯学習社会の構築と大学・自治体の役割」をテーマとして行いました。「熟慮」して「議論」するという「熟議」の手法により、異なる世代の者が集い、教え合い、学び合う場となりました。

第1回の熟議の成果を振り返り、熟議の推進役である本学の「熟議プロジェクトチーム」は、熟議を1回で終わらせるべきでなく、「継続する」との結論を出しました。新たに3年間のテーマとして「加古川地域の未来について話をしよう！」が定められました。

3年計画の1年目である第2回(2013年)は、加古川地域の現状と課題を知り、今後進むべき道筋について知ることとしました。地域のニーズを知ることとともに、「強み」と「弱み」を解析する形で進めました。2年目となる第3回(2014年)の熟議のテーマは、引き続き「加古川地域の未来について話をしよう！」ですが、サブテーマを「①加古川地域の防災・減災、②加古川地域の防犯」としました。具体的には、①では「安全・危険の判断は誰がするべきか」、②では「防犯カメラは必要か」について議論されました。加古川市との共催になったこと、熟議の情報共有としての代表者討論会の実施など、記憶に新しいところです。

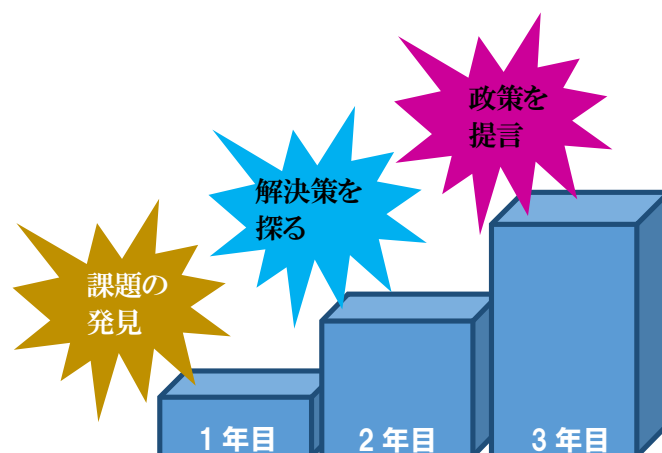
さて、「熟議 2015 in 兵庫大学」は、3年計画で進めてきた「加古川地域の未来について話をしよう！」というテーマの最終年度に当たります。サブテーマを「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」とし、3年間の集大成として、「創る」までを目標としました。第1段階では、地域における安心・安全の課題を明らかにし、第2段階では課題についての解決策を話し合い、ワークショップの最後に、各グループの結論を「カルタ」にすることになりました。全員で知恵を絞って、「カルタ」を「創る」ことができました。なお、熟議の閉会時に参加者に「速報」を届けることができ、素敵な「創る」となりました。ウェブでの事前学習(熟慮)、大きな1会場でのグループワークとしたこと等も含め、今回の熟議の成果を、本報告書からお読み取りいただければ幸いです。

最後に、本熟議に参加していただいたみなさま、メインファシリテーターとして熟議の時間管理、推進をしていただいたNPO法人生涯学習サポート兵庫理事長の山崎清治さま、各グループのファシリテーターとして事前研修に励み、当日のワークショップ運営にご尽力いただいた学生諸君、熟議実施にいたるまでの諸準備と報告書作成にご尽力いただいた熟議プロジェクトのみなさま、および関係者のみなさまに深くお礼を申し上げます。

第1章 「熟議 2015 in 兵庫大学」 実施計画について

1. 3年間の熟議の集大成

2013年度、その前年に行われた文部科学省と兵庫大学の共催で実施した「熟議 2012 in 兵庫大学」の成功を踏まえ、地域の大学として、加古川地域（加古川市、高砂市、稲美町、播磨町の二市二町）の活性化をテーマに熟議を継続することとした。熟議の企画運営にあたる熟議プロジェクトチームが発足した。熟議プロジェクトチームは、3年計画の熟議で結論を導き出すことを決する。いわば長期を見据えた熟議の計画を策定したのである。そして、1年目は、課題を見出し、2年目に課題の解決策を考え、3年目に政策を提言するなど、実行に移すという段階を踏むことになった。基本的にこのプロジェクトチームが熟議の企画、運営を行う。下記は、「熟議 2015 in 兵庫大学」の時点でのプロジェクトチームのメンバーである。



熟議プロジェクトチーム（「熟議 2015 in 兵庫大学」）

- ・田端 和彦 兵庫大学エクステンション・カレッジ長 / 社会福祉学科 教授
- ・吉原 恵子 生涯福祉学部長 / 社会福祉学科 教授
- ・北島 律之 情報メディアセンター長 / 社会福祉学科 教授
- ・木下 幸文 健康システム学科 教授
- ・森下 博 経済情報学科 准教授
- ・久井 志保 看護学科 准教授
- ・小林 洋司 短期大学部保育科 講師
- ・岩崎 治夫 学長室長
- ・柏村 裕美 学長室員

地域を考える、という兵庫大学での熟議の方針は、その後、2015年までの間に、兵庫大学が進めるCOC（Center of Community）における役割も与えられることになった。兵庫大学では、大学の特性などを踏まえ、地域の拠点として、地域の活性化や再生、競争力の強化などに積極的に関与し、その地位を確立することを目指す。その結果、兵庫大学での熟議は、徐々に、市民による話し合いの機会として、民主主義における主要な手法である熟議の普及を図るという手法の確立、という方針に加えて、COCの要との位置づけが追加されるようになった。その一環として、主要なパートナーとしての加古川市の役割も大きくなった。実際、加古川地域をテーマとする2年目の「熟議 2014 in 兵庫大学」より加古川市が共催団体として運営にも関与、「熟議 2015 in 兵庫大学」では企画にも参加している。

さて、1年目の熟議、「熟議 2013 in 兵庫大学」では、テーマを「加古川地域の未来について話をしよう！～世代を超えた熟議～」と定めた。加古川地域にある課題を明らかにすることを目的とする。そのための方法として、SWOT分析の考え方を踏まえて、加古川地域の強みと弱みをまず明らかにすることから、議論を経て課題を明らかにした。

熟議の結果、加古川地域の「強み」を強化するために、世代を超えての交流とコミュニケーションの活性化など「地域への参加」が課題として挙げられ、また「弱み」を克服するために地域の変革に必要な「人材の活かし方」が課題となっていた。その上で、共通して、加古川地域の犯罪の発生率の高さや交通事故が多いことなど安心・安全に係る内容が指摘されていることを踏まえ、安心・安全は熟議により合意形成を行う具体的な課題として適切であるとされた。

2年目の熟議、「熟議 2014 in 兵庫大学」においては、前年に挙げられた課題の解決策を熟議により探り、見出すことを目的としている。熟議プロジェクトチームでは、前年の課題の導出を再度検証しながら、「地域への参加」や「人材の活かし方」等の課題については、解決策を見出すことが難しい、という懸念が示された。これら課題は、従前より地域の活性化や再生において、繰り返し指摘されながら、具体的な解決策がなかなか得られなかったことも事実である。そこで、熟議による議論に向く具体的な課題として、安心・安全を取り上げることとした。加古川市をはじめ多くの自治体では、安心・安全を例えば長期総合計画に組み込むなど、行政課題の一つとしており、安心・安全を課題とした場合、行政への提言などを3年目に行う場合にも安心・安全という課題は適切であるとの結論に達した。

ところで、「熟議 2014 in 兵庫大学」を企画する段階では、熟議の進め方についても再度検討を行った。それは解決策に関する結論が出た後、政策提言など実行に移すまでの道筋を、従前の熟議手法で導くことができるか、という点である。兵庫大学熟議手法は、議論の後、それを共有し実行するまでの段階を包摂することを目指すものである。しかし、ワークショップを手法とする熟議では、合意しやすい内容に結論としては陥り易い。それは責任が明確ではなくなるなど、次のステップに移る場合に、議論の土台を作りにくい。安心・安全も幅広い要素があるため、できる限り詳細な、参加者にとって身近なレベルにまで課題を絞る。そして課題を絞ることを熟慮に組み込むこととした。議論の対象となったことは2つの具体的課題（1）安全・危険の判断は誰がすべきか、及び（2）防犯カメラは必要か、である。こうして2つの課題についての議論が行われた。

議論での結論は、(1)については自分での判断を、(2)では必要ということであった。そうした結論の一方で、具体的な方法論、例えば(1)については、行政が提供する公的な情報と地域での独自の情報を組み合わせることによって判断の基盤とする、などの点である。

さて、3年目であり、加古川地域についての熟議の最終年度となる、「熟議 2015 in 兵庫大学」では、この結論を踏まえて政策提言などを行うこととなった。加古川地域を考える上で課題となっている安心・安全についての、実行に向けた集大成の計画を作成する必要があった。

2. 「熟議 2015 in 兵庫大学」の課題

とはいえ、熟議プロジェクトチームは、当初より解決策の実行に向けた具体的な方法を考えることで大きな障害に直面することとなった。すなわち「熟議 2014 in 兵庫大学」での結論を踏まえての、政策提言など実効性のある方策を見出すことが困難と判断された。前述のように、熟慮の際に課題を詳細に絞り、それを議論することは、熟議の流れの中で、参加者の意見集約の方法としては、有効な手法であったことは確かである。しかし、出た結論が明確であるがゆえに、それ以上の議論の範囲が相当に狭まった。例えば、防犯カメラの必要性の有無の結論は、「有り」となっており、この結論に基づく実効性ある方策は、技術的な内容、制度設計上の内容を検討することによって得られるものであって、これは専門家集団に委ねるべき点であり、様々な年代の市民が集まって、熟慮し議論を行うという兵庫大学での熟議とは異なるものと考えられた。つまり、従前の熟議手法では、当初想定した通りに、ステップ3で、安心・安全の解決策としてステップ2で得られた「防災カメラの設置」、「災害時には自己判断で行動すること」を実現可能にするため、熟議をする、ということが相当に難しいと考えられた。

「熟議 2014 in 兵庫大学」では、明確な結論が得られたが、議論の内容を詳細に検証すると、(1)の安全・危険の判断では、自己で判断をするためには地域と住民個々との関わりが重要であると指摘され、また(2)の場合、防犯カメラの設置の効用を認めつつも、それだけではなく犯罪を抑止するために地域での活動を強化することの重要性が示されている。つまり、結論は明確であっても、その背景には地域とのかかわりが強く示唆されていた。つまり、政策の提言など実行に移すためには、地域とのかかわりを議論する必要があると考えられた。

さらに、熟議プロジェクトチームでは、企画の立案にあたって最終の着地点、つまり実行に移すことの定義を再度、考慮せざるを得なかった。当初、3年間の熟議では政策提言を一つの結論にすることを想定していた。しかし政策提言を行うだけで実行する、といえるのか、むしろ自律的な行動も求められるのではないか、との提起がプロジェクトチーム内であった。政策提言を行っても実現するかどうかは、行政または立法府に委ねられることになる。例えば、熟議に参加する市民の数が、有権者の相当数を占める場合、熟議の結論を無視することはできないであろう。それは一種のレファレンダム（住民投票）

に近いものと扱われる¹。熟議のように比較的規模は小さくとも、課題について市民が熟慮し議論するという適切なプロセスを経る仕組みの場合、課題解決に適した政策提言を行っていることを、政策担当者、あるいは決定者が認識をしない限り、提言が有効に扱われる可能性は低い。加古川地域の自治体も課題と認識することを熟議のテーマとして取り上げるだけでは、必ずしも十分ではない。

熟議プロジェクトチームでの討議の結果、市民自らの役割も含めた政策提言や市民の自立的な活動の具体的提案といった、市民を巻き込む内容を、実行に移すことの具体的内容、すなわち最終の着地点とすることとなった。そして、前年の成果を踏まえ、地域とのかかわりを議論の中心に据えた上で、地域に安心・安全をもたらす具体的な方法を熟議で考えるのである。地域をキーワードとすることで、より議論の幅が広がる。そもそも兵庫大学熟議手法では、議論の場にワークショップ方式を採用している。ワークショップ方式は、ディベートのような相手を説得するという議論ではなく、より話の幅を広げた上で意見の集約を図るため、幅広い議論を希望する場合に適している。これまでの兵庫大学熟議手法を活用するのであれば、このワークショップの特性を発揮する課題を取り上げるに限る。こうした事情を鑑み、「熟議 2015 in 兵庫大学」のテーマを「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」とした。

今後の社会のあり方は、行政制度だけではなくその意思決定も含めて市民の力を活かすことが重要となる。地域を考える熟議の最終年度となる「熟議 2015 兵庫大学」で、その部分をより深く議論すること、そして従前の安心・安全を課題に新たな市民社会の形成に向けての第一歩にする。

さて、「加古川地域のちから」という課題であるが、「ちから」とは何を意味するのであろうか。「ちから」=Power とは、モノを動かす原動力であり、環境や他者へ働きかける力と考えることができる。「加古川地域のちから」とは加古川地域が持つ、加古川地域を変革するための影響力であり、主として市民が加古川地域をよりよくするために、つまり内への方向への影響力を想定する。その源泉として具体的には、地域に存する NPO やボランティアなどの組織、人材などの地域の資源、いわゆるソーシャルキャピタルとされるネットワークや互恵に基づく関係が考えられる。さらにこの「ちから」を発揮するために必要な金融や制度、機関などを組み合わせ、実現可能な方法を導き出すのが熟議に期待されると思われる。1年目の熟議「熟議 2013 in 兵庫大学」で出された課題、「地域への参加」や「人材の活かし方」とも関連して議論されることが期待された。

学内に設けた熟議プロジェクトチームは、以上のような過程を経て課題を固めた上で、共催の相手ともなる加古川市とも検討を行い、テーマの理解を得るとともに、加古川市としては、地域の住民の自立的な動きを歓迎したい、自分たちのアイデアや努力によって、自分たちが生活しやすくなるということに気づいて欲しい、との意見を得た。その上で、公共施設の老朽化、子育て世代からみる安心や犯罪の課題、事件や事故が、例えば投資や居住をためらわせるなど、経済的な波及効果について議論があることを期待する、とされた。

¹ 大阪都構想の是非、あるいはスコットランド独立の可否に見られるように、住民の生存にもかかわる重大課題を相当の規模のレファレンダムにより決する直接民主主義の動きも、議会制民主主義を基盤としつつ、それを支える役割という位置づけにおいて、熟議型民主主義と共通すると考えられる。

ワークショップ方式を活かすために、議論を広げることを企図した課題としての「加古川のちから」は、多様な捉え方があるため、ワークショップにより意見を集約するためには工夫が必要となる。そこで、「加古川のちから～安心・安全を創る～」をメインテーマとして、安心・安全を市民が創り出すための、より具体的な課題を導き出し、さらにその具体的な課題について解決策まで導く、という2段階方式での議論を想定する。

第一段階では、例えば20年後の将来を想定して、課題を見出す議論を行う。特に課題の要因は何か、といった点をまず明確にする。第二段階では、その課題の解決を議論する。20年後に備えて、ということでもよいのかもしれない。行政に頼るだけではなく、今の自分たちの資源や事情を踏まえ、そこにアイデアや努力を付加することによって、自分たちが安心して生活しやすくなる、という提案を求める。20年以内には相当の確率で、南海トラフ地震が発生すると言われるが、その時期、高齢化が進み不安が増す中であって、住民同士の防災ネットワークを学校とつなげることで、学校を核にまずは「生き残る」ことを考えるなどの議論ができると思われる。

3. 熟慮の段階とウェブページ

兵庫大学熟慮方式は、次のようなステップで進める。これは過去3年間の継続する熟議の中で、確立してきた流れである。



熟慮の段階は、議論に至るまでにテーマについて参加者が調べ、考えるという機会である。熟慮の段階で、参加者は兵庫大学のウェブページを用いて考えることとなっている。「熟議2013 in 兵庫大学」では、地域を考えるために、郵送により熟議プロジェクトチームからの情報の提供を行ったが、翌年の「熟議2014 in 兵庫大学」では、熟議プロジェクトチームと参加者の双方向のやり取りと即時の情報の提供のためウェブページを設け、安心・安全というテーマを、身近な課題に絞り込む熟慮に活用したことは前述の通りである。「熟議2015 in 兵庫大学」でも熟慮の機会に、ウェブページを用いる。そのコンテンツは、熟議プロジェクトチームの吉原が中心となって構成した。コンテンツの制作にあたっては、熟慮の段階を事前学習と捉え、思考のプロセスを辿るものになるような工夫がなされている。

最初は準備段階で、用語についての認識を問うことになる。第一に、加古川地域のちからというテーマでは、「ちから」を参加者がどのように捉えるかということが重要となる。参加者がその認識を持つ機会となる。学びにおいては、考えを記述することも重要となる。ここにインターネットの、リアルタイムでの双方向性を生かした。第二に、安心・安全をテーマとしているが、そもそも私たちは安心、安

全という語を特に区別して使うことがあまりない。熟慮にも、議論をする基盤とするにも用語の整理は不可欠である。定義を明示した上で、参加者のそれらの語に対する認識を整理してもらう。

議論に係る段階では、まず地域における、安心・安全に関わる自分自身の経験を振り返り、これを熟議プロジェクトチームでは「記憶を辿る機会」と呼ぶ。この「記憶を辿る機会」の必要性は、多様な年代の方が参加する熟議から生じている。地元根付き地元での経験が多い高齢者や社会人と、その経験が十分ではない高校生や大学生など若年者が同じテーブルで議論をするとどうしても、議論の内容に差が生じる。そこで議論のベースが必要となる。つまり、高齢者も若年者も同じく、地域における自分の経験の中での安心・安全に関わる点を振り返ることができる。それを認識したうえで議論に臨むことが基盤となる。少なくとも、2段階に分かれる議論の第一段階に設定した課題を考える、という場面であって、自らの経験を語る機会を持つことができる。

続いて、地域の力をもって解決することを考える。その場合、地域についても認識を喚起する必要があるだろう。安心・安全、との語以上に、地域とのいう用語も様々な使用方法がある。兵庫大学が行う熟議では地域を、東播磨2市2町としているが、実際、具体的な活動として市民がそのちからを発揮するためには、身近な範囲の地域での課題を考え、解決策を考えるだろう。つまり、参加者が事前に地域の認識を新たにしておくことで、それぞれが想定する地域が異なっていることを理解し、議論の場では、互いに異なる環境下での地域の課題解決の方策を話し合い、共有することも可能になる。

こうした学びのステップをウェブページに公開し、参加者がそこにアクセスし、ステップを追いながら議論に備える。併せて加古川地域の安心・安全、また加古川地域のちからにかかわる資料集を独自に作成し、ウェブページで公開した。なおウェブページに実際に提示した内容については巻末資料編に示す。

前述のように、本学では、2014年度より熟議の特設ページの立ち上げとその運用を開始した。そして引き続き、2015年度も「熟議2015 in 兵庫大学」特設ページを開設している。その目的について、ウェブページ開設時に掲げられた3点をまず確認する。

1点目は、熟議について広く告知を行い、参加者の募集につなげることで、そして当該事業について全国に情報を発信し、兵庫大学・兵庫大学短期大学部の知名度向上を図ることである。2点目は、資料を提供し、主催者と参加者との意見の交換をおこない、熟議当日までの熟慮の段階の充実を図ること、そして議論を深化させ、参加者の参画意識と協働の可能性を高めることである。3点目は、これまでの熟議の成果等を掲載することで3年計画の位置づけを明確にし、積み重ねてきた成果を踏まえて本年度の熟議があることの認識を共有することである。

開設は、2015年7月7日、次のURLでの公開となった【図1-3-1】。

<http://www.hyogo-dai.ac.jp/jukugi/>

大学の公式ウェブサイトのトップページのメニュー「社会貢献・生涯学習」には、「熟議」の項目が盛り込まれ、「熟議 2015 in 兵庫大学」特設ページへのリンクが掲載された。



図 1-3-1 「熟議 2015 in 兵庫大学」特設ページ（一部抜粋）

今回、特にウェブページが役割を担った事項 3 点を挙げることにし、一つずつ見ていく。

①熟議の参加募集（参加申し込みフォームへのいざない）

ここ数年、高校生の熟議参加の割合が大きい。これは近隣の高等学校へ積極的に案内をおこなってきたためである。本学の学生を含め、若い世代の方の参加は会の活性化につながる。一方で幅広い世代の方々が集うのもこの熟議の意義であり、欠かせない。ワークショップのグループ構成を考えた時、その参加募集は非常に重要となる。「熟議 2015 in 兵庫大学」のチラシはもとより、実施要項を掲載して、趣旨を深く理解して頂いた上での参加を促した。参加申し込みにあたっては個人情報が含まれるため、その管轄である学長室のもとで入力フォームの作成とデータ管理がおこなわれた。その参加申し込みフォームへスムーズにいざなうことの役割を「熟議 2015 in 兵庫大学」特設ページが担った。新しい情報

を随時掲載し、特に参加者の申し込み状況を日々発信することで、既に参加申し込みをされた方、そして参加申し込みを検討されている方への情報提供に努めた。

②熟議参加者への情報提示（研修会の告知と報告）

熟議参加者の中には、毎年参加頂いている方や今回はじめて参加される方がおられ、多岐にわたる。そのため、2012年から2014年までの過去の熟議開催にまつわる内容やその報告書を掲載した。特に2014年より開設したウェブページについては、まるごと閲覧できるようにした。今回は、熟議のテーマに関わる寄稿文の掲載や参加高校生の研修会の様子なども報告することができた。

③熟慮の段階における事前学習（ネット学習の実践）

本学が実施している熟議手法では、熟議当日の議論の段階の前に熟慮の段階がある。これは「事前にテーマについての学習をおこない、課題に対する認識と議論に臨む準備をする」と位置づけられている。当日の議論の活性化には欠かせない重要な段階といえる。熟慮の段階については、以前から参加者と熟議プロジェクトチームとの双方向性を高める必要性が挙げられていた。2012年および2013年は資料と回答シートを参加者に郵送し、紙媒体で返信するというスタイルで実施された。2014年は、ウェブページを通じて、問いかけに対する回答の一部をウェブページ上に掲載して内容の共有を図った。今年は、より充実した事前学習の方法を模索し、eラーニングを意識したネット学習の実践をおこなった。

3点目の熟慮の段階が、吉原のコンテンツを生かした部分であり、この点についてさらに記述する。この熟慮の段階では、与えられたテーマや質問に対して自身の考えをまとめることが目的であり、それを熟議当日に持ち寄ることになっている。その意味でコンテンツとその実施方法が重要となる。コンテンツについては、熟議プロジェクトチームメンバーが専門的立場からその内容の構成と作成にあたることになり、それを受けてページを構築した【図 1-3-2】。

その際、次のような展開のポイントが示された。

- 1) 熟慮の段階における事前学習は Part1,2,3 の三部構成とする。それぞれにスライドが用意された (Part1 は 10 枚、Part2 は 23 枚、Part3 は 13 枚)。
- 2) スライドは自身のペースで切り替えることとし、表示されているスライドの解説の音声も自身のタイミングで再生できるようにする。
- 3) スライドによる学習をしながら、その問いについて並行して回答できるようにする。

当初、スライドの動画再生を試みたが、ファイル容量が膨大になり、サーバの負荷にも影響を与えることが懸念された。そこで、静止画の各スライドとそれに合わせた音声ファイルを用意し、紐付けながら表示と音声の再生を実現した。これによりファイル容量の問題は大きく解消された。スライドを停止しながら、別画面での回答入力をおこなうこととし、また Part1,2,3 それぞれ別々に回答を送信することで、日をあらためてじっくりと取り組むことを可能とした。なお、スライドに合わせた音声

による解説は熟慮プロジェクトチームのメンバーが担当し、さらに目で追えるように文字情報の表示も用意した。そして、ブラウザの種類や環境などにもできる限り対応できるように努めた。今回「熟慮の学習広場」のメニューにページを設け、事前学習の進め方の説明はもとより、テーマに即した資料集も置いて、熟慮の段階の充実を図った。こうして動作確認をおこない、参加者の学習とその回答を待つことにした。

熟慮Part1

熟慮「Part1」

ウォーミングアップ
肩慣らしをしましょう！

<< 戻る 進む >>

音声表紙

スライド表紙
解説：
●「熟慮Part1」をはじめます。
●テーマについて考えるまえに、肩慣らしをして行きましょう！

図 1-3-2 熟慮「Part1」のスライドの表紙（以降 10 枚続く）

結果、Part1, 2, 3とも参加者の約6割の回答があった。残りの4割は、スライドによる学習をしたものの回答の送信をしなかった、またはネット環境がなかったなどが原因として考えられる。ネット学習による「熟慮」について、今後の改善のため、使いやすさや理解しやすさなどの感想のアンケートをとったところ、「使いやすかった」との回答がある一方、「使いにくかった」との回答もあった。また「熟

慮のプロセスがあったからこそ、当日の議論が円滑で内容の濃いものになったと感じた」との回答に加え、「方法については、インターネット以外の方法があっても良いのではと感じた」との回答が寄せられた。特に「ネットより紙で回答の方がよかった」との回答が複数寄せられたことは、熟慮の段階でのウェブページを活用した進め方について再度検討を重ねる必要がある。いずれにしても、ネット学習の実践とその反応を得られたことは収穫であった。

当然のことであるが、熟慮の場面のみならず、熟議の特設ページは、兵庫大学熟議手法のそれぞれの段階を活性化するための一つのツールとして、その役割を担っており、大いに活かされることが期待される。なお、今回、熟慮の段階については、メディアを活用したネット学習形態を取り入れ、新たな試みを実施しており、今後の熟議手法の改善にも寄与するものである。

なお、各人の熟慮の段階における問いと回答のまとめについては、後に触れる「熟議速報資料」にて当日の様子とともに掲載され、熟議終了と同時に参加者の手に渡った。熟議当日前に、「熟議の学習広場」での双方向的に学習できる仕組みができれば、熟慮の段階は深みを増すと思われる。さらには、議論の段階における即時性のある情報のアップ、共有の段階における議論の成果の提示、事後学習の場の提供なども検討すべき課題といえる。今回ネット学習の際はアクセスが集中したものの、一定のアクセスが継続するような状況には至らなかった。日々の更新がコンスタントにできたとはいえ、地域への発信の在り方や運用の仕方についての反省点は少なくない。

この熟議の特設ページが地域への情報発信に大きな役割を果たすためには、熟議参加者だけに利用されるのではなく、多くの方々に見て頂けるような媒体に進化することが望まれる。2012年から開始した熟議とその報告書については、「過去の熟議開催」内にデータが蓄積されている。2014年から運用を開始した熟議の特設ページは、本学が地域と連携して取り組んでいることを知って頂くツールとして役割を果たさなければならない。これまでの運用が、地域に根ざした取り組みの一端を担っていることにつながっていれば幸いなことである。

4. 議論の段階の企画の作成

(1) 参加者の満足度向上のために

4回目の熟議となり、毎回の参加者が増えるとともに、前年とは異なる熟議の進め方が求められる。前述した通りウェブページを開設したことも、そうした試みである。参加者はそれぞれの熟議の機会に、満足度を求めておりその工夫が求められる。「熟議 2013 in 兵庫大学」でのアンケート調査によると、満足度は、「とても満足」が 50.0%、「まあ満足」46.2%であったのに対し、翌年「熟議 2014 in 兵庫大学」では、「とても満足」が 38.0%、「まあ満足」55.4%と、満足度が低下していた。満足度を上げることが、翌年の熟議の参加者を拡大することに不可欠である。

その契機となったのは、他で行われる熟議や話し合いの機会に熟議プロジェクトチームのメンバーが参加したことにある。それぞれが行う工夫は、前向きに参加し、参加することによって報われる、という思いを参加者が持つためのものであった。

そこで、熟議プロジェクトチームでは次の点を検討した。第一に、速報性を持って、参加者へ熟議での議論の結果を伝えることである。熟議の成果は、ウェブページその他、各種分析を行った後の当該報告書により参加者に還元される。しかしウェブページは必ずしも全員が見る、ということではなく、また報告書はその完成に相当の時間を要するため、速報性とは言えない。望ましいのは、議論の当日に議論された成果を還元することである。第二に、熟慮の結果を明示する場を設けることである。熟慮したことは議論の場で発揮されることとなる。とはいえ、ウェブ上で意見を述べ、回答を行った参加者は、当然、次の議論の場であってその結果を知りたいと考える。これに対する返答が十分ではなかった。第三には、参加者全員が場を共有したとの実感を持つことである。ワークショップでの議論、その後の共有の場での議論など、複数の場面を、これまでの熟議では教室の移動により対応してきた。テーブルでの議論が終わり、移動の間にその熱気はやはり冷めてしまい、その思いを持って全員参加の場で共有することが難しい状況にあった。第四に、参加者からの声にしばしばあった、時間が短いという不満に対応することである。そして、第五に、何かを作り出すという達成感を持ってもらうことである。兵庫大学熟議手法では、ワークショップで結果を作り出し、それを共有することができるようになっているが、それを参加者が知覚してもらう工夫が十分ではなかったのではないかと。

以上について、集大成となる「熟議 2015 in 兵庫大学」での対応を計画に盛り込む。

まず、議論当日に、速報を発行し参加者に配布する。このことにより、当日の議論の様子を、速報をもって参加者に還元することができる。このアイディアは、国立明石工業高等専門学校で行われた「熟議 DAY」での経験を参考にした。同じく熟議を掲げるこの事業は「熟議 2015 in 兵庫大学」に先立つ 2015 年 6 月 14 日（日）に「明石高専の可能性」をテーマに開催され、熟議カケアイの発案者でもある鈴木寛文部科学大臣補佐官なども参加する内容であった。この際、速報が発行され、最後に参加者にも配布された。これは参加者にとっては場の共有の感覚を持つツールともなった。

編集や印刷時間を考えれば、熟議の進行中に全ての議論の結果を速報に盛り込むことはできないが、可能な範囲でワークショップの結果を掲載する方針とした。議論が終わり閉会の際に議論の成果として配布する。参加者は、結果をすぐ手元に持つことができ、その場で文字として議論の結果を共有するだけでなく、ともに議論をしたという一体感も持つことができる。さらにこの速報に熟慮の結果を掲載することにより、参加者は熟慮の際に兵庫大学へと返答した回答が分析等に生かされていることが理解されるであろう。また資料としての価値も向上することが期待される。

次に、議論と共有の段階、当日で使用する時間を午前、午後の終日とする。従前、熟議は午後から開始し、夕方までの時間で終了していた。しかし、「熟議 2015 in 兵庫大学」は、これまでの熟議の集大成ということもあり、終日の時間いっぱいを使用する方針とした。実際に 2 段階の熟議を行う場合、午後だけでは時間が不足する、ということは熟議プロジェクトチームでの時間シミュレーションで示され

ていた事実である。終日を熟議に充てることで、上記に示す参加者の不満としてあった議論の時間が短い、という点にも対応する。

さらに、会場を大きな1会場として、そこで議論と共有の段階を行うこととなった。これまで本学の教室を用いて議論を行ってきたが、最初の説明、テーブルに分かれてのワークショップ、ワークショップの成果の共有にあたって、大教室、小教室を短時間で移動しなければならない、という課題があった。この点が、慌ただしい印象を参加者に与えていたことは否めない。会場を1つとして、そこに全てのテーブルを配置し、1会場で、最初の説明、ワークショップ、共有を行う。この結果、移動に係る時間が不要になる他、同じ部屋で長時間を過ごすことで、参加者が場を共有する一体感を持つこともできる。さらに、最初の説明からテーブルを共にすることで、ワークショップにおけるアイスブレイクの役割を果たすことも可能になり、ワークショップでの議論を盛り上げることにもつながる。熟議プロジェクトチームではさらに、全てのテーブルが一堂に会し、ワークショップを1会場で行うことにおける利点として、進行を把握し制御しやすい点も指摘した。複数の教室に分かれてのワークショップの場合、テーブルにより進行の差がある。熟議プロジェクトチームのメンバーがそれぞれの教室を担当し、やむを得ず調整等の介入を行うこともしばしばあった。またワークショップのファシリテーターとなった学生からは、時間や進行の管理にのみ気を取られた、との意見も多数あった。1会場での進行の場合、メインファシリテーターを立て、時間管理を行うことで、各テーブルのテーブルファシリテーターは、ワークショップの議論に集中して、参加者の意見を最大限テーブルに出すことができるであろう。

メインファシリテーターは、そうした機会が多く経験が豊富な、山崎清治氏（NPO 法人 生涯学習サポート兵庫 理事長）が務めることになった。山崎氏は「熟議 2014 in 兵庫大学」において、共有の段階におけるメインファシリテーターを務めた。

最後に、何かを作り出すという達成感を参加者が持つことができるような工夫が必要である。熟議プロジェクトチームは、ワークショップの最後に、各テーブルでの結論を川柳にする、という案をまとめた。川柳など短い文章にする、ということは結論を再度見直し、集団での創作というプロセスを加えることにより、テーブルでの結論を共有することにも寄与する。その後、メインファシリテーターの山崎氏の案もあり、「カルタ」とすることに決し、最終的に、2段階の議論とその結論をカルタにまとめる、という進行に結びついた。

(2) 議論・共有の段階の企画

「熟議 2015 in 兵庫大学」では、2段階の議論を行うことを軸として、参加者の満足度を高める、との観点からの工夫を盛り込んでの企画の作成を進め、議論と共有の段階により構成される次のような当日プログラムを確定した。

| | 時間 | 所要時間 | 内容 |
|---------|-------------|-------|---------------------|
| 全体会 | 9:30～10:00 | (30分) | 受付 |
| | 10:00～10:10 | (10分) | 開会の挨拶 |
| | 10:10～10:20 | (15分) | テーマ等の説明 |
| グループワーク | 10:25～10:40 | (15分) | アイスブレイキング |
| | 10:40～12:00 | (80分) | 熟議（第一段階議論）… ワークショップ |
| | 12:00～12:40 | (40分) | 昼食 |
| | 12:40～13:50 | (70分) | 熟議（第二段階議論）… ワークショップ |
| | 13:50～14:30 | (40分) | まとめ・休憩 |
| 全体会 | 14:30～15:20 | (50分) | 議論の結果の共有と講評、挨拶 |
| | 15:20～15:45 | (25分) | 総括 |
| | 15:45～16:00 | (15分) | 閉会（総括） |

まず議論の段階となるグループワークの内容の企画の詳細に触れておく。

第一段階は、前述のように、地域における安心・安全の課題を明らかにすることである。その前提として熟慮で行った言葉の整理や「記憶を辿る」という作業により、体験に基づく安心・安全に対する脅威をテーブルに提出し、議論によって整理をする。今回、各テーブルで3つの課題を出すことが指示されており、その課題をフリップボードに書き込むまでを第一段階とする。フリップボードへの記載により、テーブルで出された課題を参加者全員が共有することを目的としている。

第二段階は、第一段階での課題についての解決策を話し合う。課題の解決に地域のちからを活用するためにはどうすべきか、をワークショップ方式で議論をする。その際に、2つの課題を取り上げることとしているが、今回、工夫として、1つは第一段階で話し合った課題を、もう1つは別のテーブルで出された課題を話し合う、という条件を付ける点にある。これは参加者が、第二段階で議論すべき課題を見出すために、全ての課題を読むことになり、結果、課題の共有が自然とはかれる。そして2つの課題の議論の後、まとめの段階で、解決策を踏まえたカルタを作成する。

以上が、「熟議 2015 in 兵庫大学」における議論の段階の内容である。

共有の段階であるが、その機会を複数設ける点が今回の「熟議 2015 in 兵庫大学」の特徴である。すなわち、安心・安全の課題をフリップボードで提出し共有する、当日発行する速報に議論の結論を掲載し共有する、そして作成したカルタを共有の時間に共有する、というものである。この、カルタの共有の段階にも山崎氏が引き続きメインファシリテーターを担うことで、議論の段階との連続性を持たせる。

(3) 兵庫大学熟議手法の特徴を活かして

兵庫大学熟議手法の特徴としては、まず討議型世論調査を応用している点がある。討議型世論調査では参加者に対し、熟慮、議論の前後でのアンケート調査により、意見や態度の変化を見る。従前より、兵庫大学熟議手法では、記名式での事前、事後のアンケートを行っている。過去3回のアンケートにおいて、熟議の進め方については共通しており、テーマに関連した質問項目を設けることとなっている。この項目については、事前と事後での変化を追跡することができるよう同一の質問としている。

事前アンケートは、郵送法による配布と回収をおこなっている。参加者に対しては、『「熟議 2015 in 兵庫大学」の進め方（資料 A）』を配布、その際に事前アンケートを配布している。一方、事後アンケートは、議論の当日、全てのプログラムの終了後に実施する。両者とも記名式のアンケートであるため、事前と事後の変化を個人ベースで追跡し分析することを可能にしている。

次に、学生の参加について触れる。兵庫大学では、「熟議 2012 in 兵庫大学」以来、学生がファシリテーターを務め、熟議の機会を学生の教育に生かすことを試みている。学生の参加は兵庫大学熟議手法の一つの特徴と言える。熟議に参加する学生及び高校生に対しては、主として自己認識シートにより、教育効果について分析をしており、これまで高い教育効果が得られていることを明らかにしている。「熟議 2015 in 兵庫大学」でも引き続き、講習会や予行演習を行う。その方法として、兵庫大学エクステンション・カレッジにおける教育機会を利用する。2015年度講座における「ワークショップの運営とファシリテーター養成のための講座」は、下記のような内容で開講される。

| 回 | 日程 | 時間 | 内容・講師 |
|-----|-----------|-------------|--|
| 第1回 | 10月8日(木) | 18:00~19:30 | 「ワークショップとはどのようなものか」 小林 洋司 (保育科講師) |
| 第2回 | 10月15日(木) | 18:00~19:30 | 「コミュニケーションの重要性」 北島 律之 (社会福祉学科教授) |
| 第3回 | 10月22日(木) | 18:00~19:30 | 「全員参加でのワークショップの実際①」 山崎 清治 (NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長) |
| 第4回 | 10月29日(木) | 18:00~19:30 | 「全員参加でのワークショップの実際②」 山崎 清治 (NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長) |
| 第5回 | 11月5日(木) | 18:00~19:30 | 「全員参加でのワークショップの実際③」 山崎 清治 (NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長) |
| 第6回 | 11月12日(木) | 18:00~19:30 | 「ファシリテーションの定着」 田端 和彦 (社会福祉学科教授) |

熟議プロジェクトチームのメンバーの他、メインファシリテーターである山崎氏も講師を務める。もちろん、エクステンション・カレッジの講座は、市民の受講者を対象とするものであるため、熟議に特化した内容ではない。しかし、ワークショップの進め方や討議型民主主義の意義などを学ぶことは、教育効果もあると判断している。

最後に、「熟議 2015 in 兵庫大学」において新たに導入した高校生向けの講座について触れる。兵庫大学熟議手法をはじめとして、熟議を、議会制民主主義を補完する市民の政治や社会への参画の役割と位置付けてきたため、その普及も重要となる。兵庫大学での熟議は、（選挙権を持たない）高校生も参加する多様な年齢層の参加も特徴となっている。18歳での選挙権が認められ、未成年者の政治、すなわち政策決定への参画が常態化するであろう中であって、高校生の時分より投票という方法以外に、主として地方での政策に参画する経験を、熟議を機会として得ることは意義あることと考えている。

そこで、「熟議 2015 in 兵庫大学」に参加する高校生を対象とする、熟議に関する教育を兵庫大学で実施する企画を作成する。内容は下記の通りである。今後とも、熟議を、民主主義を学ぶ機会とする企画を作成し、若年者に提供することが必要と考えている。

| タイトル | 内容 |
|------------|---|
| 熟議とはなにか | <p>【概要】「熟議 2015 in 兵庫大学」についての説明と民主主義国家における熟議の意義を学びます。</p> <p>【取り上げる項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 熟議の定義（熟慮して議論をすること）の説明 ・ 兵庫大学での熟議の様子やその成果に関する提示 ・ 議会制民主主義を補完する熟議の意義と役割についての解説 |
| ワークショップの役割 | <p>【概要】ワークショップがどのような場面で採用されているか、具体的な進め方について学びます。</p> <p>【取り上げる項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ワークショップの種類や意味、「モノ」を作り上げる機会であること ・ ディベートとの違いやワークショップ形式として、話し合いながら結論を導き出すことの意味 ・ KJ法とその応用 ・ ファシリテーターの役割 |
| ワークショップ実践 | <p>【概要】グループに分かれてワークショップを実践しましょう。ファシリテーターは教員が務めます。</p> <p>【取り上げる項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ アイスブレイキングを兼ねてのグループ分け。（※グループが一つの場合はアイスブレイクのみ） ・ テーマについて、各自での考察 ・ 考察したことを付箋に、1つの項目を1枚に記載 ・ 発表しながら模造紙に貼付 ・ ファシリテーターの指示により、意見を集約 ・ まとまった意見を発表 |

(田端和彦・森下 博)

第2章 熟慮の段階

1. 熟慮段階における参加者の回答

これまでの熟議においても、テーマについてグループで議論する前に、個人でテーマに関する内容を熟慮する“宿題”、事前学習課題が出されている。今回もテーマについて熟慮していく上で、重要と思われる点、安心・安全を創ることを熟慮するために要する、加古川地域を中心としての資料をあらかじめ参加者の方々に提示している。今年度のテーマは「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」。このテーマに基づいた宿題（熟慮）は、回答1の“あなたにとって地域の「ちから」とは何でしょうか？”から回答11の“安心して暮らせる地域にするためには(2) あなたなら何をしますか(何ができますか)？”までであった【図2-1-1】。ここでは、設問ごとに参加者が回答した意見についてまとめてみたい。



図2-1-1

回答1 あなたにとって地域の「ちから」とは何でしょうか？【図2-1-2】

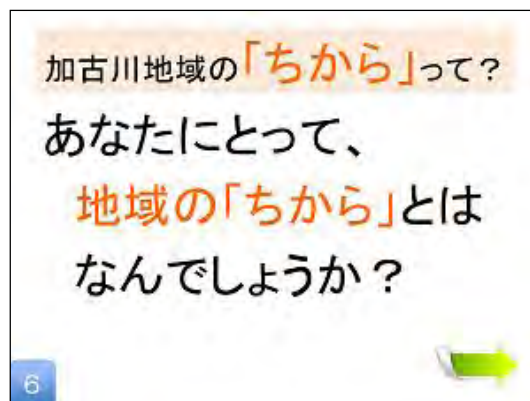


図2-1-2

加古川地域に住んでいる住民が地域の課題解決に向けて議論する、コミュニケーションを図る、解決に向けて行動する、このような点が地域の「ちから」であるという回答が多く見られた。このような意見が多く見られた背景として、加古川地域においてはボランティア活動や祭りなどの地域活動に対して熱心に取り組む人が多い、地域間の連携が強いといった住民の団結力の強さと考える参加者が多いことも関係していることが推察される。その他、「加古川地域の「ちから」は自然や歴史などの魅力」、「新しいことにも挑戦できる勇気とそれを受け入れる包容力」といった意見も出された。

回答2 「安全」とはどんなことでしょうか【図 2-1-3】

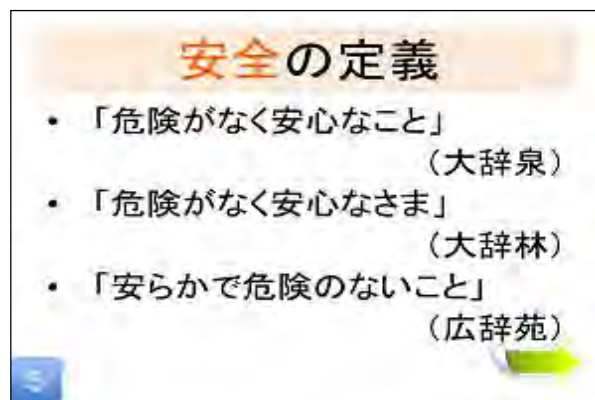


図 2-1-3

回答2は「安全」という語彙について参加者の言葉に対する意見を求めた。参加者の所属によって「安全」という言葉に対するイメージは異なる傾向にあった。例えば、高校生や大学生については、「自分の身に危険が及ばないこと」「危険な状態ではないこと」という危険を感じることなく安心して暮らせる環境が確保されている状態が安全であると考えている意見が多いようである。一方で、大学生を除いた20歳以上の参加者については、様々な危険に対するリスク対策について考慮することが安全に繋がるという考え方が多いようであった。例えば、安全とは「生命の危機を事前に察知して回避すること」「危険を回避するために何らかの対策を行った状態」という意見が代表的なものである。

回答3 「危険」とはどんな危険でしょう？「損」とはどんな損でしょう？【図 2-1-4】

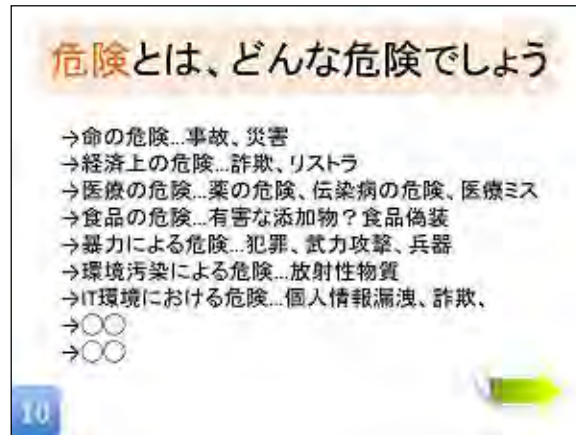


図 2-1-4

ここでは参加者の感じる「危険」について具体的に意見を求めた。「危険」とは、自然災害などの環境的要因、または、事故、事件、犯罪など主体的要因によって自分自身の身体や生命が脅かされることと考えている参加者が多い。また、「皆が幸せを感じない状態」を危険と考える参加者もいた。一方で、「危険がない状態」として、人や物などに対して危害の発生する恐れがほとんどない状態、身体や命に害をなす要素がない状態と考える参加者も見られた。加古川地域に限定して考えた場合、「危険」よりも「危機」ととられるほうが適切であるというコメントもあった。「損とは」という意見については、「金銭や財産といった財政的な不利益によるもの」のほか「自分が被害を受ける」「自分が利益を得られない」といった意見、「自分だけが幸せを感じないと思う心」「自分の中では納得できないもの」「大切なものを失うもの」という意見もあった。

回答4 「安心」とはどんなことか、自分の言葉で説明してみましょう【図 2-1-5】

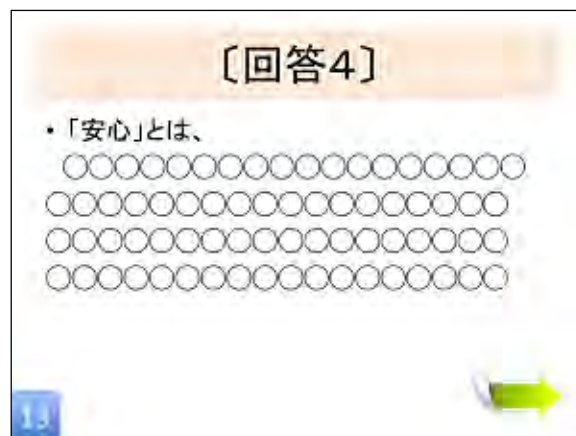


図 2-1-5

安心とは「心の落ち着いた状態」「人が幸せを実感できる状態」「誰もが不安なく生活できること」など心配や不安のない状況であったり、「災害などによって生命や資産などが危険にさらされていないと感じている状態」が、すなわち安全だと考えている参加者が多いようである。ただし、安心の尺度は個人によっても大きく異なることから、精神面も含めて安全な状態であり、安心よりも広い概念として捉える必要もある。例えば、警察など困ったときに助けてもらえる環境がある、信頼できる相談者が周りにいる、信頼できる人たちが仕事をしてくれるといった誰かに守られている環境にあることが安心な状態であるとも考えている。

回答5 「安全」と「安心」はどう違うのでしょうか【図 2-1-6】【図 2-1-7】

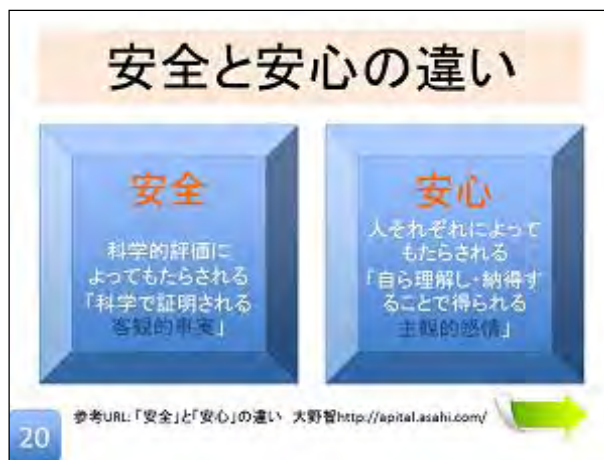


図 2-1-6



図 2-1-7

「安全」は客観的にみて危険がない状態であり、「安心」とは危険がないことで得られる心の状態、主観的にみて危険がない状態である。「安全は人が目に見えてわかるもの」「安心とは人には見えず自分自身の心が感じるもの」と、安心は施設の整備などで造りあげることができる。一方で、安心は個々の心情であるため安全であるから安心であるとも考えることもできる。このような点から、安全はリスクの大

小で数値評価することも可能となるが、安心については人間の感じ方であると考えられることから、人によって評価が異なる。安心は身体に関して害のないこと、すなわち、身体的な部分、安心とはメンタルな部分での不都合な状態がないと考えている参加者も見られた。「安全とは個人、グループ相互の相手との協調性」、「安心とは、健康、財源、生活力」、「安全とは、身体に関して害のないこと、安心とは心に関して害のないこと」、「安心とは危険なものがないことで得られる心の状態」という意見も挙げられた。

回答6 今住んでいる地域に暮らすなかで「安全でない」「安全が感じられない」と思った事がらや経験がありますか【図 2-1-8】

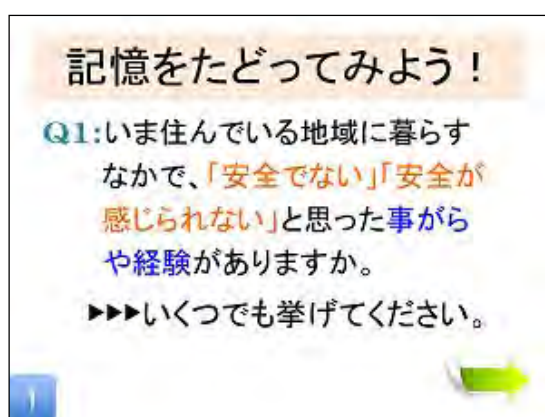


図 2-1-8

これまで行われた熟議においても度々議論されていた内容でもあるが、交通事故の多さ、犯罪率の高さという点で安全が感じられないと回答しており、特に高校生、大学生を中心に複数の参加者がこの点を指摘している。人間の交通行動を規制している要因として、人的要因（主体要因）によるものと環境的要因によるものがあることが指摘されている。高校生や大学生は安全運転義務違反に関連するような運転者のマナー、すなわち人的な要因が路上での安全を感じさせないことにつながっているようである。一方で、20歳以上の参加者については、同じ交通に関しても道幅の狭さや交通量の多さといった環境的な要因に問題を感じているようである。また、交通に関する意見と合わせて、地震や津波、河川や用水路の氾濫などの自然災害に対して、安全が感じられないという意見も多く見られた。東播磨地域にはため池が多く存在していることから、震災などによるため池の崩壊について意見もあった。高校生と大学生の中に、街灯の少なさを指摘する意見が多く見られ、不審者に関連する点について指摘する意見もあった。

回答7 「安全でない」「安全が感じられない」ことに対する解決方法や対策案を書いて下さい【図 2-1-9】

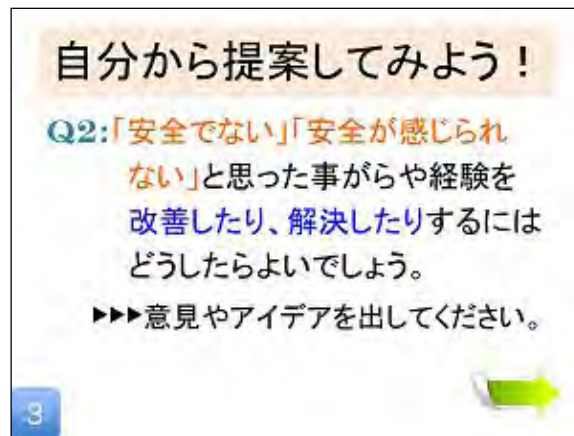


図 2-1-9

「安全ではない」「安全が感じられない」ことに対する解決方法や対策案についてコメントを求めたところ、回答6に関連して、自然災害、交通マナーと防犯対策の3点に意見が多く集まった。この3点は共通して、解決には地域住民間のコミュニケーションや意識の改革などが重要であると考えている参加者が多い。自然災害については、避難場所の確保、水路の整備、その他に公共事業を増やすことが解決につながるという意見であった。交通マナーについては、信号機、ガードレールや標識、案内板といった設備改善の必要性、防犯対策については、防犯カメラや街灯（青色LED街灯など）が解決の方法や対策案として述べられている。また対策案について、「地域で同じような考えがあるのかどうかも気になる」という他の参加者の意見も聞いてみたいというコメントもあった。

回答8 「あなたが住んでいる地域」といえば、どのような範囲ですか

「あなたが住んでいる地域」の回答について、熟慮の段階で回答の得られた50件を対象に解析したところ、最も多くの参加者が選択したのは「〇〇市の範囲」で、全体のほぼ1/3（34%）の参加者がこのエリアを選択していた。その後、「〇〇町の範囲」（24%）、「町内会（自治会）の範囲」と「小学校区の範囲」（12%）と続いた（その他は、「東播磨地域の範囲」（10%）、「中学校区の範囲」（2%）、「その他」（6%）、「となり近所の範囲」（0%）であった）。属性で評価したとき、特徴的な結果が見られたところがある。「町内会（自治会）の範囲」を選択したのは50名中6名であったが、1名は大学生であり、その他の5名の参加者はすべて社会人という結果であった。この点については、年代によって捉え方が異なるようであった【図 2-1-10】。

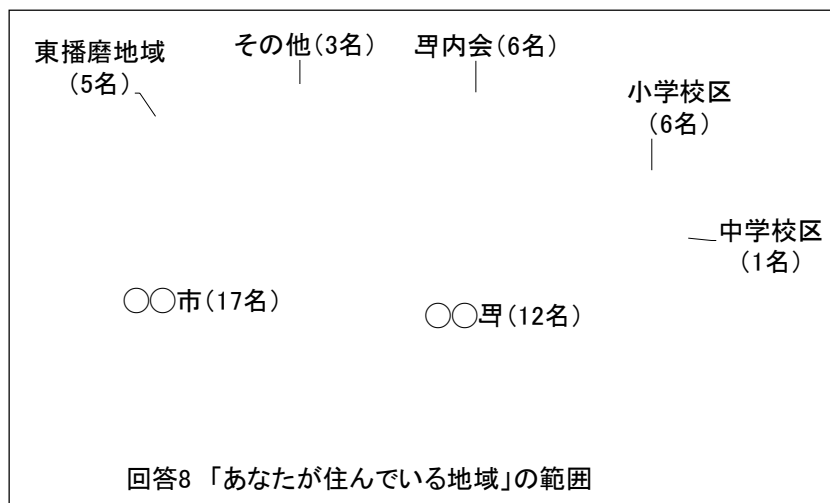


図 2-1-10

回答 9 今住んでいる地域への「愛着度」はどのくらいですか？

回答 9 は居住している地域への愛着度について、愛着度が強い（慣れ親しんでいる場所）の「10」から愛着度の弱い（生活するための場所・特に理由がない）の「1」までを設定し、参加者に数値で回答を求めた。回答 9 を回答した参加者（熟慮の回答数のうち回答のあった 50 件を対象）について、1 から 10 までの 10 段階のうち最も多かったのは「8」、ついで「7」、「10」の順であった。一方で、少なかったのは「1」「2」「4」、ついで「3」の順であった。おおよその参加者はどちらかというと、地域に対する愛着度が強い傾向にあることが伺える。また、回答 9 について、回答の大半を占めていたのは高校生や大学生であったが、年齢などによる属性の違いは特に認められなかった【図 2-1-11】。

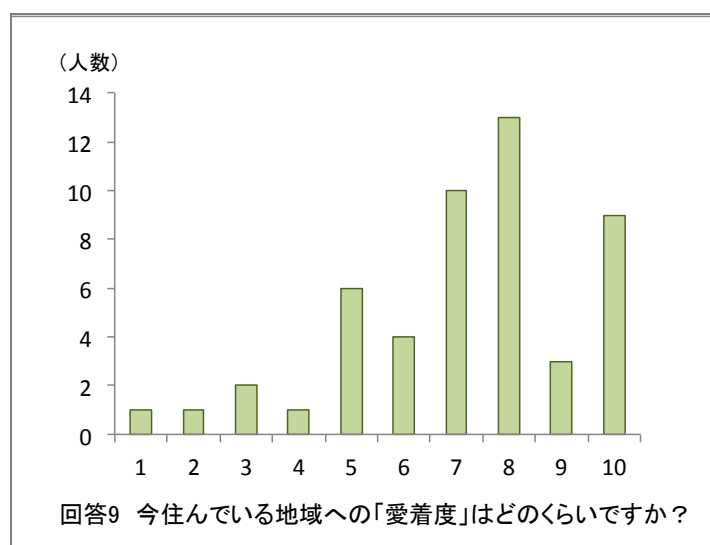


図 2-1-11

回答 10 あなたにとって「安心して暮らせる地域」とはどのようなものですか？【図 2-1-12】

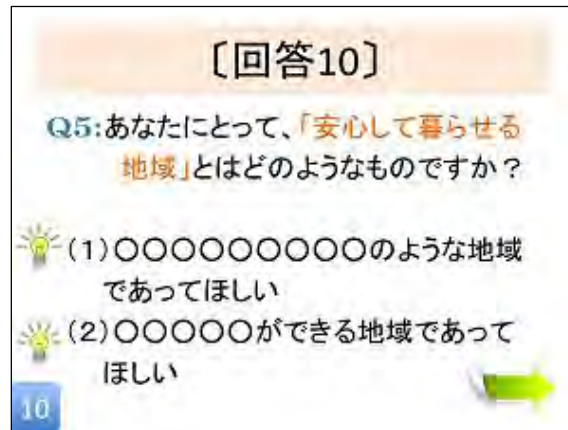


図 2-1-12

回答 10 では、あなたにとって安心して暮らせる地域とはどのような地域であるのかという点について意見を求めた。「周りの人とコミュニケーションが取れて挨拶のできる地域であってほしい」にあるように、住民間のコミュニケーションや地域での交流が必要であるといったキーワードが多く見られた。具体的には、「災害有事の際に共助ができる地域」「世代間交流で子供たちと高齢者との相互理解と協力体制」といった意見であり、地域コミュニティの重要性が伺えた。防犯や防災が充実して犯罪のない地域、公共交通アクセスが充実した地域、交通事故や事件が少ない地域など、回答 6 や回答 7 にあったように安全な生活を脅かすもののない地域という意見も多くあった。また、「子どもたちが未来に希望が持てる地域」「遠くに就職しても、また帰ってきたいと思える地域」のほか、「今居住している町内会」が安心して生活できる地域であるという回答もあった。

回答 11 (1) 安心して暮らせる地域にするためには？地域としてどんなことをしたらよいと考えますか？【図 2-1-13】

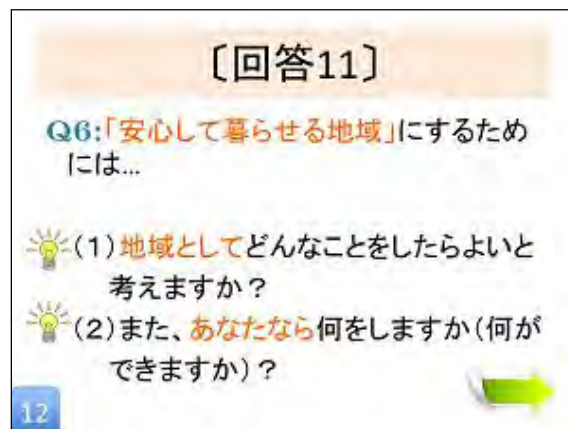


図 2-1-13

回答7において、「安全でない」「安全が感じられない」ことに対する解決方法や対策案について意見を求めたがその時の回答7では、個人としての意見、個人としてどのように対応していくのかという視点で意見が出されていたように感じる。一方で地域として出来ることにも共通した意見があったように思われる。ここの設問では、その点を含めて地域としての対応、例えば地域住民同士の関わり、近所付き合いの強化、地域での交流の場を増やすといった住民間の交流に意味があるのではないかと考えられている。また、防犯対策や防災対策、交通マナーの改善も必要である。地域として考えた時、「その地域の誇れるものをもつ」「自分の住む地域に興味や関心をもつ」「地域に安心して集える場所（サンクチュアリ）をつくる」このようなことが安心して暮らせる地域につながるのではないかという意見もあった。

回答11(2) 安心して暮らせる地域にするためには？あなたなら何をしますか（何ができますか）？

自治会活動やイベントなどの地域活動、地域守り隊などのボランティア活動に積極的に参加する。このことが地域やコミュニティを知るきっかけとなる。地域活動の参加、声かけや挨拶、散歩を通じたきっかけづくりなども地域に暮らす住民の顔が見えてくるのではないかと考えている参加者が多い。また、回覧板などで地域の様々な情報を共有することも地域での安心した暮らしにつながると考えられる。一戸一灯、地域パトロールや挨拶運動は防犯面の強化につながり、地域のハザードマップを作成することは地域防災という側面からも重要である。学校単位で行えることとして、生徒会を通じた交通安全の呼びかけ、交通マナーやルールを守ることを訴えていくことも出来るのではないか。このほかの意見として、個人の意識として、自分自身がルールを守ることを心がけ、地域のことを考えていくことも必要であるという点も挙げられた。

2. 安心して暮らせる地域とは（熟慮の成果）

熟慮の段階とは、実際に参加者が集って議論に至るまでにテーマについて参加者が各自で調べ、考えるという機会である。今年度は、特に安心・安全というテーマについて兵庫大学のウェブページを用いて熟慮を実施した。加古川地域のちから～安心・安全を創る～を考えていく上で、地域とは何か、安心・安全とは、また安心して暮らせる地域について考える段階まで自身の考えを整理していただいた。

安全とは、人とその共同体への損傷、ならびに人、組織、公共の所有物に損害がないと客観的に判断されることである。安心とは個人の客観的な判断に大きく依存するものであり、人が知識や経験を通じて予測している状況とは大きく異なる状況にならないと信じていることであると示されている（「安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会」報告書、文部科学省、2004年）。すなわち、安全・安心な社会の構築のためには、目指すべき安全・安心な社会のイメージを明確にすることが必要となってくる。今回の参加者の皆さんが持っている安全や安心のイメージとして、自然災害、交通マナー、防犯対策が多く挙げられていた。安心は個人の客観的な判断に依存するところが大きいわけである

が、加古川地域で生活する住民、つまり本熟議の参加者においては、年齢などの属性に関係なく、同じテーマをイメージして持ち合わせているものと思われる。また、安心して暮らせる地域にするために、個人や地域で行えることとして意見に挙げられたのが、住民間のコミュニケーションや世代間の交流であった。特に、回答1で見られたように、住民による地域間の問題解決に向けた議論、コミュニケーション、解決に向けた行動が加古川地域の「ちから」であると考えている参加者が非常に多く、世代を問わず見解は共通していた。

本論から外れるが、健康づくりにおいて身体を動かすことの必要性は周知の事実である。また最近、健康を維持する上で「ソーシャルキャピタル」の重要性が謳われている。いわゆる、社会の絆や結束から生み出される資源が「ソーシャルキャピタル」と考えられているが、健康は個人として維持するだけではなく、地域の人々とのつながりも健康を守ることに繋がっている。すなわち、住民同士の問題解決によって生まれる結束が地域の社会環境を改善していくのである。

交通マナーというテーマにおいては、世代間で問題に対する捉え方が異なること点も見られ、熟議の場において課題が解決されることが期待される。安心して暮らすために地域として取り組めること（回答11）においては、「犯罪の抑制力を高める」や「監視カメラを設置する」といった意見と、「地域で話し合える仕組みづくり」や「住民同士のつながり」という意見がそれぞれ挙げられており、互いの議論によって地域としての解決策を見出すことにつながる展開が予測される。

(木下幸文)

第3章 議論の段階

1. 2つの議論と1つのカルタ

ワークショップによる熟議の場合、成果を発揮する場面は、課題を見出し解決のための議論を広げ、そして議論の中で収束する中で、合意を得る過程にある。「熟議 2015 in 兵庫大学」では課題を見つける、そして課題の解決を探る、という2段階で議論を行う企画であることは、第1章での記載の通りである。議論の結果を報告するにあたり、議論の流れを踏まえて、2段階でのまとめとなっていることをまずは示す。つまり、議論の結果は2つある。

ところで、議論の舞台となるテーブルであるが、参加者の人数を踏まえAからLまで用意、それぞれのテーブルに集う参加者をグループとして、以下扱うこととする。各グループは、大学生のファシリテーターが1名、高校生と大学生、及び社会人の参加者の6~8名により構成される。それぞれのグループにより若干の相違があるが、高校生と大学生が4~5名、社会人が2~3名という内訳で、いずれも若年者の方が多い構成である。そしてグループのメンバーについては、終日変更をせず、休憩時の昼食も共にしつつ、グループ内で親睦と信頼を強め、議論と共有を深める。

前半の議論として、課題を見出す議論、——ここでは「テーマを出すための議論」——を行った。先立っての熟慮段階を踏まえ、それぞれが懸念や気づきを出しあい、収束させる中で、安心・安全について、後半の段階で議論するテーマを出すことができる。この時、メインファシリテーターは、各グループに対して、3つ以内でテーマを出すこと、またテーマを疑問形で作成することを課している。第2節の「熟慮から議論の段階へ—熟議の前提をふまえて—」では、グループ毎に議論の内容と出された3つのテーマを記述し、それらの傾向と背景を分析して、6つのカテゴリに分かれることを示す。

後半の議論は、出されたテーマについての解決の方向を話し合うが、企画段階で記したように、その際に自分のグループから出されたテーマと、他のグループのテーマの2つを選択して議論をする。グループ毎に、前半の議論で出された3つ以内のテーマと、後半の議論でどの2つのテーマを取り上げたかを図示しているので参考にして欲しい。後半の議論については、第3節「安心・安全の課題の解決と提案」にまとめられている。AからL全てのグループでの、2つのテーマそれぞれでの議論の内容と結果、提案を記すとともに、議論された24のテーマを5つのカテゴリに分類している。そしてこの節は、「熟議 2015 in 兵庫大学」での重要な結論部分となっていることは言うまでもない。

さて、後半の議論で得られた結論や提案を身近なものとするための工夫が、最後のカルタの作成である。それぞれのグループに3~4の最初の1文字を手渡して、それに続く言葉を紡いでカルタを作成した。若年者の言葉は、社会人とは異なる。しかし、結論を言い表すカルタを作成することで、多くの人にそれを共有してもらおう機会を持ちたいとの思いは共通していた。できあがったカルタは、本章の最後

のページに、五十音順で示されている。グループでの結論を踏まえ、それを言い表すカルタを作成することは、実は結論をグループ内で共有することにもつながる。ただ、どのグループがどのカルタを作成したか、は報告書では触れない。カルタは全ての参加者の共通のものであり、その真意はカルタのできを競うのではなく、カルタによって参加者を一つにまとめることである。

2. 熟慮から議論の段階へ -熟慮の前提をふまえて-

これまで記述してきた通り、兵庫大学における「熟慮」のメソッドには熟慮の段階を伴う。多様な属性の多世代の参加者がテーマに対して熟慮を行い、熟慮の結果を持ち寄ることによってはじめて議論が成り立つという前提に立つからである。今年度の熟慮では、「今住んでいる地域に暮らす中で安全でない、安心が感じられない点」について参加者に事前に考えていただき議論に臨んでいただいていた。

(1) 具体的にどのような議論がなされたか

今回の熟慮では A グループから L グループまで 12 のテーブルが設けられており、世代を超えた参加者がテーブルを囲んだ。とりわけ、高校生の多さが今年度の熟慮の特徴であったと言えるであろうか。前半の議論の目的は、後半で議論するためのテーマを抽出することであった。ここで、それぞれのグループが具体的にどのような議論を行い、その結果としてどのような課題が抽出されたのかを概観するとともに、抽出された課題を概観しつつその傾向について考察していきたい。

| 傾向 | 出されたテーマ |
|--|---|
| Aグループ ・イヤホンをして自転車を運転している、決められた場所に自転車を止めない、速度制限を守らない車がある、といった「交通マナー」に関することをはじめ、街灯が少ないため夜道が暗い、自転車を盗られたといった「防犯」に関する事などが意見として多く出されていた。 | ① 交通ルールマナーを浸透させるには？ ② 防犯力を上げるには？ ③ 道路環境をよくするには？ |
| Bグループ ・東加古川駅から兵庫大学までの道路でバイパスと交差するトンネルが危ない、という意見に代表される道の狭さなど交通の問題をはじめ、盗難、不審者などの軽犯罪への対応をめぐり、ため池の増水という自然災害等にも議論が及んでいた。 | ① なぜ事故（交通）が多いか？ ② なぜ軽犯罪が多いのか？ ③ なぜ自然災害対策が進まないか？ |

| | |
|--|--|
| <p>Cグループ</p> <p>・防犯面に関する意見が多く、不審者への対応などに対して地域住民の協力や行政、とりわけ警察などのパトロールの強化といった具体的な解決策が議論された。また、自然災害に関する意見も多く出され、有効な備えができていないことに対する危惧、住民の意識の低さなどが指摘されていた。</p> | <p>① 犯罪被害を減らすためには？</p> <p>② 例えば、地域力とは何か</p> <p>③ マナーを強化するには</p> |
| <p>Dグループ</p> <p>・他グループと同じように自転車を中心にした交通問題（道が狭い、ガードレールが少ない）への言及をはじめ、災害時、とりわけ大雨による冠水、土砂崩れといった災害による高齢者、障がい者の孤立をどう解決するかというような議論が行われていた。</p> | <p>① 治安をよくするためには？</p> <p>② 交通事故を起こさないためには？</p> <p>③ 災害が起こった時どうするべきか？</p> |
| <p>Eグループ</p> <p>・車が多いのに道路が狭い、歩道と車道、自転車道の区別といった道路をいかに安全に保つかという議論とともに、子どもが安心して遊ぶことのできる場をどう作るかといった子どもの安心・安全の議論がなされていた。そしてそれらへの対応として、個人として何ができるか、地域として何ができるかを考えていかなければならないことが共有されていた。</p> | <p>① 災害時の被害を少なくするには？</p> <p>② 子どもが安全安心に生活するには？</p> <p>③ 交通安全対策をどうすれば良いか？</p> |
| <p>Fグループ</p> <p>・空き巣、痴漢といった軽犯罪に対する備えと対策と、橋の歩道が狭い、自転車の二人乗りなどの交通問題が議論された。また、ゴミの問題、ため池に繁殖する外来種の問題といったところにも議論が及んでいた。</p> | <p>① ご近所付き合いはしていますか</p> <p>② 交通整備、交通マナーはどうなっているのか？</p> <p>③ 生活環境は大丈夫ですか</p> |
| <p>Gグループ</p> <p>・安心安全について①誰が何をするのか②必要なインフラは？③身近な対策はというキーワードで集められた意見を類型化しながら議論をしていた。それぞれにまとめられた意見の中で代表的なものをあげると①には防災防犯の活動に参加する、行政、住民、企業、各種団体で安全安心の実現に向けて役割分担が必要。②では、交通問題を解消するための道幅の拡張、加古川の決壊対策など。そして③では楽しみながら防災の勉強をする、子どもなどが犯罪にあった時の逃げ場所づくりなどの意見が出されていた。</p> | <p>① 自分の地域を知っていますか</p> <p>② 地域で安心して暮らせますか</p> <p>③ 自分の町のインフラは大丈夫ですか</p> |

| | |
|--|--|
| <p>Hグループ</p> <p>・加古川という地域の活性化、自転車、街灯問題といった交通に関する問題、そしてそれらを解決していく方法としての世代間交流の可能性について忌憚のない意見が交わされていた。</p> | <p>① 地域のコミュニケーションを深めるには？</p> <p>② 災害にどう備えるか？</p> <p>③ 住みやすい街にするには？</p> |
| <p>Iグループ</p> <p>・防犯、防災、事故などに対する「意識」の問題を教育・学習などによってどう変容させていくかということと、交通・災害の問題を解決していく際の財源の問題という性格の異なる課題について幅広く議論されていた。とりわけ、安全に対する意識の根本は、自分の体に愛情を持つことから始まるという意見は非常に印象的であった。</p> | <p>① どこからお金が出る？</p> <p>② 安全に関する情報を共有するには？</p> <p>③ 自己愛を向上させるには？</p> |
| <p>Jグループ</p> <p>・防犯・交通問題改善の観点から暗い道路への街灯の設置、地域住民によるみまわりの促進などが議論されていた。また、災害対策とともに「水環境」に対する意見（水辺に親しむ、河川改修等を含んだ水をめぐる安全）が多く交わされていたのが印象的であった。</p> | <p>① 災害時に備えて一人一人が優先的に何をすべきか？</p> |
| <p>Kグループ</p> <p>・踏切の遮断時間の長さや、人気（ひとけ）のなさ、ながら運転や死角の多さといった交通に関わる問題や、自然災害への対応、不審者による犯罪への対策の重要性などが議論されていた。</p> | <p>① 不審者から身を守るには</p> <p>② 安全な道を作るには</p> |
| <p>Lグループ</p> <p>・参加者の熟慮の結果（交通問題や軽犯罪などの安心安全を脅かす問題群）に対してソフト面（自分たちで変えていけるような内容）とハード面（自分たちではどうすることもできない行政が対応するような内容）に分けて議論がなされた。とりわけ特徴的な議論は、高校生の参加者から出された「食」に対する安全の議論であった。</p> | <p>① 安全に道路を利用するには？</p> <p>② あなたの食べるものは安全ですか？</p> <p>③ 加古川って安全なの？</p> |

表 3-2-1

(2) 課題の抽出からみえてくる傾向と、参加者の考える加古川地域の課題

A から L のグループで議論がなされた結果、上記のようなテーマが抽出された【表 3-2-1】。抽出されたテーマはあわせて 33 件で、類似するテーマをグループ化し、大別すると以下のように分けることができる。※ () 内はグループ

| 交通・道路環境に関すること <9 件> |
|---|
| 交通ルールマナーを浸透させるには？ (A)、道路環境をよくするには？ (A)、なぜ事故 (交通) が多いか？ (B)、マナーを強化するには (C)、交通事故を起こさないためには？ (D)、交通安全対策をどうすれば良いか (E)、交通整備、交通マナーはどうなっているのか？ (F)、安全な道を作るには (K)、安全に道路を利用するには？ (L) |

| 防犯に関すること <5 件> |
|---|
| 防犯力を上げるには？ (A)、なぜ軽犯罪は多いのか？ (B)、犯罪被害を減らすためには？ (C)、治安を良くするためには？ (D)、不審者から身を守るには (K) |

| 自然環境・自然災害に関すること <6 件> |
|--|
| なぜ自然災害対策が進まないか？ (B)、災害が起こった時にはどうするべきか？ (D)、災害時の被害を少なくするには？ (E)、災害にどう備えるか？ (H)、災害時に備えて一人一人が優先的に何をすべきか？ (J)、加古川って安全なの？ (L) |

| 自分の住む地域に関すること <5 件> |
|---|
| 生活環境は大丈夫ですか (F)、自分の地域を知っていますか (G)、地域で安心して暮らせますか (G)、自分の町のインフラは大丈夫ですか (G)、住みやすい街にするには？ (H) |

| 地域の「つながり」に関すること <4 件> |
|---|
| 例えば地域力とは何か (C)、ご近所付き合いしていますか (F)、地域のコミュニケーションを深めるには？ (H)、安全に関する情報を共有するには？ (I) |

| その他 <4 件> |
|---|
| 子どもが安全安心に生活するには？ (E)、どこからお金が出る？ (I)、自己愛を向上させるには？ (I)、あなたの食べるものは安全ですか？ (L) |

(3) 参加者の考える加古川地域の課題

熟議の前半部分において抽出されたテーマを概観し、整理すると6つのカテゴリに分けることができる。各グループのディスカッションとテーマを検討してまず率直に言えることは、加古川地域の安全・安心を議論するにあたり交通・道路環境に関する課題が非常に重要なテーマであるということである。高校生、大学生を中心とした参加者にとって加古川地域の安全・安心を脅かす事柄として「道の狭さ」、「交通量の多さ」、「歩行者や自転車と車の通行区域が分離されていないこと」、「狭路を乗用車が走る速度」など多岐にわたる交通に対する不安が挙げられる。とりわけ自転車をめぐる「交通・道路事情」は高校生、大学生の大きな関心事になっているといえよう。車を運転する世代にとってもすれ違う車のスピードなどには恐怖を感じる人も少なくないようである。熟議の後半でどれだけのグループが交通・道路環境を議論のテーマに設定するかにかかわらず、加古川地域において継続的に検討されなければならない課題であることはいうまでもないであろう。

防犯に関することでいえば、不審者への対応、窃盗に対する不安が多くのグループで語られていた。自分たちのみならず犯罪の被害者になる人のことを考えれば喫緊の課題であるがゆえにそうした不安への対策として防犯カメラの設置などの方策まで議論しているグループが多く見受けられた。また、自然環境・自然災害に関する議論も幾つかのグループで熱心に行われていた。自然環境としての加古川をはじめ、ため池などの水環境が加古川地域の特徴である反面、決壊したらどうなるかといった水に対する備えについては非常に関心が高いように思われた。

自分の住む地域に関することについてよく知らないという事実、そしてその地域に住む人々との「つながり」が必ずしも緊密ではないことも参加者の不安に感じる事として挙げられている。災害や防災、子育てを前提として地域のことをどれだけ知っているか、どのような人と「つながり」を持っているか、またそのつながりを具体的にどのようにつくっていくかということに関心が集まり議論されていた。その他の課題でも、食をめぐる課題、こどもをめぐる課題なども数は少ないが看過できないテーマである。

以上のようなテーマが参加者が考える加古川地域の課題として挙げられた。このテーマの中から参加者による12のグループが改めてどのようなテーマを選び出し、どのような解決策を導き出したのか、熟議後半の結果に注目していきたい。

(小林洋二)

前半議論から後半議論へ・・・



自身を感じる地域の課題を出し合います。



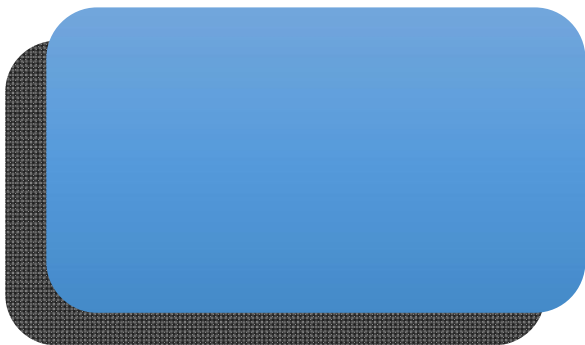
出された意見を基に、グループ内で3つのテーマを抽出します。



A~Lの12グループから33のテーマが出されました。



33のテーマを参加者全員で共有します。

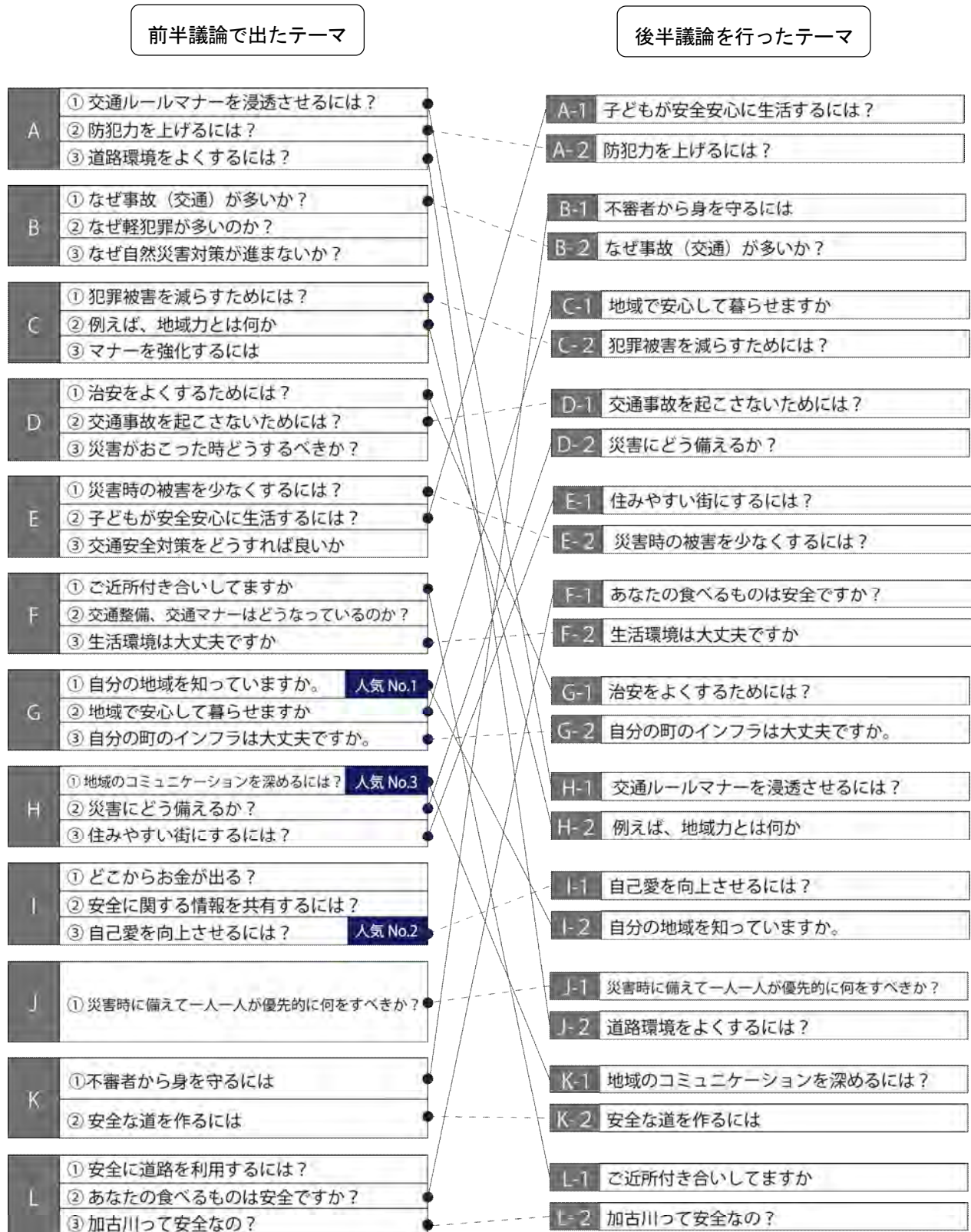


議論したいテーマを2つ選択します。



後半の議論が始まります！

前半議論で出たテーマと後半議論を行ったテーマ



※破線は自グループのテーマ、実線は他グループのテーマを示す

3. 安心・安全の課題の解決と提案

前述のように第3節では、後半での議論の内容と結論、提案について記載するとともに、その分析を行う。議論の内容等については、各テーブルで記録係が作成した記録簿及び、グループ毎に示す写真から、それぞれのテーマについての議論の流れを再構成、また結論や提案については、熟議プロジェクトのメンバーがそれぞれのテーブルで採取した結論等を参考にしている。結論を採取した目的は、企画に示したように、速報を作成し、議論の結果を参加者に早くお知らせするためである。速報の内容については、巻末の「資料編」を参考にしたい。

続いての分析では、話し合われたテーマを5つのカテゴリに分類することから始め、それぞれのカテゴリについてどのような結論が得られ、あるいは提案がなされたのか、を分析している。特にその背景にある、当該地域と市民に係る課題については、議論全体の意義との項を設け、その中で語る。

なお、前述の通り、第2節では6つのカテゴリに分類しており、本節とは異なる部分があるが、それは本節では、結論や提案を踏まえてテーマを再度見直し、カテゴリ化しているためである。同時にこのことは、後半の議論であるテーマを採択したグループが、前半の議論でそのテーマを出したグループの想定した解決策とは異なった捉え方をした可能性を示しており、議論を広げることを企図した、2段階の議論を行い、後半の議論の際には別のグループのテーマを選択することができる、という当該企画の正当性を示した、とはいえないであろうか。

(1) グループ毎の具体的な議論



【解説】

テーマ：子供が安全安心に生活するには？

子供を小学生と定義し、出された意見をその内容から、「公園」「地域コミュニティ」「その他」に分類した。最も多くの意見が出された「地域コミュニティ」に注目し、解決策がまとめられた。登下校時に大人がつきそう、近所の人の声かけを行う、挨拶をしよう、不審な写メールなどの情報を共有することが提案された。

テーマ：防犯力を上げるには？

「自転車を盗難された」「後ろをついてこられた」など体験談が示され、それらに対する解決策が議論された。その結果、まずは自分の身は自分で守る意識が大切であること、その上で、地域の助け合いも必要であると結論づけられた。地域の助け合いの具体的なものとして、店の明かりをつける、地元の人でパトロールを行う、子供への防犯指導の機会を設けるなどがあった。

Bグループ



【解説】

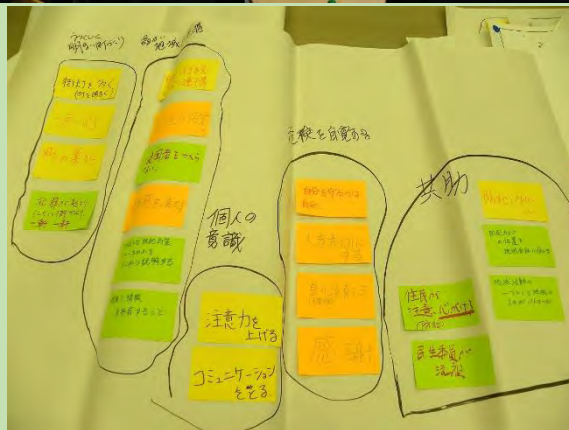
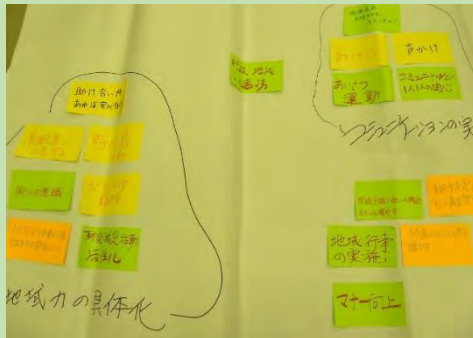
テーマ：不審者から身を守るには

毎日のあいさつ、近所どうしのコミュニケーションで情報を共有、子供や女性対象の防犯セミナーを行う、パトロール強化、防犯カメラの設置、一人で帰らない、暗い道は遠回りするなど、多くの意見が出された。それらが「挨拶など身近な活動」「道徳や防犯の教育」「環境整備などの対策」として集約された。

テーマ：なぜ事故(交通)が多いか？

道路が狭い、計画性のない道路設置、車の渋滞が多い、自転車道や歩道が整備されていない、街灯が少ない、溝に蓋がないなど環境に係る意見、交通マナーを守らないことについての意識に係る意見、事故が多い場所などが共有できていないなどの情報に係る意見が出された。また、自動車や自転車の取締り強化を求める声もあった。

Cグループ



【解説】

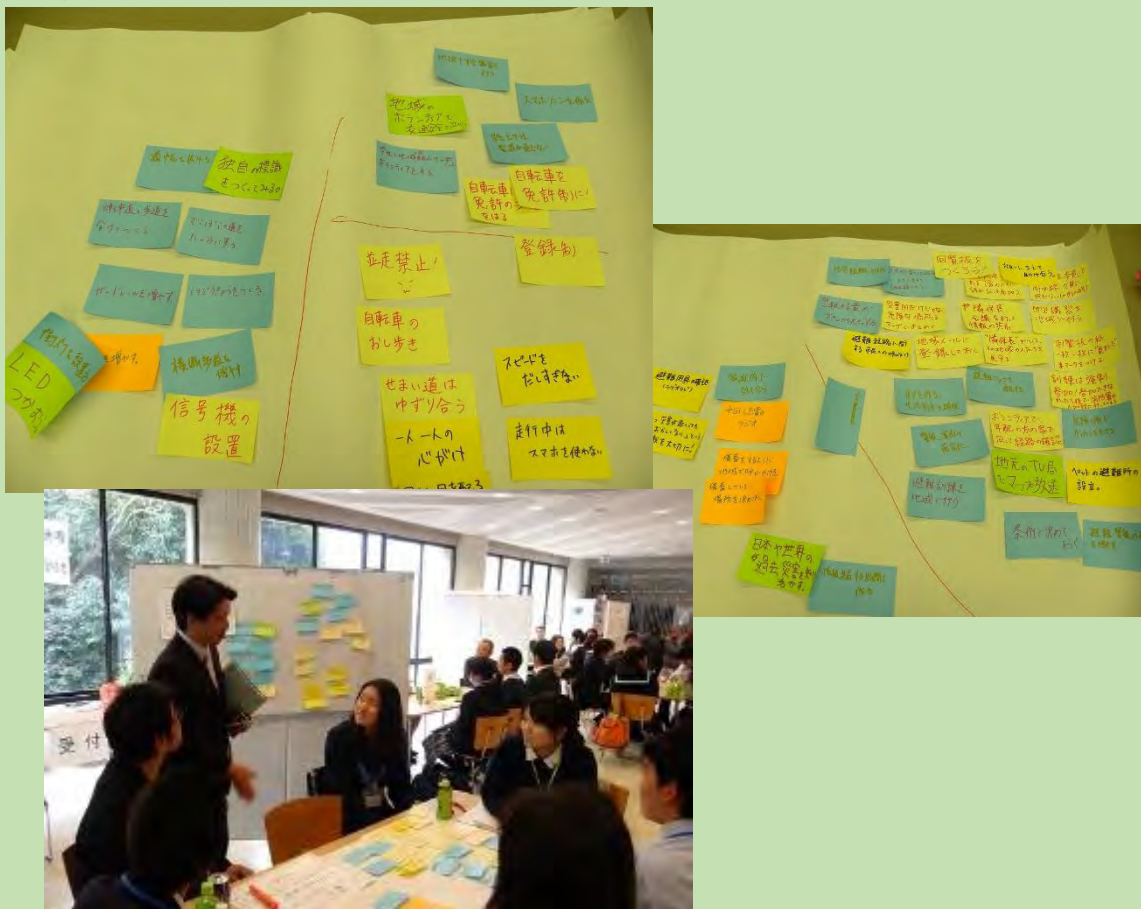
テーマ：地域で安心して暮らせますか

出された意見は大きく2つの事柄に分類された。1つは地域力の具体化であり、危険時には地域の高齢者や子供のことを優先で考える、地域で話し合えるような場をつくる、ボランティア精神を尊重するなどであった。もう1つはコミュニケーションの実践であり、行政との連携、地域行事の実施など、組織などの垣根を超えた情報の共有であった。

テーマ：犯罪被害を減らすためには？

出された意見は、大きく3つの事柄に分類された。1つ目は明るく、美しい街づくりであり、そのような環境では犯罪が起こりづらいと考えられた。2つ目は共助を念頭に置いた個人意識の向上であり、良心を育んだり、感謝の気持ちをもてるような啓蒙が大切とされた。3つ目は地域の温かい連携であり、行政からお隣さんまでの協調体制が求められた。

Dグループ



【解説】

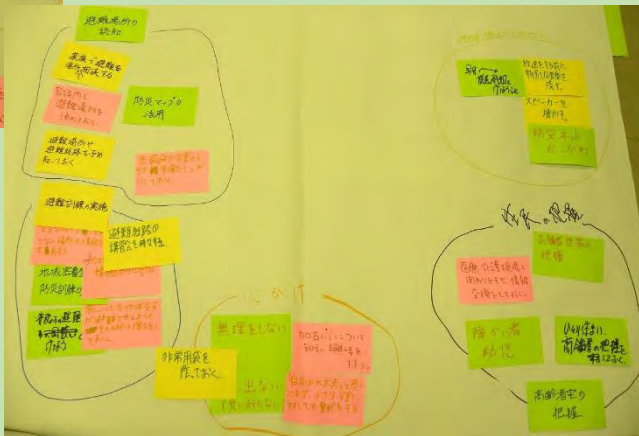
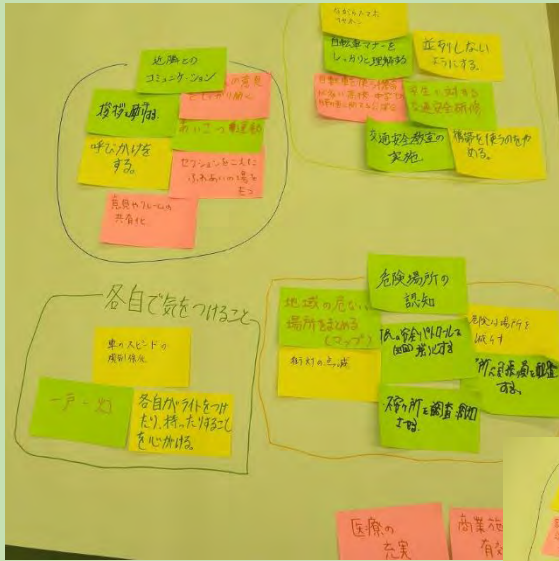
テーマ：交通事故を起こさないためには？

道が狭かったり、ガードレールが設置されていないかったり、街灯がなかったり、信号機が少なかったりと物理的な問題を指摘しつつも、設備を整えることの難しさから、個々人の意識の改革を中心に議論がなされた。自転車のマナーの向上(場合によっては免許制にする)、学生と地域の共同で交通ボランティアを行うなどの意見が出された。

テーマ：災害にどう備えるか？

大きく2つの事柄にまとめられた。1つは地域との関わりの大切さの指摘である。普段からつきあいを密にすることで、緊急時には自然と協力できると思われる。また、地域の人々で用水路掃除などを実施することで、大雨のときなどの二次災害を防ぐことができる。もう1つは情報の共有であり、防災組織を作ったり、看板や回覧板を積極的に活用することが提案された。

Eグループ



【解説】

テーマ：住みやすい街にするには？

意見は大きく3つにまとめられた。1つ目は「まずは各自で気をつける」であり、自転車の運転マナーの向上について多くの提案がなされた。2つ目は「危険な場所を認知する」であり、不安な場所を調べて周知したりマップにすることや、町内の安全パトロールを行うなどが提案された。3つ目は「近隣とのコミュニケーション」であり、挨拶運動、人々の意見やクレームを共有化、様々な人との触れ合いの場の設定などが提案された。

テーマ：災害時の被害を少なくするには？

多様な意見が出された。各家庭で避難場所を決めておくこと、災害用の携行品を準備しておくこと、避難経路の講習会や地域密着の防災訓練を開くこと、高齢者世帯、障がい者や幼児がいる世帯を把握しておくこと、災害時には早めに放送をしたり特別な音楽を流すこと、設置するスピーカーを増やすこと、防災ネットを活用することなどであった。行政が中心となるべきものもあったが、地域の人々が意識をもつことにより達成できるものも多かった。

Fグループ



【解説】

テーマ：あなたの食べるものは安全ですか？

全国で多発する「食」に係る問題について解決策が提案され、3つのレベルに分類された。「国」は自国での生産能力を向上させるように努める必要がある。「生産者」は化学物質を少なくし、アレルギー表示を明確にし、さらには生産者情報を開示することなどが求められる。「個人」は食品への正しい知識をもち、品質表示の確認を怠らないことが大切である。また、何か起こった時の風評被害について、対策を講じることの重要性も論じられた。

テーマ：生活環境は大丈夫ですか？

地域における防災、環境美化、ため池の整備などの意見が多数出された。具体的な対応として、地域や家族で防災に対する意識をもつこと、地域住民の意見の吸い上げや学ぶ機会の確保、回覧板の活用などによる情報の共有が提案された。それらの中心に位置するものが地域コミュニケーションであることが確認された。

Gグループ



【解説】

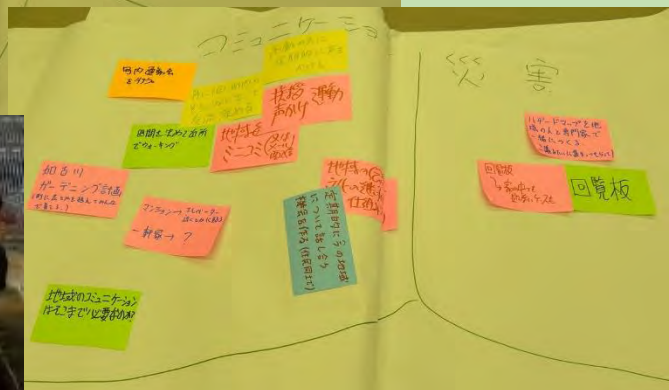
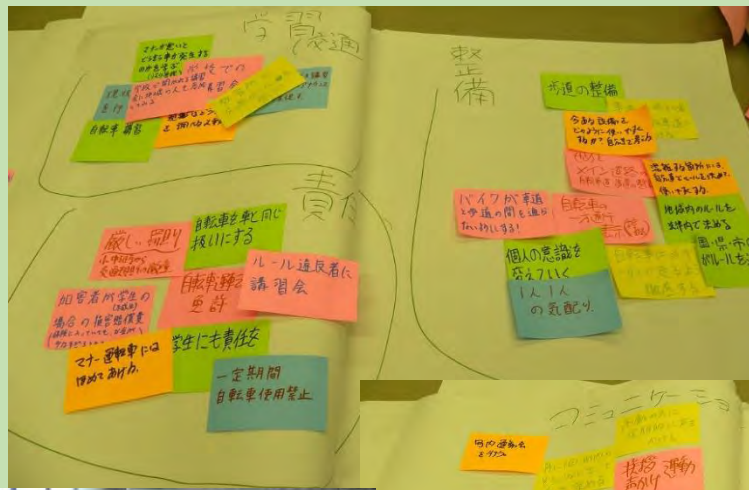
テーマ：治安をよくするためには？

誰が行うかで意見は3つに分類された。あいさつや声かけといった「自分たちができること」、警察の強化や防犯カメラの設置といった「行政・公ができること」、不審者の情報の共有や見回りパトロールといった「地域ができること」となった。特に地域でできることについての意見は多く、他にも「子ども110番」を増やすこと、自転車の盗難を防ぐために預けられる場所を増やすこと、防犯灯が少ないところを点検することなどの意見がみられた。

テーマ：自分の町のインフラは大丈夫ですか。

意見は行政を中心とした整備や対策と、自分たちでできることに分類された。前者は、川の治水対策や、危険な道路の整備に関するものが中心であった。増水時のため池の活用や自転車専用道の設置などが挙げられた。また、後者は、増水時の避難経路の作成や、通学などで子どもを見守る取り組みなどが挙げられた。さらに、自分たちでできることと、行政の力を必要とするものの線引きについて、地域で話し合うことの必要性も論じられた。

Hグループ



【解説】

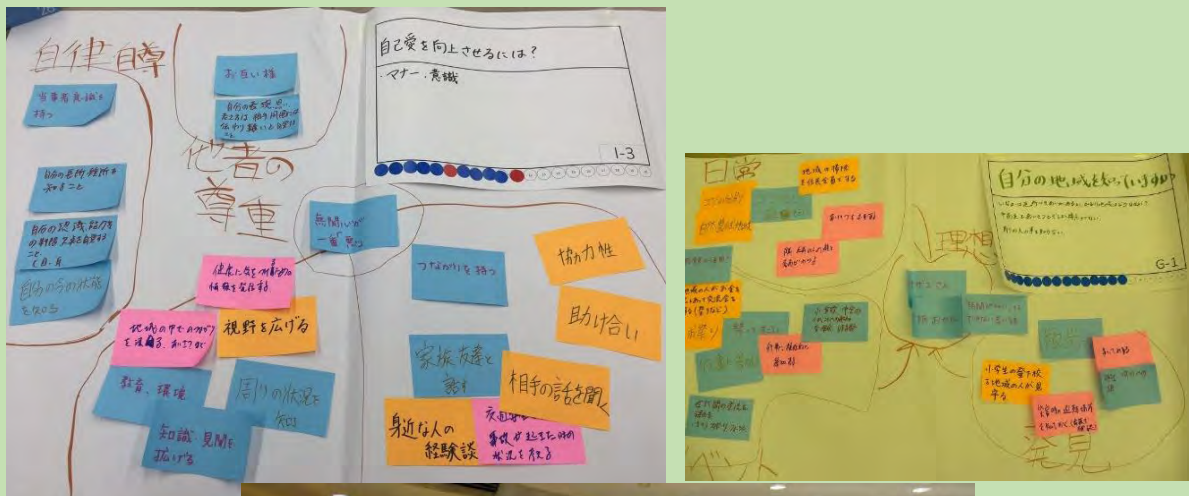
テーマ：交通ルールを浸透させるには？

個々人の意識の問題として「責任」、危険な現実やルールを理解することとして「学習」、行政を中心とした対策として「整備」が挙げられた。責任では、危険な行為について罰を与えるなどの厳罰化と自転車の免許制などが指摘された。学習では、学校や地域で講習会をしっかりと開催することの必要性などが挙げられた。整備では、車道と歩道をしっかり分けることなどが求められた。

テーマ：例えば地域力とは何か

「コミュニケーション」に分類される意見が多数出された。挨拶や声かけ、定期的に地域について語り合うこと、月に1回程度の町内掃除、町内で運動会を行うことなどが挙げられた。ただ、そこまでの地域コミュニケーションの必要性について疑問も出された。また、「災害」についても意見が出され、ハザードマップを地域と専門家が協働で作成すること、回覧板の活用などが論じられた。なお、回覧板は家庭で見ない人がいることも指摘された。

1 グループ



【解説】

テーマ：自己愛を向上させるには？

長所や短所など自分を知ることが大切である一方、知識を増やしたり見分を広げたりすることで視野を広げることが求められた。また、他者とのつながりも重要であり、家族や友人など身近な人と会話をすること、人との協力や助け合いを行うことも挙げられた。これらのことに無関心でいることが、自己愛にとっては最も悪いと結論づけられた。

テーマ：自分の地域を知っていますか。

自ら動き、何かを発見することの大切さが論じられた。散歩、掃除、ゴミ出し、祭りなどに積極的に参加することで、挨拶ができ、コミュニケーションが生まれ、顔と名前が一致ようになる。そうすれば、不審者かどうかわからないといった状態を避けることができる。理想はサザエさんのようなご近所づきあいである。ただし、若い世代は、平日は仕事、土日も忙しく、地域の行事に参加することが困難という問題も指摘された。

Jグループ



【解説】

テーマ：災害時に備えて一人一人が優先的に何をすべきか？

数多くの意見が出された。発生する災害の想定、ハザードマップの作成、家族での情報共有、非常時の携行品の準備、避難場所や避難経路の確認、防災ネットの利用、若い世代による動けない人への支援、防災対策の講演会の開催と参加、自分の命を自分が守る意識をもつことなどが挙げられた。

テーマ：道路環境をよくするには？

危険だと思える箇所を地域単位で挙げ、必要に応じて行政にも働きかけることが求められた。具体的には、歩道・自転車道・自動車の減速を促すバンプ道路を整備すること、防犯灯の増設や修理、中央分離帯・カーブミラー・看板の設置、道路脇を花壇にすることなどの意見が出された。また、スマートフォンを見ながら歩いたり、傘をさしたまま自転車に乗ったりしないなどがよくあり、交通ルールを守ることの必要性についても論じられた。

Kグループ



【解説】

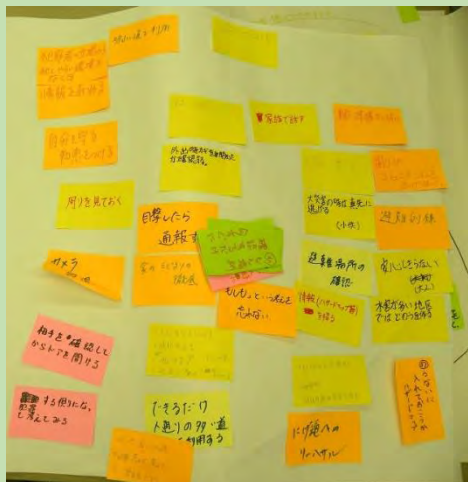
テーマ：地域のコミュニケーションを深めるには？

挨拶の重要性が指摘された。ただし、自然と挨拶ができる環境づくりに取り組むことが大切とされた。自治会の活動、子供会や老人会の活動、清掃活動、防災訓練、大学の学園祭などを活用することが考えられる。それらの行事があることを様々なツールにより周知することも必要である。また、世代を超えた交流を行いお互いが教えあう機会を設けたり、子供たちが安心して遊べる広場を設置したり、ボランティアで観光係をつくることも提案された。

テーマ：安全な道を作るには

多くの意見が出され、それらの内容が順序づけられた。最初に、交通ルールの遵守やゆずりあいなど、個人の意識を高めることが必要である。次に、地域の中で危険な場所や不審者情報を共有して対応を話し合う場を設ける。そして必要に応じて、ミラー・ガードレール・標識・横断歩道などを増設したり、狭い道は一方通行としたりするなど、行政へ提言することが求められる。

Lグループ



【解説】

テーマ：ご近所付き合いしてますか

地域に関心をもつことが大切である。一人ひとりが当事者意識をもち、積極的にかかわることが求められる。自治会の活動や地域の行事にはできるだけ参加するようにすること、年代間の交流を行うことなどが提案された。ただし、少子化で子ども会がなくなってきたことが問題として挙げられた。また、地域の情報を知ることの重要性についても論じられた。

テーマ：加古川って安全なの？

加古川を、より安全にするための方法についての意見が多く出された。明るい道や人通りが多い道を通るようにする、防犯カメラを設置する、戸締りをしっかり確認する、不審者などを目撃したら通報する、事前に家族で安全について話しておくなどが論じられた。また、犯罪者目線で犯罪を行いやすい環境について考えることも大切ではないかという意見も出された。

(2) 議論されたテーマの分類と主な意見

前半の議論で提出されたテーマのうち、実際に後半の議論で解決策が論じられたものは24テーマであった。これらにはテーマの内容が類似したものが多くあり、比較的近いものをまとめて分類し、【表3-3-1】に示すように5つのカテゴリとした。それぞれについて、議論で出された意見を振り返ってみる。カテゴリごとの主な意見を【表3-3-2】に示す。

カテゴリの一つめは「防犯」であり、不審者から身を守る方策、犯罪をなくす方策などについて議論された。自分の身は自分で守る、公助の意識をもつなど、防犯に関する心構えの意見が多く出されている。また、近所同士の声掛け、子どもの登下校への大人の付き添い、地域住民によるパトロールなど、地域の人々が気にかけることで実行できる内容も多い。さらに、防犯カメラの設置、警察の強化など行政の力を必要とする意見も出された。

二つめは「交通」であり、交通事故を防ぐための方策について議論された。まず重要とされたのが、交通ルールを守ることである。近年、スマートフォンの普及にともない、自転車に乗りながらスマートフォンを操作したり、イヤホンで音楽を聴いたりする人が増えている。これらの行為が危険であることは、いずれの議論においても共通した認識であった。それらを遵守させるために、学校や地域で講演会を開く、取り締まりを強化する、免許制にするなどの意見が出された。また、環境面から交通事故を防ぐことを求める意見も挙げられた。車道と歩道を分ける、交差点などのミラーを増やすなどがあった。さらに、地域において危険な道がどこか調べ、その情報を共有することで事故を減らすことができるのではないかといった提案もみられた。

三つめは「災害」であり、地震や洪水のような緊急事態にどのように対処するか議論された。自分の命を自分で守るという意識のもと、日ごろから携行品を準備したり、家族と避難場所を事前に話し合っておくことが大切である。また、近所づきあいをすることで、いざという時の助け合いにつながるという意見も出された。高齢者や体の不自由な人のいる世帯を把握しておくことも大切である。災害において地域はどのような状況になるかを理解するためにハザードマップを作成したり、回覧板などの活用で情報を共有することも求められた。加えて、地域住民が中心となって防災組織をつくることの提案もあった。

四つめは「環境」であり、食やインフラについての問題が議論された。食については消費者自身がチェックする目をもつこと、製造業者が適切な情報を公開すること、行政が自国での生産率を上げる施策を行ったり、風評被害の対策を講じることなどの意見がだされた。インフラについては、地域特性が出ており、加古川やため池の整備や活用を求める声が多かった。

五つめは「自己・地域」であり、自分をよく知り、地域をいかに活性化させるかについて議論された。自分を知るためには、知識を深め、広げることが大切である。そのためには、多くの人と話をすることが一番である。一方で、地域を活性化させるためには、挨拶をはじめとする近所づきあい、運動会などの地域の行事、清掃などのボランティア活動に参加することなどが考えられる。自己を知ることと、地

地域の活性化は決して無関係でなく、強いつながりがあることは想像に難くない。ところで、地域活性化について、世代を超えた交流の場を設定することが挙げられた。地域の伝統を高齢者が若い世代へ伝え、ICT関係など新しい技術を若い世代が高齢者へ伝える。このような取り組みが多く地域で活発になされることは、地域が時を超えて発展していくための礎となるのではないだろうか。また、観光ボランティアの推進といった意見も見られた。加古川地域の活性化を内外から推し進める有効な方策の一つであると思われる。

議論が行われたテーマの分類

| |
|-----------------------------|
| 1. 防犯 |
| A-1 子供が安全安心に生活するには？ |
| A-2 防犯力を上げるには？ |
| B-1 不審者から身を守るには |
| C-1 地域で安心して暮らせますか |
| C-2 犯罪被害を減らすためには？ |
| G-1 治安をよくするためには？ |
| L-2 加古川って安全なの？ |
| 2. 交通 |
| B-2 なぜ事故(交通)が多いか？ |
| D-1 交通事故を増やさないためには？ |
| H-1 交通ルールを浸透させるには？ |
| J-2 道路環境をよくするには？ |
| K-2 安全な道を作るには |
| 3. 災害 |
| D-2 災害にどう備えるか？ |
| E-2 災害時の被害を少なくするには？ |
| J-1 災害時に備えて一人一人が優先的に何をすべきか？ |
| 4. 環境 |
| F-1 あなたの食べるものは安全ですか？ |
| F-2 生活環境は大丈夫ですか |
| G-2 自分の町のインフラは大丈夫ですか？ |
| 5. 自己・地域 |
| E-1 住みやすい街にするには？ |
| H-2 例えば地域力とは何か |
| I-1 自己愛を向上させるには？ |
| I-2 自分の地域を知っていますか。 |

K-1 地域のコミュニケーションを深めるには？

L-1 ご近所付き合いしていますか

表 3-3-1 議論が行われたテーマの分類

分類されたテーマごとの主な意見

| | |
|------------|---------------------------------|
| 防犯 | 共助の意識をもつ・良心を育む |
| | 高齢者や子どものことを優先的に考える |
| | 自分の身は自分で守る意識をもつ |
| | 戸締りを確認する習慣をしっかりとつ |
| | 家族で安全について話しておく |
| | 近所の声かけ・挨拶 |
| | 明るい道や人通りの多い道を通るようにする |
| | 子どもの登下校に大人が付き添う |
| | 不審者の情報の共有 |
| | 地域のパトロール |
| | コミュニケーションの促進(地域行事など) |
| | 暗いところや危険なところをチェック |
| | 犯罪者目線で危険な場所を検討 |
| | 防犯の講習会の開催 |
| | 子ども 110 番を増やす |
| | 防犯カメラの設置 |
| | 行政と地域の人々との連携を強化 |
| | 組織の垣根を超えた連携 |
| | 警察の強化 |
| | 自転車を預けることができる場所をふやす |
| 明るく美しい街づくり | |
| 交通 | 交通ルールを守る |
| | スマートフォンを見ながら、傘をさしながらの自転車の運転をやめる |
| | 自転車のマナーの向上(免許制も検討) |
| | 交通ルールの順守やゆずりあいなど、個人の意識を高める |
| | 事故が起こった場所についての情報共有 |
| | 学生と地域が共同で交通ボランティア |

学校や地域で交通安全の講習を開く

危険な場所を地域ごとに確認

行政への提言

自動車や自転車の取り締まりを強化

車道と歩道を分け、整備をする

減速を促すバンプ道路の設置

中央分離帯の設置

ミラーの設置

道路脇の花壇の設置

狭い道は一方通行にする

地域との連携

渋滞の緩和

街灯を増やす

災害

自分の命は自分で守る意識をもつ

各家庭で避難場所を決めておく

災害時の携行品を準備しておく

普段から近所とのつきあいを密にする

地域での用水路などの掃除

高齢者世帯や障がい者がいる世帯を把握しておく

ハザードマップの作成

看板や回覧板の活用

防災組織をつくる

避難経路の講習会をひらく

防災訓練をひらく

防災用のスピーカーを増やす

環境

各自が食品についての正しい知識をもち、品質表示の確認を怠らない

通学などで子どもを見守る取り組み

増水時の避難経路の作成

業者は食品の化学物質を少なくし、アレルギー表示をきちんとする

自国での食品の生産能力を向上させる

風評被害の対策を行う

ため池の整備や活用

川の治水対策

危険な道路の整備

| | |
|-------|--|
| 自己・地域 | <p>個人個人が知識を増やしたり見聞を広げる</p> <p>自分の長所や短所を知る</p> <p>自転車マナー向上の取り組み</p> <p>家族、友人などとのつながりをもつ</p> <p>挨拶運動</p> <p>散歩、掃除、ゴミ出し、祭りなどに積極的に参加→コミュニケーションが増える→名前と顔の一致</p> <p>サザエさんのような近所づきあいが理想</p> <p>不安な場所を調べて周知</p> <p>町内の安全パトロール</p> <p>町内の清掃活動</p> <p>町内で運動会</p> <p>ハザードマップを地域の人と専門家で作成</p> <p>回覧板の活用</p> <p>多くの人と触れ合える場所の設定</p> <p>世代を超えた交流の場の設置</p> <p>自治会、子供会、老人会の活動の活発化</p> <p>ボランティアで観光係を設置</p> <p>若い世代が地域の行事に参加できないことが問題</p> <p>子どもたちが安心して遊べる広場の設置</p> |
|-------|--|

表 3-3-2 分類されたテーマごとの主な意見

(3) 議論全体の意義

5つに分類されたカテゴリごとに出された意見を見ていくと、いずれのカテゴリについても、地域住民あるいは個人ができることが非常に多いことに気づく。「防犯」では自分の身を守る意識をもつことから始まり、近所の声掛けや地域住民のパトロールなどがそれにあたる。「交通」では地域や学校で交通安全に関する意識を定着させるような講演会を開くことが求められている。「災害」では日ごろから携行品を準備すること、高齢者や障がい者がいる世帯を把握する必要性が挙げられている。「環境」では食の表示などに意識をもつことや、ため池などの活用を考えることなどがあつた。「自己・地域」では自分をよく知り、地域の行事に積極的に参加することなどが意見として出された。いずれも、自分たちの力で実行可能なものであり、適切なきっかけがあり、歯車がうまく回ることによって持続できそうな取り組みも多い。

自分たちができること、あるいはすべきことについて加古川地域の住民は高い意識をもっていることを確認できた。これは議論全体の意義の一つであろう。

課題は、適切なきっかけと、歯車が回る仕組みである。「自己・地域」で指摘されたように、特に若い世代が参加することが難しい現状がある。そのあたりを念頭に置き、後押しするような環境を、大学や行政がつくることが求められるであろう。

一方、危険を避けるための道路の整備や、自転車の免許制、川の治水対策など、行政の力を必要とする意見も数多く出された。ただし、これらについても、地域住民が単に待ちの姿勢をとるというのではない。「防犯」では地域と行政の連携の強化を求める声が、「交通」では行政への提言の必要性が、そして「自己・地域」ではハザードマップを地域と専門家が一緒に作成する提案が、意見として出された。地域住民が、大きな課題に積極的に参画する用意があることを示したと言えるのではないだろうか。これも議論全体の意義の一つであろう。

(北島律之)

加古川地域「安心・安全 カルタ」

| | | | | |
|--------------------------------------|---|-------------------------------------|--------------------------------------|---|
| <p>わ たしたち 一人一人が 防犯係</p> | <p>ら くをして 安全な街は つくれない</p> | <p>や っちゃった そうなる前に 確認を</p> | <p>ま てよコラッ！ 目の前信号 赤だけど？！</p> | <p>は じめよう きんじよの人と ごあいさつ</p> |
| | <p>り かいしあえる 地域のキズナが 安全につながる</p> | | <p>み んな一緒に 絶対守ろう 交通ルール</p> | <p>ひ とと人 つながり守る 地域から</p> |
| <p>を んりようを 大きくさせよう 放送施設</p> | <p>る ーるをね 守るとみんな 良い気持ち</p> | <p>ゆ だん タイテキ そのスマホ</p> | <p>む かんしん 一番イケナイ 絶対に</p> | <p>ふ だんから 自分を守るのは 自分だけ</p> |
| | <p>れ んしゅうだ 皆で作ろう 防災地域</p> | | <p>め ざそう サザエさん</p> | <p>へ へいお待ち！ 狭い道そんなに 急いでどこへ行く？</p> |
| <p>ん ！いいね！！ 優しい気遣い できるひと</p> | <p>ろ うじんを 大切に出来る 人づくり</p> | <p>よ くないよ ながらスマホと ルール無視</p> | <p>も う一度 あの人だーれ？ ふり返る</p> | <p>ほ っとする 温もりのある街 加古川に！</p> |

あ そこにも
笑顔の花咲く
街にしたい

か なえよう
事故のある場所
安全に

さ いきんは
あのおじいちゃん
元気かな？

た のしもう
地域ぐるみで
町づくり

な まえを
知ろう
近所の人の

い いのかな
行動前に
考えよう

き をつける
最も「悪」は
無関心

し あわせ
いっばい
かがわのまち

ち やりのって
スマホを見ずに
前を見よう！

に こやかに
あいさつしよう
誰とでも

う しろから
いろんな危険が
追ってる

く ふうして
地域で描く
防災マップ

す つきやねん
やっぱりすきや
このまちが

つ ながり
守ろう
地域の安全

ぬ くもりある
ちいきれんけい

え んまん
家庭と地域
あいさつで

け いけんを
大いに活かし
伝えよう！

せ まいなあ
そう思うなら
一列で！

て いねいな
運転こそが
思いやり

ね ずみまでもが
おどろくような
防犯対策

お 互いに
できることを
考えよう！

こ ども達
地域の宝
守りぬこう

そ れぞれの
防災意識
高めよう

と まれ！！
一時停止は
大事やで

の びのびと
子供が遊べる
加古川市

ファシリテーター研修の授業で一人の学生に出会いました。彼を見た最初の印象は、「意識が低い学生」でした。髪型も服装もなんとなくだらしがないし、研修開始ギリギリに到着。椅子に浅く座って、背もたれにもたれた感じです。研修中の私の問いかけにも言葉少なめで、実際のワークショップ体験中も、積極的に自分の意見を言うことはありませんでした。研修には来ているものの、学ぶやる気も、やってみる勇気もないのです。私は、正直不安でした。彼に熟議のファシリテーターが務まるのかと。

しかし、迎えた当日の朝の彼は違いました。驚きました。なんと彼の服装はスーツで髪型もきちんとセットされていました。しかも誰よりも早く到着して、細々と準備している。これまでにない真剣な表情です。私の驚きは熟議がスタートしても更に続きました。話合いでは、どの参加者の意見にも真剣な眼差しで耳を傾けている！しっかりとうなずいている。見事に参加者の声を引き出しています。また、そればかりか、参加者から出た意見を、悩みながらも一生懸命自分なりにまとめようとして、その姿が、熟議参加者の共感を呼び、見事に全員参加の議論になっている。

彼が自分の力を今まで隠していたのか、それとも彼が成長したのかはわかりません。でも、どちらにせよ、彼の力を引き出させたのは熟議という「場」だったのだと思います。本気を引き出させる本番という場です。地域の大人や高校生が集まり、それぞれの意見を真剣に議論する場だからこそ成し得たことなのではないのかなと思います。考えてみれば、力を引き出されたのは彼だけではなかったように思います。参加した大学生全員が、この熟議という場によって成長したのではないのでしょうか。

「最近の若者は・・・」というセリフはいつの時代の若者も言われてしまいます。でも、大人がそういった言葉を使えば使う程、若者は「本気」を引き出す場からは遠ざけられてしまいます。私たち大人が、若者に役割を任せることは勇気のいることかもしれません。でも任せるからこそ成長するのです。勇気が必要なのは、若者ではなく、私たち大人なのかもしれない。たった一日の熟議でしたが、その日に至るプロセスを含め、そんなことを感じました。

最後に、例の彼ですが、熟議が終わり、参加者が帰ったあと、達成感に満ちた表情で私に「思った程うまくはいきませんでした。楽しかったです」と言ってくれました。その時、私から見た彼の印象は「意識の高い好青年」となっていました。

第4章 熟議への意識と地域の課題

～安心・安全を創るための地域のちからを巡って～

1. 参加者への「熟議」アンケートの概要

討議型世論調査の方式を参考に、兵庫大学の熟議では、参加者に対し、事前のアンケートと事後のアンケートを課しており、その比較を行うことによりテーマに対する参加者の意見が、熟議の前後でどのような変化をするか検証が可能である。これまでの熟議でもアンケート調査を実施してきた。その場合、例年共通して熟議や討議といった熟議手法に関する質問を設ける他、それぞれの年度毎のテーマに関する質問項目も用意をしている。特に、テーマに関する質問については、事前、事後のアンケートで共通させており、その差を熟議によつての意見の変化として明らかにする。

「熟議 2015 in 兵庫大学」においても、この方針を引き継ぐ。具体的なアンケートの設問作成は、田端の原案を踏まえ熟議プロジェクトチームで作成、結果の統計分析は同チームの森下が行った。

(1) 回答の回収数

「事前アンケート」、「事後アンケート」の回答の回収状況の概要を示しておく。

「事前アンケート」の回収数は、80件であり、「事後アンケート」の回収数は77件である。当日の参加者は、77名であった。事前に回答しながら参加しなかった方もあった。両アンケートに共通し、個別にマージが可能になる回答者数は73名であった。「事前アンケート」「事後アンケート」の比較はこの集団を対象とする。

(2) 属性別の回答状況

属性として、まず参加者の性別での構成を示す。性別では、男性が2/3、女性が1/3を占めている。これは過去の熟議の比率とほぼ同様である【表4-1-1】。

| | 事前アンケート | | 事後アンケート | |
|----|---------|--------|---------|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 男性 | 54 | 67.5% | 50 | 64.9% |
| 女性 | 26 | 32.5% | 27 | 35.1% |
| 計 | 80 | 100.0% | 77 | 100.0% |

表4-1-1 性別の回答数

次に、生年月日より計算した年齢階級別の比率を示す【表 4-1-2】。年齢階級では、「20 歳未満」が事前で 6 割を占めている。兵庫大学での熟議では、多様な年齢層の参加者による議論を重視しており、これまでも地域内の高等学校に対し積極的に参加の声掛けを行ってきた。学生の参加もあることから、類似する事業の中ではこの年代の参加率は高く、「熟議 2013 in 兵庫大学」ではおよそ 40.0%、翌年の「熟議 2014 in 兵庫大学」でおよそ 45%であり、徐々に数字が上昇している。今回の「熟議 2015 in 兵庫大学」では、例年よりもこの年齢層の参加者が多くあった。熟議による教育効果の評価が高等学校の間で高まっており、参加を決めた学校が多かったと考えられる。次に「20 歳以上、40 歳未満」の割合がおよそ 20%を占めており、ここには兵庫大学の学生も含まれている。さらに「60 歳以上」も 15%以上を占めている。

| | 事前アンケート | | 事後アンケート | |
|---------------|---------|--------|---------|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 20 歳未満 | 48 | 60.0% | 42 | 54.5% |
| 20 歳以上、40 歳未満 | 15 | 18.8% | 17 | 22.1% |
| 40 歳以上、60 歳未満 | 5 | 6.3% | 6 | 7.8% |
| 60 歳以上 | 12 | 15.0% | 12 | 15.6% |
| 無効回答 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| 計 | 80 | 100.0% | 77 | 100.0% |

表 4-1-2 年齢階級別の回答数

所属別では、前述の通り「高等学校（高校生）」が最も多く、42 件で過半数を占める。次いで「大学（大学生）」が 10 件、12.5%である。学生、生徒が 2/3 を占めている結果である。アンケート結果を読み解く場合には、若年者が多い点に注意が必要である。学生、生徒以外では、「自治体・政府（公務員）」が 9 件、11.3%となっている【表 4-1-3】。

| | 件数 | 比率 |
|-------------|----|--------|
| 高等学校（高校生） | 42 | 52.5% |
| 大学（大学生） | 10 | 12.5% |
| 民間企業 | 4 | 5.0% |
| 自治体・政府（公務員） | 9 | 11.3% |
| NPO・各種団体 | 5 | 6.3% |
| その他 | 6 | 7.5% |
| 無職 | 4 | 5.0% |
| 無効回答 | 0 | 0.0% |
| 計 | 80 | 100.0% |

表 4-1-3 事前アンケートでの所属別の回答数

2. 議論に臨む考え方と熟議への評価

(1) 議論への評価

熟議など議論の経験について、事前アンケート（N=80）を対象に分析をする。

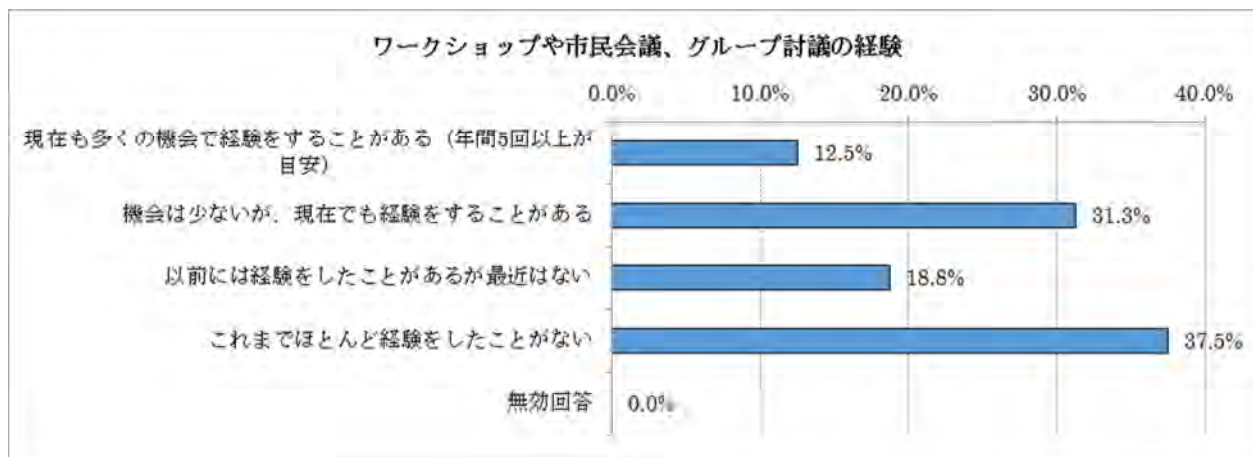


図 4-2-1 ワークショップや市民会議、グループ討議の経験

「これまでほとんど経験をしたことが無い」の比率は 37.5%である。「熟議 2013 in 兵庫大学」では、同じ項目が 42.2%、また「熟議 2014 in 兵庫大学」では 46.9%であり、今回はそれよりも相当に低くなっている【図 4-2-1】。所属別での結果を【表 4-2-1】に示すが、参加者について高校生・大学生（N=53）と、それらを除いた社会人（N=27）で比較すると、社会人では「これまでほとんど経験をしたことが無い」が 11.1%と低い。これに対し回答者数の多い高校生・大学生では 50.9%と高く、全体での比率にも影響をしている。社会人と比べ、高校生・大学生では社会経験が少なく、会議などの機会も少ない。社会人と高校生・大学生の参加状況の差は従前の結果とも類似する。ただ高校生の場合は昨年「熟議 2014 in 兵庫大学」での 77.1%から、今回は 42.9%と大幅に低下している。高等学校では議論の機会を増やしていることが考えられる。また、社会人については、「機会は少ないが、現在でも経験をする」が 48.1%と半数近くを占める。「現在も多くの機会に経験をする (年間 5 回以上が目安)」の 18.5%と合算すると、2/3 の社会人が、継続的にグループ討議の機会を得ていることになる。

| | 高校生・大学生 | | 社会人 | |
|----------------------------|---------|--------|-----|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 現在も多くの機会に経験をする (年間5回以上が目安) | 5 | 9.4% | 5 | 18.5% |
| 機会は少ないが、現在でも経験をする | 12 | 22.6% | 13 | 48.1% |
| 以前には経験をしたことがあるが最近はない | 9 | 17.0% | 6 | 22.2% |
| これまでほとんど経験をしたことがない | 27 | 50.9% | 3 | 11.1% |
| 無効回答 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| 計 | 53 | 100.0% | 27 | 100.0% |

表 4-2-1 所属別・ワークショップや市民会議、グループ討議の経験

次に、「参加者が議論し、対策や方針を作成する」ことに対し、良い点と悪い点をそれぞれ求めた【図 4-2-2、図 4-2-3】。

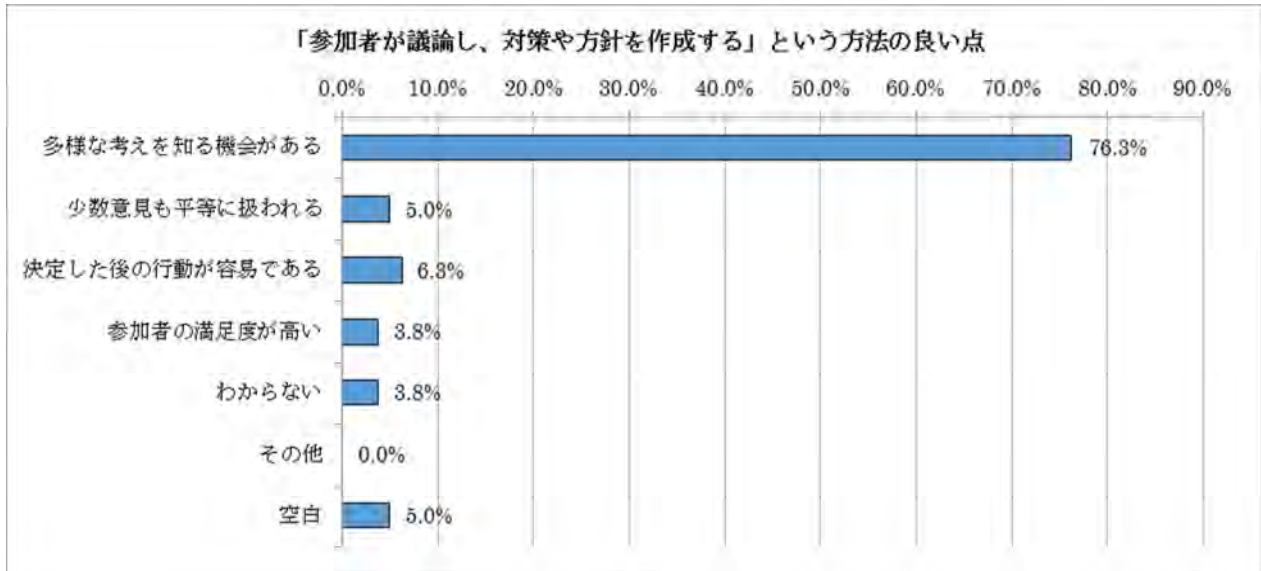


図 4-2-2 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

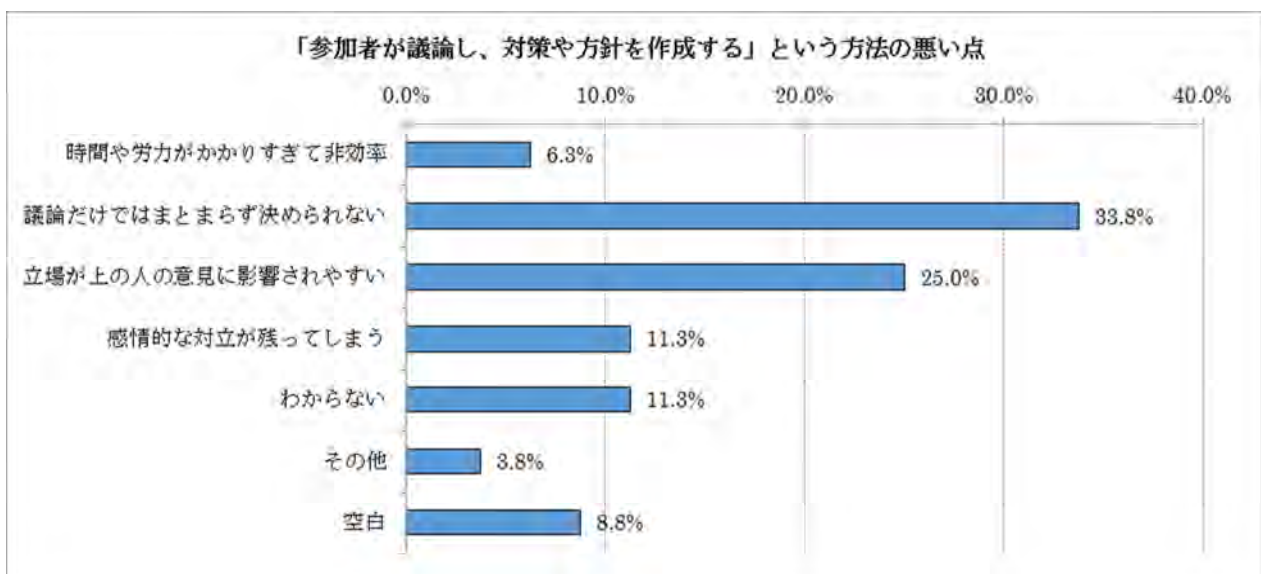


図 4-2-3 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

良い点として最も多い回答は、「多様な考えを知る機会がある」で、76.3%を占める。昨年、一昨年とも70%を超える回答である。多様な考えを知ることへの期待が大きいことは、ワークショップの利点とされる多様な考えの表出への期待に結び付く。

逆に、悪い点では「議論だけではまとまらず決められない」が33.8%、次いで「立場が上の人意見に影響されやすい」で25.0%である。ちなみに、これら2つの意見について、昨年度は、「立場が上の

人の意見に影響されやすい」が 29.2%で最大、「議論だけではまとまらず決められない」が 25.0%であったが、一昨年度は、逆に 22.9%、38.6%である。本年度の結果は、いわば一昨年度に戻った、ともいえる。いずれにしても、これらの割合が高いことは、「決定する」という要素において、議論には不利な点がある、と考えていることがわかる。なお、所属別で【表 4-2-2、表 4-2-3】に示す。

| | 高校生・大学生 | | 社会人 | |
|----------------|---------|--------|-----|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 多様な考えを知る機会がある | 38 | 71.7% | 23 | 85.2% |
| 少数意見も平等に扱われる | 4 | 7.5% | 0 | 0.0% |
| 決定した後の行動が容易である | 2 | 3.8% | 3 | 11.1% |
| 参加者の満足度が高い | 3 | 5.7% | 0 | 0.0% |
| わからない | 3 | 5.7% | 0 | 0.0% |
| その他 | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| 空白 | 3 | 5.7% | 1 | 3.7% |
| 計 | 53 | 100.0% | 27 | 100.0% |

表 4-2-2 所属別・「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

| | 高校生・大学生 | | 社会人 | |
|-------------------|---------|--------|-----|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 時間や労力がかかりすぎて非効率 | 2 | 3.8% | 3 | 11.1% |
| 議論だけではまとまらず決められない | 14 | 26.4% | 13 | 48.1% |
| 立場が上の人の意見に影響されやすい | 12 | 22.6% | 8 | 29.6% |
| 感情的な対立が残ってしまう | 8 | 15.1% | 1 | 3.7% |
| わからない | 8 | 15.1% | 1 | 3.7% |
| その他 | 3 | 5.7% | 0 | 0.0% |
| 空白 | 6 | 11.3% | 1 | 3.7% |
| 計 | 53 | 100.0% | 27 | 100.0% |

表 4-2-3 所属別・「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

良い点として挙げられる中で、興味深いのは、高校生・大学生では、「少数意見も平等に扱われる」が 7.5%、「参加者の満足度が高い」が 5.7%など、参加者に注目した意見にも回答が見られたこと、それに対し、社会人では「決定した後の行動が容易である」が 11.0%と決定に注目していることが伺われる。逆に悪い点として挙げられる項目に注目すると、「議論だけではまとまらず決められない」が社会人では 48.1%と半数近くを占めるのに対し、高校生・大学生では 26.4%である。また高校生・大学生は「感情的な対立が残ってしまう」が 15.1%あるのに対し、社会人の場合の比率は低い。これに対し高校生・大学生は議論そのものに関心を持ち、社会人は結論や決定に注目をしている。

(2) 議論に対する期待と得られた成果

「熟議 2015 in 兵庫大学」における議論の段階への期待と、議論の後に実際に得られた成果について、

「事前アンケート」での設問である、「[熟議 2015 in 兵庫大学]」での「議論の段階」において、あなたはどのことに最も大きな期待をしておられますか」と「事後アンケート」にある設問「[熟議 2015 in 兵庫大学]」の議論の段階で、あなたにとってはどうのような成果がありましたか」の回答を、前者を期待と後者を成果として比較する。なお、比較を行うために、ここでは事前、事後のアンケートの双方を回答した共通回答者（N=73）を対象としている【図 4-2-4】。

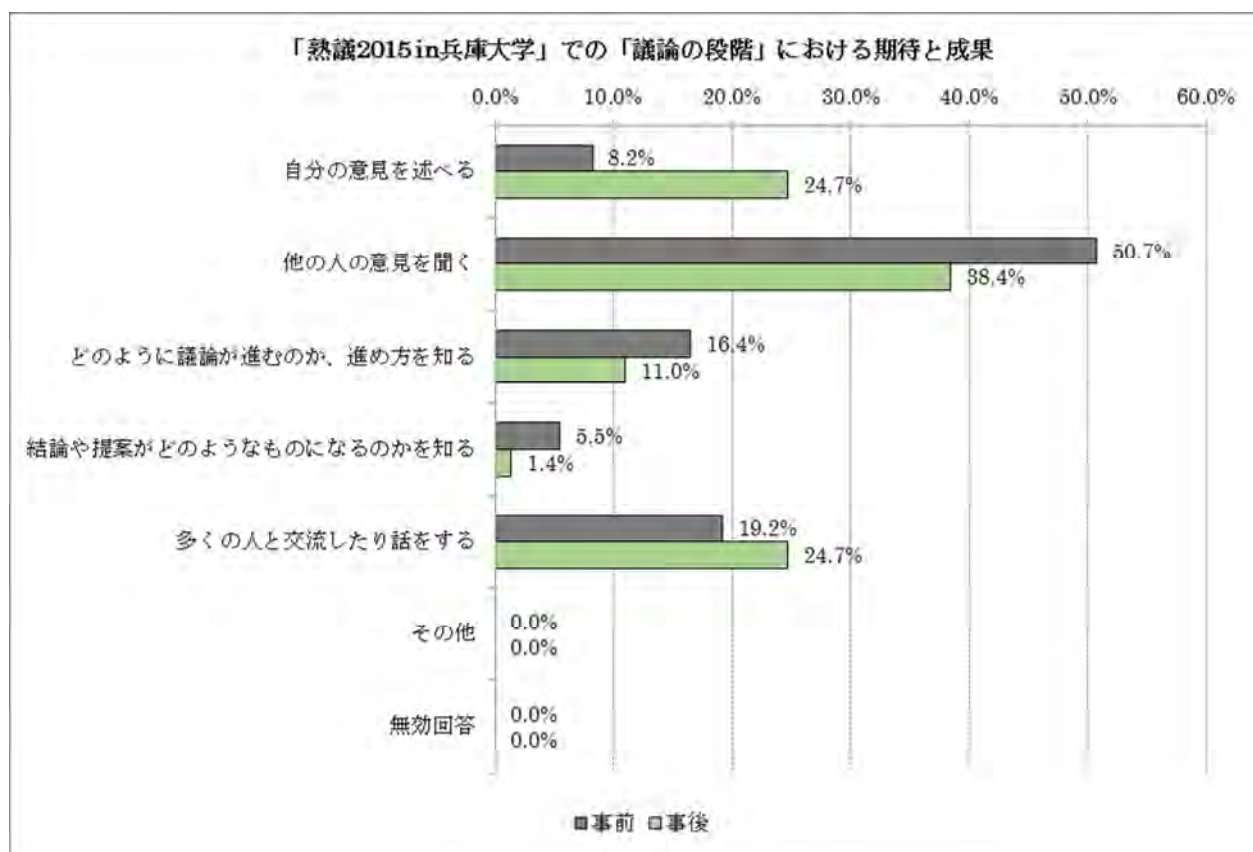


図 4-2-4 「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果

期待での回答の多い項目は、「他の人の意見を聞く」で 50.7%である。意見を聞くことへの期待は、「熟議 2013 in 兵庫大学」で 44.9%、「熟議 2014 in 兵庫大学」では 46.6%といずれも半数を占めている。熟議への期待は他者の意見を聞く機会と認識されており、裏返すならばそうした機会を求める人が多いことになる。「多くの人と交流したり話をする」が 19.2%、「どのように議論が進むのか、進め方を知る」が 16.4%である。両選択肢とも、過去の熟議におけるアンケート結果にあっても、15%から 20%程度を占めており、同様の結果を示していた。興味深いのは「自分の意見を述べる」の期待が 8.2%を占めている点である。「熟議 2013 in 兵庫大学」では 1.3%と低く、「熟議 2014 in 兵庫大学」は 3.4%であった。「自分の意見を述べる」期待が徐々に増加をしている。意見の述べる機会との認識が広がってきているのではないかと。

次に、成果では、「他の人の意見を聞く」が38.4%であり、期待と比べその比率が低下する。昨年度「熟議2014 in 兵庫大学」の結果は、むしろ47.7%と増加していた。もっとも、一昨年度の「熟議2013 in 兵庫大学」の場合は、本年度同様に成果の方が期待よりも低下(39.7%)していたことを踏まえると、常に「他の人の意見を聞く」ことの重要性を半数の人は、期待、成果ともに有しているといえる。「自分の意見を述べる」は24.7%であり、期待の8.2%と比べて増加している。この点は、昨年度、一昨年度の結果とも共通する。昨年度は期待の3.4%から成果では22.7%、一昨年度は1.3%から17.9%へ、それぞれ大幅に増加した。熟議の中で、自分の意見を述べる機会を發揮し、重要性を認識したといえる。「多くの人と交流したり話をする」は24.7%に増加、「どのように議論が進むのか、進め方を知る」は逆に11.0%に低下している。昨年度、「多くの人と交流したり話をする」については、成果(10.2%)が期待(15.9%)を下回り、一昨年度、15.4%から29.5%と倍増していたことと対照的であった。年度よっての違いは、議論の進め方にも影響を受けた可能性がある。

期待と成果について、所属先から高校生・大学生(N=47)、及び社会人(N=26)についてと2つに区分し、比較を行う【図4-2-5、図4-2-6】。

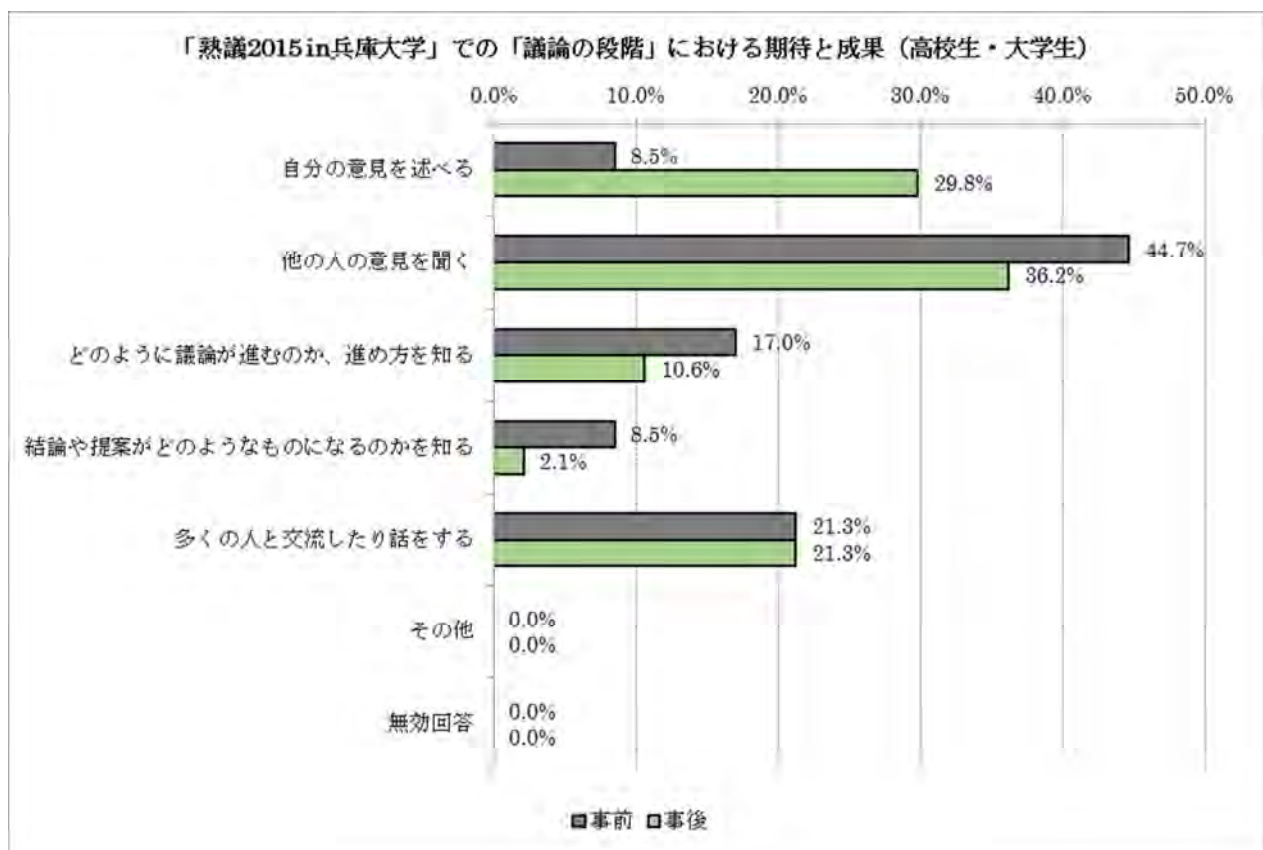


図4-2-5 「熟議2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果 (高校生・大学生)

高校生・大学生は、「他の人の意見を聞く」との期待は44.7%であり、社会人の61.5%と比べて低くなっている。「多くの人と交流したり話をする」の期待は高校生・大学生で21.3%であり、社会人の15.4%

を上回る。しかし、成果では21.3%、30.8%と逆転される。前述のように、議論の過程にも関心を持つ高校生・大学生にとっては、交流は大事な要素であり、期待も高く、結果も準じたのではないかと。社会人は結論を得る、ということに議論の意義の中心をおいており、議論の最中にある交流には関心が低かった。しかし、多様な世代との交流を体験し、それを重要な成果と判断した。多様な世代との交流を一つの重要なテーマとする兵庫大学熟議手法にとっては、その手法を評価されたと考えてよいだろう。

また、「自分の意見を述べる」については、高校生・大学生では、期待の8.5%から成果の29.8%に、社会人では7.7%から15.4%にいずれも増加している。特に、高校生・大学生の場合の伸び率が大きく、社会人を対象として自分の意見を述べる事ができた自信も背景にあると考えられる。

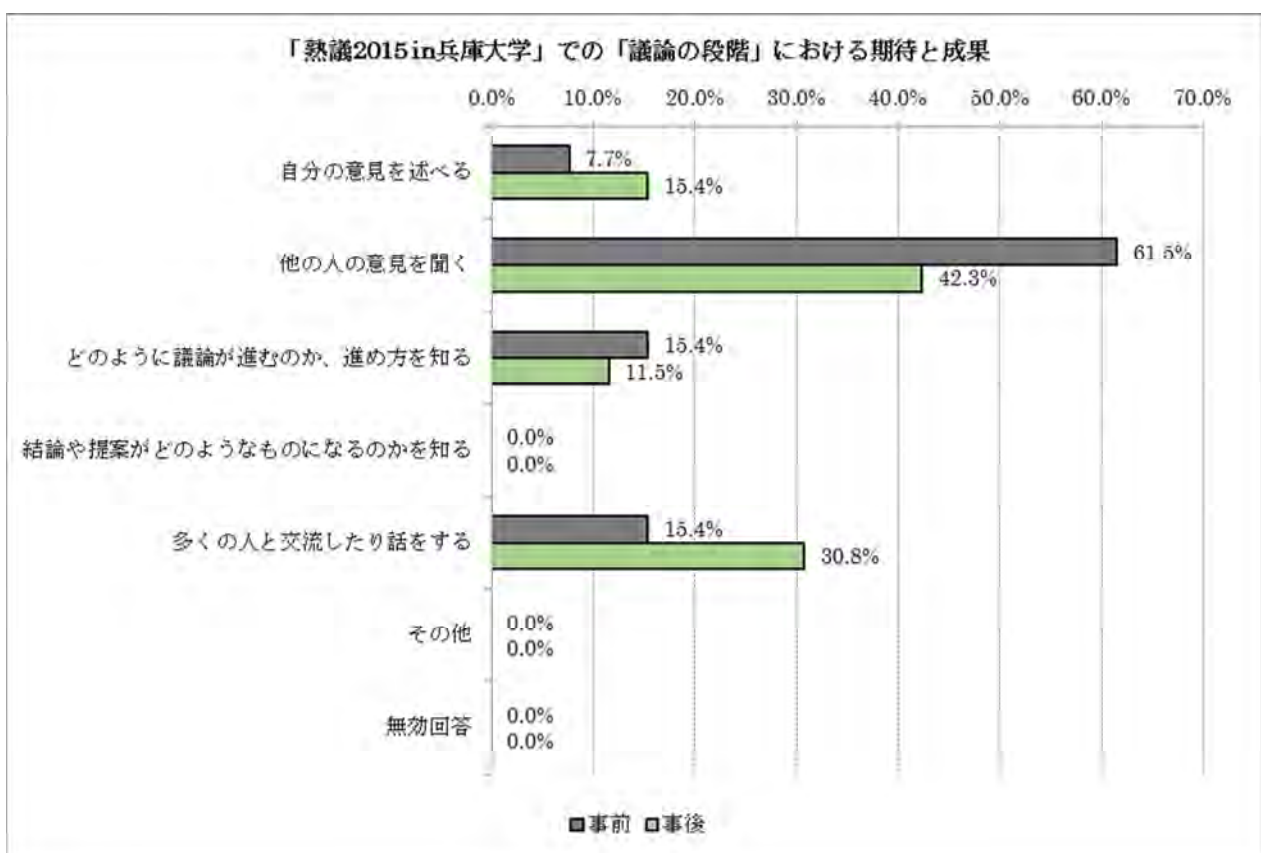


図4-2-6 「熟議 2015 in兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果 (社会人)

(3) 議論に臨む重要な資質とは

兵庫大学熟議手法は、教育的な側面を有することは既に述べたとおりである。その中でも未成年など、まだ社会に出る前の若年者、すなわち熟議に参加する高校生、大学生については、コミュニケーション力など社会人に必要な能力の涵養が教育の中心となる。大学生に対しては「熟議 2012 in 兵庫大学」以降、また高校生に対しては「熟議 2013 in 兵庫大学」以降、社会人基礎力²などを踏まえて、熟議に関

² 経済産業省が2006年から提唱する職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な能力であり、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されている。

連するであろう10の能力について、熟議の前後で自己評価を行い、その変化から熟議による成長を計測した。なお、これらの詳細について、第5章では高校生、第6章では大学生について、熟議に臨む態度、その結果としての意見の変容とともに、分析、評価している。

社会人に対し、これら成長を問うことは適切ではなく、これらの能力が社会経験を踏まえ、議論に臨む際に重要であるかどうかを計測することとした。具体的には、「事前アンケート」と「事後アンケート」にて、10の能力について、その重要度を、5が非常に重要、1が全く重要ではないという5段階評価で評価してもらい、その平均値を共通の回答者（N=26）について比較をする【図4-2-7】。

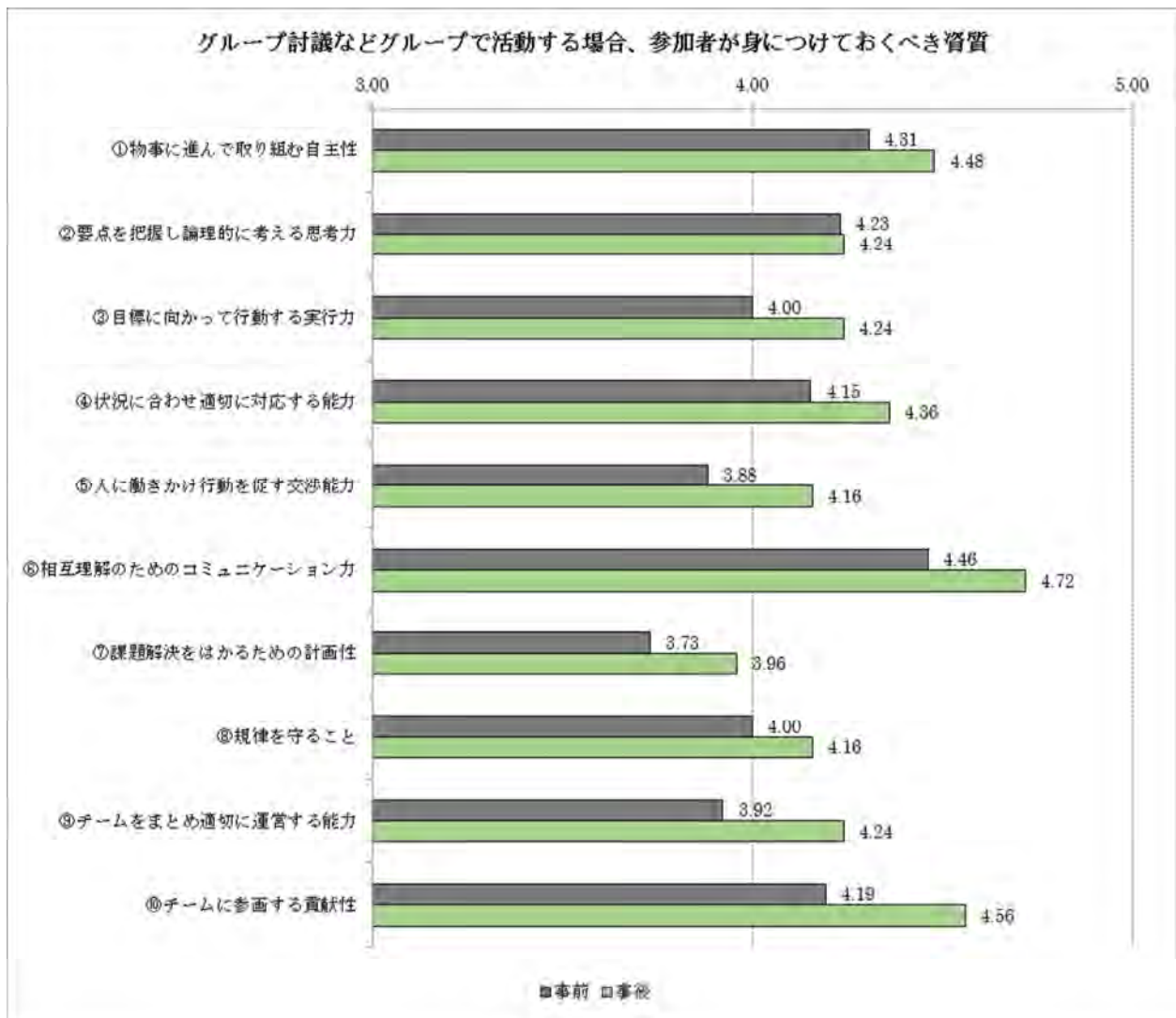


図4-2-7 グループ討議などグループで活動する場合、参加者が身につけておくべき資質

全ての能力において、事後の平均が事前を上回っており、つまり、熟議を終えてそれら能力の重要性が上がったことから、いずれの能力も熟議を行うことに不可欠ということになる。「熟議2013 in 兵庫

大学「熟議 2014 in 兵庫大学」でも同様の結果が得られており、これらの能力を高校生・大学生が身につけることで、成長をしたかどうかを判断する、との検証には大きな意味があるといえる。

「事前アンケート」で点数が最も高いのは、「⑥相互理解のためのコミュニケーション力」が 4.46 ポイント、次いで、「①物事に進んで取り組む自主性」が 4.31 ポイント、「②要点を把握し論理的に考える思考力」が 4.23 ポイントとなっている。昨年度においても、コミュニケーション力が 4.49 ポイント、自主性が 4.41 ポイント、思考力が 4.33 ポイントと同様な順序であり、さらに一昨年度の「熟議 2013 in 兵庫大学」でも、これら 3 つの能力が「事前アンケート」で高くなっていた。熟議など議論には、コミュニケーション力とともに、課題を考える思考力や積極的に参加する自主性が求められる。

「事後アンケート」でも、やはり「⑥相互理解のためのコミュニケーション力」が 4.72 ポイントと最も高い。事後の回答者 (N=35) を見ると、非常に重要という 5 を挙げた回答者が 45.7% と 4 割以上を占める。次いで「⑩チームに参画する貢献性」が 4.56 ポイント、「①物事に進んで取り組む自主性」が 4.48 ポイント、「④状況に合わせて適切に対応する能力」が 4.36 ポイントとなっている。コミュニケーション力、自主性は、しばしば就職の際にも求められるが、回答はそうした社会人としての認識を示し、社会人として要する能力と考えられている可能性がある。注目したいのは「⑩チームに参画する貢献性」で事後では事前と比して 0.37 ポイント上昇をしている。チームについては「⑨チームをまとめ適切に運営する能力」も 0.32 ポイント、上昇している。このように、実際に議論を行った後、チームワークへの関心が強くなっている。昨年度も「⑨チームをまとめ適切に運営する能力」は事前の 4.0 から事後に 4.28 へと上昇している。今年度の熟議では、終日を議論の段階に充てるなどこれまで以上に同一テーブルで過ごす時間を長く取っていた。その中で、培われたチームワークが熟議を進める上で役に立った、との認識があったと思われる。

3. 「熟議 2015 in 兵庫大学」と熟議民主主義

(1) 認知度と参加

兵庫大学での「熟議」は、議論の機会だけではなく、事前の熟慮やその後の交流なども含む一連の手法である。この手法を本学で開発し、アンケート結果や参加者の声を参考にしつつ、毎年改善を続けている。改善は、もちろんより良い手法を求めて行われているのであるが、同時に参加者が様々な課題について、議論をすることでその解決に導く、との手法を定着させる、という思いもある。熟議の意義は、熟議型民主主義、討議型民主主義といわれるように、民主主義の保証という側面があり、兵庫大学熟議手法が民主主義を支える一助になると考えている。そのため、熟議という言葉の認知度が高まり、身近なものとなることが不可欠である。こうした点を踏まえ、この節では熟議の意義を考えることとする。

最初に、参加者の熟議に対する認知度を明らかにする。「事前アンケート」(N=80)、つまり熟慮の前の段階での調査である。

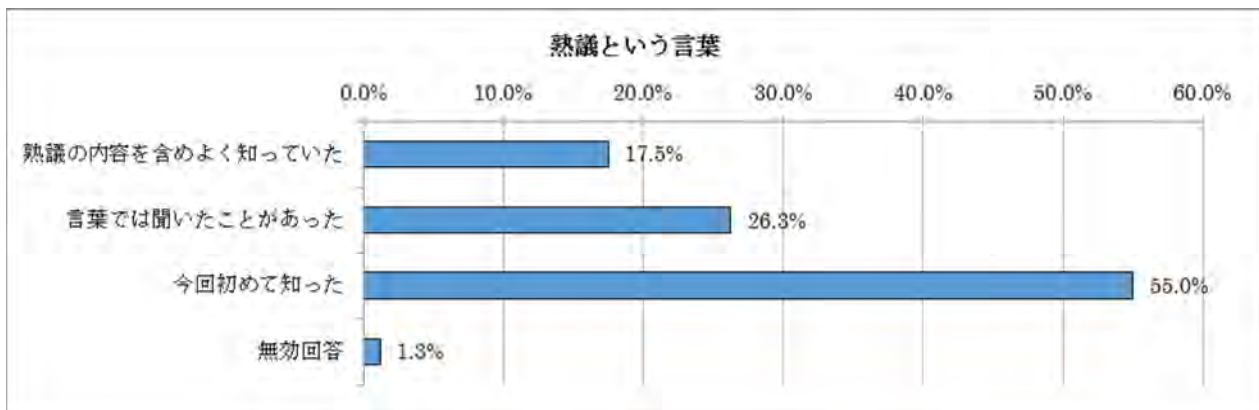


図 4-3-1 熟議という言葉の理解

4

「熟議の内容を含めよく知っていた」との回答は 17.5%、「言葉では聞いたことがあった」は 26.3%、「今回初めて知った」は 55.0%である。「今回初めて知った」との回答が、過半数を占めており、まだ一般的な名詞とはなっていないと考えられる【図 4-3-1】。

これを所属別で見ると【表 4-3-1】、高校生・大学生では、「熟議の内容を含めよく知っていた」が 5.7%、社会人では 40.7%と、両者に大きな差がある。社会人の場合、兵庫大学の熟議に継続して参加される方があることも要因と思われる。高校生・大学生では、「今回初めて知った」が 71.7%と 7 割を上回る。もっとも高校生・大学生も、「言葉では聞いたことがあった」との回答が 22.6%を占めている。昨年度、この比率は 20.4%で、5 人に 1 人程度は熟議を知っていることになる。

| | 高校生・大学生 | | 社会人 | |
|-----------------|---------|--------|-----|--------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 熟議の内容を含めよく知っていた | 3 | 5.7% | 11 | 40.7% |
| 言葉では聞いたことがあった | 12 | 22.6% | 9 | 33.3% |
| 今回初めて知った | 38 | 71.7% | 6 | 22.2% |
| 無効回答 | 0 | 0.0% | 1 | 3.7% |
| 計 | 53 | 100.0% | 27 | 100.0% |

表 4-3-1 所属別・熟議という言葉の理解

熟議の認知度はどのように変化をしたのであろうか。当該質問項目については、2012 年度に実施した「熟議 2012 in 兵庫大学」以降、毎年調査をしている。【図 4-3-2】は、毎年の調査結果から、熟議についての理解の変化を示したものである。「熟議の内容を含めよく知っていた」は、2012 年度には 3.1%であったが、2015 年度では 17.5%にまで上昇、逆に、「今回初めて知った」との回答は 70.1%から 55.0%にまで減少をしている。明らかに熟議の認知度が高まっていることが読み取れる。熟議の普及という一つの目的は、徐々にではあるが、達成されつつある、といえるであろう。

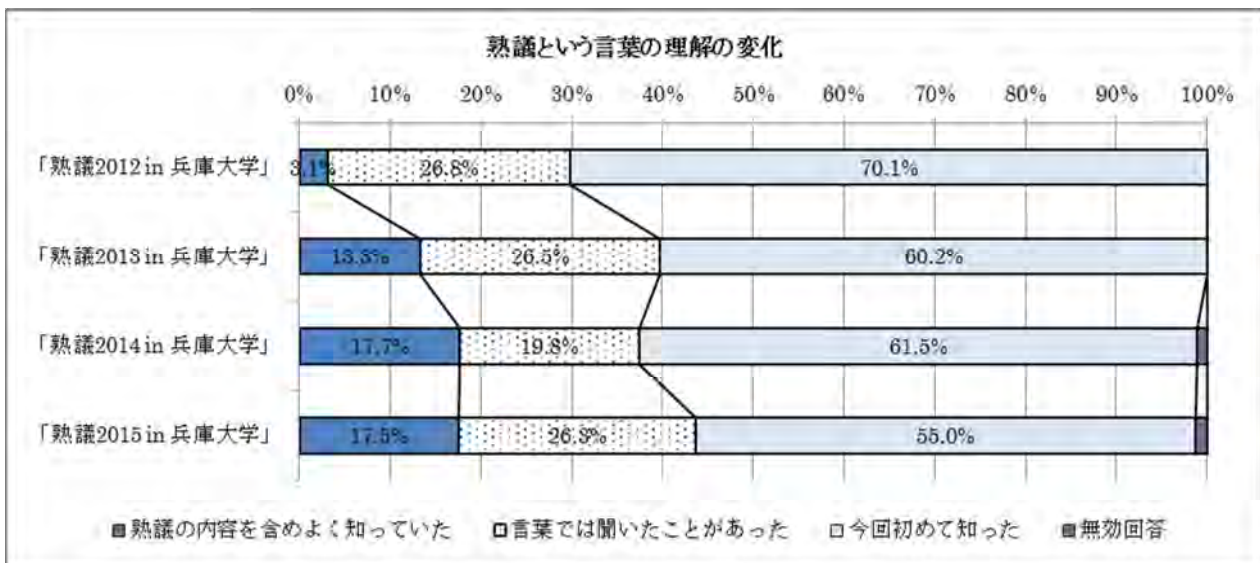


図 4-3-2 熟議という言葉の理解の変化

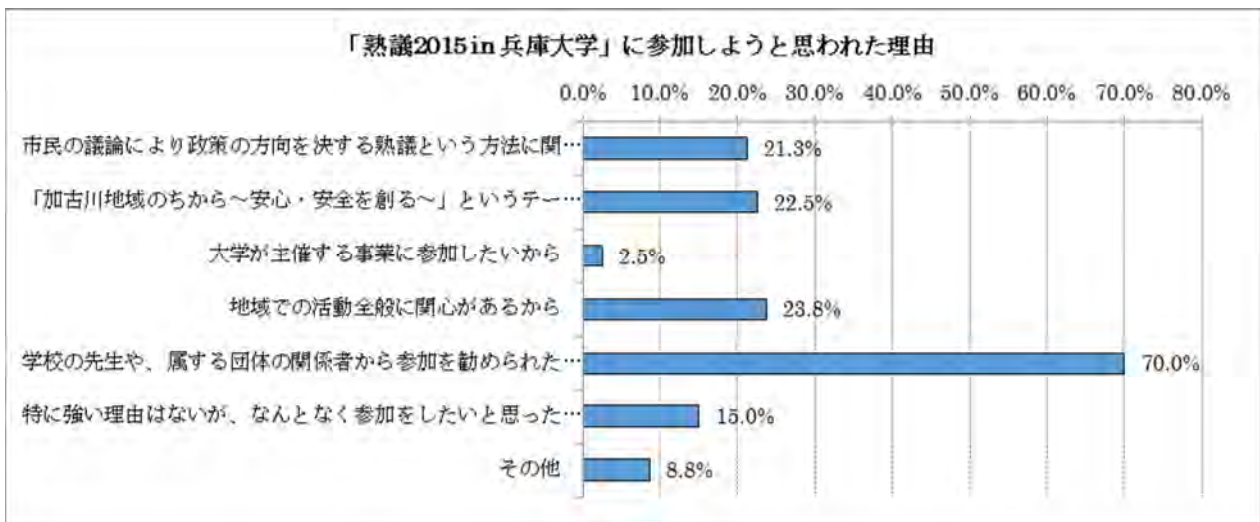


図 4-3-3 「熟議 2015 in 兵庫大学」への参加理由

次に、「熟議 2015 in 兵庫大学」への参加理由を複数回答で示す。

70.0%が「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」で占められている。これは昨年度とほぼ同一である。以下、「加古川地域のちから～安心・安全を創る」というテーマに関心があるから」が 22.5%、「地域での活動全般に関心があるから」が 23.8%、「市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから」が 21.3%と熟議への関心に応じて参加したとの回答がそれぞれ 2 割を占めている【図 4-3-3】。

所属別で、高校生・大学生は「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」が 84.9%となっている【表 4-3-2】。また「地域での活動全般に関心があるから」「市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから」が 13.2%を占めており、熟議の持つ手法への関心も見られ、

参加についてはテーマよりも、機会のあることが重要であった。つまり、機会を増やすことで熟議への若年者の理解と参加を拡大することが可能である。興味深い点として、「特に強い理由はないが、なんとなく参加をしたいと思ったから」が20.8%、また「その他」が13.2%を占めていることがある。「その他」についての記述では、「自分のためにも議論する力をのばしたい」など自分の力を付けたい、という回答が多くみられた。これらの点も熟議という方法への関心とみなすことができる。今後、市民の地域への関わりを重視するシティズンシップ教育の一環としての熟議の役割が高まることが予想される。

(各項目における回答者に対する割合)

| | 高校生・大学生 | | 社会人 | |
|-------------------------------------|---------|-------|-----|-------|
| | 件数 | 比率 | 件数 | 比率 |
| 市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから | 7 | 13.2% | 10 | 37.0% |
| 「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」というテーマに関心があるから | 3 | 5.7% | 15 | 55.6% |
| 大学が主催する事業に参加したいから | 1 | 1.9% | 1 | 3.7% |
| 地域での活動全般に関心があるから | 7 | 13.2% | 12 | 44.4% |
| 学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから | 45 | 84.9% | 11 | 40.7% |
| 特に強い理由はないが、なんとなく参加をしたいと思ったから | 11 | 20.8% | 1 | 3.7% |
| その他 | 7 | 13.2% | 0 | 0.0% |
| 計 | 81 | | 50 | |

表 4-3-2 所属別・「熟議 2015 in 兵庫大学」への参加理由 (M.A)

社会人では、「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」というテーマに関心があるから」が55.6%で過半数の方が、テーマに惹かれての参加である。次いで、「地域での活動全般に関心があるから」が44.4%であり、いずれにしても地域の課題を自ら解決することに関心があると思われる。さらに「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」が40.7%を占めている。

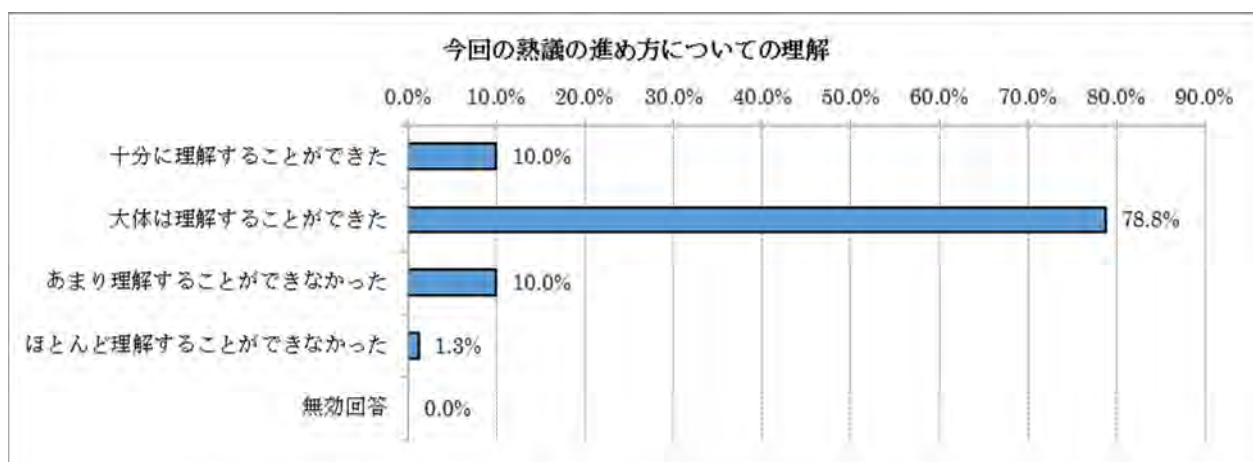


図 4-3-4 今回の熟議の進め方についての理解

熟議の進め方への理解を、「事前アンケート」の結果から明らかにする。

「十分に理解することができた」は 10.0%で、また「大体は理解することができた」は 78.8%である。合計では 88.8%が手法を理解したことになる。昨年度の「熟議 2014 in 兵庫大学」では、それぞれ 7.3%、77.1%であり、昨年度を上回るが、一昨年度の 14.5%、73.5%と比べた場合、「十分に理解することができた」がやや低くなっている。とはいえ、全体の傾向として、熟議に対する理解度については年度による差はほとんどないといってもよいだろう【図 4-3-4】。

(2) 熟議への評価と比較

次に、「事後アンケート」の結果から、「熟議 2015 in 兵庫大学」への評価を確認する。

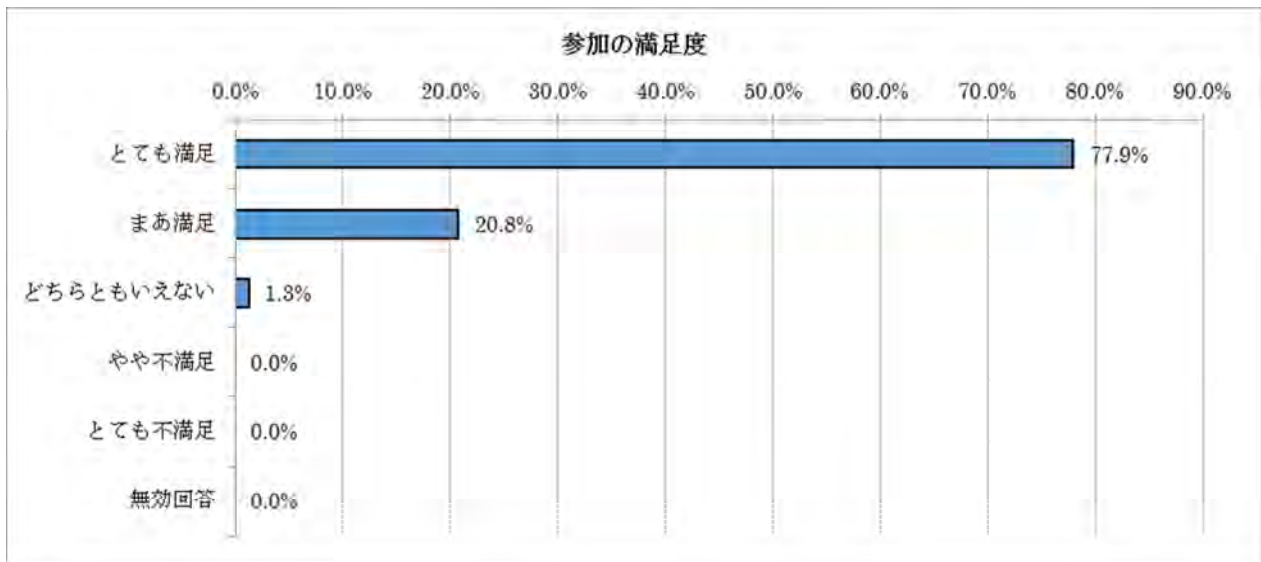


図 4-3-5 参加の満足度

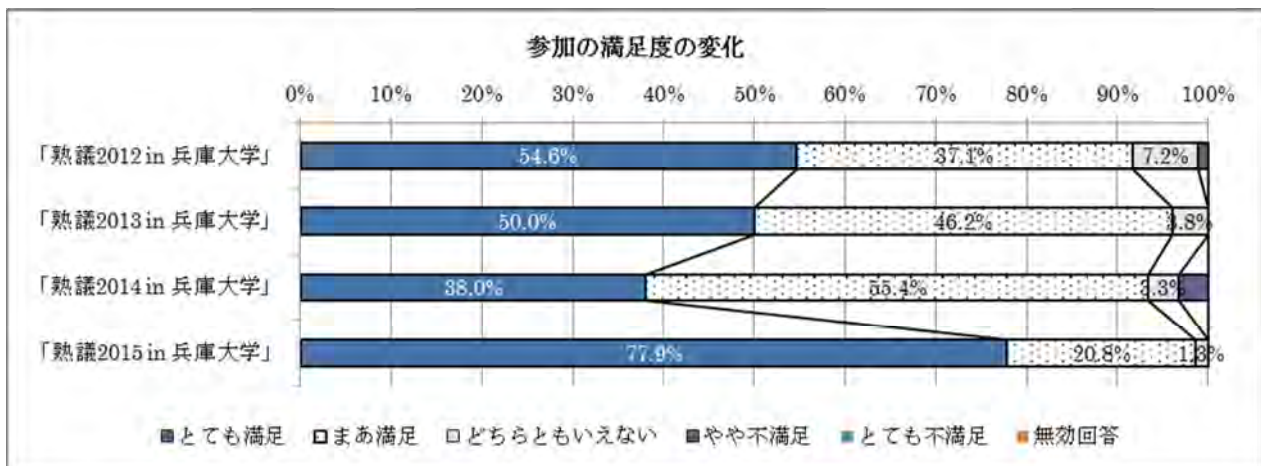


図 4-3-6 参加の満足度の変化

参加への満足度では、「とても満足」が 77.9%、「まあ満足」 20.8%を占めており、ほとんどの方が満足をしている。第 1 章でも述べたように、満足度向上にも取り組み、その成果があったといえる【図 4-3-5】。

そして、参加の満足度の変化については、「熟議 2012 in 兵庫大学」以降、「とても満足」の回答が低下する傾向にあったが、「熟議 2015 in 兵庫大学」で挽回し、高い満足度となった【図 4-3-6】。

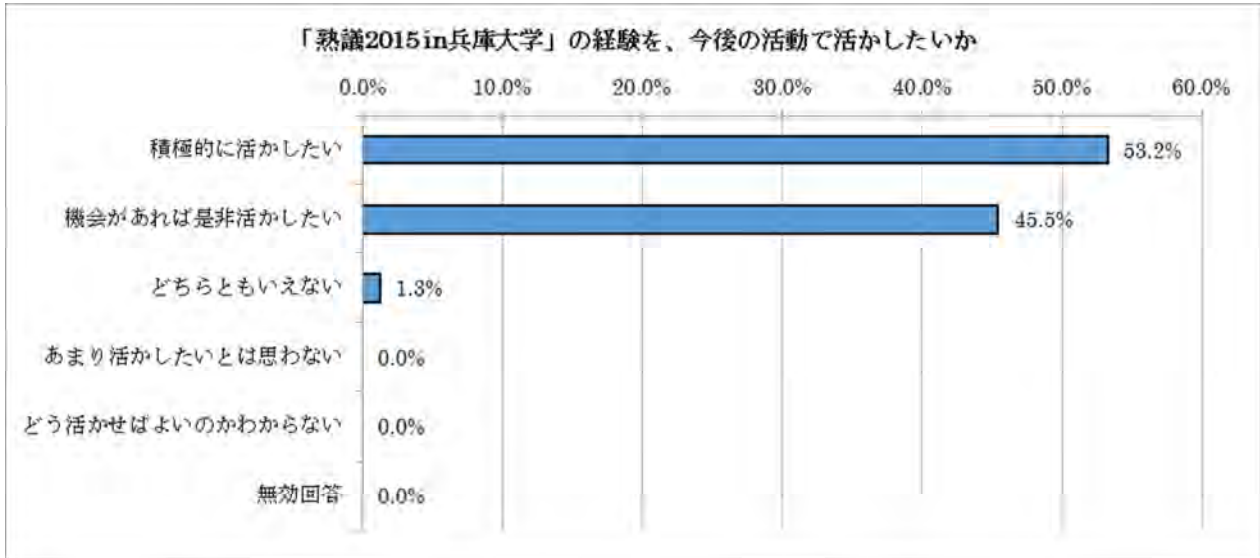


図 4-3-7 「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいか

「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を今後活かしたいか、との設問に対し「積極的に活かしたい」、53.2%、「機会があれば是非活かしたい」45.5%とほとんどの回答者が、活かすことに賛成である【図 4-3-7】。

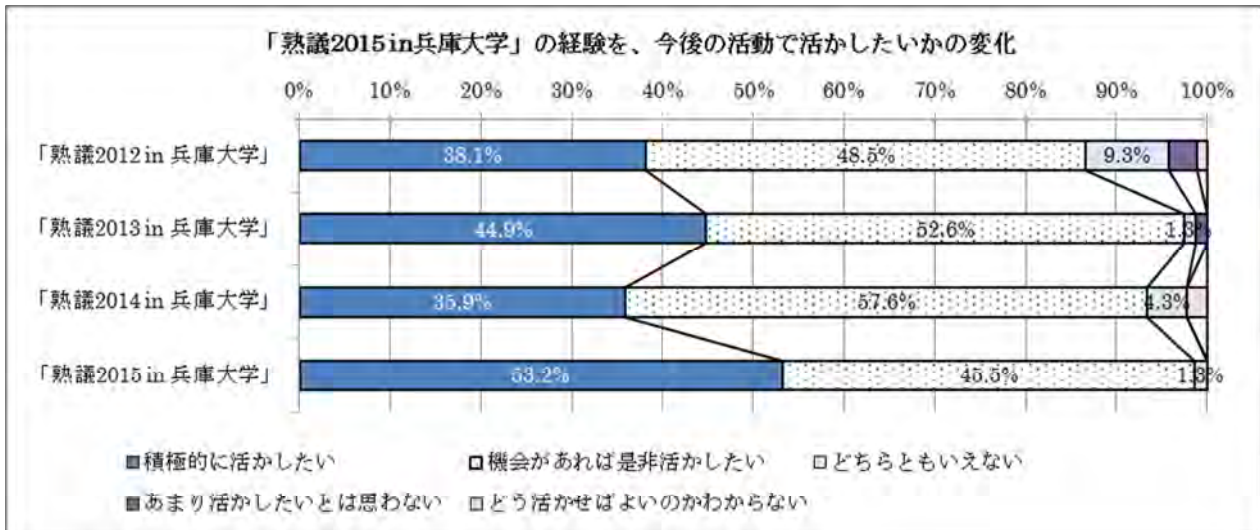


図 4-3-8 「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいかの変化

「熟議 2012 in 兵庫大学」からの変化を見ると、「積極的に活かしたい」との比率は増加する傾向にあるといえる。「どちらともいえない」「あまり活かしたいとは思わない」は、年度を追うと少なくなる。ただし、昨年の「熟議 2014 in 兵庫大学」において、「積極的に活かしたい」の比率は低下しており、

これは満足度の低下と関係がある。つまり、熟議を実施してその満足度が高いことによって、積極的に活かしたい、との希望が拡大すると考えられる【図 4-3-8】。

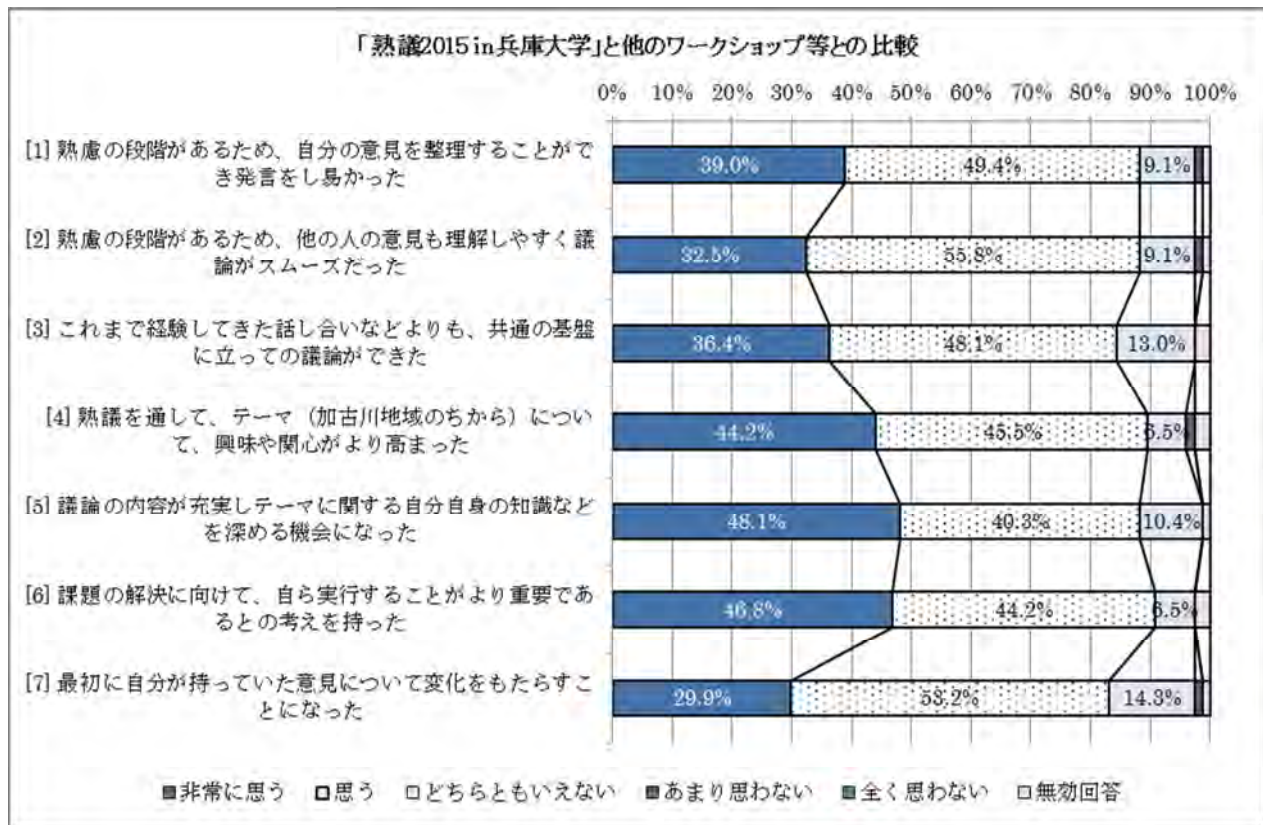


図 4-3-9 「熟議 2015 in 兵庫大学」と他のワークショップ等との比較

「熟議 2015 in 兵庫大学」の他の議論などと比較しての利点を示す【図 4-3-9】。「非常に思う」が多く、賛同の回答が多いものは、「議論の内容が充実し、テーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった」である。この項目について、昨年度の「熟議 2014 in 兵庫大学」では、「非常に思う」が 26.1%と低かったものの、「思う」が 62.0%と合計で 88.0%となり、最も賛同が多かった。ワークショップ形式での議論の充実が評価されている。「熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった」との項目も同じく、議論を通してテーマを考えることであるが、「非常に思う」が 44.2%、「思う」が 45.5%と高い数値となっている。また、「課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った」については、「非常に思う」が 46.8%、「思う」が 44.2%であった。昨年度も当該項目に対してはやはり賛同が多く、議論から実行を含む手法であることへの評価が高い。

兵庫大学の熟議手法の特徴とも言える熟慮の段階を設けていることについては、「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ、発言をしやすかった」は、「非常に思う」が 39.0%、「思う」が 49.4%、「熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」は 32.5%、55.8%となっており、熟慮の期間において、段階的に考え、意見を述べる機会を設けたこともあり、議論の機

会に話をすることに、より役立ったと考えられる。とはいえ、「これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた」については、「どちらともいえない」が13.0%であり、熟慮により共通の基盤を形成することは、やや困難であった。なお、議論により「最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった」は、「非常に思う」が29.9%と最も低いなど、議論がその後の行動に影響をする、とは必ずしも言えない。

「非常に思う」を2、「思う」を1、「どちらともいえない」を0、「あまり思わない」を-1、「全く思わない」を-2として、有効回答数で除した平均ポイントを計算する。

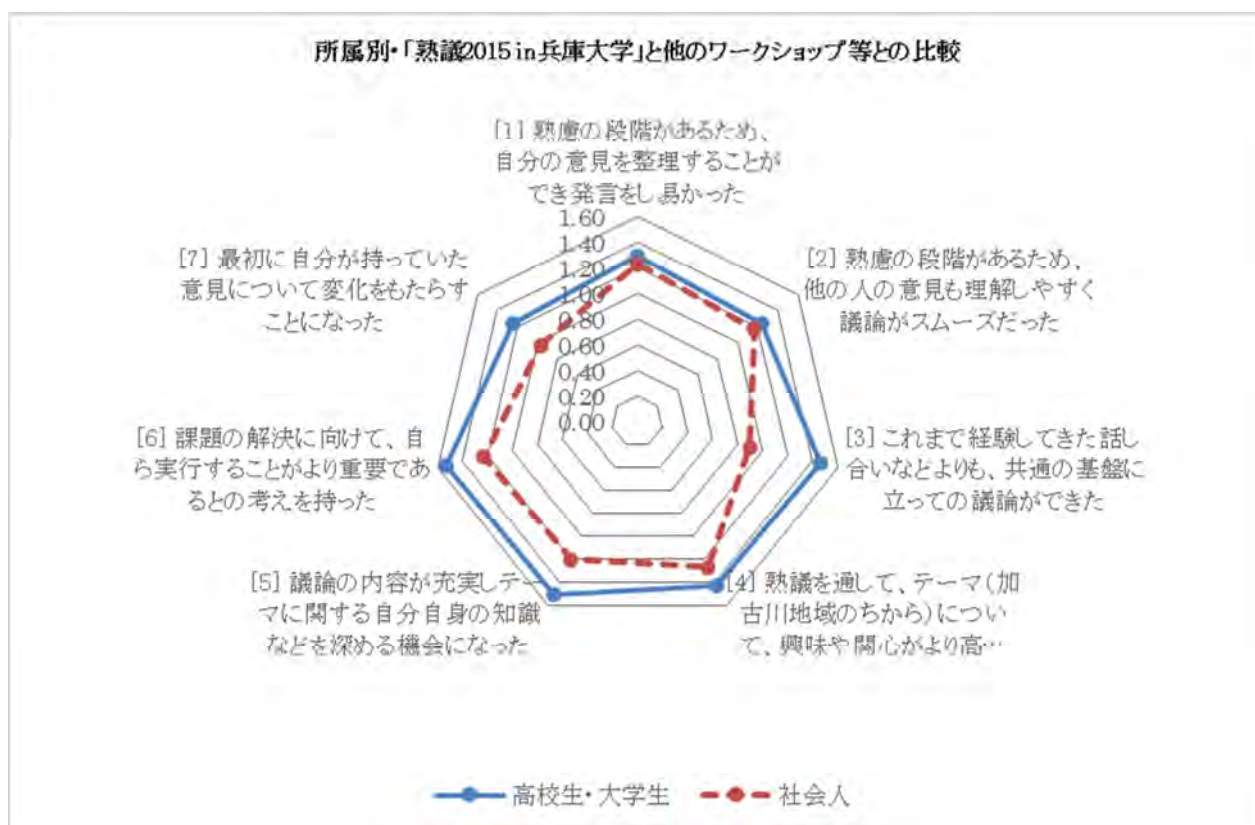


図 4-3-10 所属別・「熟議 2015 in 兵庫大学」と他のワークショップ等との比較 (ポイント)

高校生・大学生と社会人との所属別で比較をすると、高校生・大学生の方がいずれの項目でもポイントが高い【図 4-3-10】。特に、「これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた」は高校生・大学生が1.47であるのに対し、社会人では0.90である。多様な世代との議論を対等な立場で行うことができた、という点で高校生・大学生で賛同をする評価が高かったと思われる。逆に両者のポイントの差が小さかったのは、「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」及び「熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」で、前者は高校生・大学生が1.30と社会人が1.23、後者は1.24、1.17で、差は0.7ポイントである。

いずれも熟慮の段階に関する項目であり、熟慮への工夫が世代を問わず、広い範囲で高い評価を得る要因になったと思われる。

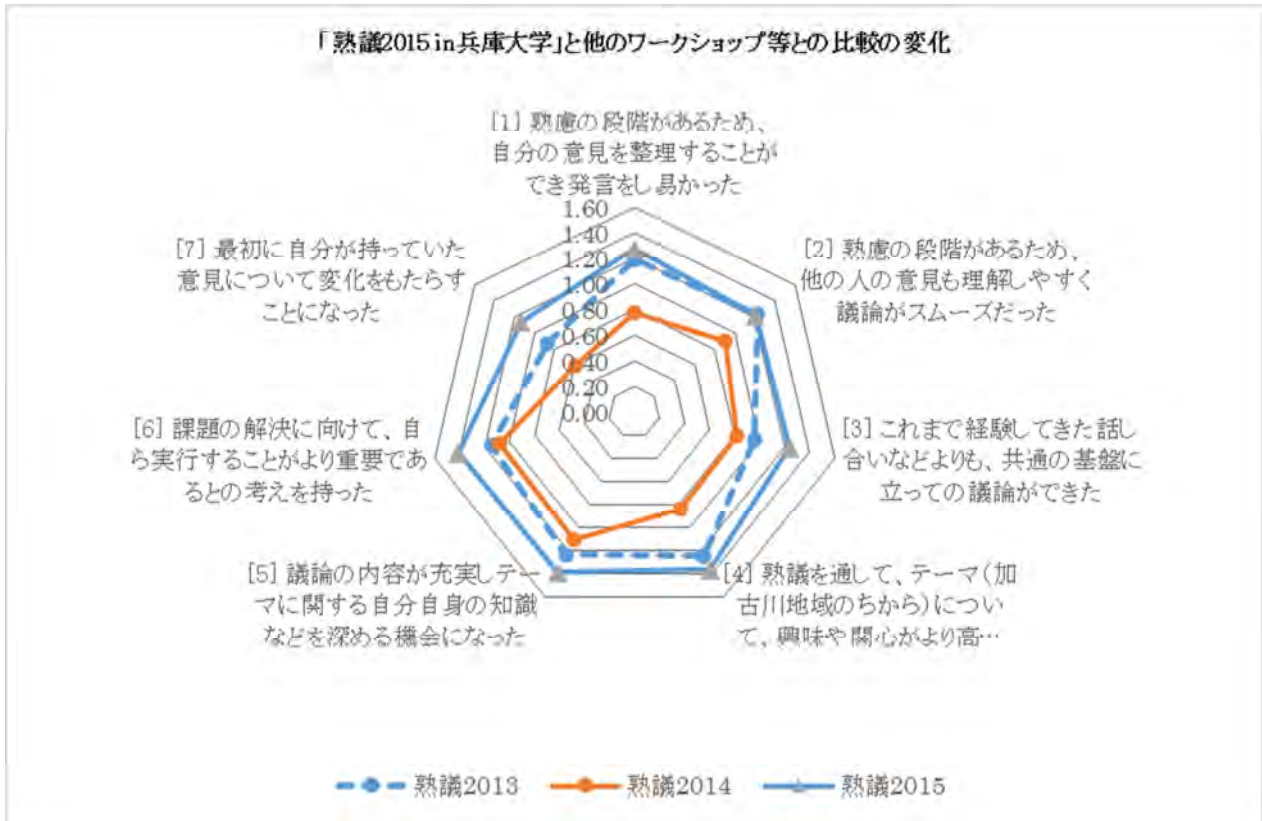


図 4-3-11 「熟議 2015 in 兵庫大学」と他のワークショップ等との比較の変化 (ポイント)

平均ポイントの年度別の違いについてみると【図 4-3-11】、ほぼ全ての項目について「熟議 2015 in 兵庫大学」での値は、「熟議 2013 in 兵庫大学」のそれを上回る。そして「熟議 2014 in 兵庫大学」については、「熟議 2013 in 兵庫大学」における値よりも小さくなっている。つまり、平均ポイントの値は、2015 年 > 2013 年 > 2014 年となっている。これは各年度での熟議に対する満足度と関係があり、満足度が十分に高くなければ、手法としての利点は低く評価されざるを得ない。

「熟議 2013 in 兵庫大学」と「熟議 2015 in 兵庫大学」のそれぞれの項目での値を比較した場合、熟慮に関連する「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」は、2013 年で 1.19、また 2015 年で 1.28 であり、「熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」は 1.23、1.21 と、どちらも比較的似た数値となっている。

(3) 熟議は現実に役立つか

熟議を進める背景に熟議民主主義の定着のあることは前述した。特に、政策の決定過程において市民が平等な立場で議論をすることで、行政や政策にどのような影響を与えるのか、あるいはその可能性が

あるのかを明らかにする必要がある。行政への影響、という点が重要である。行政は、立法府での審議を経て成立した予算や条例、法に従い事務を行うことが原則であるが、行政の現場では具体的に市民の声を必要とする場合もある。立法とは異なる立場で行われる熟議は、実際に行政に影響を与うるのか。それは行政府の長たる首長や内閣総理大臣にもよるであろう。特に、地方自治体では議院内閣制の国と異なり、首長が直接選挙で選ばれることもあり、場合によっては選挙の当選により公約を市民の声とすることも可能である³。実際には、法に定められている、あるいは首長による諮問に応じる審議会、委員会など専門家や関係者による意見聴取の場もある。ただ、熟議のようにあらゆる市民に平等に議論をおこなう機会が設けられ、その結論を市民の意向として行政に反映することができるのか。「事後アンケート」では、熟議の経験を踏まえ、「市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるか」の質問を行っている【図 4-3-12】。

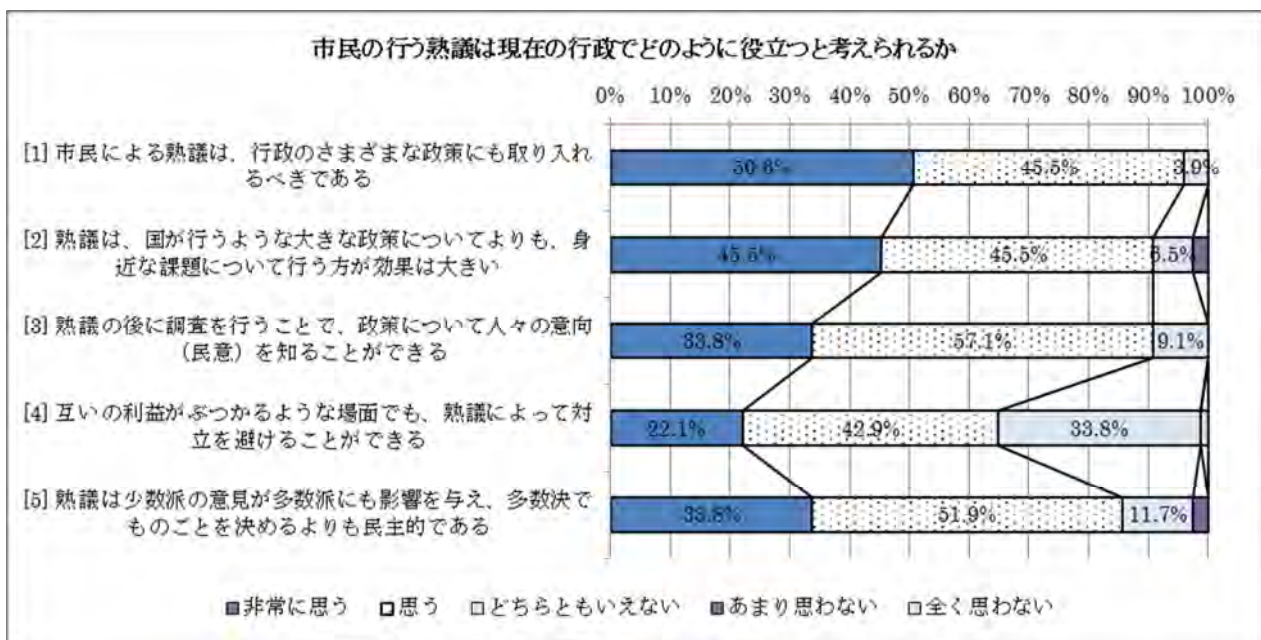


図 4-3-12 市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるか

「非常に思う」「思う」の合計が最も多くを占める内容が、「市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである」であり、96.1%である。特に、「非常に思う」の回答が50.6%と過半数である。昨年度の「熟議 2014 in 兵庫大学」においても、この項目への賛意が最も強く「非常に思う」「思う」の合計82.6%であった。一昨年度もやはり85.9%を占めていた。熟議を行政に取り入れ、現実の政策決定にも活かすことができることへの期待が大きいのである。次いで、「熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい」は、「非常に思う」「思う」がそれぞれ45.5%で、91%が賛同している。身近な課題の議論の経験を踏まえ、熟議がより身近な範囲で可能であることを示している。この結果を所属別で示す【図 4-3-13】。

³ 実際には、当選後、公約通りに進めることで、議会との対立など混乱をもたらした自治体の事例もある。

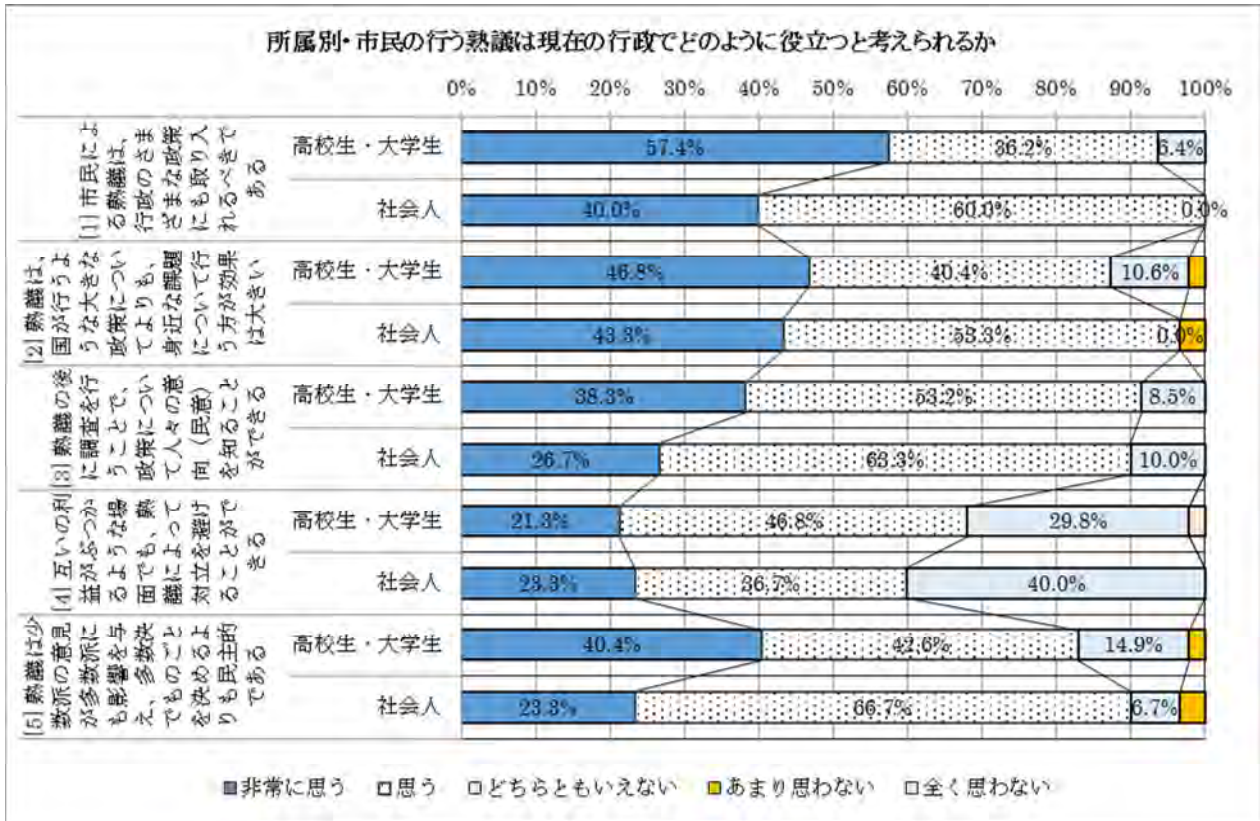


図 4-3-13 所属別・市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるか

「市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである」については、高校生・大学生では、「非常に思う」が 57.4%であり、社会人の 40.0%を大きく上回る。社会人では、賛同するが必ずしも強い賛同ではない。同じ項目であっても、「非常に思う」は高校生・大学生で割合が高くなる傾向がある。若年者に熟議への強い期待があることが伺われる他、経験を積んでいる社会人の場合、「非常に思う」と表することが難しい場合も多い。

「互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる」については、「非常に思う」が社会人で高いものの、「どちらともいえない」も多くあり、全体の賛同は高校生・大学生が多くなる。逆に「[5]熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数派でものごとを決めるよりも民主的である」は高校生・大学生での「非常に思う」の割合が高いが、「思う」の比率が低く、全体の賛同では社会人が多くなる。熟議の議論の過程に関わることであり、高校生・大学生では議論の過程を重視していることを踏まえると、議論により課題の解決を図ることの期待がある⁴。逆に、「熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である」については、高校生・

⁴ 平成 27 年、政治課題となった限定的な集団的自衛権の行使のための法整備に対し、国会へのデモ行進を行った自由と民主主義のための学生緊急行動（SEALS）は話し合いによる国家間紛争の解決を詠い、しばしば非現実的と批判の対象となった。話し合いによる解決への期待が若年者の傾向として高いことが、SEALS が若者に受け入れられた背景にあるのではない。

大学生では「非常に思う」の比率が40.4%と高く熟議への期待が大きい反面、「思う」との合計では、むしろ社会人よりも賛意の比率が低下する。多数決原理による不合理を踏まえ、社会人にも議会制民主主義を補完する意味での熟議を待望する考えがあるのかもしれない。

ここで、回答についての年次変化を明らかにするために、各項目について回答をポイント化する。「そう思う」を2、「思う」を1、「どちらともいえない」を0、「あまり思わない」を-1、「思わない」を-2とし、有効回答数で除したものがポイントである。

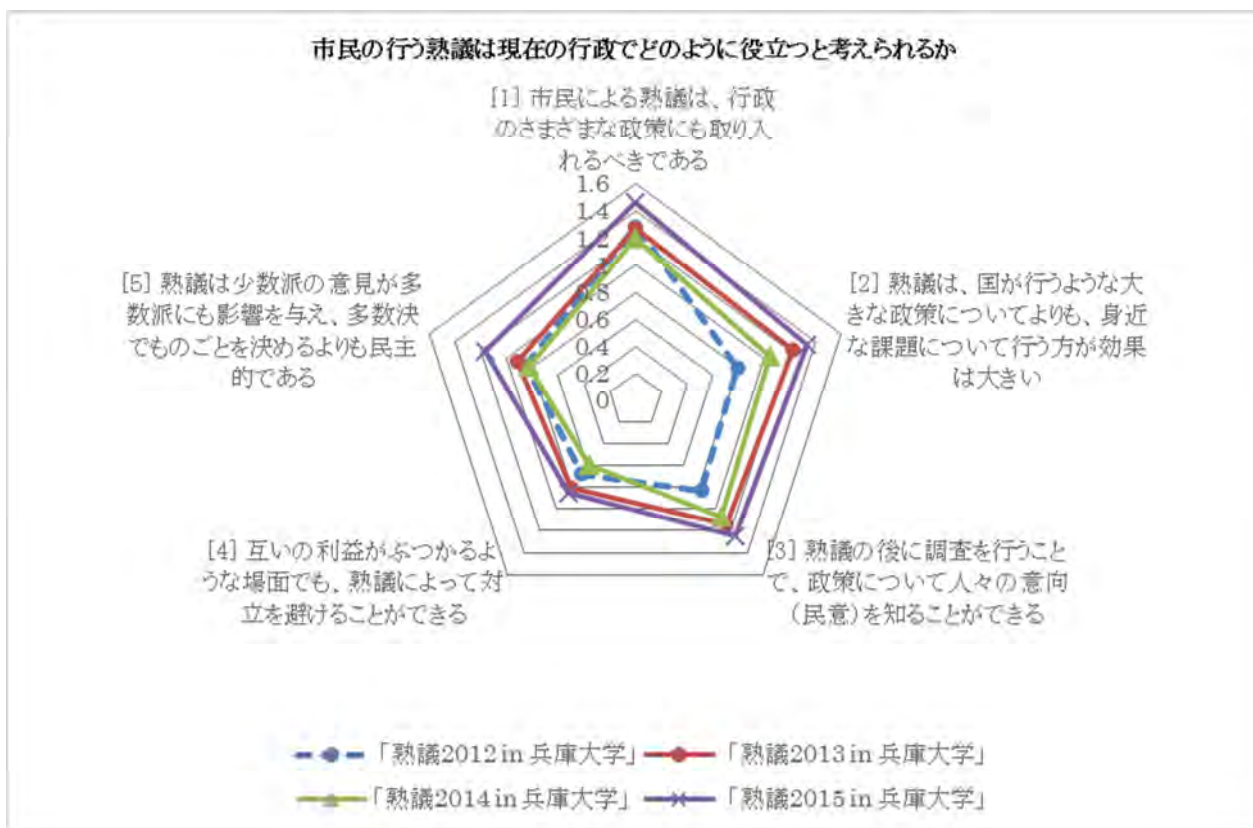


図4-3-14 市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるかの変化（ポイント）

ポイントの違いを見ると【図4-3-14】、「市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである」では、2012年度の値は1.28、以下、1.27、1.20、1.47であり、2012年度から14年度までは1.2前後で安定をしていたが、2015年度に大きくなっている。「熟議2012 in 兵庫大学」の頃から、熟議の必要性が認識されていた。「熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい」はそれぞれ0.79、1.22、1.04、1.34と上昇する傾向にあり、地域の課題を考える熟議を通し、地域での適用の有用性を感じる人が増えた。同じく、「熟議の後に調査を行うことで、政策について人々の意向（民意）を知ることができる」も、2012年度が0.83に対し、1.14、1.08、1.25とポイントは上昇している。熟議が持つ民主主義における有用性が理解されてきている。「互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる」は、他の項目と比べて低い値にな

っている。「熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である」は、2012年度から2014年度までは0.85前後であるが、2015年度は1.17と大きくなっている。熟議での満足度が高かった2015年度では、やはりその有用性が高く認識されている。

4. 地域の安心・安全を考える

(1) 将来の安心・安全

熟議プロジェクトチームでは、将来における安全・安心の課題が拡大するか、との検討を行った。「熟議2014 in 兵庫大学」では、現在の安心・安全の認識に基づく議論であったが、「熟議2015 in 兵庫大学」のテーマである、地域のちからを考えるにあたって、将来を見据えての課題との認識を有していた。将来にあつて、人口の減少が明確な中では、安心・安全を維持するため地域のちからへの期待が大きくなると考えられたのである。

最初に、より客観的な視点から、将来において、安心・安全を脅かす要素を明らかにする必要がある。将来に予測される事象には、正と負の側面がある。例えば、人口知能・ロボットの将来の発展は、事業用ロボットの開発による人材不足の解消に寄与する意味で、安心・安全を高めてくれる。しかし、仕事の多くをそうしたロボットに奪われる懸念もあり、就業の安定という安心・安全を支える根幹を失う。そのため「事前アンケート」で行った設問は、将来を予測しうる期間であり、できるだけ未来に、との意図の下、「今から35年後の、2050年において、次の項目に関連して、安心・安全は向上していると思いますか、それとも低下していると思いますか。5段階で評価をしてください」との内容である。つまり、2050年における、下記の各種の社会事情が安心・安全に正負のいずれの効果をもたらすか、肯定的な場合（向上する）に5、否定的な場合（低下する）には1を回答する、という方法である。このことはまた、議論の場においては、こうした幅広い安心・安全についての論を語り合い、また将来を見越しての意見交換ができることを参加者に気付かせることも意図されていた。

- | | | |
|----------------------|------------------|-----------------|
| [1] 人口減少(2050年) | [2] 医療(2050年) | [3] 都市(2050年) |
| [4] コミュニティ(2050年) | [5] 経済・財政(2050年) | [6] 技術発展(2050年) |
| [7] 人工知能・ロボット(2050年) | [8] 災害(2050年) | [9] 環境(2050年) |

結果について、5を+2、4を+1、3を0、2を-1、1を-2に換算し、その総合計を有効回答数で除し0を中立とする平均値を算出し、これをポイントとする。項目別の結果を図に示す【図4-4-1】。

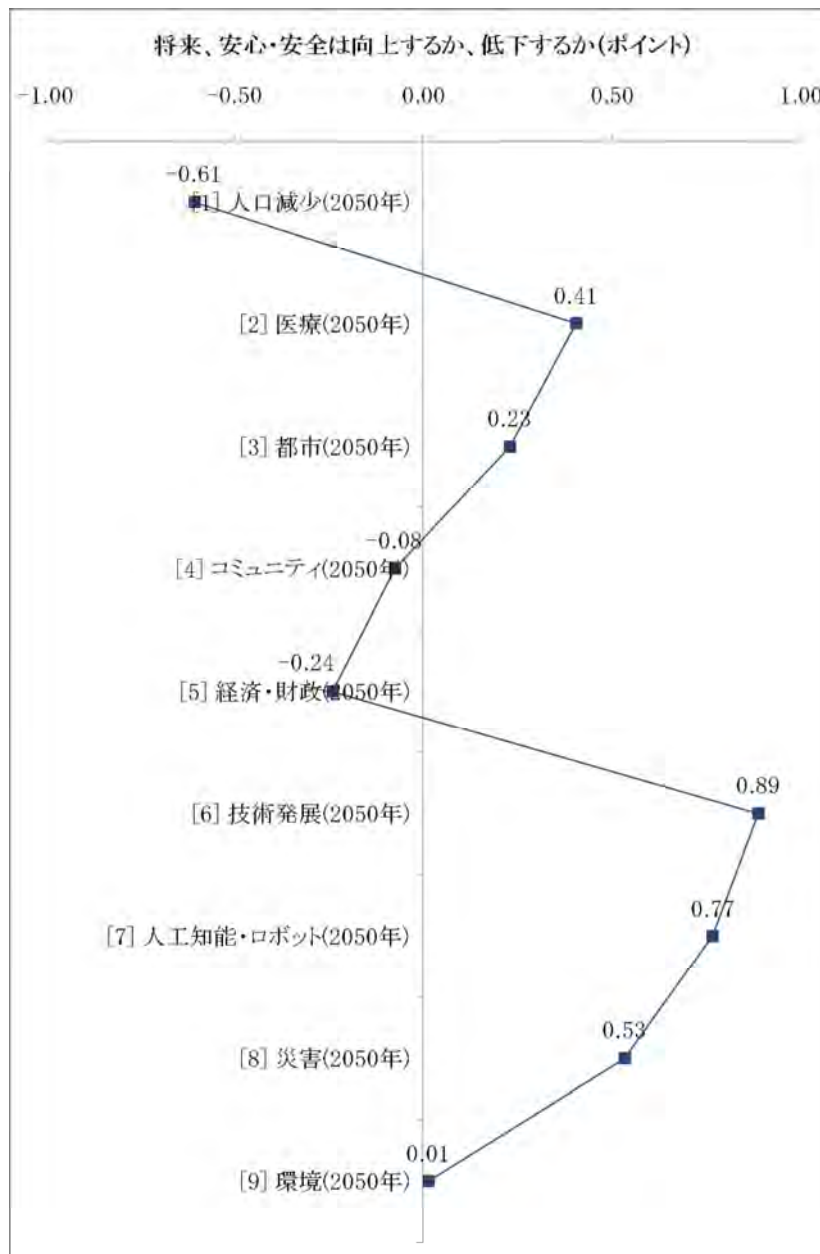


図4-4-1 将来、安心・安全は向上するか、低下するか（ポイント）

医療、都市、技術発展、人工知能・ロボット、災害などはプラスの値である。特に技術発展は0.89と最もポイントが高い。これらの項目には主として技術的なイノベーションを伴い、ハードウェアとそれに付随するソフトウェアの進歩により明るい未来を見せてくれる要素でもある。技術の発展の背後には、負の側面も予測されるのであるが、それ以上に正の面を評価している。医療であれば、将来、医療技術の進歩は病気リスクを軽減させ、安心・安全を向上させるが、医療格差や医療費の高騰などの生活の安心・安全を脅かす可能性もある。しかし、医療という言葉からは進んだ医療への期待が大きいと考えられる。都市も本来評価の困難な項目である。インフラの整備など都市生活の利便性が向上する反面、人口集中による混雑の拡大、非常時のリスクの増大など、都市化に伴ってのコストも上昇する。

一方で、人口減少は、 -0.61 でマイナス幅が大きな項目である。人口の減少は、経済社会の維持の困難をもたらす可能性がある。混雑の解消、環境汚染の縮小など社会的コストを引き下げ、社会の安心・安全を高めることも考えられる。コミュニティ、経済・財政についても負の値を取る。社会にかかる、ソフト的な部分、総ずるならば人に関わる内容については、悲観的ということができる。

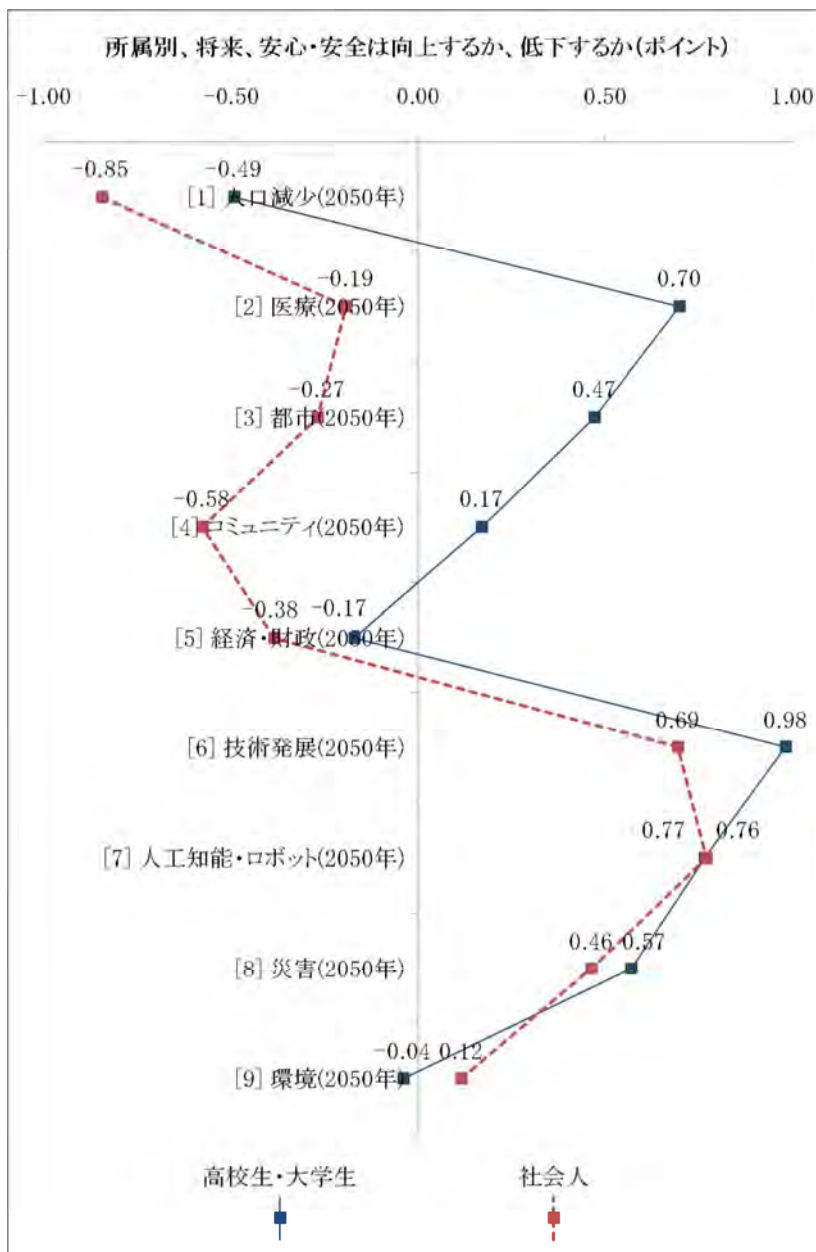


図4-4-2 所属別、将来、安心・安全は向上するか、低下するか (ポイント)

これを所属別で示した場合【図4-4-2】、差が大きいのは、医療、都市、コミュニティの項目である。医療については、高校生・大学生が 0.70 と正の値であるのに対し、社会人では -0.19 と負になっている。同じく、都市については、 0.47 と -0.27 、コミュニティについては 0.17 と -0.58 である。医療に

については、医療費負担を抱え、医療機関に頼る機会も多い社会人では、医師、看護師不足などで医療への不安が大きくなっている可能性がある。高校生・大学生の場合、むしろ医療技術の進歩を期待しているのかもしれない。同様に都市についても、社会人の場合、都市生活の経験を持っているため、負の側面も理解し、安心・安全については、必ずしも肯定的ではないのかもしれない。そして興味深い点は、コミュニティについての評価では、社会人ではポイントが若年者と比べて相当に低い点である。若年者の方が、コミュニティへの関心が低く、関わりを持たない生活への期待があると思われており、安心・安全については社会人よりもポイントが低くなると考えられた。にもかかわらず、実際の結果では逆転をしている。社会人の場合、実際のコミュニティでの活動に関与し、その限界を熟知し、また将来においてコミュニティの力が失われることなどを予想して、その衰退により安心・安全が維持できないことを懸念してのものかもしれない。

人口減少については、高校生・大学生のポイントは -0.49 で、社会人 -0.85 よりも上向きになっている。いずれもマイナスであるが、高校生・大学生は人口減少による安心・安全上の利点も理解をしていると思われる。経済・財政の項目も同様の傾向である。負の値ではあるが、やや若年者の方が楽観的である。このように、若年者が将来に対しては比較的楽観的といえる。技術革新については、高校生・大学生の場合、4と回答した割合が47.2%、5の比率が26.4%と肯定的な意見が2/3を占めている。技術革新によつての安心・安全の課題の解決への期待が大きい。人口知能・ロボット、災害、環境などの項目については、高校生・大学生と社会人のポイントに大きな差が見られない。

(2) 地域のちからに対する考え方とその変化

兵庫大学熟議手法では、討議の前後での世論の比較を重視する討議型世論調査の手法を参考に、テーマについて、同じ問いを「事前アンケート」と「事後アンケート」において行う。これにより「熟議2015 in 兵庫大学」を通して、意見がどのように変化をしたのか、を追跡することも可能になる。質問は地域のちからを活用し、地域の安心・安全についての下記の考え方への賛否の度合いを問う内容である。なお、対象とするのは、「事前アンケート」と「事後アンケート」の双方に回答のあった73件である。

- [1] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ。
- [2] 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である。
- [3] 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている。
- [4] 他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である。
- [5] 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい。
- [6] コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている。
- [7] 行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる。
- [8] 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない。
- [9] 安心・安全を創るのは、地の人々の役割であり、風の人には関わらないものである。
- [10] 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある。

【図 4-4-3】は、5段階での回答（大いに賛成、やや賛成、普通、やや反対、大いに反対）について、それぞれ 2、1、0、-1、-2 の数字を当て合計し、有効回答数で除して平均値を求めた結果である。

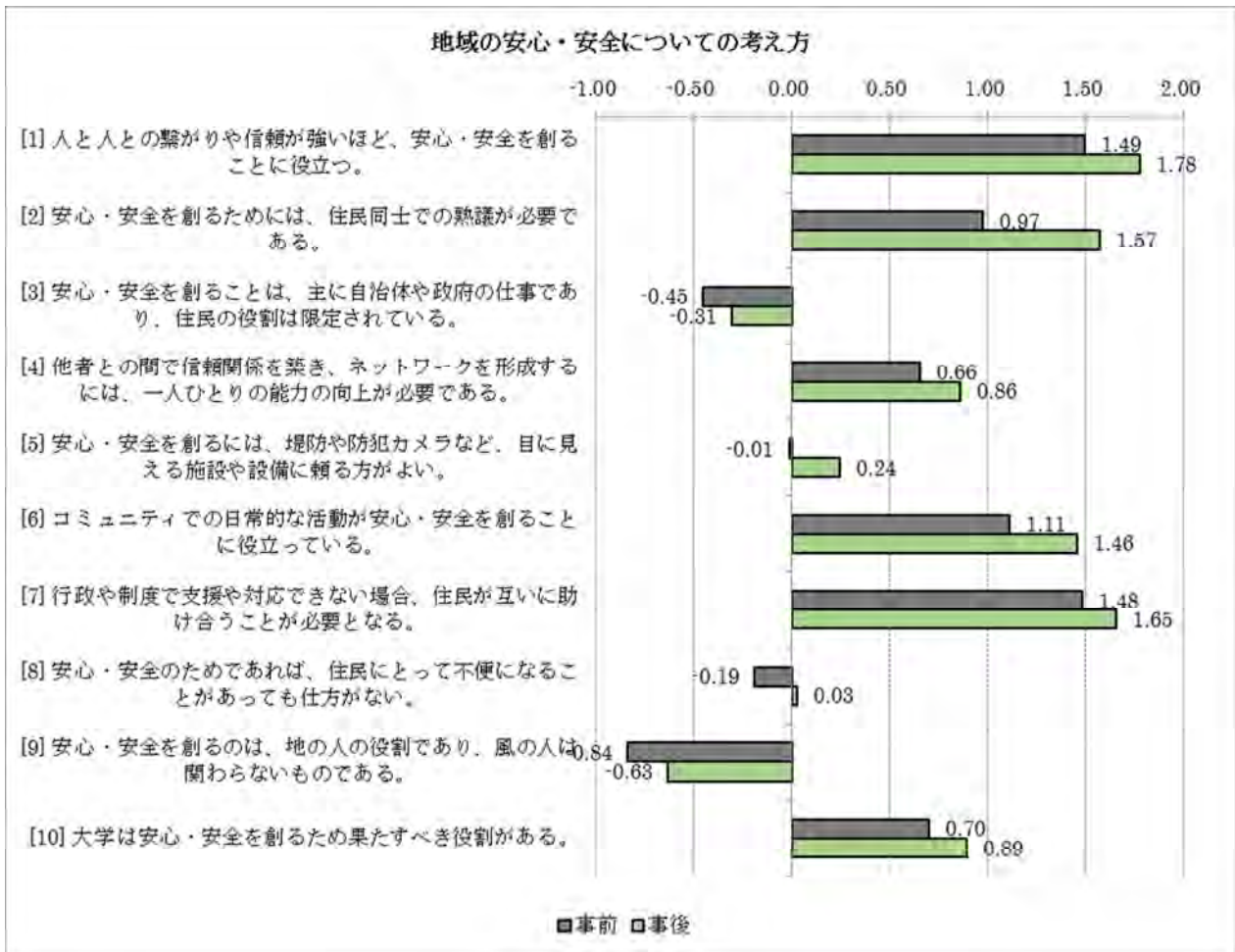


図 4-4-3 地域の安心・安全についての考え方（ポイント）

項目順に考察を行う。

「[1] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」は、熟議の前までは 1.49 と最も高く、熟議の後には 1.78 に上昇をしている。地域のちからとして、互惠性のあるつながりやネットワークなどを想定しており、熟慮に際しての資料にも用いたが、それらが安心・安全に寄与すると参加者は認識をしており、その思いを、さらに熟議を通して強化したのである。

「[2] 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」は、熟議後に 0.97 から 1.57 に大幅に上昇した項目である。この項目の回答比率の、熟議前後で比較すると、次の通りである。「事後アンケート」では、大いに賛成が 21.9%から、60.3%に大幅に増加している。熟議への満足度とともに、その有用性が確認されたことは既に述べたが、ここでもそれを示しているといえる【図 4-4-4】。

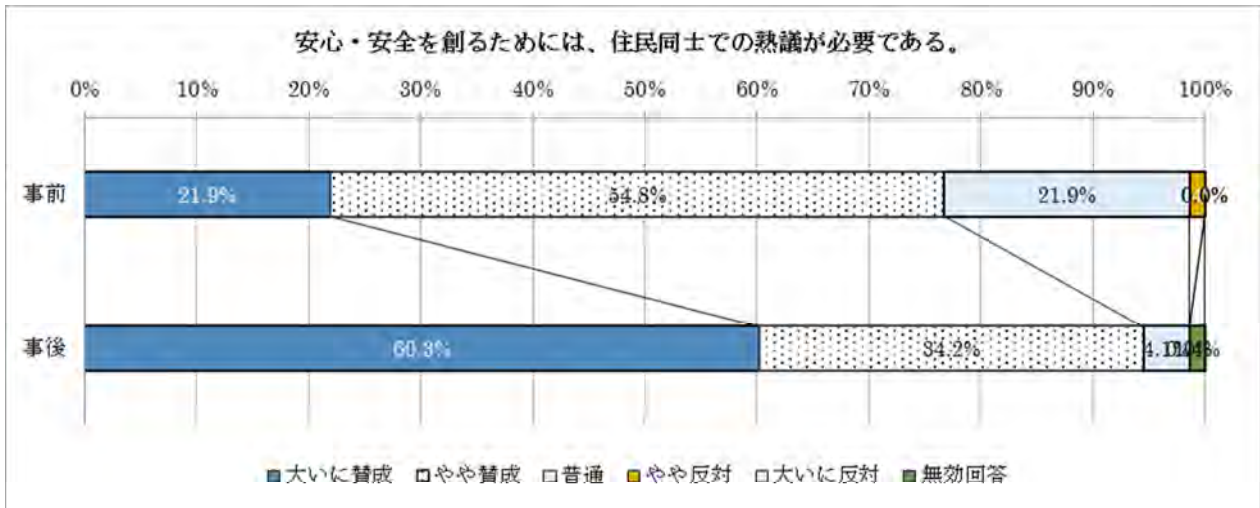


図 4-4-4 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である、の比率

「[3] 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」については、熟議前には-0.45、熟議後はやや上昇し-0.31 となっている。住民の役割は限定されないと考えの回答者が多い。

「[4] 他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」との項目は、自律を重視する考え方に関する質問である。広くは安心・安全のための自己責任に通じる点である。0.66 から 0.86 に事後でポイントが上昇しており、自らがその覚悟と自覚を必要とする、との考えへの賛成が比較的多くなっている。

「[5] 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」については、「熟議 2014 in 兵庫大学」での結論、すなわち防犯カメラ設置・利用への賛同が比較的多くなっていた、という点を踏まえている。事前ではほとんど中立、となっている。「熟議 2014 in 兵庫大学」でも、カメラは必要であるが、その設置、運用への注意が必要である、ということが言われており、賛否を決定しにくい事情にあると思われる。

「[6] コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」は事前で 1.11、事後で 1.46 である。災害を拡大しない減災につなげるには、いざというときにコミュニティが機能し、支え合うことが必要になるが、そのために互いを知るなどの日常的な活動は不可欠である。これは減災のための活動を地域に「埋め込む」ことになる。熟議後にポイントが上昇している点は、議論等を通し、コミュニティのちからが再確認されたと考えられる。

「[7] 行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」に対しては、事前で 1.48、事後では 1.65 と高いポイントとなっている。1995 年の阪神・淡路大震災では、行政でできる限界以上の支援について、ボランティアが大いに活躍、その後もボランティアが力を発揮してきた。東日本大震災では、ボランティアの他に住民によるコミュニティの強さが注目された。このように公助に頼るだけではない、共助の重要性を多くの人が認識をしている。

「[8] 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」との項目は賛否の分かれるところである。911 テロ以降、激化するテロリズムや中東の不安定化に伴っての多数の難民の流入、グローバル化が進むゆえに自由が高まる以上に脅かされる安全、といった課題が突きつけられている。市民の自由と安全の適切なバランスはどこにあるのか、の疑問は各国で共通している。そうした現状からか、賛否が拮抗することは十分に考えられる。実際、回答比率を見るならば、「事前アンケート」では20.5%が賛成に、39.7%が反対との意見であった。反対、つまり自由を守ることが重視されている。しかし、事後では、賛成が32.9%、反対が28.8%とわずかに逆転する結果となっている。議論を通し、近隣での軽犯罪や事故を防ぎ、あるいは災害時の強靱性のために、一部の利便性が制約される事情があることが理解された可能性がある【図4-4-5】。

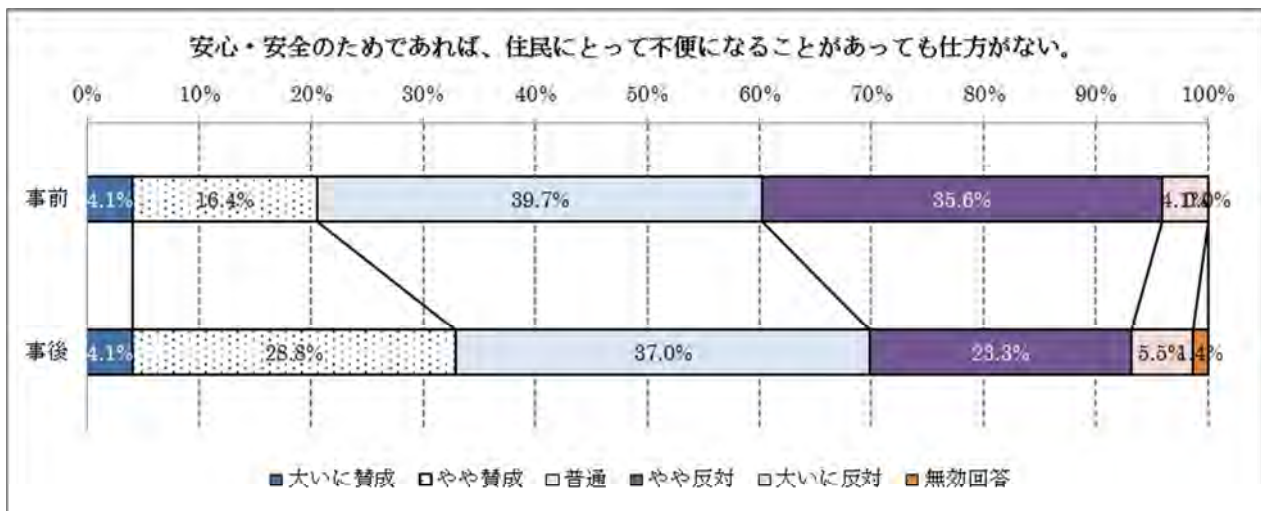


図4-4-5 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない、の比率

「[9] 安心・安全を創るのは、地の人々の役割であり、風の人には関わらないものである」については、昨年度の「熟議2014 in 兵庫大学」において取り入れた課題に立脚する。それは次のように定義されていた。

「地の人」とは地域活動を支える基礎になる人々で、長く住み、地域にネットワークを持って活動し、地域の変化にも敏感である。地の人には、長い歴史と伝統が蓄積されており、それらを熟知している強みを持つ。また「風の人」とは外から地域に文化をもたらし、考え方をもち活動をする人々で、外から地域に訪れ、その地に魅かれている。外にある変化を捉え、その地域にある頑なな考え方や心情をときほぐす役割を果たす。

地元コミュニティに密着し、地域に構成される多層的なネットワークに関わる「地の人」と地域には根ざさない、しかしその地の魅力を知る「風の人」との関係に対する意見を確認するものである。熟議

の前では-0.84であり、反対する人が多く、事後も-0.63である。つまり、地の人の役割の大きさを認識しつつも、風の人も関わりを持ちながら、地域の安全・安心を形作ることが必要との認識である。

「[10] 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」は、事前で0.70、事後で0.89となっている。熟議の後にポイントが上昇しており、学生も参加する議論の中で大学の役割が指摘された可能性がある。ところで、同じ設問を安心・安全をテーマに実施した「熟議2014 in 兵庫大学」でも行った。その際のパポイントは、事前で0.69、事後で0.91となっている。つまり、今回とほぼ同様の結果であった。メンバーが異なり、年度も異なる熟議で、類似する結果が出たことは、大学が地域で一定以上の役割を果たすことへの期待が広く認識されていることを示すものである。

次に、所属別での比較を行う。【図4-4-6】に高校生・大学生の、また【図4-4-7】に社会人の、地域の安心・安全についての考え方についての、事前・事後でのポイントを示す。

所属別での相違点について触れる。

「[1] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」については、社会人のポイントが、事前、事後とも高校生・大学生を上回っており、社会経験の差があると思われる。

「[3] 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」については、高校生・大学生では、事前-0.28、事後-0.13、社会人ではそれぞれ-0.77、-0.64であり、社会人で反対側へのポイントが高くなっている。高校生・大学生では、将来的にコミュニティーの役割が大きいことを理解しているが、現状、自治体や政府の役割への期待も持っている

「[5] 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」をみると、高校生・大学生では、事前で0.13、事後で0.43と正の値になっているのに対し、社会人では-0.27、-0.13とマイナスとなっている。つまり、高校生・大学生では、社会人と比較してハードウェアに依存することにそれほどの抵抗はないと思われる。

「[6] コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」について、興味深い点は、高校生・大学生において、ポイントが0.93から1.40へと事前・事後で大きく上昇した点である。熟議を通し、コミュニティの活動を認識するようになったといえる。政策合意を求める中では、参加者の意識が重要となるが、この結果は、熟議がその可能性を大いに秘めていることを示している。

「[8] 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」では、高校生・大学生が、事前で-0.43、事後で-0.09とマイナスを、社会人では0.23、0.24とプラスである。高校生・大学生は不便となることに否定の観を抱いている。興味深い点は、高校生・大学生と社会人とで、回答の比率の、熟議前後での変化に相違が見られる点である。【図4-4-8】に高校生・大学生の、また【図4-4-9】に社会人の、安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない、の比率を示す。

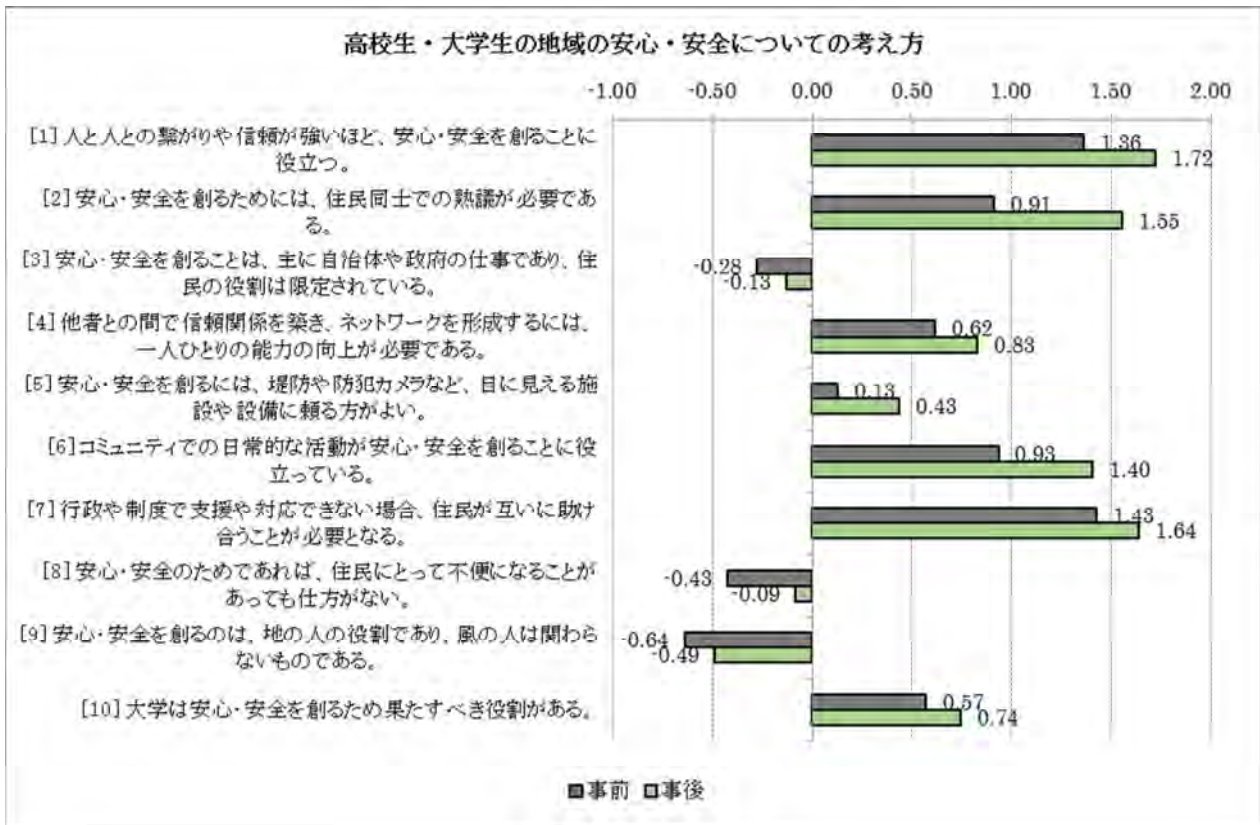


図 4-4-6 高校生・大学生の地域の安心・安全についての考え方（ポイント）

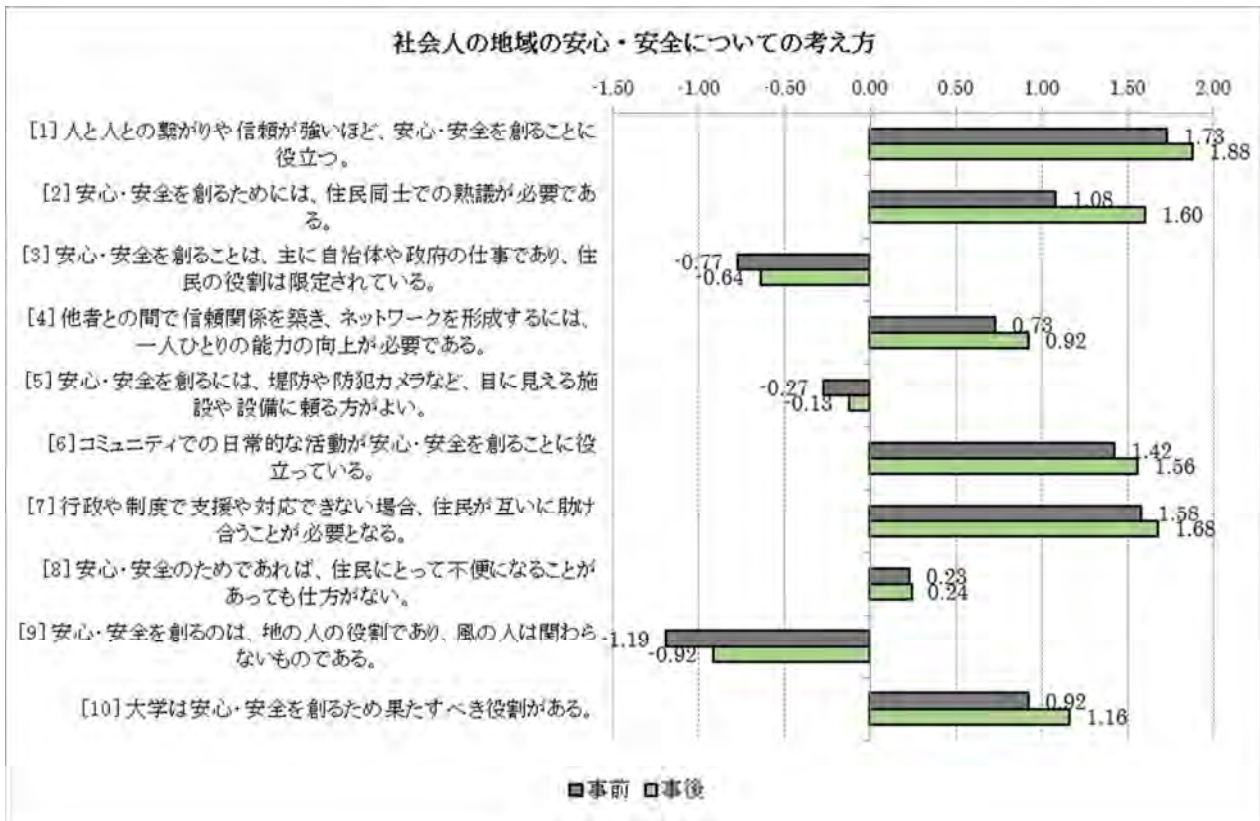


図 4-4-7 社会人の地域の安心・安全についての考え方（ポイント）

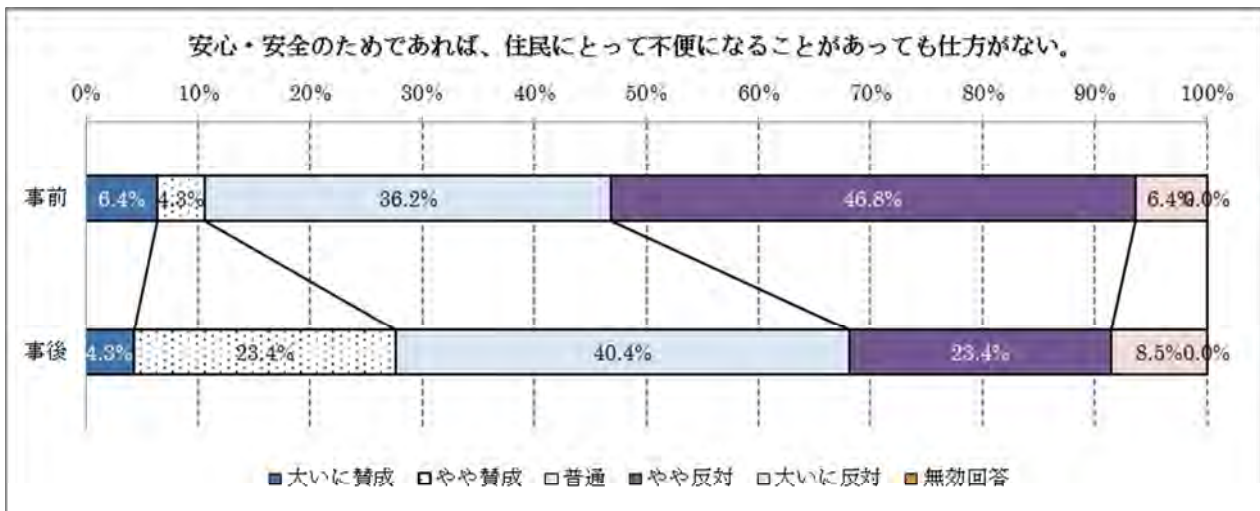


図 4-4-8 高校生・大学生の安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない、の比率

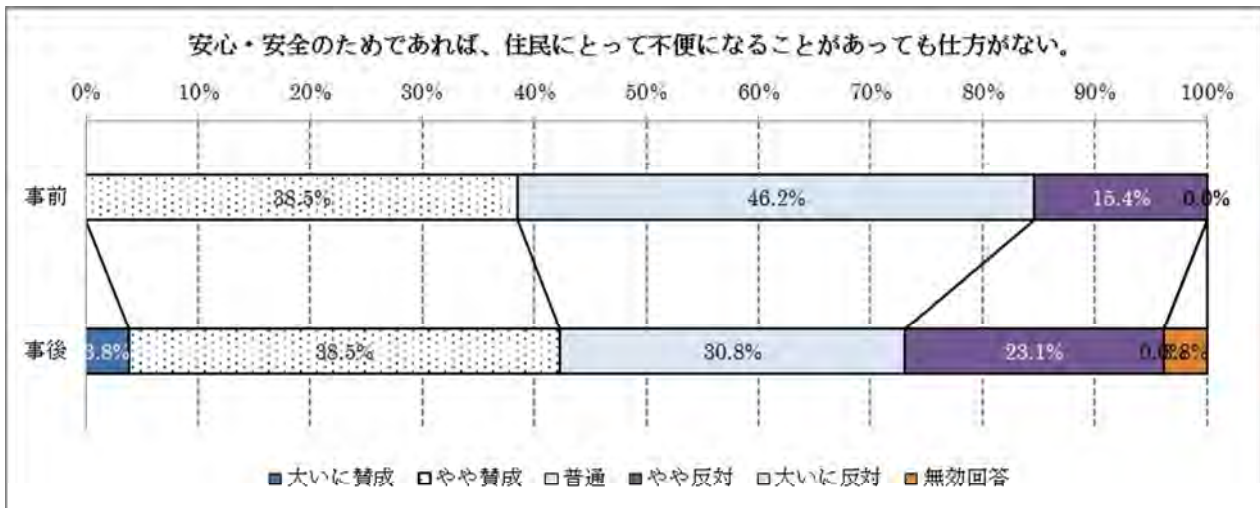


図 4-4-9 社会人の安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない、の比率

高校生・大学生の場合、議論の後、やや反対の比率が半減しており、一方で、賛成は 4.3%から 23.4%に大きく増加をしている。議論の中で、社会人の方から、地域の利便性が一部制約されることも致し方ない、との事例などを聞いたのかもしれない。一方、社会人の場合、やや反対が 15.4%から 23.1%にまで増大している。ポイントには大きな変化がなかったものの、議論により、反対も増えていたのである。高校生・大学生との議論により、考えが変化する人も少なくなかったのではないかと推察される。

「[9] 安心・安全を創るのは、地の人々の役割であり、風の人には関わらないものである」については、高校生・大学生は-0.64、-0.49と負の値、つまり反対ではあるが、その数値は社会人の-1.19、-0.92よりも高くなっており、風の人への期待がやや小さいと思われる。むしろ、若年者が風の人への期待が大きいであろう（つまり、ポイントのマイナス幅が大きい）と考えていたため、その仮説とは異なる結果である。しばしば、地域に変革をもたらす人々に「若者」「ばか者」「よそ者」の三者を挙げる。風の

人はよそ者であり、それらは若者と一緒になってイメージされる。風の人へ高校生・大学生の方が、大きな期待を抱くとは、そのイメージに拠るものである。しかし、実際に三者がどのように関わり、役割を分担するのか、連携をするのかは必ずしも言及されない。地域の側の、改革への思い込みでもある。高校生・大学生が地元だけではなく、風の人と接する機会を設けることも課題かもしれない。

ところで、「[10] 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」については、高校生・大学生よりも社会人の方が、ポイントが高い。大学の地域での役割をもっと若年者に PR をしていかなければならないのであろう。もちろん、熟議はその有用なツールである。

(田端和彦)

第5章 熟議が高校生に与える影響

～能力の自己認識とテーマ理解の事前事後を中心として～

1. 「熟議」の教育的意義

この数年、高大連携、大学入試に係る改革をはじめ、教育改革が加速している。また、学習指導要領の全面的改訂が諮問され、平成28年度内の答申提出に向けて議論が進められている。これまでの改革と異なるのは、理念的な政策から、具体的なものとなっており、実践手法や環境整備にまで踏み込んでいる点である。例えば、教育に携わる者であれば、教育の転換として、教員が「何を教えるのか」から、児童生徒が「何ができるようになるのか」に重点が移っていることは実感しているところである。しかるに、次の問いは、「何をどのように学ぶのか（学ばせるのか）」ということになる。

学習指導要領に沿って編纂された教科書にある知識・技術を伝達することにおいて、「何が理解できるようになるか」についての目標を掲げることはできる。しかし、「何ができるようになるか」、言い換えれば、「どのような能力を身につけられるか」への答えを用意できないということである。すなわち、教え方＝教授法の転換は、能力観の見直しをも求められると行うことができよう。

文部科学大臣からの中央教育審議会への諮問（平成26年11月20日）では、社会や時代の変化を踏まえ、「伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力を身に付けること」（下線は筆者による）を子どもたちに求めている。

そのうえで、「ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすること」（下線は筆者による）が重要であるとしている。

さらに、この視点に基づく学習（教育）方法として、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）」の導入や、「そのための指導の方法等を充実させていく」必要があるとしている。

このような国レベルの教育改革の方針から、地域の教育に目を向けるとき、これまでの学校中心の教育にとどまらない、新しい時代に必要な試みが必要となるであろう。兵庫大学の「熟議」は今年で4回目を迎えたが、これまで、地域の方々、行政や諸機関の方々、そして高校生、大学生の参加を得て成果を上げてきた。なかでも、高校生に対しては、学校では得ることのできない経験となっていることについて、報告書の分析で明らかになっている。

「学校で学んだ知識や技術がどのように、社会や地域で生かされていくのか」、「生徒自身がそれらをどう活かしていくのか」、そういった視点そのものを高校生に持ってもらうことは重要である。また、地域の課題にどのようにして気づき、他者と共有し、議論するのか、その方法論を知っていることも欠かせない技能である。

さらに付け加えるならば、地域のさまざまな関係者（ステークホルダー）から家族や仲間まで、異なる立場で種々の価値観をもつ人々のなかで、課題解決に向けて協働することができる力を培うことが大切である。まさに、「自立した人間として多様な他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力」（上記の諮問より）をどう育んで行くのが、今後の地域と学校の大きな課題である。

「熟議」を経験して、高校生のなかにどのような変化が起こっているのか、何を得て、何をどのように活かして行こうと考えているのか。このことを検証していくことは、これからの子どもたちに求められる「21世紀型能力」「21世紀型スキル」などをどう捉えるのか、またどう育むのかといった課題の検討にも役立つのではないかと。

本章では、このような考え方に立ち、以下の流れで高校生の変化を見ていく。

1. 参加した高校生の特徴と「熟議」による変化（事前の状況）
2. 自己認識シートの分析（事前事後の変化）
3. 高校生は「地域の安全・安心」についてどう考えたか（事前事後の変化）
4. 高校生は「熟議」をどのように経験し、どう活かすのか（事後の状況）
5. まとめ ～「熟議」の経験とその効果～

分析では、熟議の事前と事後に行った自己認識シート、事前・事後アンケートを中心に用いる。ただし、あくまでも自己評価であることに留意し、生徒の内部に起こったことを推測するにとどめることとする。

2. 参加した高校生の特徴と「熟議」による変化

本節では、熟議への参加を通して、高校生の自己認識にどのような変化があったのか概観する。兵庫大学の熟議は今年で4年目となるが、第1回目から熟議の教育的効果に注目し、熟議前後の参加者の変化を測る自己認識シートを開発した。「自主性」「思考力」「会話力」「計画力」「規律性」など10項目にわたり汎用的能力の変化を知るためである。

節目を迎えた本年度の報告として、分析には過去のデータも参照し、考察を行う。なお、自己認識シートの回答者は事前では42名、事後は34名である。また、事前事後アンケートについては、事前では42人、事後では36人、事前事後の比較では両方に回答した36人を対象とする。

(1) 「熟議」に参加した高校生の特徴

今回参加した高校生は、加古川地域 2 市 2 町にある公立高校に通う生徒を中心とした 42 名である（男子 27 名、女子 15 名：当日参加者は 36 名）。また、学科でみると、普通科 30 名、その他の学科（専門学科、総合学科など）12 名となっている。これは、昨年同様の比率である。

熟議の高校生に対する影響を見る前に、ここでは、どのような高校生が参加したのか全般的な傾向について押さえておく。

1) 熟議の認知度と参加理由

「熟議」という言葉を「言葉では聞いたことがあった」生徒は 28.6%と、昨年参加した高校生の 25.7%と同等の数値となっている。一方、今回の熟議参加で知ったとする者は 64.3%を占めている【図 5-2-1】。

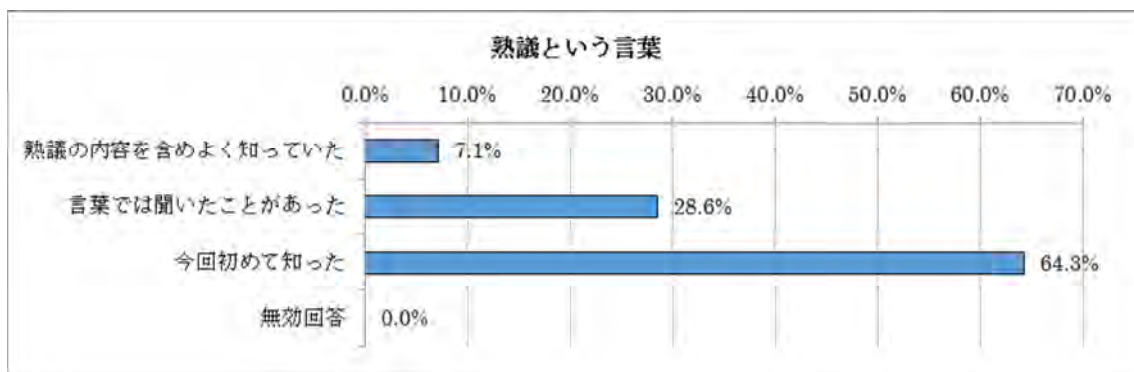


図 5-2-1 熟議という言葉の理解

「熟議 2015 in 兵庫大学」に参加した理由は、「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」が 85.7%と、昨年の数値 82.9%と同程度である。しかし、「加古川地域の安心・安全」というテーマに関心があるからは昨年の 20.0%から 2.4% に減っている。一方、「熟議という方法」に関心がある生徒は、昨年の 8.6%から 16.7%へと増加している。全体として、学校の先生に勧められた以外では、イベントとしての熟議、手法としての熟議に関心をもって参加した高校生が多いことが分かる【図 5-2-2】。

なお、「大学が主催する事業に参加したいから」については 2.4%と非常に低いことから、地域の大学として、近隣の高校および高校生に対して、大学とその活動についての認知度を高めていく必要がある。

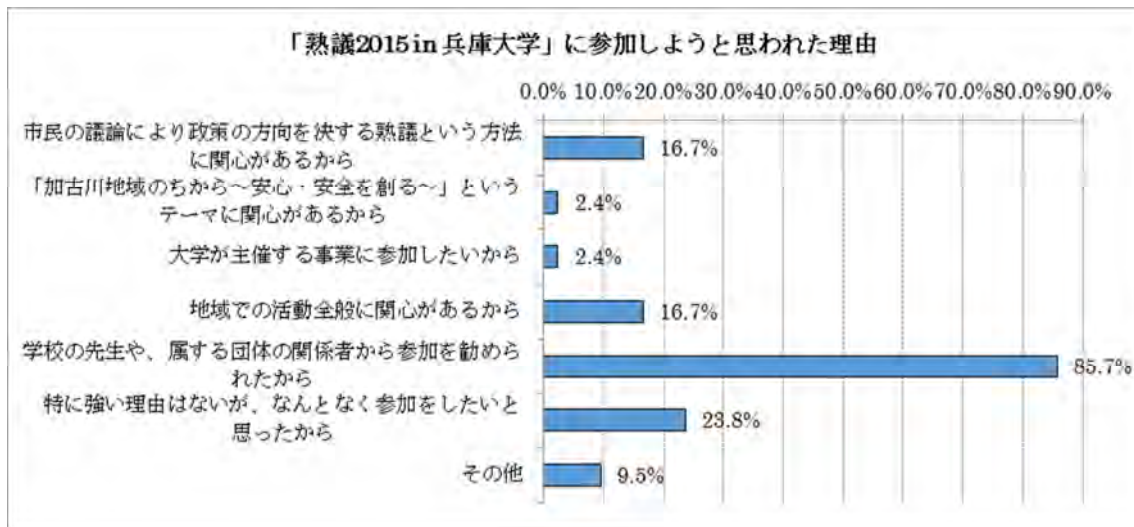


図 5-2-2 「熟議 2015 in 兵庫大学」に参加しようと思われた理由

2) ワークショップ経験と議論形態についての考え方

参加生徒は熟議の本番である「ワークショップ」についてどのような経験をもっているのだろうか。「ワークショップや市民会議、審議会、グループ討議の経験」がほとんどない者が 42.9%（昨年 77.1%）と「現在も多くの機会を経験することがある」11.9%（昨年 0.0%）、「機会が少ないが、現在でも経験することがある」が 28.6%（昨年 17.1%）とこれまでに比べ、ワークショップ経験者が比較的多いことがわかる【図 5-2-3】。

今年度の熟議でも昨年に引き続き熟議専用サイトを設け、これまで以上に自主学習のコンテンツを充実させた。その影響もあり、熟議の進め方について「大体は理解することができた」とする高校生は 85.7%（昨年 68.6%）に上っている【図 5-2-4】。また、テーマ内容についての理解も「大体は理解することができた」が 83.3%に上っている【図 5-2-5】。

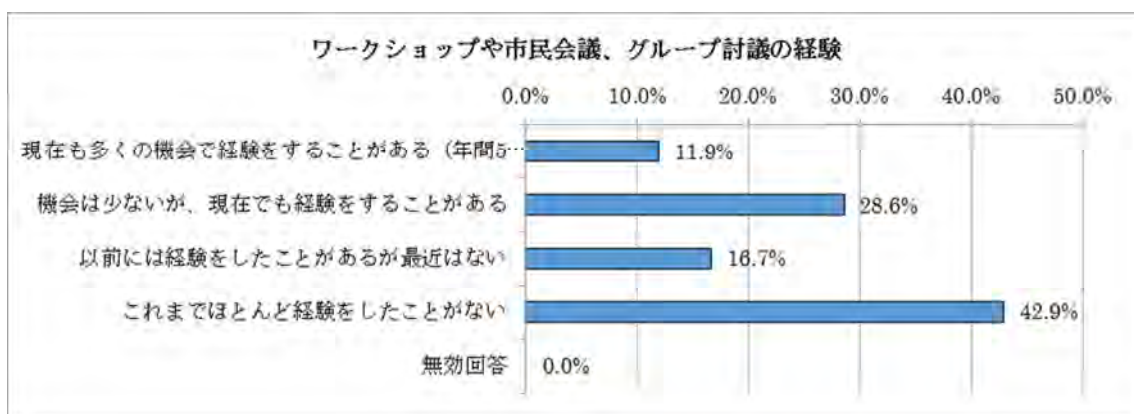


図 5-2-3 ワークショップや市民会議、グループ討議の経験

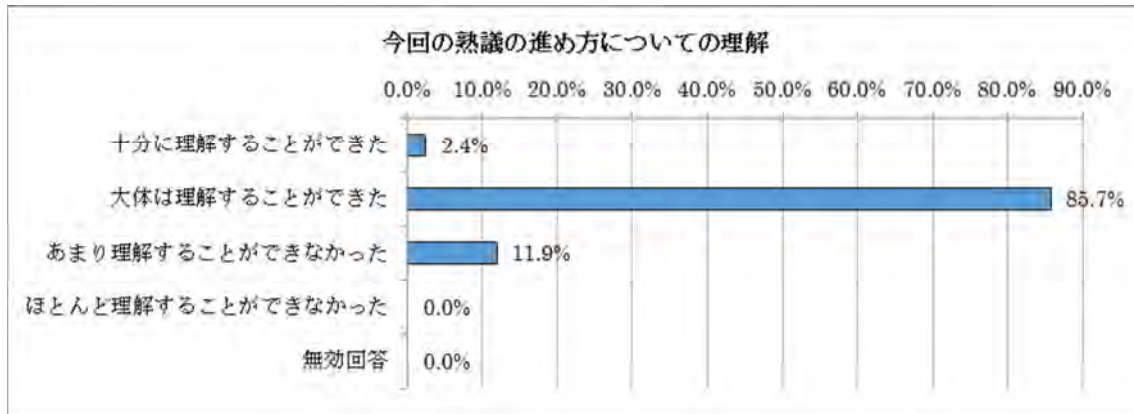


図 5-2-4 今回の熟議の進め方についての理解

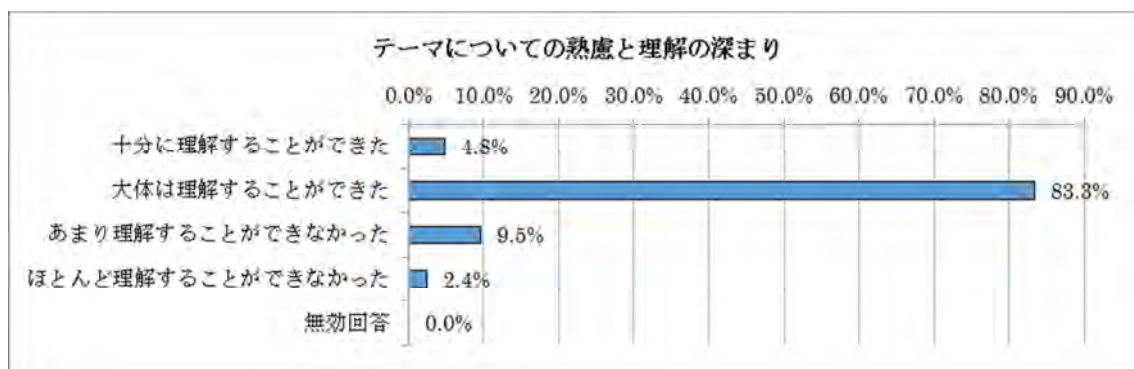


図 5-2-5 テーマについての熟慮と理解の深まり

また、熟議における「議論の段階（当日のテーブルでの討議）」への期待について、「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」とする割合が47.6%（昨年37.1%）であり、昨年を10ポイント上回っている。熟議前では、どちらかと言えば「受け身」の態度が見受けられる。ついで「多くの人と交流したり話をする事への期待が大きい」が19.0%（昨年17.1%）となっている。【図 5-2-6】。また、大学生では、「どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい」とする割合が36.4%に上っているのに対して、高校生は11.9%にとどまっており参加への構えの違いが読み取れる。

それでは、高校生は、熟議のような議論形態についてどのような考えをもっているのだろうか。「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点について、71.4%が「多様な考えを知る機会がある」（昨年62.9%）と捉えている。一方、悪い点については、「議論だけではまとまらず決められない」が31.0%（昨年17.1%）と昨年に比して高い数値となっている。ついで、23.8%が「立場が上の人の意見に影響されやすい（昨年34.3%）」と考えている【図 5-2-7】【図 5-2-8】。

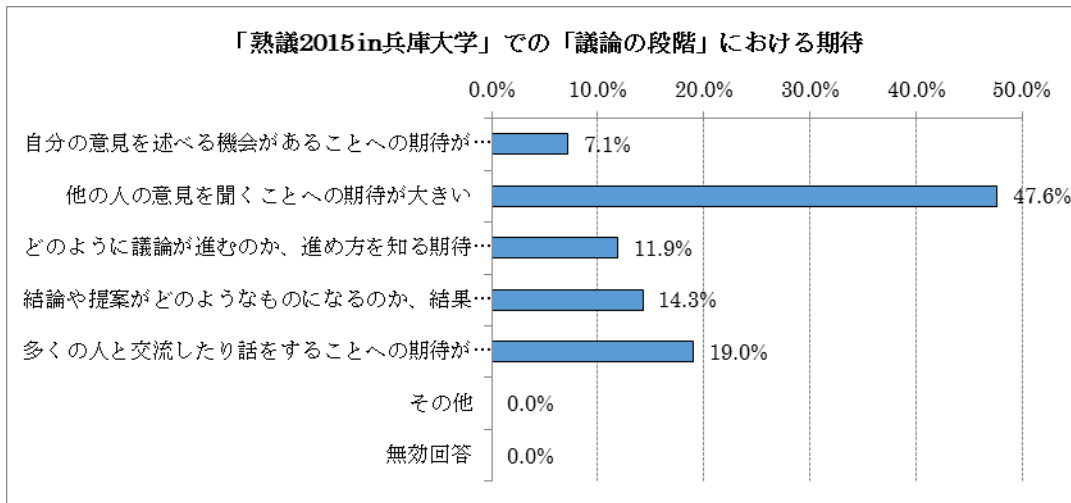


図 5-2-6 「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待

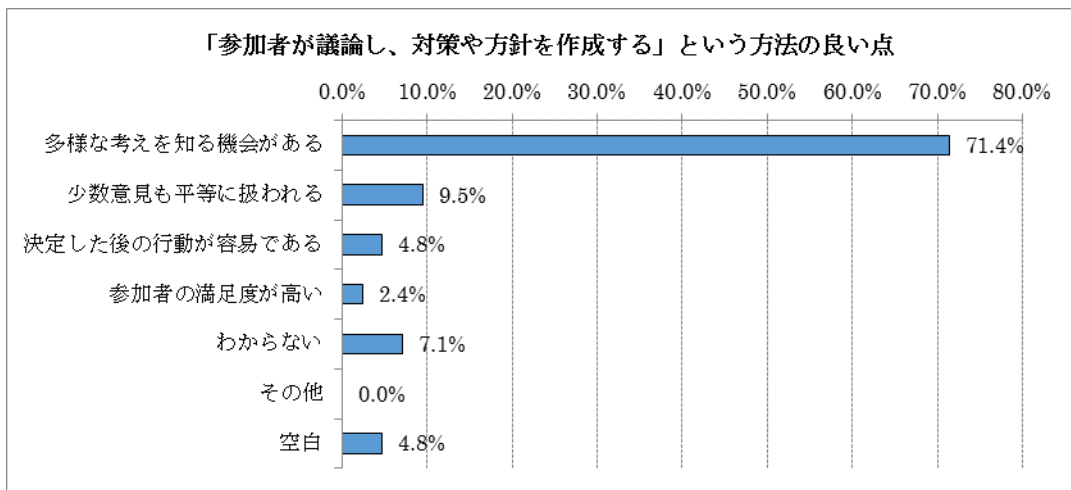


図 5-2-7 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

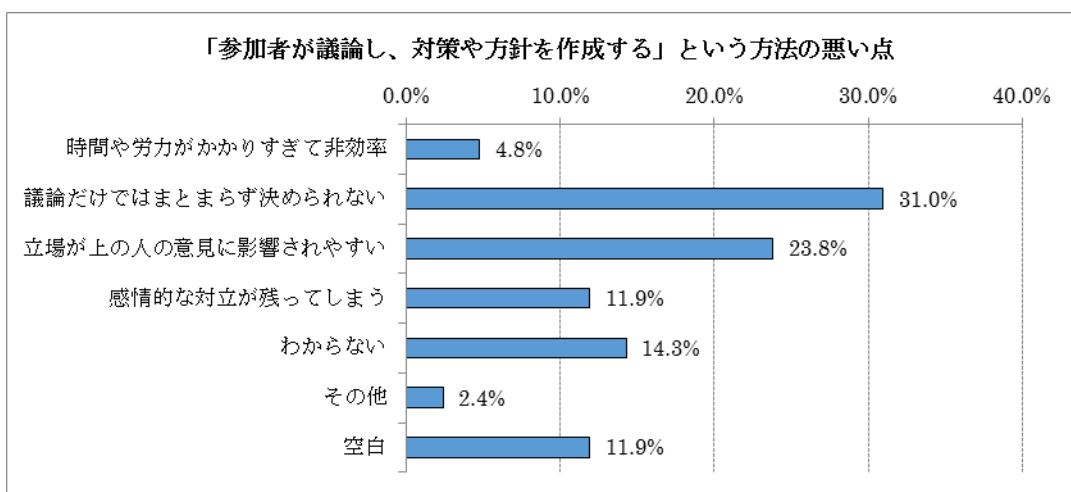


図 5-2-8 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

ここまでのデータを見ると、参加した高校生の60～70%は「他の人に勧められて参加したが、ワークショップを経験したことがあり、熟議を通して、他の人の意見を聞き、多様な考えや意見を知る機会としたい」ようだ。一方で、熟議の形態について「議論だけではまとまらず決められない」点を悪い点として挙げ、また、年上の学生や年配の人々の意見から受ける影響について心配している様子もうかがわれる。

3) 高校生の未来像

事前アンケートでは、「今から、35年後の2050年において、次の項目に関連して、安心・安全は向上していると思いますか、それとも低下していると思いますか」について、5段階（5〔向上〕～1〔低下〕）で評価をしてもらっている。「加古川地域のちから」について、現状を認識するうえで将来像を視野に入れて議論をしてほしいとの意図がある。

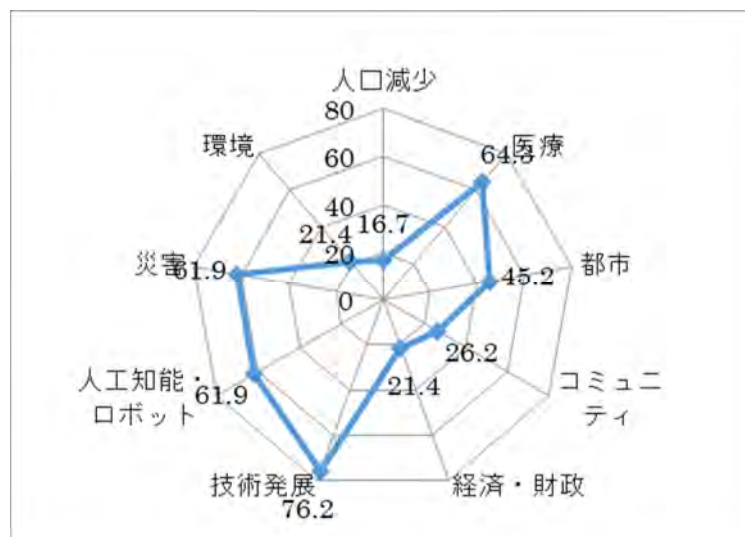


図 5-2-9 2050年加古川の安心・安全状況についての未来像

項目ごとに、最も多くの方が評価した最大値に着目すると、人口減少は52.4%が2、医療について38.1%が4となっている。都市は42.9%が3、コミュニティは54.8%が3と中程度の評価が多い。一方、経済・財政について52.4%が3、技術発展について45.2%が4、人工知能・ロボットについて4、5ともに31.0%である。また、災害について50.0%が4、環境について47.6%が3となっている。また、向上度の高い方から評価5と評価4を足した比率をレーダーチャート（【図 5-2-9】）で見ると、人口問題には悲観的であり、コミュニティや都市の状況や経済・財政状況についても将来に向けて上向きになるとの期待は低い。一方、技術発展については、項目中4、5を合わせて76.2%と、もっとも高い評価となっており、同様に医療、人工知能・ロボットについても評価が高い。一方、環境については低い評価となっている。

高校生の年齢においては、知識や情報の限界もあり、全般的に「技術に強い日本」「ノーベル賞を取れる日本」など印象レベルの評価であることは否めない。しかし、漠然とであれ、人口減少への危機

感、経済状況への不安など高校生なりに感じ取っていることがうかがわれる。また、災害については、60%近くが4、5と評価しており、今後の改善への期待の表れであると解釈できよう。

(2) 「熟議」を通してどのような能力に変化があったのか

1) 自己認識シートにおける事前評価 ～「自主性」「規律性」をもつ高校生の参加～

熟議に参加する高校生に熟議の前と後で、能力に関する自己評価をしてもらっている。以下の【図5-2-10】【表5-2-1】を見ると、実施前で自己評価が高い項目は、第一位は「規律性」の3.65、第二位は「自主性」「運営力」3.47、第三位は「会話力」3.41である。過去に遡って同データを見ると、2014年は第一位「規律性」、第二位「自主性」、第三位「会話力」「実行力」、2013年は第一位「規律性」、第二位「自主性」、第三位「対応力」となっている。まとめると、熟議に参加する高校生は「自主性」「規律性」について自己評価の高い者が多いと言える。「物事に進んで取り組み、社会のルールや人との約束を守る」高校生が、熟議のような地域で行われる行事に関心を持ち、積極的に参加していることが予想される。

(注)自己認識シートにおける各「能力」の説明

自主性：物事に進んで取り組む力、**思考力**：問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力、**実行力**：目標に向かって行動する力、**対応力**：状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力、**交渉力**：人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力、**会話力**：相手と意思疎通を図る力、**計画力**：現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力、**規律性**：社会のルールや人との約束を守る力、**運営力**：違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力、**貢献性**：社会の担い手として役割を自覚して、参画する力（以下、事前事後比較表内の二重線は数値の高い方から第一位、第二位、一重線は低い方から第一位、第二位。また、増減について、太字は変化率が高い項目、斜字は低い項目である。）

| 能力項目 | 実施前平均 | 実施後平均 | 増減 |
|------|-------------|-------------|--------------|
| 自主性 | <u>3.47</u> | 3.91 | +0.44 |
| 思考力 | 3.15 | 3.82 | +0.68 |
| 実行力 | 3.36 | 3.85 | +0.49 |
| 対応力 | 3.32 | <u>4.03</u> | +0.71 |
| 交渉力 | <u>3.09</u> | <u>3.76</u> | +0.68 |
| 会話力 | 3.41 | 3.91 | +0.50 |
| 計画力 | 3.18 | <u>4.00</u> | +0.82 |
| 規律性 | <u>3.65</u> | <u>4.00</u> | +0.35 |
| 運営力 | <u>3.47</u> | 3.94 | +0.47 |
| 貢献性 | <u>3.12</u> | <u>3.71</u> | +0.59 |

表 5-2-1 事前事後の自己認識の変化

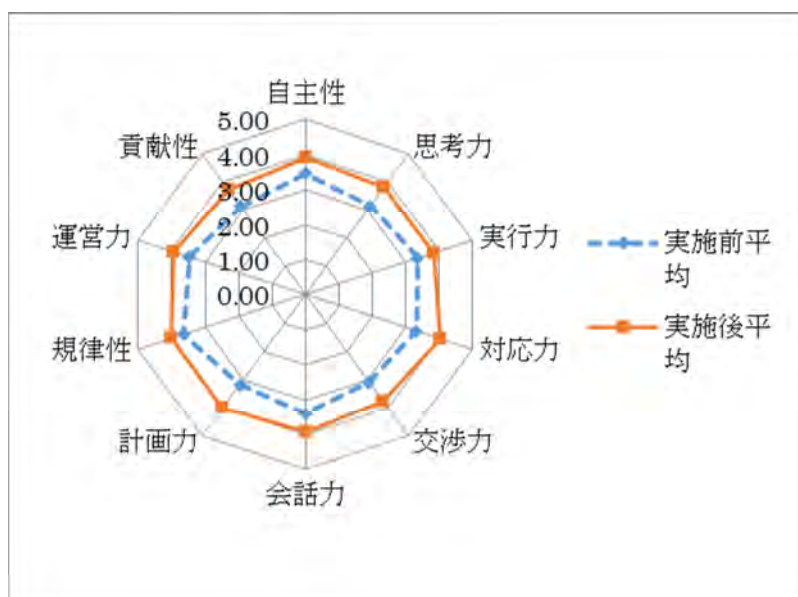


図 5-2-10 事前事後の自己認識の変化

2) 自己認識シートにおける事前と事後の変化 ～「計画力」「対応力」が伸びる～

それでは、事後において自己認識シートでの評価はどのようになっているだろうか。レーダーチャート【図 5-2-10】で全体を見ると、どの項目でも能力が伸びたと評価していることがわかる。【表 5-2-1】の増減を見ると、第一位は「計画力」の+0.82、第二位は「対応力」+0.71、第三位は「思考力」+0.68である。今年度の熟議では、熟議 HP 上の資料を読み、考え、課題に答えるといった「熟慮」プロセスを経験した後、本番の「議論の段階」に臨まなければならないことから、時間を有効に用いて準備を進める必要があった。また、本番では、大学生のほか、地域の住民、行政の方々など大人の意見に耳を傾けるだけでなく、各テーブルで対等な立場で発言する状況に置かれた。このような経験がこの結果に反映していることが考えられる。

同様に、過去 3 年間の熟議に参加した高校生の比較で見るとどうであろうか【表 5-2-2】。全体として、開催年によって違いが見られる。2014 年では、「思考力」がもっとも伸び、「対応力」がそれに次いでおり、2015 年と同様の傾向が見られる。しかし、2013 年では「貢献性」がもっとも伸び、「交渉力」「規律性」がそれに次いでいる。2013 年は、高校生に対して与えた課題は社会人と同様、加古川地域の未来について考えるための「事前熟慮メモ」のみであり、「ふるさと」「加古川地域の“強み”と“弱み”」を中心としたレポート形式の課題に答えるものであった。事前学習というよりは、各人の考えをまとめるにとどめたものであったと言えよう。

以上より、議論の前にしっかりと熟慮を行うかどうか、能力の自己評価に影響を与えることが予測される。高校生に対しては、事前課題の内容や形態について工夫を行い、「計画力」「思考力」をさらに伸ばしていくことは可能ではないか。また、熟議本番であるワークショップが「対応力」獲得の手応えを与えているのではないかと予想されることから、今後、高校生が参加しやすい熟議形態を検討していくことも課題の一つと言えよう。

事前事後の自己認識評価の増減（事前事後両方に回答した高校生）

| 能力項目 | 2015 (34 名) | 2014 (32 名) | 2013 (27 名) |
|------|-------------|-------------|-------------|
| 自主性 | +0.44 | +0.34 | +0.41 |
| 思考力 | +0.68 | +0.66 | +0.30 |
| 実行力 | +0.49 | +0.50 | +0.48 |
| 対応力 | +0.71 | +0.53 | +0.07 |
| 交渉力 | +0.68 | +0.28 | +0.63 |
| 会話力 | +0.50 | +0.31 | +0.48 |
| 計画力 | +0.82 | +0.41 | +0.11 |
| 規律性 | +0.35 | +0.34 | +0.52 |
| 運営力 | +0.47 | +0.06 | +0.26 |
| 貢献性 | +0.59 | +0.44 | +0.67 |

表 5-2-2 事前事後の自己認識評価の増減（経年）

※太字は伸び率の高い方から第 3 位まで、斜字は低い方から第 2 位までを表している。

3) 事前と事後の変化 ～大学生との比較～

それでは、事前事後の変化は、大学生と比較してどのような結果となっているだろうか。大学生参加者は、ファシリテーター（12人）とワークショップの参加者（11人）に分けられる。役割が異なることから、ここでは分けて分析を行う。全体として、両者ともに高校生と同様、どの能力項目においても事前よりも事後で能力が伸びたと評価している。

ファシリテーターの学生は、第一位は「運営力」の+1.25、第二位は「計画力」「貢献性」+1.00、第三位は「交渉力」「会話力」+0.92であり、能力項目10項目のうち半数が過去には見られないほど高い変化率となっており、熟議のファシリテーターを経験したことによる大きな効果が見て取れる。一方、ワークショップ参加学生では、第一位は「交渉力」の+1.09、第二位は「対応力」+1.00、第三位は「運営力」+0.91となっている。これらの数値も例年のワークショップ参加者に比して高い変化率となっている。

ファシリテーターでは、やはり「違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力」である「運営力」の数値が最も高く、「現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力」（計画力）、「社会の担い手として役割を自覚して、参画する力」（貢献性）がそれに次ぐ。一方、ワークショップ参加学生は、「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力」（交渉力）が最も高くなっており、「状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力」（対応力）が次いで高い。それぞれの役割に応じた能力の伸びを自覚できている様子が見られる。

高校生が「対応力」が高い傾向は大学生の参加者と同様であるが、異なる立場の人々とチームワークよく作業や討議を進めることについて手応えは得られていないようだ。一方、「計画力」が高いのはファシリテーターと同様の傾向である。ファシリテーターのリードにより、解決に向けて筋道を立てる手法から得たものがあることが推測される。

3. 高校生は「地域の安全・安心」についてどう考えたか

本節では、熟議参加を決めた後、熟議の事前準備としての「熟慮」の時期に行う「事前アンケート」と熟議当日の議論を終え、「熟議」すべてを経験した後に行う「事後アンケート」の比較を行う。「熟議」という経験を通して、熟議への構え、テーマに対する意見がどのように変化したのかを考察する。「協働を目指す対話」である熟議の成果が、どのように現れているかについて見ていくことが目的である。

なお、データを比較することから、参加者のうち事前および事後のアンケートの両方に回答した高校生のみを対象とする。

(1) 「熟議」への期待 ～「議論の段階」における期待と成果～

熟議参加への期待として「自分の意見を述べる」について、事前では8.3%と消極的であったが、事後では30.6%と大幅に増加している。一方、「他の人の意見を聞く」に変化は見られないが、事前で47.2%、事後で44.4%と【図5-3-1】の5項目中最も高い数値となっている。一方、議論の進め方や結論・提案の方向性についてはそれほど関心が高いとは言えない。事後の結果は、事前よりさらに数値が下がっており、高校生の経験として、「自分の意見を述べる」ことができたことの充実感が優れていることが表れているとみることができよう。また、「多くの人と交流したり話をする」についても、事前で22.2%、事後で16.7%とある程度の期待が読み取れる。

高校生は、熟議への構えとして「他の人の意見を聞く」として参加したが、実際には、それだけでなく「自分の意見を述べ」、「多くの人と交流したり話をする」経験をしたと言えよう。

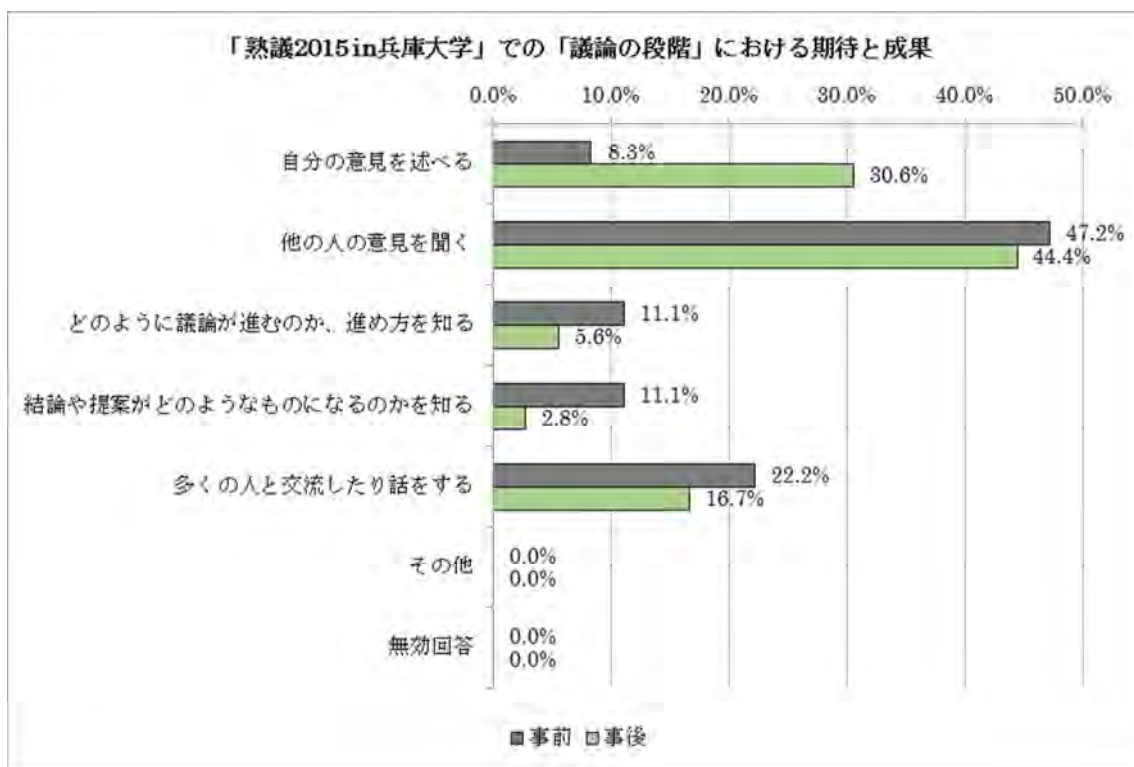


図5-3-1 熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果

(2) 「地域の安全・安心」に関する意見の変化 ～熟議前と熟議後～

今年のテーマは「加古川地域のちから ～安心・安全を創る～」に関わり、10項目のサブテーマを設定した。以下では、それらについての意見が熟議前と熟議後でどのように変化したのか見ていく。

10項目それぞれについて、賛成か反対かをたずねた結果を検討し、さいごにこれらの項目を全体として考察する。なお、選択肢の5段階尺度のうち、「大いに賛成」と「やや賛成」の合計を「肯定派」とし、「大いに反対」と「やや反対」の合計を「否定派」として分析に用いる。

1) 項目別の変化

① 「人と人の繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」

高校生では、「大いに賛成」が事前では52.8%であったが、事後には75.0%に増加した【図5-3-2】。熟議での意見交換を通する体験を通して、人々のつながりの重要性を実感したと思われる。

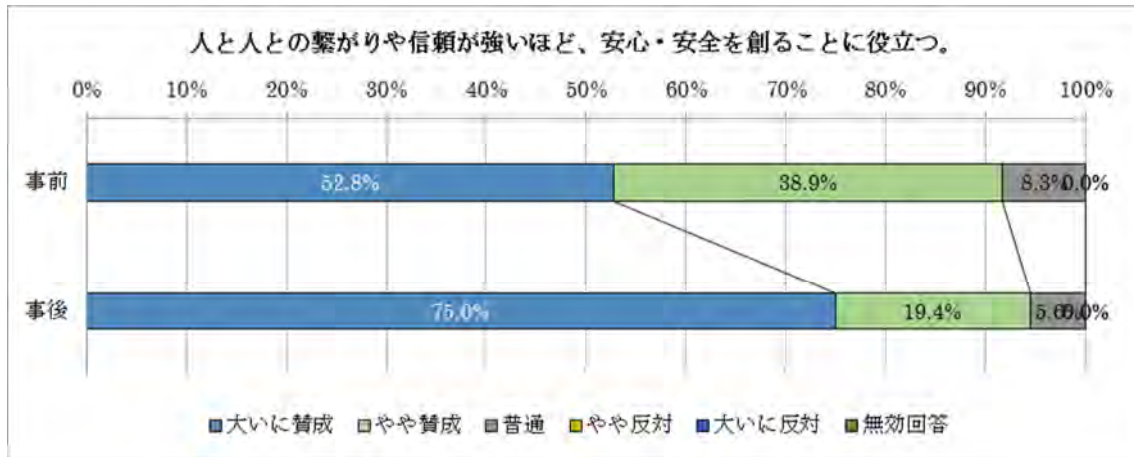


図5-3-2 人と人の繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ。

② 「安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」

事前では、「大いに賛成」が事前では16.7%であったが、事後には58.3%へと大幅に増加した。熟議の経験により、住民が同じテーブルを囲み、顔と顔を突き合わせて意見交換することが安心・安全につながっていくのではないかとの認識をもった様子が見られる【図5-3-3】。

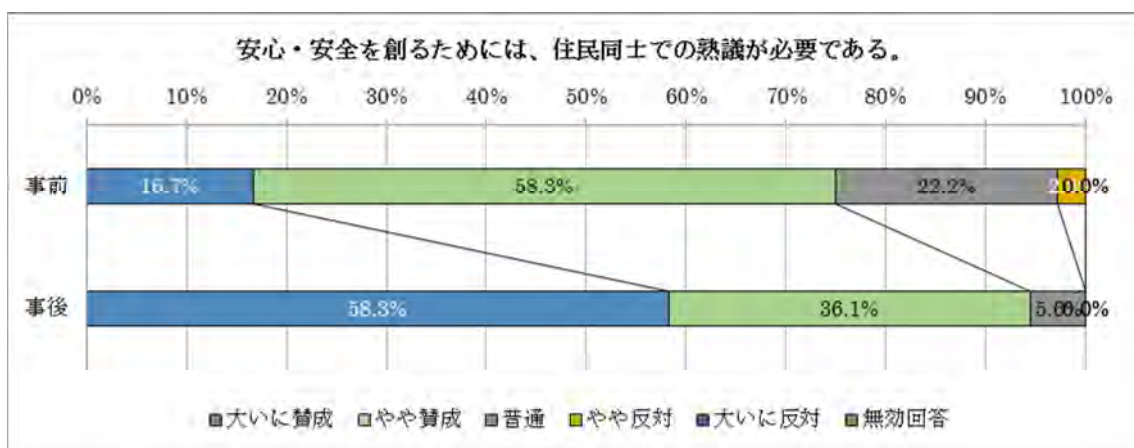


図5-3-3 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である。

③「安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」

事前では、「大いに賛成」「やや賛成」の「肯定派」は30.6%であり、事後では27.8%とあまり変化はみられない。一方、「住民の役割は限定されていない」と考える「否定派」も、47.2%から44.4%へと変化はみられない。「住民の役割」の重要性は事前事後に関わらず認識されていることがわかる【図5-3-4】。

テーブルでは、「住民 対 行政」といった二項図式や「安心・安全」はどのステイクホルダーの責任かといった議論が多くなかったことの表れとも解釈できよう。

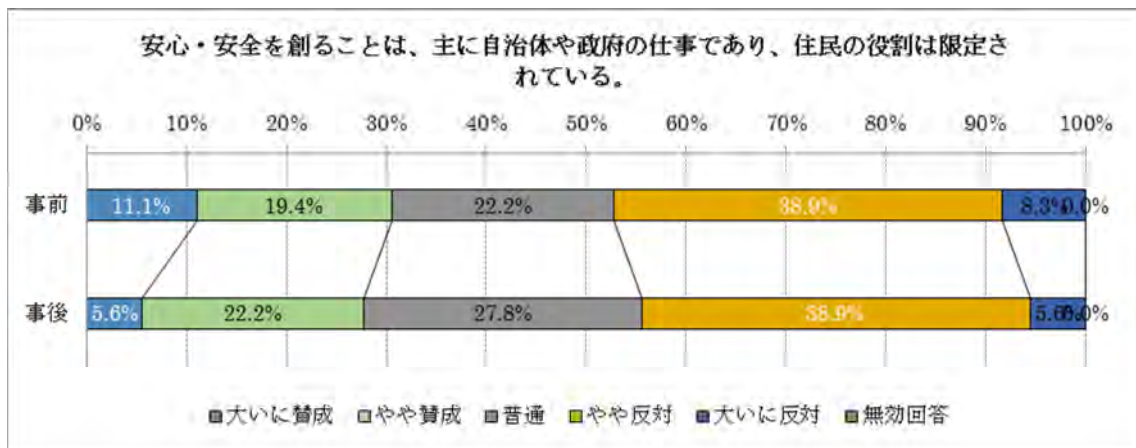


図 5-3-4 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている。

④「他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」

一人ひとりの能力向上について、「肯定派」は事前の72.2%から61.1%へと10ポイント近く低下している。安心・安全を創ることの議論が、「一人ひとりの能力の向上」と結びつけられなかったことがうかがわれる。どちらかといえば、ネットワークの力、協働の力の必要性について印象が強かったのではないかと予想される【図5-3-5】。

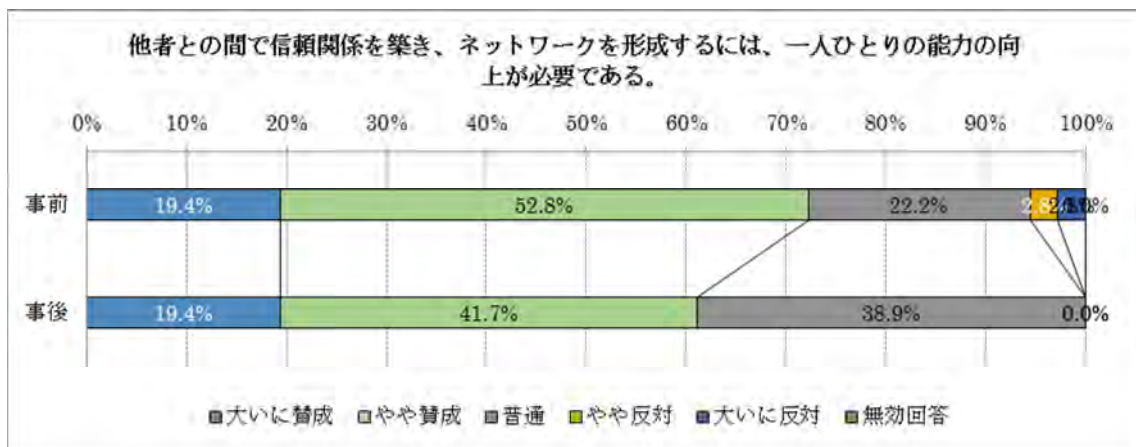


図 5-3-5 他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である。

⑤ 「安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」

「肯定派」は事前の 33.3%から 41.7%へと 10 ポイント近く増加している。一方、「否定派」は 22.2%から 19.4%へと減っている。「ひと」の協力だけでなく、「もの」の必要性についての気づきがこの数値に表れていると読むことができよう【図 5-3-6】。

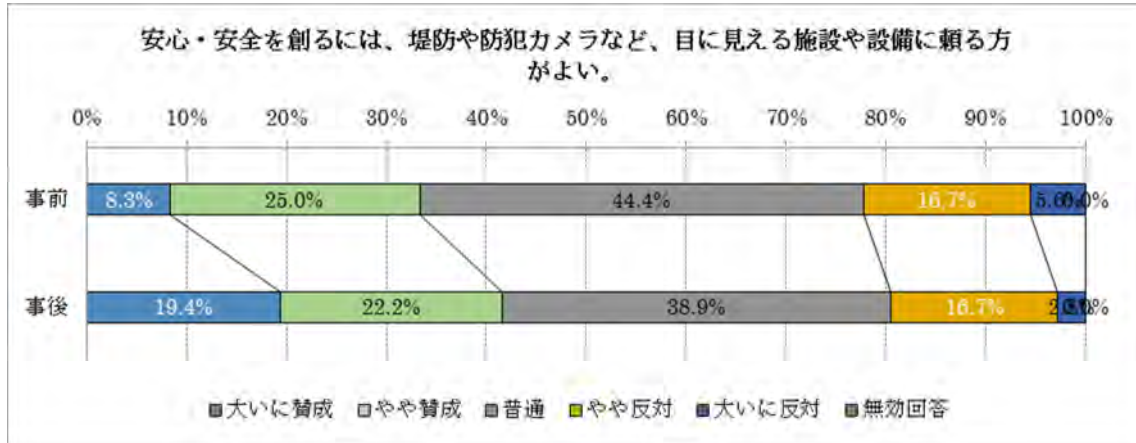


図 5-3-6 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい。

⑥ 「コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」

「大いに賛成」は 27.8%から 47.2%へと大幅に増加している。事後では、「やや賛成」と合わせると「肯定派」である 90%近くがコミュニティでの日常的な活動の重要性を感じていることが分かる【図 5-3-7】。

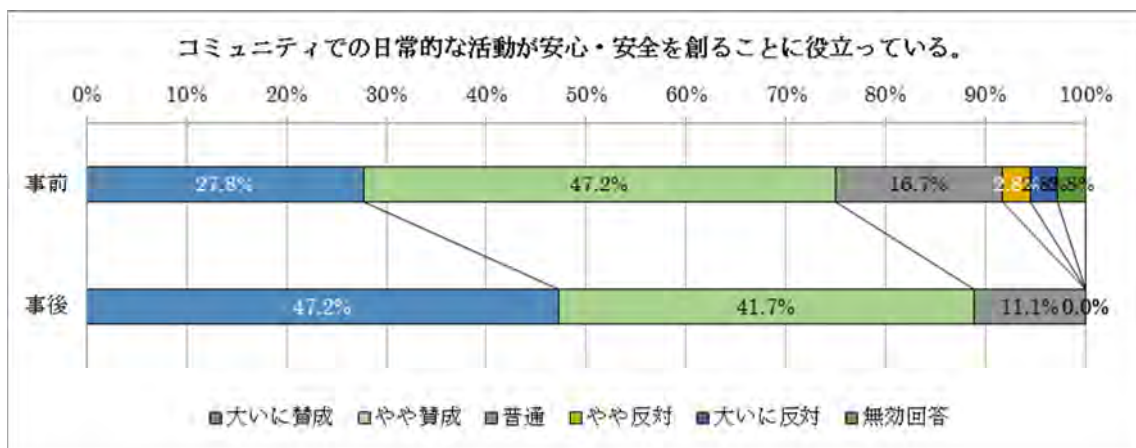


図 5-3-7 コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている。

⑦「行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」

「大いに賛成」は事前でも 61.1%に上っているが、事後でも増加して 66.7%となっている。事後では、「やや賛成」と合わせると「肯定派」は 100%に上っており、高校生は住民同士の助け合いの必要性を十分に理解していることが分かる【図 5-3-8】。

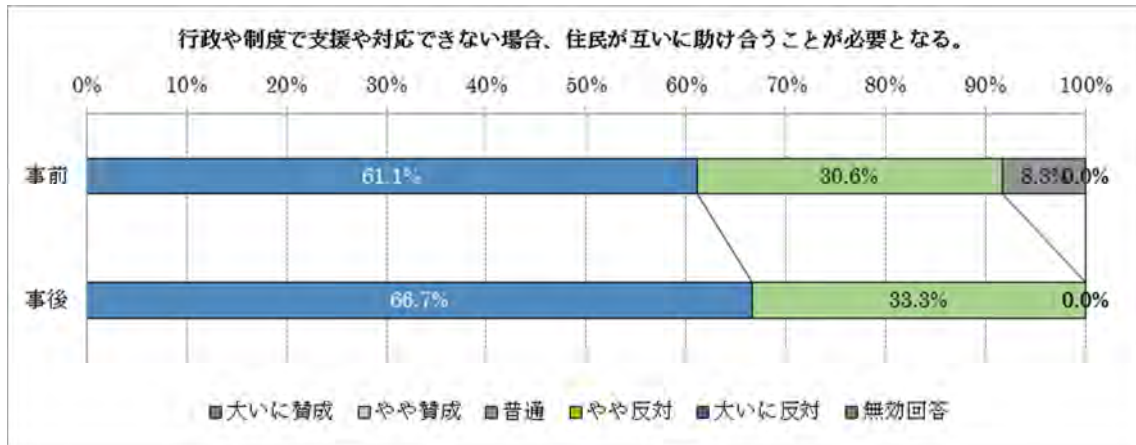


図 5-3-8 行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる。

⑧「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」

「肯定派」は事前の 11.1%から事後の 27.8%へと 15 ポイント近く増加している。一方、「否定派」は事前の 52.8%から事後の 33.3%へと 20 ポイント近く減少している。議論を経て、不便があっても安心・安全のためには致し方ないという認識が高まったことが分かる【図 5-3-9】。

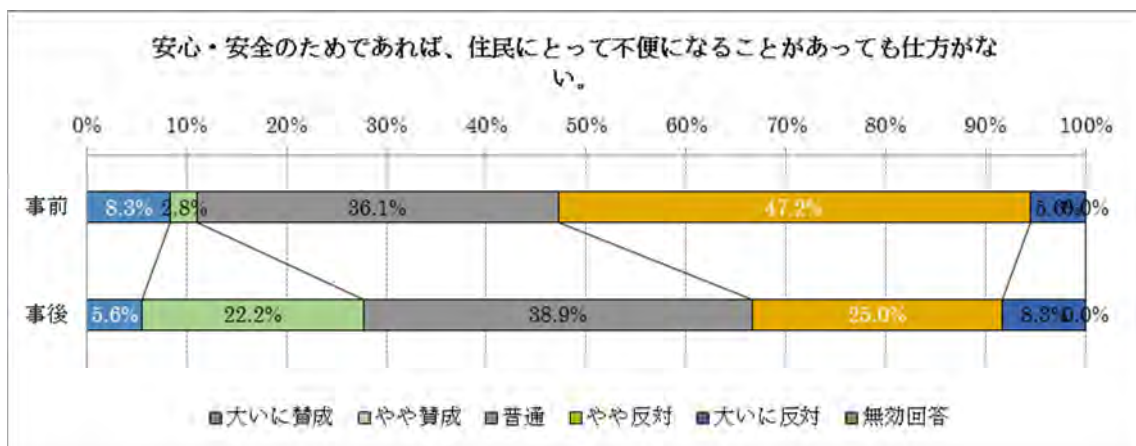


図 5-3-9 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない。

⑨「安心・安全を創るのは、地の人の役割であり、風の人に関わらないものである」

「肯定派」は事前の 19.4%から事後の 13.9%へと減少している。一方、「否定派」は事前の 61.1%から事後の 47.2%へと 15 ポイント近く減少しており、否定派の変化が大きい。安心・安全を創るとき「地の人」か「風の人」かと問われれば、どちらかと言えば、地の人の役割が重要との認識が高まったことがうかがわれる。【図 5-3-10】。

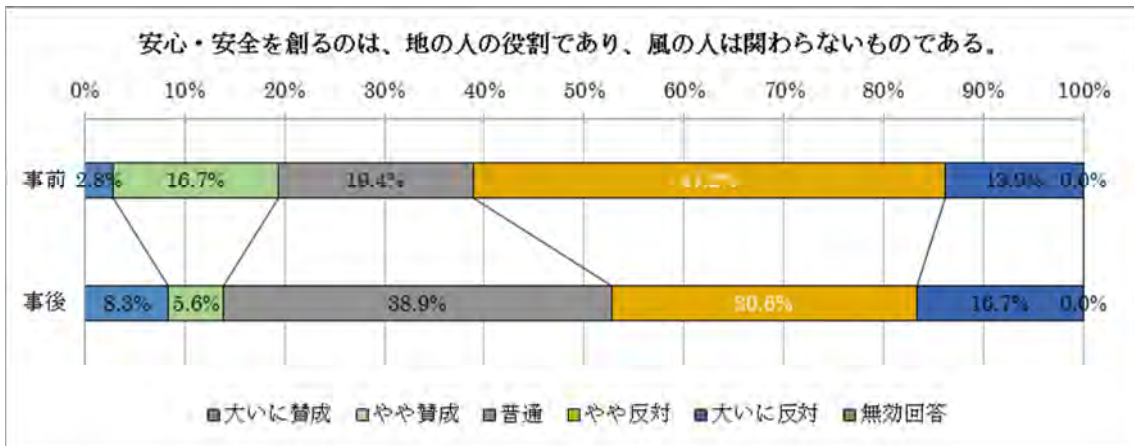


図 5-3-10 安心・安全を創るのは、地の人の役割であり、風の人に関わらないものである。

⑩「大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」

「肯定派」は事前の 36.1%から事後の 44.4%へと増加しているが、全体としては大きな変化はない。大学が「安全・安心」とどう関わるのかについて、高校生にとっては関連性がわかりにくかったのではないかと推測される【図 5-3-11】。

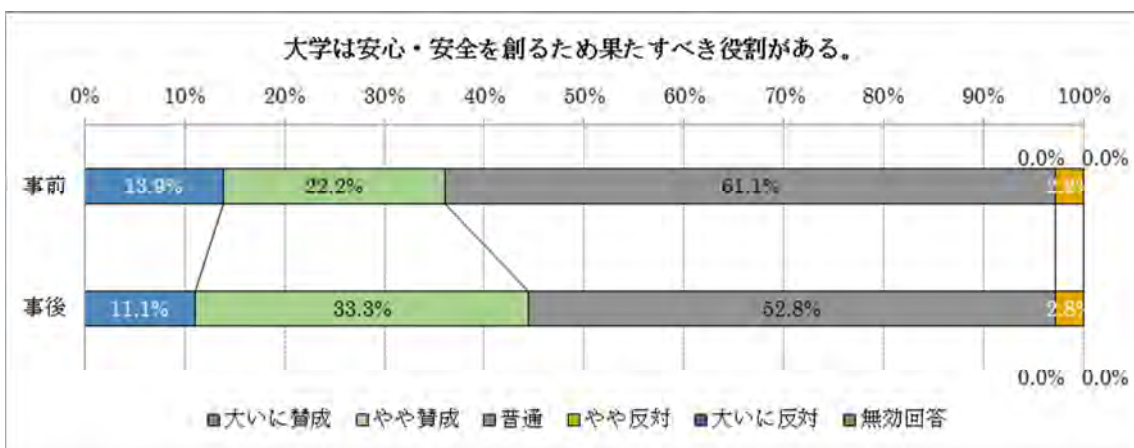


図 5-3-11 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある

2) 全体の考察

【図 5-3-12】は、上で個別に考察した 10 項目について、「大いに賛成」を 5、「やや賛成」を 4、「普通」を 3、「やや反対」を 2、「反対」を 1 として平均を算出したものである。地域の安心・安全についての考え方について、熟議の前と後で目立った変化がみられるのは、「安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」(+0.64) と「コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」(+0.39)、「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」(+0.31) である。

熟議の経験を通して、高校生のなかで起こった最も大きな変化は地域の安心・安全のためには、「住民同士の熟議の必要性であること」について認識が高まったことである。また、コミュニティでの日常的な活動の重要性を感じるとともに、安心・安全のためには住民に不便になることを受け入れなければならないといった、「コミュニティの一員としての責任感」の必要性を再認識したと言えよう。

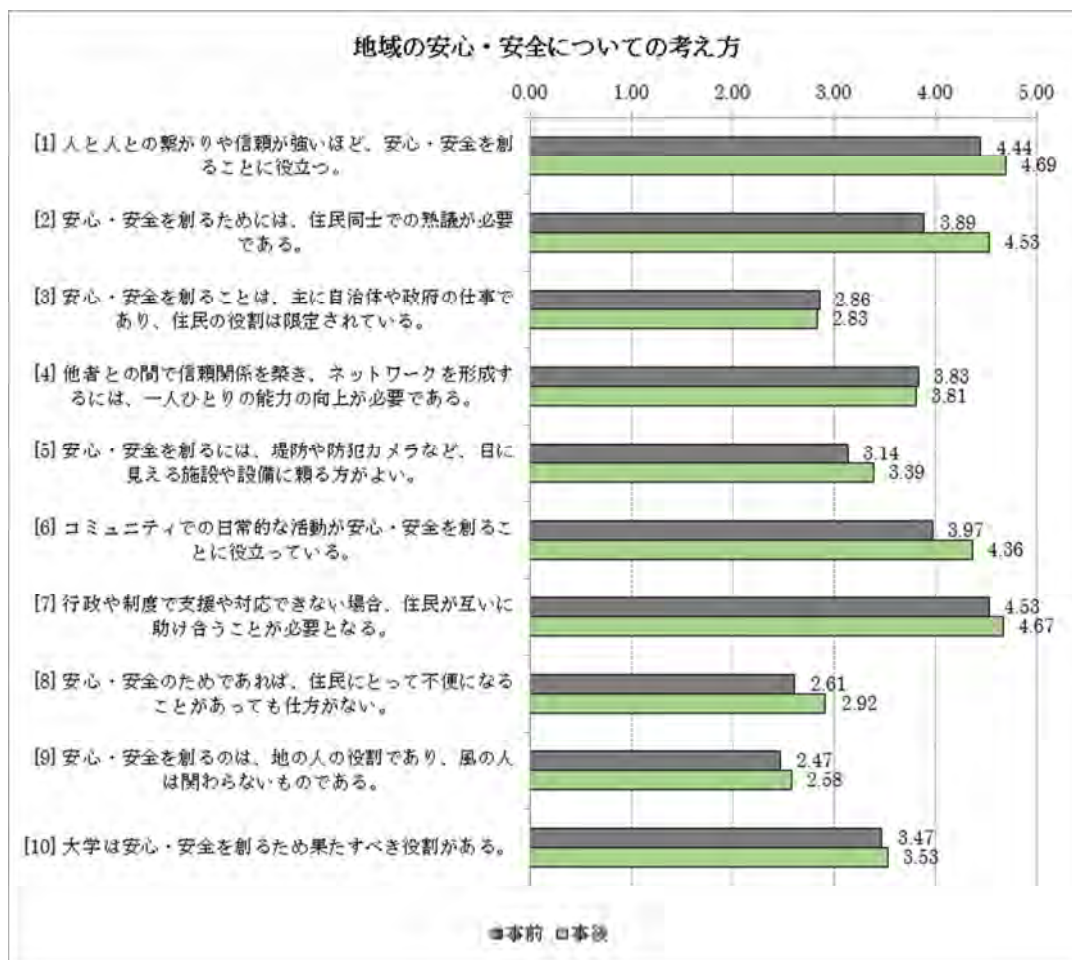


図 5-3-12 地域の安心・安全についての考え方 (ポイント)

4. 高校生は「熟議」をどのように経験し、どう活かすのか

本節では、事後アンケートから、参加した高校生が熟議を通して学んだこと、経験したことを今後どう活かそうと考えているのかみていく。事後に回答した高校生は36名である。

(1) 「熟議」の満足度

熟議の満足度は、「とても満足」が80.6%となっており、全体として非常に高い。「まあ満足」の19.4%を合わせると、高校生全員が熟議の一連の経験と学びを充実感を持って捉えていることが分かる【図5-4-1】。

自主学习による事前の熟慮、地域の人々や大学生との交流、テーマにしたがって課題を抽出するといった討議方法など、学校の学びでは得られない体験として印象づけられている様子が見られる。

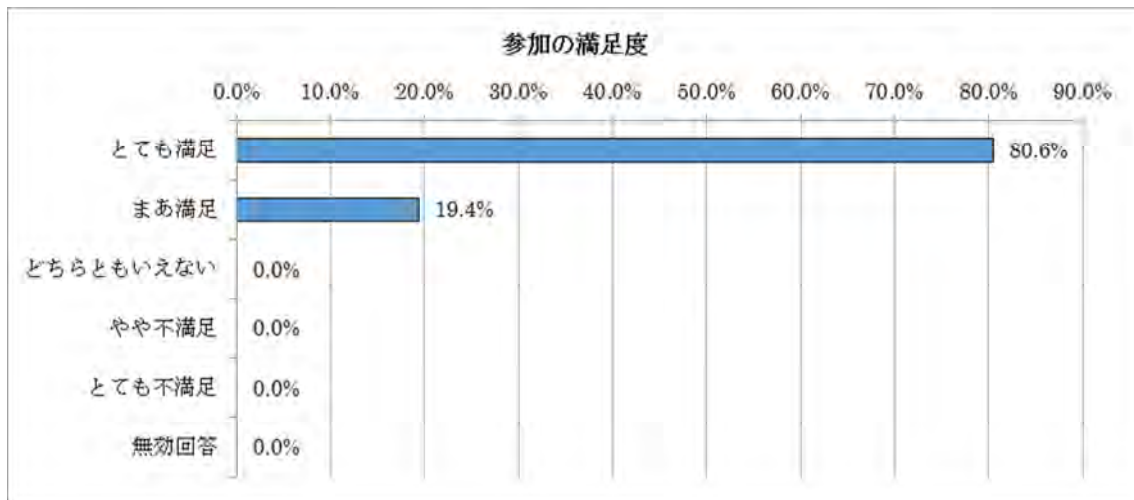


図5-4-1 参加の満足度

(2) 「熟議」経験の活用

それでは、高校生はこの経験を今後の生活や学びに活かしていくことを考えているのだろうか。【図5-4-2】で、「熟議の経験を今後の活動で活かしたいか」について、「積極的に活かしたい」が47.2%となっている。約半数が熟議の経験をそのままにせず、何らかのかたちで活かして行きたいと考えていることが分かる。また、「機会があれば是非活かしたい」についても52.8%となっていることから、熟議の成果を次につなげようとする高校生の強い意欲が感じられる。

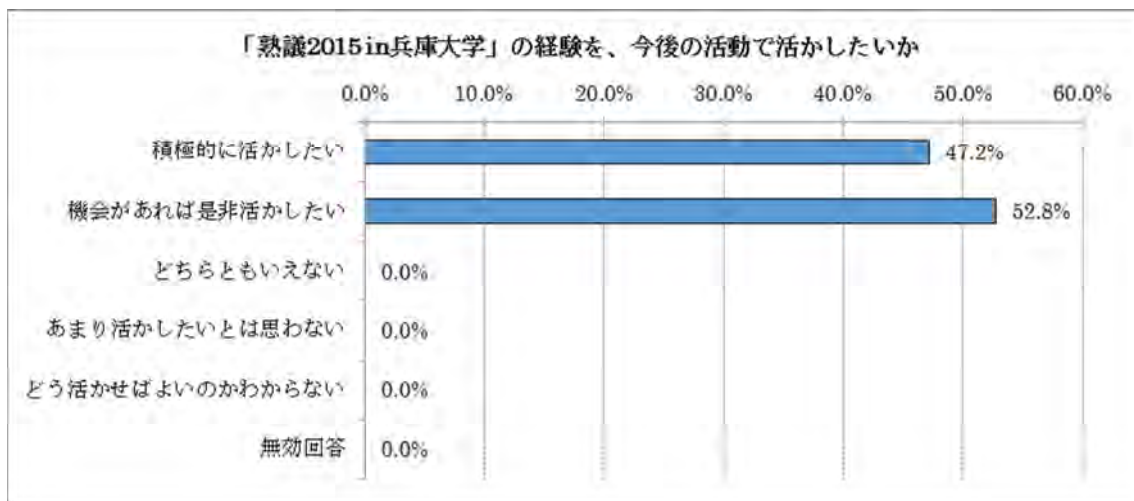


図 5-4-2 「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいか

(3) 「熟議」の討議形態に関する意見

熟議で経験したことについて、とくに熟議の討議形態に焦点を当て、高校生が何を感じたのかについて見ていく。熟議は地域の課題の抽出、共有、深化といったプロセスにおいて協働し、その結果を地域づくりやネットワークづくりにつなげていくことをめざしている。中学生や高校生であっても、その立場は尊重され、生徒なりに考え、発言することができる。そして、その内容は共有される。このような熟議は、民主主義的ルールに則った実験場でもあり、選挙権年齢が18歳以上となり市民性教育（シティズンシップ教育）の重要性が高まるなか、有効な方法の一つとして注目できよう。

① 「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」

まず、「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」について5段階評価でたずねた。結果は、「非常に思う」が33.3%、「思う」が50.0%と、熟慮の段階が議論の段階の準備として効果があったことを示している【図 5-4-3】。

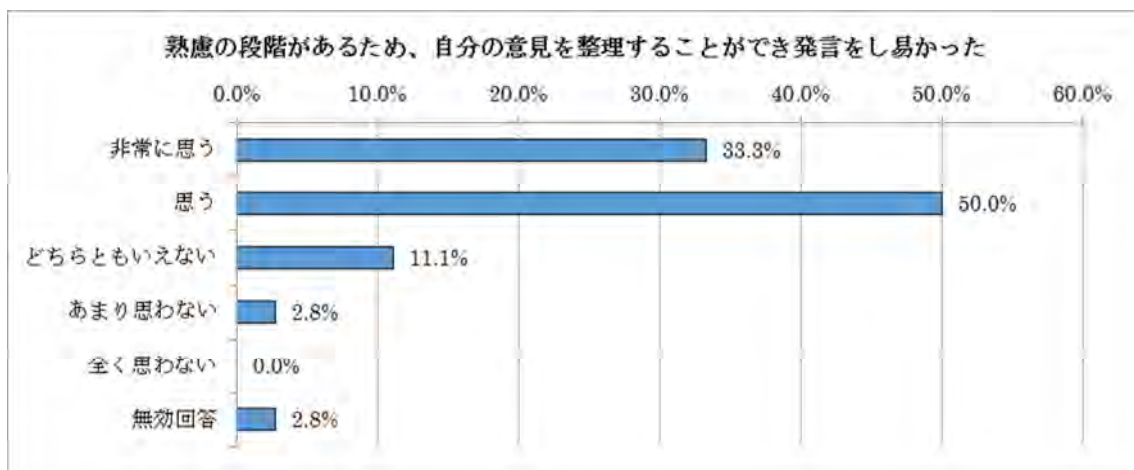


図 5-4-3 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった

②「これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた」

熟慮の段階が、当日の議論を促進するために十分な「共通の基盤」ができていたか。これについては、「非常に思う」が44.4%、「思う」が47.2%となっている【図5-4-4】。合わせると90%を超える高校生が話し合いのための共通の基盤ができていたと感じている。熟慮の段階として、事前アンケートが自分自身の意見や考えをまとめるツールとしてだけでなく、地域をめぐるテーマの範囲や方向性についての情報を確認したり、共有したりすることにつながっていることが予想される。また、ウェブ上で、共通の学習資料により、議論で必要となる用語表現や定義を学んだことの影響も見て取れる。

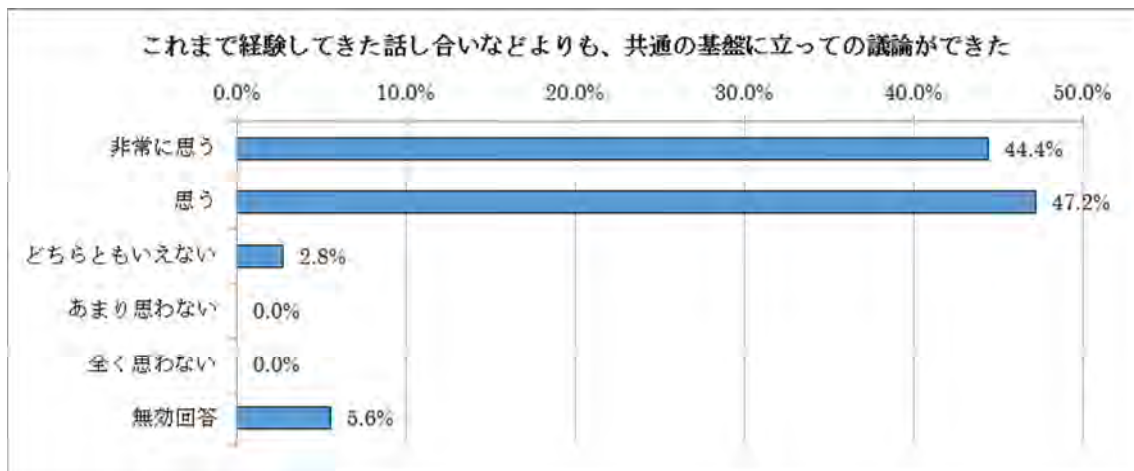


図5-4-4 これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた

③「熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった」

つぎに、「加古川地域のちから」というテーマそのものについて、高校生がより関心を持つ機会となったのかどうかについて尋ねた。「非常に思う」が44.4%、「思う」が41.7%となっている【図5-4-5】。合わせると85%近くの高校生が、「地域の課題とはなにか」「地域をどうしたらよいのか」といったテーマに対して、より関心が高まったとしている。

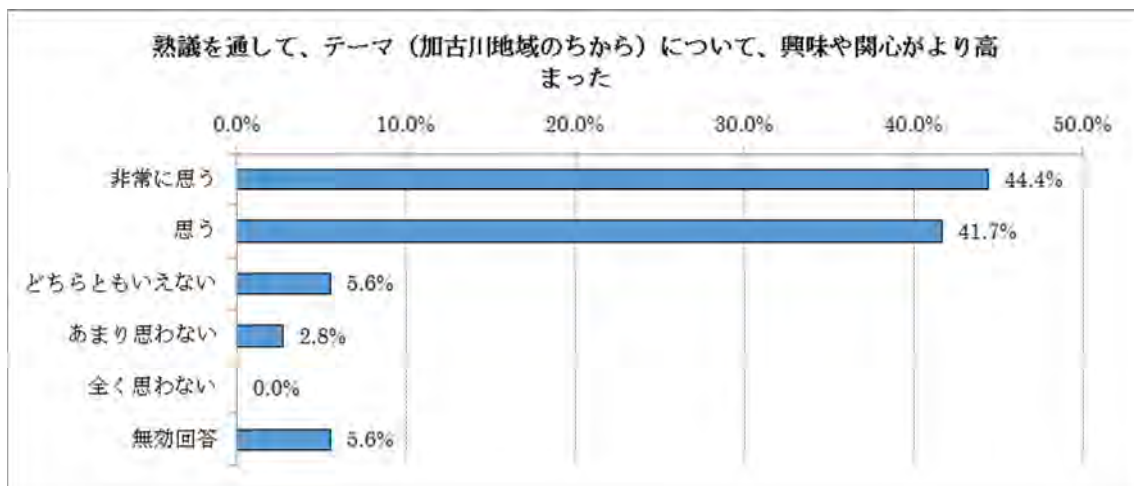


図5-4-5 熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった

(4) 「熟議」が促進する高校生の自己変化

① 「議論の内容が充実しテーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった」

つぎに、熟議に参加したことにより、テーマに関する知識を深める機会となったかについてたずねた。「非常に思う」が52.8%、「思う」が38.9%となっている【図5-4-6】。合わせると90%を超える高校生が、「地域のちから」に関する知識を深めたとしている。実際に議論をしてみると、安心・安全にも災害や事故だけでなく、食品や環境など幅広い領域があること、また、安全度を高めていくために地域のだれがどのように行うかについて、さまざまな課題があることなど、テーマを深められたのではないかと

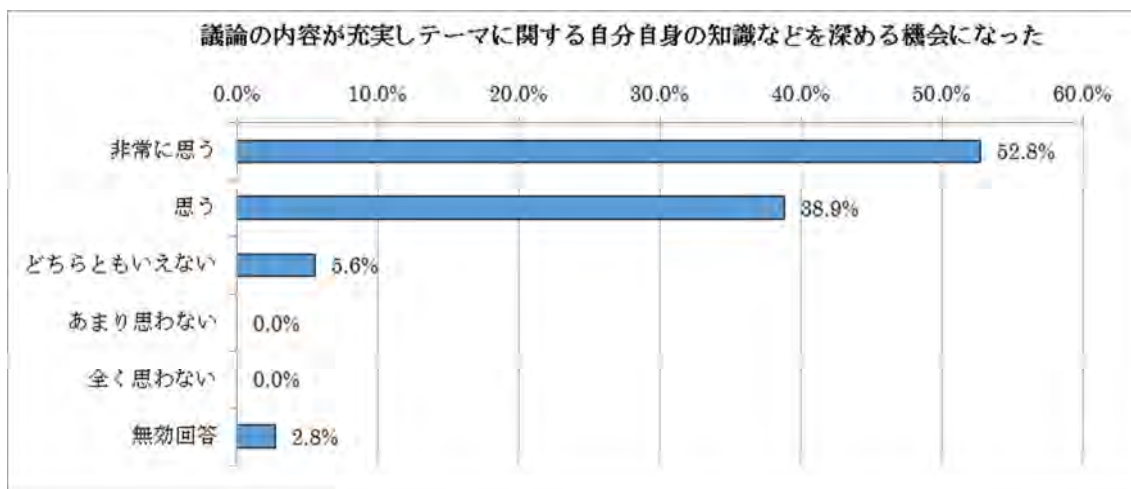


図5-4-6

② 「課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った」

それでは、熟議に参加したことが、単に交流や討議それ自体を目的とするにとどまらず、地域の課題解決に向けて「自ら実行することの重要性」の気づきにつながっているかどうかについてはどうであろうか。「非常に思う」が52.8%、「思う」が38.9%となっている【図5-4-7】。合わせると90%を超える高校生が、知識を深めるだけでなく、自ら実行していくことの重要性を自覚している。

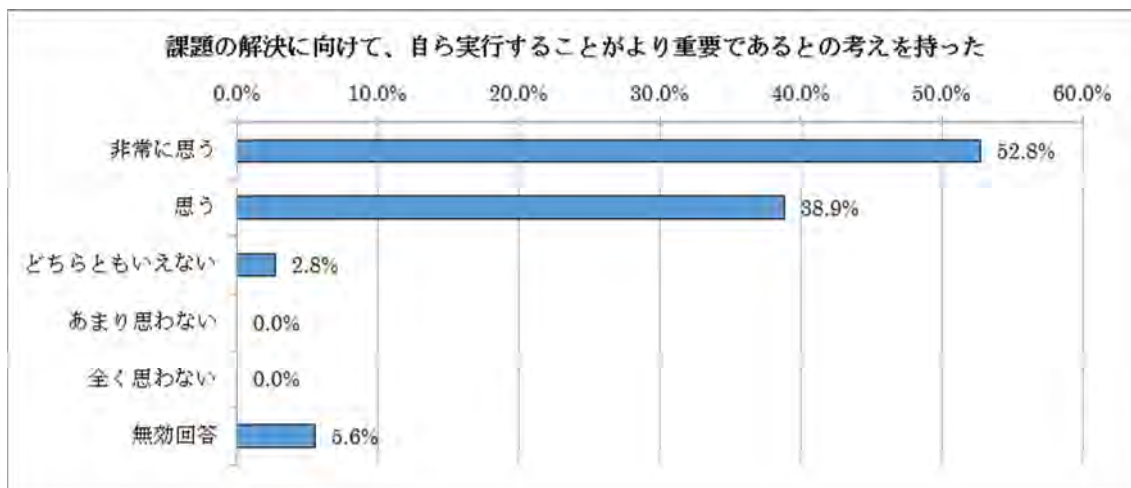


図5-4-7 課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った

③「最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった」

さいごに、議論の段階の影響について、「最初に持っていた自分の意見が変化したか」たずねた。「非常に思う」が33.3%、「思う」が52.8%となっている【図5-4-8】。合わせると85%近くの高校生が、議論を経て、はじめに持っていた自分の意見に何らかの影響があったとしている。

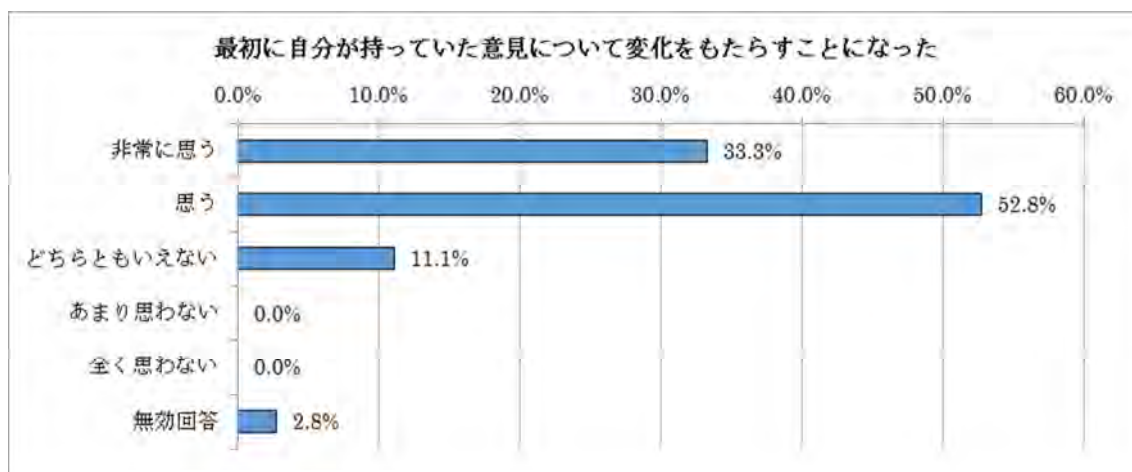


図5-4-8 最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった

5. まとめ ～「熟議」の経験とその効果～

本章では、「熟慮の段階」「議論の段階」の前後に行った自己認識シートおよび事前と事後のアンケートをもとに、熟議が高校生に与える影響について見てきた。本節では、これまでの分析を総括する。なお、テーマに関する質問項目の内容を以下に、模式図【図5-5-1】として示しているので参照されたい。

まず、変化や効果などの影響を見る前に、どのような高校生が参加したのか把握する必要がある。参加した高校生は、「熟議」という言葉をはじめて聞いた者が64.3%を占めている。したがって、自ら参加を決めたというよりは、学校の先生に勧められた者が85.7%に上る結果となっている。しかし、事前アンケートでは、ホームページの学習資料等を通じて、熟議の進め方やテーマについて「大体理解できた」とする者が80%以上と多数を占めている。また、「議論の段階」に対しては、約半数の者が「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」とし、「多様な考えを知る機会」と捉えている者が70%に上っている。

また、未来像については、人口問題には悲観的であり、コミュニティや都市の状況や環境、経済・財政状況についての期待は低い。一方、技術発展、医療、人工知能・ロボットについては高い期待を寄せている。

このような高校生が熟議を経験した後、能力の自己評価ではどの項目に変化が見られたのだろうか。今回の熟議に参加した高校生は、「自主性」「規律性」について自己評価の高い者であると言える。事前と事後の比較で見ると、まず、どの項目でも能力が伸びたと評価していることがわかる。つぎに、項目ごとの増減で見ると、第一位は「計画力」、第二位は「対応力」、第三位は「思考力」である。

今年度の熟議では、熟議 HP 上の学習資料を読み、考え、課題に答えるといった比較的時間を割かねばならない「熟慮」プロセスを用意した。「自主性」「規律性」をもった高校生は、限られた時間を有効に用いて、きちんとこれらの課題を理解し取り組んだ様子である。「計画力」の評価が高まった所以である。また、本番では、大学生のほか、地域の住民、行政の方々など大人の意見に耳を傾けるだけでなく、各テーブルで対等な立場で発言する状況に置かれた。このような経験が「対応力」を高めたことが予想される。

今回の議論は、一つの結論に導くことを意図したものではない。各テーブルの一人ひとりがしっかりと考えること自体が目的の一つであった。高校生はこの「考える」プロセスに身を置き、自分のなかから意見や考えを取り出す作業ができたのではないか。「思考力」が伸びたと実感できたのはこのためだと考えられる。

一方、テーマに関する認識や意見の変化は見られたのだろうか。詳しくは上に見たとおりであるが、以下では、項目の一覧と賛否の増減について、「大いに賛成」における変化を大きな変化、「やや賛成」や「普通」における変化をそれに次ぐものとして考察する。

全体としてまとめると、まず、①、②、⑥に見られるように、『安心・安全を創るためには、「人と人とのつながりや信頼」が重要であり、「住民同士の熟議」を行うとともに、コミュニティの日常的活動が必要である』について肯定的意見が高まっている。次に、⑧、⑨、⑩に見られるように、『「安全か不便か」と問われれば、「不便も致し方ない」との考えへの変化が見られ、コミュニティのなかでは「地の人」の役割の重要性に気づくとともに、大学の役割についても認識が高まっている』ことがうかがわれる。

さいごに、他の項目では、③、⑦に見られるように、安全・安心を守るには、「行政だけでなく、住民が役割を果たすこと」、④「一人ひとりの能力の向上も重要であるが、力を合わせること」、⑤「施設や設備に頼るだけではないこと」については熟議前後で変化は見られず、熟議参加とは関係なくそのような考えをもっていたことがわかる。

①「人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」

→「大いに賛成」が増加

②「安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」

→「大いに賛成」が増加

③「安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」

→大きな変化は見られない。

- ④ 「他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」
→ 「やや賛成」が減少、「普通」が増加
- ⑤ 「安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」
→ 大きな変化は見られない。
- ⑥ 「コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」
→ 「大いに賛成」が増加
- ⑦ 「行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」
→ 大きな変化は見られない。
- ⑧ 「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」
→ 「やや賛成」が増加、「やや反対」が減少
- ⑨ 「安心・安全を創るのは、地の人の役割であり、風の人に関わらないものである」
→ 「普通」が増加、「やや反対」が減少
- ⑩ 「大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」
→ 「やや賛成」が増加

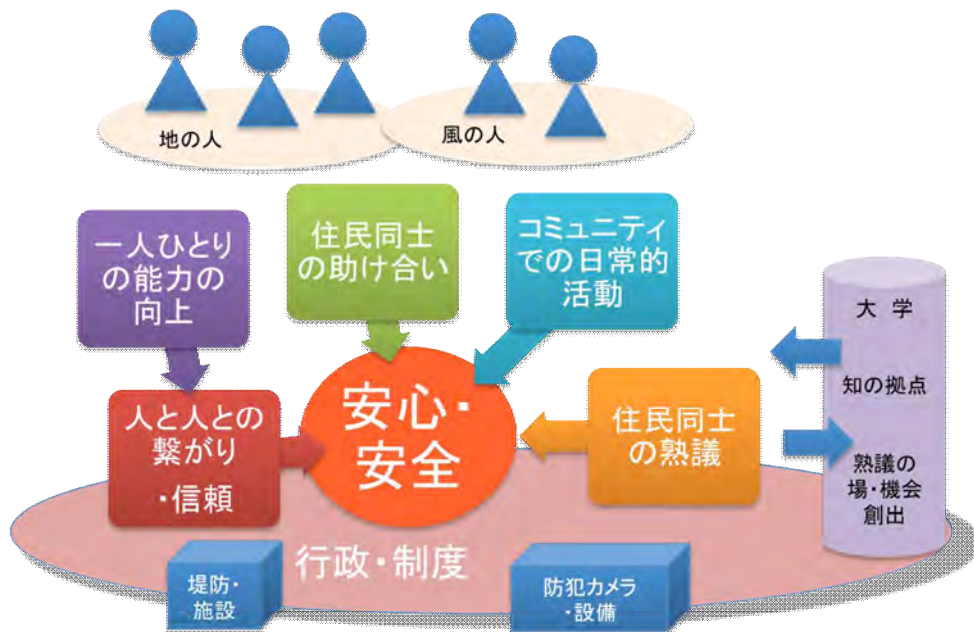


図 5-5-1 安全・安心をめぐる考え方を構成する要因間関係

(吉原恵子)

第6章 熟議が大学生に与える影響

～能力の自己認識とテーマや熟議手法からの学び～

1. 「熟議」が大学生を育てる ～「汎用的能力」の育成～

(1) 「質的転換答申」が求める能力とアクティブ・ラーニング

平成24年8月、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申)が中央教育審議会により取りまとめられた。

その中核となる内容は、大学が「生涯学び続け、主体的に考える力」を育む高等教育の場となるために、主体的な学修を促す「学士課程教育の質的転換」が必要であるという点である。

この「質的転換答申」の前段階として、「学士課程答申」(平成20年12月)がある。文部科学省のまとめによれば、『我が国の大学が授与する学位としての学士が保証する能力の内容として「知識・理解」、「汎用的能力」、「態度・志向性」及び「総合的な学修経験と創造的思考力」を挙げ、各大学が学位授与の方針を明確化することを促した』ものである。いわゆる「学士力」が位置づけられたわけである。この後、これを獲得することを保証する仕組みや制度が整えられていくが、状況は大学によって開きのあるものであった。

「質的転換答申」において、質的転換の意味は「国民一人一人が主体的な思考力や構想力を育み、想定外の困難に処する判断力の源泉となるよう教養、知識、経験を積むとともに、協調性と創造性を合わせ持つことのできるような大学教育への質的転換」と説明されている(下線は著者による)。また、ポスト工業社会における成熟社会においては、「我が国が生み出した固有の価値を異なる文化的・言語的背景を持った人々に発信できる能力、異なる世代や異なる文化を持った相手の考え方や視点に配慮しつつ、意思疎通ができる能力」を育成する必要があるとしている(下線は著者による)。

これらの考え方を土台として、実際に、大学教育ではどのような取組みをして行けばよいのだろうか。兵庫大学では、平成23年度4月に3つのポリシーを設定し、教育課程とシラバスの関係の明確化、4年間の科目履修の体系や順次性を表すカリキュラムマップ、ナンバリングの導入を行ってきた。そして今、求められているのが「質的転換」を実現するための具体的な教育改革・教育改善である。兵庫大学では、今後の事業のなかに、アクティブ・ラーニングを推進する授業についての研修会、研究会実施と推進を設定している。

「質的転換答申」では、(1)予測困難な時代に地域社会や産業界を担う人材の育成が必要であり、(2)大学が地域の拠点となっていく「地域を支え、地域を創る」人材の育成には「汎用的能力」の涵養が不可欠としている。これは、地域の「知の拠点」として、地域づくり、地域の活性化、地域の人材育成を使命のひとつとしている兵庫大学の方針と重なっている。

兵庫大学では、「汎用的能力」は学士課程教育全般にわたって育成しているが、とくに専門教育の学びの土台となる初年次を主とした教養科目やゼミナール科目による学修を重視している。また、数年前より、各科目で目標とする「身につける力」をシラバスに明示し、学生が授業目標や身につけるべき能力を意識して学修に取り組むよう指導している。

この「汎用的能力」の育成には、知識・技術の伝達だけではない教授法の転換が求められる。答申でも、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である」としている。

今後、大学教育では、正課での教養教育、ゼミナール科目を中心として授業形態や授業方法の工夫を行い、能動的学修(アクティブ・ラーニング)を促していく必要がある。また、正課外でも、ボランティアやインターンシップ、政策立案や地域づくり関連の地域プロジェクトなど様々な機会を利用して学びを豊かにしていくことが求められる。

(2) 「汎用的能力」養成の手法としての兵庫大学の「熟議」

熟議は、ここまで見てきた「質的転換答申」の趣旨とそれに沿った具体的な方策と合致している点が多い活動であり、その意味で教育的成果が期待できる学習・活動と位置づけることができる。地域に目を向け、地域について考え、地域の問題を解決するという目的だけでなく、その手法のなかにも「汎用的能力」を身につけるための経験や学習が多く盛り込まれている。

兵庫大学の熟議は地域のさまざまな世代、職業の方々が集い、協働して地域のことを考える場である。これは、まさに上でみた「異なる世代や異なる文化を持った相手の考え方や視点に配慮しつつ、意思疎通ができる能力」を培う機会となるであろう。また、参加者が公平な立場で参加でき、お互いの意見を尊重するワークショップ形式という議論形態からの学びもある。

また、汎用的能力（大学レベルでは一般に、論理的思考力や批判的思考力、問題解決力などがあげられることが多い）について、熟議では、第1回より、熟議の教育的効果に着目し、「社会人基礎力」を参考として、「自主性」「思考力」「規律性」など10項目（p.163参照）を設定して、熟議の事前事後で自己評価の変化をみてきた。

また、年々「熟慮の段階」の資料やデータを充実させるとともに、今年度は、ウェブを用いて自主的にテーマや基本用語を学習できるようにした。さらに、大学生は、事前にワークショップの手法を学ぶ5回の研修会を受講している。これは、授業の前に授業内容を学習してから授業に臨む「反転授業」の手法と共通点が多い。また、高校生、大学生ともに事後アンケートを実施し、大学生に対しては、熟議終了後、ファシリテーターとワークショップ参加者が共に、振り返りのためのグループワークを行っている。

熟議の本番とも言える「議論の段階」だけでなく、「熟慮の段階」を重視する兵庫大学の熟議手法は、アクティブ・ラーニングの基本となる学習の事前準備・事後展開を含むものとなっており、学生の主体

的な学修の確立のために必要とされる「教員と学生あるいは学生同士のコミュニケーションを取り入れた授業方法」とも重なり合う。

「熟議」を経験することで、大学生のなかにどのような変化が起こっているのだろうか。何を得て、何をどのように活かして行こうと考えているのか。このことを検証していくことは、これから地域に貢献する人材にもとめられる能力やスキルなどをどう捉えるのか、またどう育むのかといった課題の検討にも役立つのではないか。

本章では、このような考え方に立ち、大まかに以下の流れで大学生の変化を検討する。

1. 参加した大学生の特徴と「熟議」による変化（事前の状況）
2. 自己認識シートの分析（事前事後の変化）
3. 大学生は「地域の安全・安心」についてどう考えたか（事前事後の変化）
4. 大学生は「熟議」をどのように経験し、どう活かすのか（事後の状況）
5. 「熟議」終了後のふり振り返りグループワークから（事後の状況）
6. まとめ ～「熟議」の経験とその効果～

分析では、熟議の事前と事後に行った自己認識シート、事前・事後アンケートを中心に用いる。また、熟議終了後に実施した振り返りのためのグループワーク時の作業シート（自由記述）も参考にする。ただし、あくまでも自己評価であることに留意し、学生の内部に起こったことを推測するにとどめることとする。

2. 参加した大学生の特徴と「熟議」による変化

本節では、熟議への参加を通して、大学生の自己認識にどのような変化があったのか概観する。兵庫大学の熟議は今年で4年目となるが、第1回目から熟議の教育的効果に注目し、熟議前後の参加者の変化を測る自己認識シートを開発した。「自主性」「思考力」「会話力」「計画力」「規律性」など10項目にわたり汎用的能力の変化を知るためである。

節目を迎えた本年度の報告として、分析には過去のデータも参照し、考察を行う。なお、自己認識シートの回答者は事前では23名、事後は23名である。また、事前事後アンケートについては、事前事後の比較のため両方に回答した11人を対象とする。

(1) 「熟議」に参加した大学生の特徴

今回参加した大学生は、兵庫大学の学生23名である（男子7名、女子16名：ファシリテーター12名、ワークショップ参加者11名）。また、学科でみると、看護学科4名、経済情報学科2名、栄養マネジメント学科3名、健康システム学科6名、社会福祉学科2名、こども福祉学科4名、保育科2名となっている。

熟議の大学生に対する影響を見る前に、ここでは、どのような大学生が参加したのか全般的な傾向について押さえておく。

1) 熟議の認知度と参加理由

「熟議」という言葉を「今回初めて知った」学生が100.0%となっており、兵庫大学が主催する熟議が4年目を迎え、学生の間で「熟議」が知られていないことから、今後関連の行事やミニ熟議など、正課内でも正課外でも進めて行く必要があるだろう。因みに、今回参加した高校生では、「熟議の内容を含めよく知っていた」「言葉では聞いたことがあった」を合わせると35.7%に上っている【図6-2-1】。

「熟議2015 in兵庫大学」に参加した理由は、「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」が81.8%となっており、高校生の85.7%と同程度である。しかし、「加古川地域の安心・安全」というテーマに関心があるからは18.2%と、高校生の2.4% と比べ高いと言える【図6-2-2】。

なお、「大学が主催する事業に参加したいから」については0.0%となっており、大学生として地域づくりに関する行事や活動への関心度を高め、大学の地域貢献に関わる活動を促進していく必要がある。

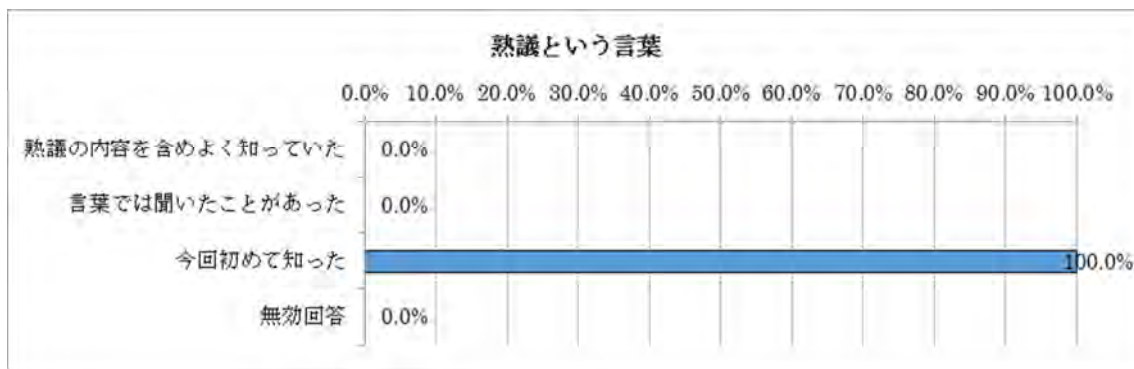


図 6-2-1 熟議という言葉

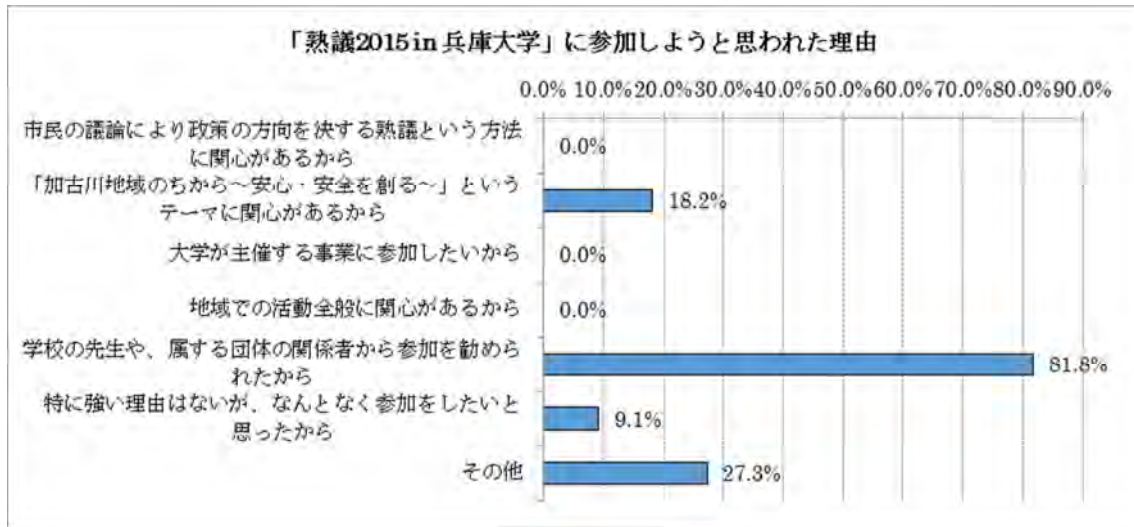


図 6-2-2 「熟議 2015 in 兵庫大学」に参加しようと思われた理由

2) ワークショップ経験と議論形態について

それでは、参加学生は熟議の本番に行われる「ワークショップ」についてどのような経験をもっているのだろうか。第5章で見たように、高校生では、「現在も多くの機会を経験することがある」11.9%（昨年0.0%）、「機会が少ないが、現在でも経験することがある」が28.6%（昨年17.1%）とこれまでに比べ、ワークショップ経験者が比較的多い（p.94【図5-2-3】参照）。これに対して、大学生は、「これまでにほとんど経験したことがない」が81.8%を占めている【図6-2-3】。今後、中学・高校段階からワークショップなどのアクティブラーニングを経験した生徒が大学に進学してくることから、大学教育でもますます教授法の工夫が求められる。この点からも熟議の教育上、学習上の効果について考察していく必要があるであろう。

今年度の熟議でも昨年度に引き続き熟議専用サイトを設け、これまで以上に自主学習のコンテンツを充実させた。その影響もあり、熟議の進め方について「十分に理解することができた」と「大体は理解することができた」を合わせると72.7%となっている【図6-2-4】。高校生では88.1%に上っていた（p.95【図5-2-4】参照）。

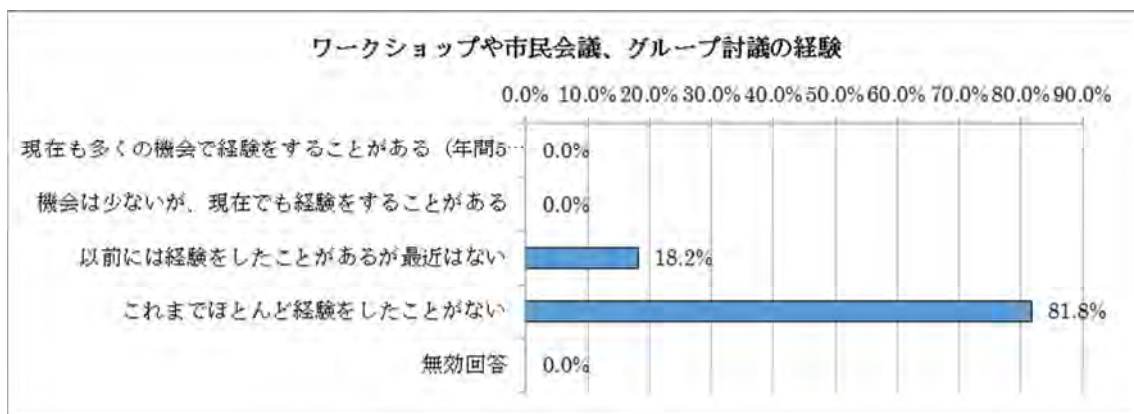


図 6-2-3 ワークショップや市民会議、グループ討議の経験

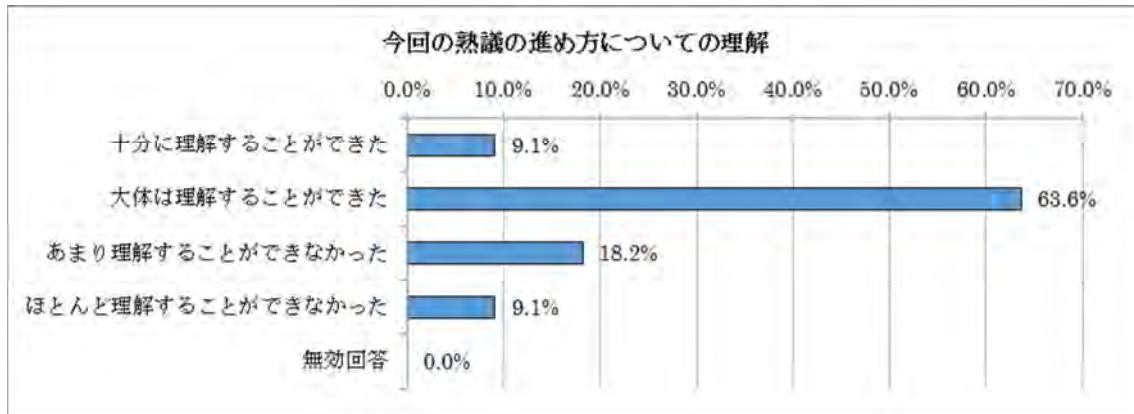


図 6-2-4 今回の熟議の進め方についての理解

また、熟議における「議論の段階（当日のテーブルでの討議）」への期待について、「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」とする割合が36.4%（高校生47.6%）であり、「どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい」についても36.4%（高校生11.9%）となっている。この点は、高校生との関心の違いが表れている【図6-2-5】。

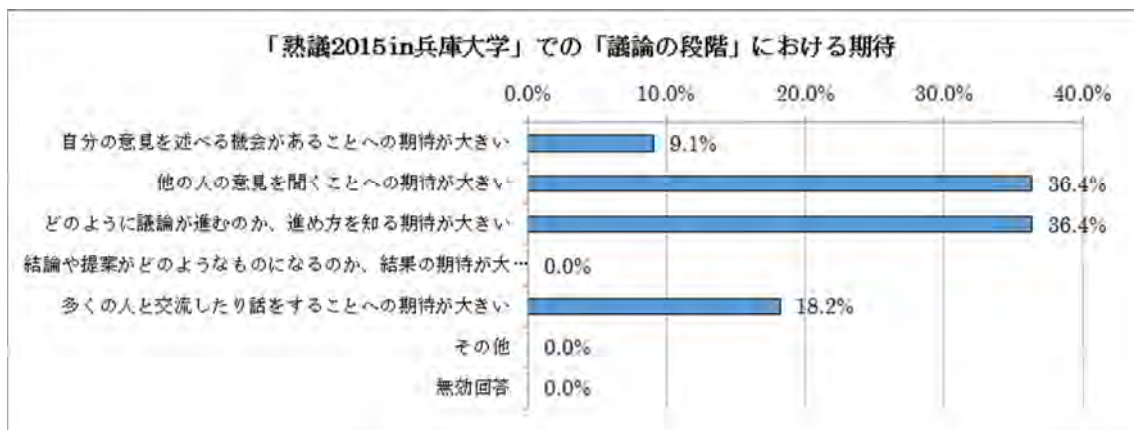


図 6-2-5 「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待

それでは、大学生は、熟議のような議論形態についてどのような考えをもっているのだろうか。「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点について、72.7%が「多様な考えを知る機会がある」（高校生71.4%）と捉えている。一方、悪い点については、「感情的な対立が残ってしまう」が最も多く27.3%となっている。高校生で最も多い項目が「議論だけではまともな決められない」が31.0%であるのと対照的である。参加した大学生は熟慮（討議の前の段階）の時点では、少なからず議論の成果に消極的な態度が見受けられる【図6-2-6】【図6-2-7】。

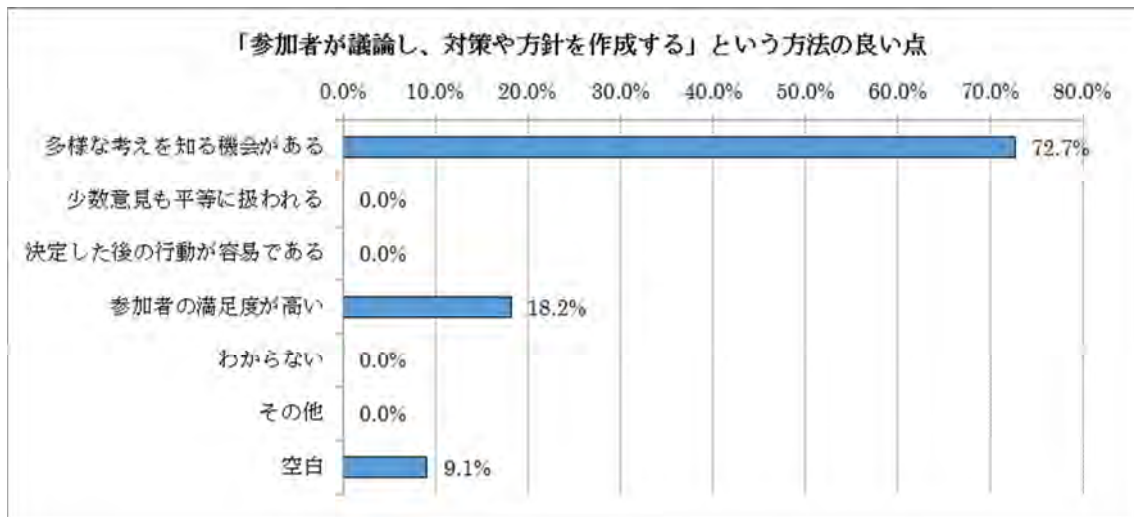


図 6-2-6 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

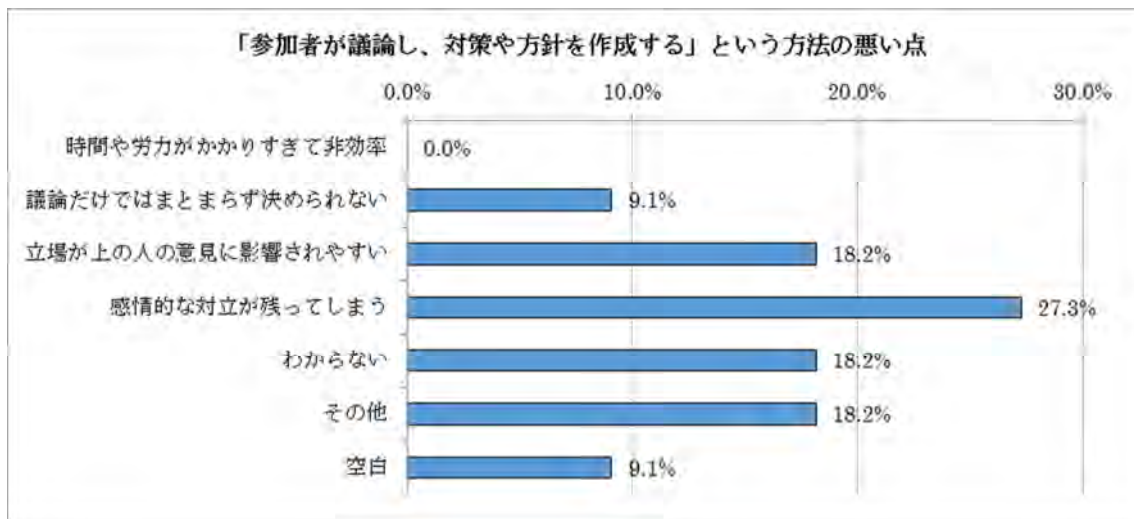


図 6-2-7 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

ここまでのデータを見ると、参加した大学生の約80%は「他の人に勧められて参加したが、ワークショップを経験したことがない者がほとんどであり、熟議を通して、「他の人の意見を聞き、議論の進め方や多様な考えを知る機会としたい」ようだ。一方で、熟議の形態について「感情的な対立が残ってしまう」点を悪い点として挙げていることから、討議の進行に対する不安が感じ取れる。

3) 大学生の未来像

事前アンケートでは、「今から、35年後の2050年において、次の項目に関連して、安心・安全は向上していると思いますか、それとも低下していると思いますか」について5段階（5〔向上〕～1〔低下〕）で評価をしてもらっている。

それによれば、最も多く評価された数値に着目すると、人口減少は54.5%が2、医療について63.6%が4となっている。都市は36.4%が4、コミュニティは3と4がそれぞれ45.5%と意見が分かれている。一方、

経済・財政についても2, 3がそれぞれ45.5%、技術発展について54.5%が4、人口知能・ロボットについて4が63.6%である。また、災害について45.5%が4、環境について45.5%が3となっている。

また、評価4と評価5を足した比率をレーダーチャート【図6-2-8】で見ると、高校生と同様、人口問題には悲観的であり、コミュニティや都市の状況について、向上への期待は高いとは言えない。とりわけ経済・財政状況については9.1%しか向上を期待しておらず、将来の発展への期待は低いと言えよう。一方、技術発展については、項目中4, 5を合わせて63.6%（高校生76.2%）となっている。最も高い評価となっているのは医療の81.8%である。人工知能・ロボットについても評価が高い。災害については、54.5%と意見が分かれている（高校生61.9%）。一方、環境については高校生と同様低い数値となっている。高校生と比較すると大学生は、人口減少と経済・財政について、より悲観的である。社会の実態について高校生より現実的な把握ができていく様子が見られる。また、医療については期待が高校生に比べ、15ポイント以上高いのも特徴的である。その背景要因として、学生の専攻分野との関連性も考えられる。まとめると、科学や技術の発展、医療の進歩については、高校生と同様高い評価となっているが、コミュニティの安全・安心の向上への期待は大学生が45.5%、高校生が26.2%と20ポイント近く差がある結果となった。これは、卒業後に社会人として、職場や地域において社会貢献をしていくことを予期的に受け止めている大学生の特徴が現れたと見ることもできよう。

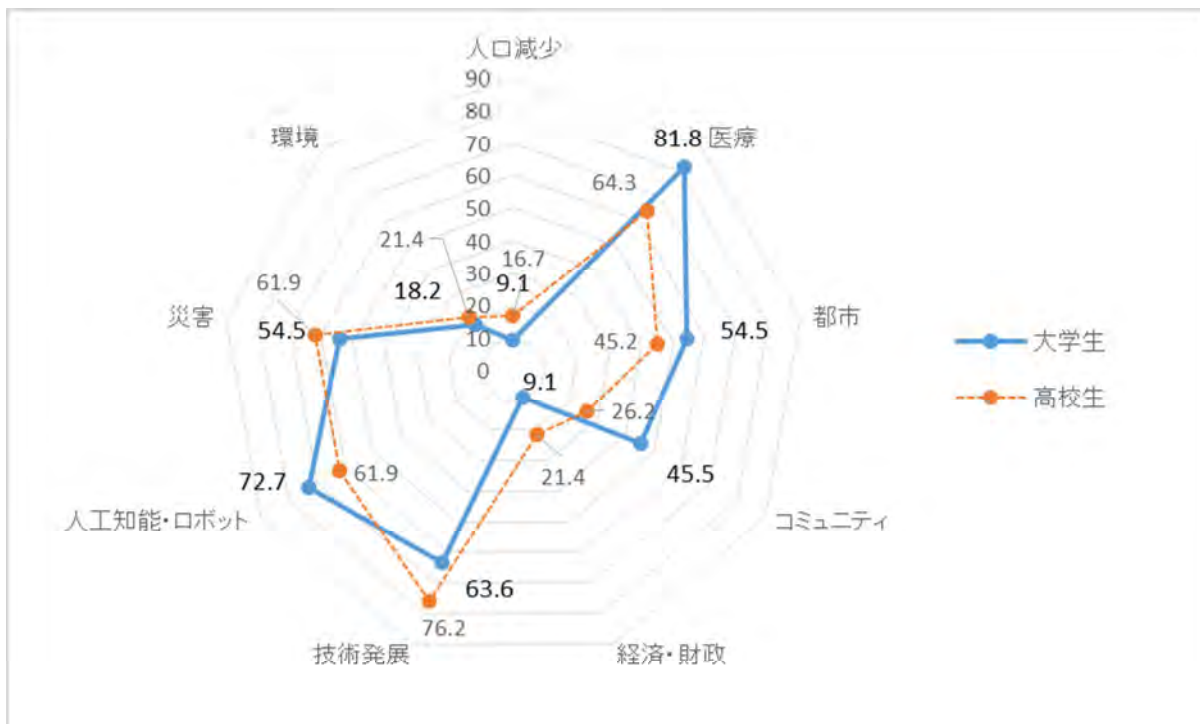


図 6-2-8 2050 年加古川の安心・安全状況についての未来像

(2)「熟議」を通してどのような能力に変化があったのか

1) 自己認識シートにおける事前評価 ～「規律性」「実行力」をもつ大学生の参加～

熟議に参加する大学生（23名）に熟議の前と後で、能力に関する自己評価をしてもらっている。以下の【表6-2-1】を見ると、実施前で自己評価が高い項目は第一位は「規律性」の3.74、次いで「実行力」の3.61、第三位は「自主性」3.57である。過去に遡って同データを見ると、2014年は第一位「規律性」、第二位「会話力」、第三位「自主性」「実行力」、2013年は第一位「規律性」、第二位「自主性」、第三位「会話力」となっている（各年熟議報告書参照）。まとめると、熟議に参加する大学生は、能力項目のうち、「規律性」について自己評価の高い者が参加し、そのほか、「自主性」「実行力」「会話力」に比較的自信があると言える。

学生は毎年、ファシリテーターあるいはワークショップの参加者のどちらかとして熟議に参加する。どちらの役割を担うかは、本人の希望をもとに熟議プロジェクトチーム事務局が調整を行い決定される。これら二つのグループには能力の自己評価において特徴があるだろうか【表6-2-2】。

ファシリテーターグループの第一位は、「実行力」の3.83、次いで「自主性」の3.75、第三位は「規律性」3.58である。一方、ワークショップの参加者グループの第一位は、「規律性」の3.91、次いで「自主性」「実行力」が同値で3.36である。上位3項目は共通しているが、ファシリテーターでは、実行力が規律性よりも高く、ワークショップの参加者はその逆である点が異なっている。ファシリテーターは、テーブルの議論を引き出し、まとめる積極的な態度が求められることから、「実行力」の自己評価が高いことは役割にマッチしていると言えよう。

(注)自己認識シートにおける各「能力」の説明

自主性：物事に進んで取り組む力、**思考力**：問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力、**実行力**：目標に向かって行動する力、**対応力**：状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力、**交渉力**：人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力、**会話力**：相手と意思疎通を図る力、**計画力**：現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力、**規律性**：社会のルールや人との約束を守る力、**運営力**：違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力、**貢献性**：社会の担い手として役割を自覚して、参画する力

(以下、事前事後比較表内の二重線は数値の高い方から第一位、第二位、一重線は低い方から第一位、第二位。また、太字は変化率が高い項目、斜字は低い項目である。)

| 学生全体 | | | |
|------|-------------|-------------|-------------|
| 能力項目 | 2015 | 2014 | 2013 |
| 自主性 | 3.57 | 3.27 | <u>3.57</u> |
| 思考力 | 3.04 | <u>2.88</u> | <u>2.93</u> |
| 実行力 | <u>3.61</u> | 3.27 | 3.25 |
| 対応力 | 3.17 | 3.12 | 3.21 |
| 交渉力 | <u>2.74</u> | <u>2.64</u> | <u>3.04</u> |
| 会話力 | 3.22 | <u>3.39</u> | 3.43 |
| 計画力 | 2.87 | 2.91 | 3.32 |
| 規律性 | <u>3.74</u> | <u>3.42</u> | <u>4.00</u> |
| 運営力 | <u>2.78</u> | <u>2.88</u> | 3.25 |
| 貢献性 | 2.87 | 2.94 | 3.29 |

表 6-2-1 自己認識評価の経年変化

| 能力項目 | 全体 | ファシリテーター | ワークショップ学生 |
|------|-------------|-------------|-----------|
| 自主性 | 3.57 | <u>3.75</u> | 3.36 |
| 思考力 | 3.04 | 3.33 | 2.73 |
| 実行力 | <u>3.61</u> | <u>3.83</u> | 3.36 |
| 対応力 | 3.17 | 3.50 | 2.82 |
| 交渉力 | 2.74 | 2.83 | 2.64 |
| 会話力 | 3.22 | 3.17 | 3.27 |
| 計画力 | 2.87 | 2.92 | 2.82 |
| 規律性 | <u>3.74</u> | 3.58 | 3.91 |
| 運営力 | 2.78 | 2.83 | 2.73 |
| 貢献性 | 2.87 | 2.92 | 2.82 |

表 6-2-2 自己認識評価の役割別比較

2) 自己認識シートにおける事前と事後の変化 ～「運営力」「交渉力」が伸びる～

それでは、事後において自己認識シートでの評価はどのようになっているだろうか。レーダーチャート【図6-2-9】で全体を見ると、どの項目でも能力が伸びたと評価していることがわかる。【表6-2-3】の増減を見ると、第一位は「運営力」の+1.09、第二位は「交渉力」+1.00、第三位は「計画力」+0.78である。「交渉力」は事前評価では最も低い値となっており、低い順から「運営力」、「計画力」・「貢献性」と続いている。すなわち、事前で評価が低かった能力が熟議を経験して伸びたということが出来る。

ファシリテーターとワークショップの参加者で分けて見るとどうであろうか。ファシリテーターでは、第一位は「運営力」の+1.25、次いで「計画力」と「貢献性」が+1.00である【表6-2-4】。一方、ワークショップの参加者では、第一位は「交渉力」の+1.09、次いで「対応力」+1.00と「運営力」+0.91である【表6-2-5】。異なる立場の人々の意見を引き出しまとめる役割を経験したファシリテーターは「運営力」が伸び、ワークショップの参加者は、テーブルでのやりとりから、「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力」として「交渉力」の伸びを感じたと解釈できる。

参考までに高校生の結果と比較しておく（p.98【表5-2-1】参照）。高校生で「対応力」が伸びる傾向は大学生のワークショップ参加者と同様であるが、異なる立場の人々とチームワークよく作業や討議を進める「運営力」について手応えは得られていないようだ。一方、「計画力」の変化が大きいのはファシリテーターと同様の傾向である。ファシリテーターのリードする様子や解決に向けて筋道を立てる手法から得たものがあることが推測される。

〈大学生全体〉

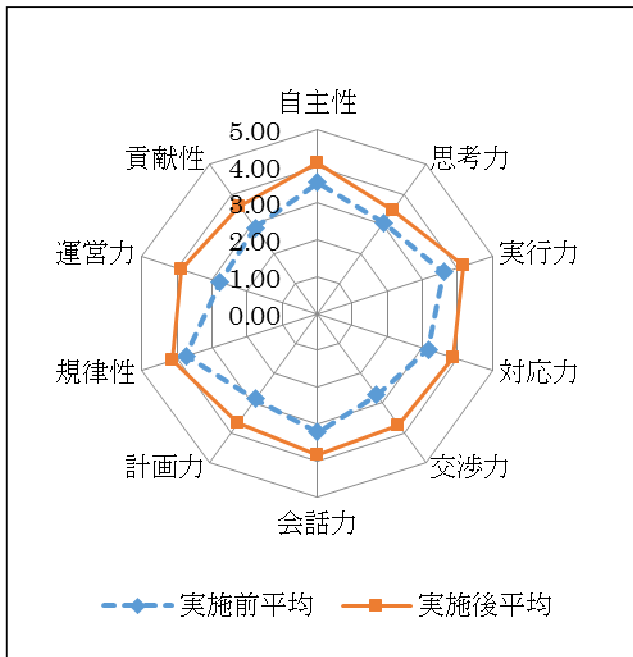


図 6-2-9 事前三後の自己認識の変化

| 能力項目 | 実施前 平均 | 実施後 平均 | 増減 |
|------|-------------|-------------|-------|
| 自主性 | 3.57 | 4.09 | +0.52 |
| 思考力 | 3.04 | <u>3.48</u> | +0.43 |
| 実行力 | <u>3.61</u> | <u>4.17</u> | +0.57 |
| 対応力 | 3.17 | 3.87 | +0.70 |
| 交渉力 | <u>2.74</u> | 3.74 | +1.00 |
| 会話力 | 3.22 | 3.83 | +0.61 |
| 計画力 | 2.87 | 3.65 | +0.78 |
| 規律性 | <u>3.74</u> | <u>4.13</u> | +0.39 |
| 運営力 | <u>2.78</u> | 3.87 | +1.09 |
| 貢献性 | 2.87 | <u>3.61</u> | +0.74 |

表 6-2-3 事前三後の自己認識の変化

〈ファシリテーター〉

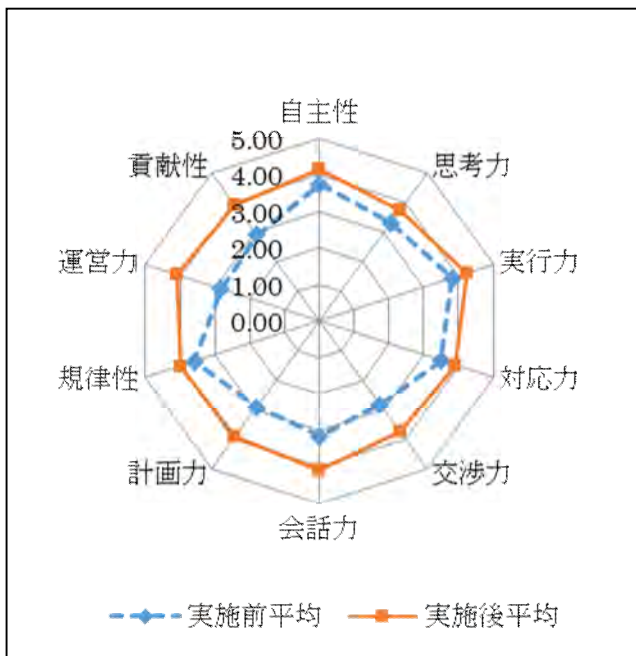


図 6-2-10 事前三後の自己認識の変化

| 能力項目 | 実施前 平均 | 実施後 平均 | 増減 |
|------|-------------|-------------|-------|
| 自主性 | <u>3.75</u> | <u>4.17</u> | +0.42 |
| 思考力 | 3.33 | <u>3.75</u> | +0.42 |
| 実行力 | <u>3.83</u> | <u>4.25</u> | +0.42 |
| 対応力 | 3.50 | 3.92 | +0.42 |
| 交渉力 | <u>2.83</u> | <u>3.75</u> | +0.92 |
| 会話力 | 3.17 | 4.08 | +0.92 |
| 計画力 | 2.92 | 3.92 | +1.00 |
| 規律性 | 3.58 | 4.00 | +0.42 |
| 運営力 | <u>2.83</u> | 4.08 | +1.25 |
| 貢献性 | 2.92 | 3.92 | +1.00 |

表 6-2-4 事前三後の自己認識の変化

〈ワークショップ参加学生〉

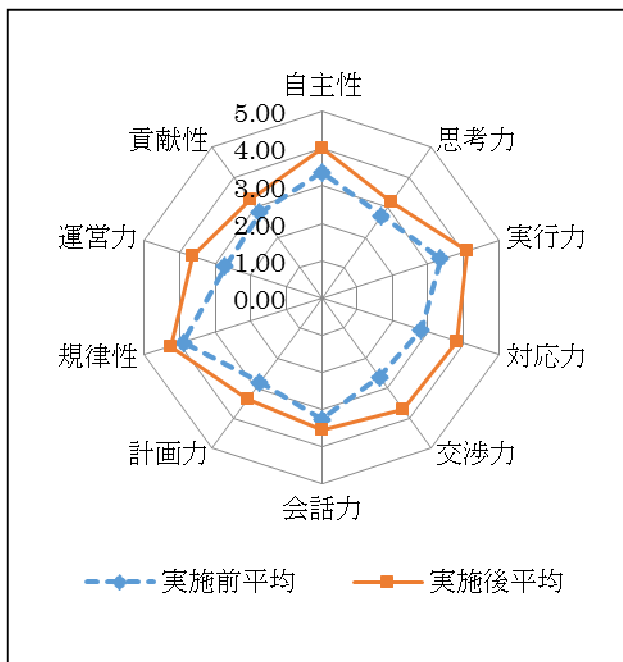


図 6-2-11 事前事後の自己認識の変化

| 能力項目 | 実施前平均 | 実施後平均 | 増減 |
|------|-------------|-------------|-------|
| 自主性 | <u>3.36</u> | 4.00 | +0.64 |
| 思考力 | <u>2.73</u> | <u>3.18</u> | +0.45 |
| 実行力 | <u>3.36</u> | <u>4.09</u> | +0.73 |
| 対応力 | 2.82 | 3.82 | +1.00 |
| 交渉力 | <u>2.64</u> | 3.73 | +1.09 |
| 会話力 | 3.27 | 3.55 | +0.27 |
| 計画力 | 2.82 | 3.36 | +0.55 |
| 規律性 | <u>3.91</u> | <u>4.27</u> | +0.36 |
| 運営力 | <u>2.73</u> | 3.64 | +0.91 |
| 貢献性 | 2.82 | <u>3.27</u> | +0.45 |

表 6-2-5 事前事後の自己認識の変化

3. 大学生は「地域の安全・安心」についてどう考えたか

本節では、熟議参加が決まり、熟議の事前準備としての「熟慮」の時期に行う「事前アンケート」と熟議当日の議論を終え、「熟議」すべてを経験した後に行う「事後アンケート」の比較を行う。「熟議」という経験を通して、熟議への構え、テーマに対する意見がどのように変化したのかを考察する。「協働を目指す対話」である熟議の成果が、学生の中にどのように現れているか、教育的効果の観点から見ていくことが目的である。

なお、データを事前事後で比較することから、参加者のうち事前および事後のアンケートの両方に回答した大学生のみを対象とする。

(1) 「熟議」への期待 ～「議論の段階」における期待と成果～

大学生が「地域の安全・安心」についてどう考えたのかを見るまえに、「議論の段階」に対する期待が、実際に熟議を通して変化したのかどうかを確認しておく。最も大きく変化したのは、「他の人の意見を聞く」27.3ポイントの減少である。その一方で、「多くの人と交流したり話をする」と「自分の意見を述べる」がそれぞれ18.2ポイント増加している。議論の段階では、実際に聞くというよりは自分の意見を述べ、他の人と意見を交換し、交流することを行った経験がそのまま数値に表れていると言える

【図6-3-1】。

高校生では、「自分の意見を述べる」は22.3ポイント増加しているが、「他の人の意見を聞く」については事前事後であまり変化がみられなかった（P.101【図5-3-1】参照）。また、大学生と異なり「多くの人と交流したり話をする」は減少している。大学生に比べ、高校生は大人の間で緊張していたこと、他の人との交流を行う余裕がなかったことも予想される。大学生は、高校生に比べ議論の手法としてのワークショップからもある程度の成果を上げられたことが読み取れる。

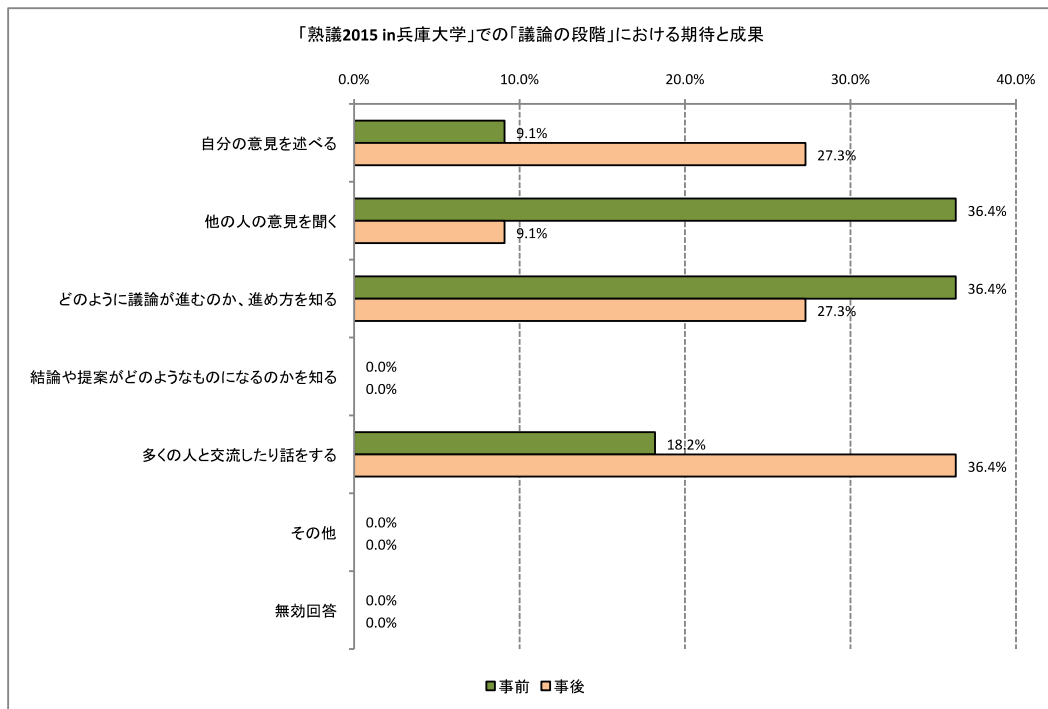


図 6-3-1 「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果

(2) 「地域の安全・安心」に関する意見の変化 ～熟議前と熟議後～

今年のテーマは「加古川地域のちから ～安心・安全を創る～」に関わり、10項目のサブテーマを設定した。以下では、それらについての意見が熟議前と熟議後でどのように変化したのか見ていく。

10項目それぞれについて、賛成か反対かをたずねた結果を検討し、さいごにこれらの項目を全体として考察する。なお、選択肢の5段階尺度のうち、「大いに賛成」と「やや賛成」の合計を「肯定派」とし、「大いに反対」と「やや反対」の合計を「否定派」として分析に用いる。

1) 項目別の変化

① 「人と人との繋がりが信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」

「大いに賛成」が事前では27.3%であったが、事後には81.8%に増加した【図6-3-2】。この増加率は高校生より高いが傾向は同じである。熟議でのテーブルで意見交換を行う体験それ自体を通して、人々のつながりの重要性を実感したと思われる。

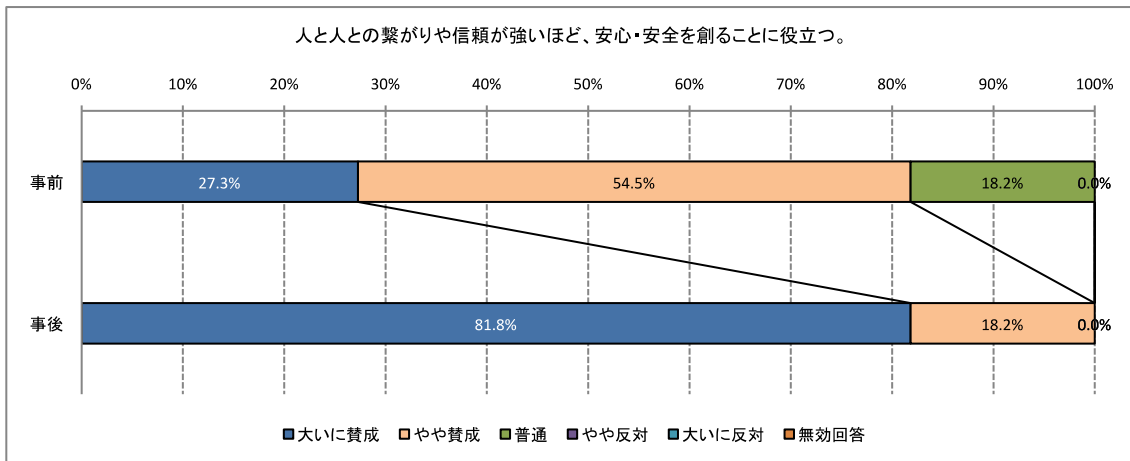


図 6-3-2 人と人の繋がりがや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ

②「安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」

事前では、「大いに賛成」が18.2%であったが事後には72.7%へと大幅に増加した。この項目についても高校生よりも増加率が高い。事前学習や「議論の段階」の経験により、地域の課題解決のために熟議の必要性や重要性を認識した様子が見られる【図6-3-3】。

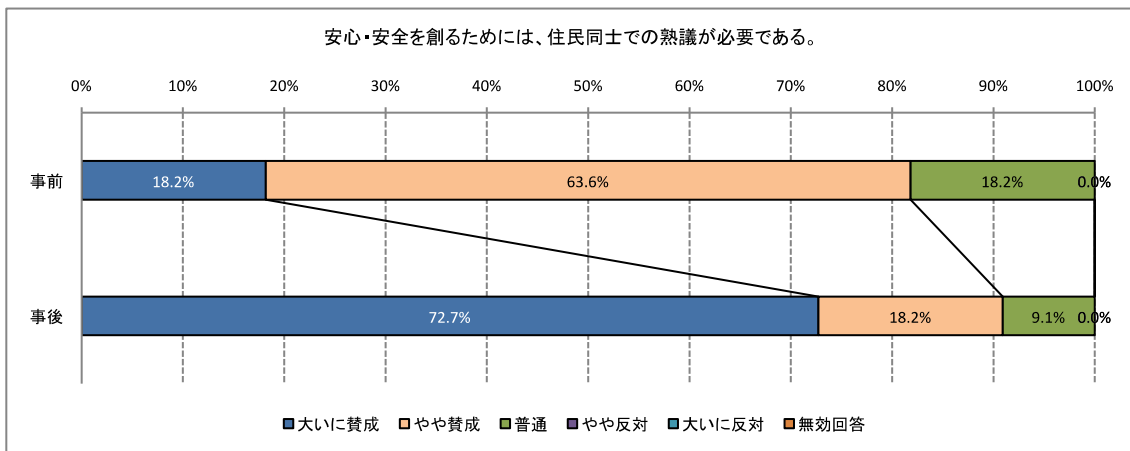


図 6-3-3 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である

③「安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」

事前では、「大いに賛成」「やや賛成」の「肯定派」は9.1%であり、高校生に比べて、熟議前から住民の役割を限定的に考えない志向は大学生で高かった。しかし、事後では、「肯定派」は9.1%であり36.4%と27.3ポイントも伸びている。一方、「住民の役割は限定されていない」と考える「否定派」は、18.2ポイント減少している。議論を通して、大学生は「住民の役割」の限界性についても考える機会となったことがうかがわれる【図6-3-4】。

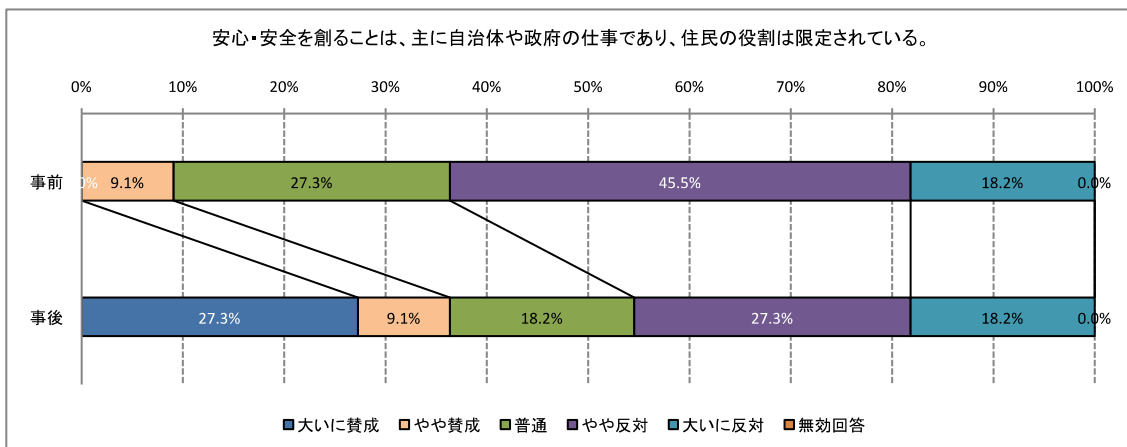


図 6-3-4 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている

④「他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」

「肯定派」は事前の27.3%から63.6%へと35ポイント以上増加している。高校生では減少したことで対照的である。一方、「否定派」は36.4%から0.0%へと大幅に減少した。安心・安全を創ることの議論において、「一人ひとりの能力の向上」が重要との認識が高まったことがうかがわれる。どちらかといえば、ネットワークの力、協働の力の必要性について印象が強かった高校生とは異なる傾向が見られる。

【図6-3-5】。

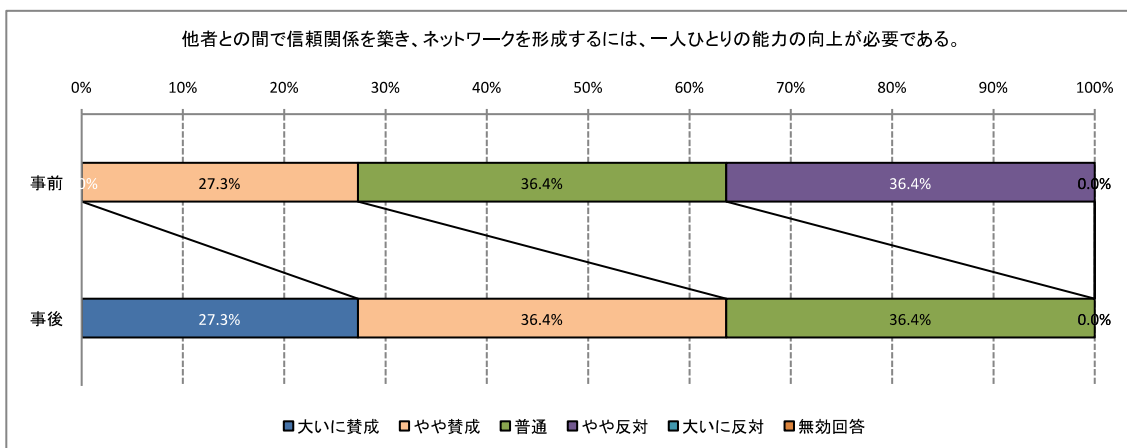


図 6-3-5 他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である。

⑤「安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」

「肯定派」は事前の27.3%から54.5%へと30ポイント近く増加している。「ひと」の協力だけでなく、「もの」の必要性についての気づきがこの数値に表れていると読むことができよう。本項目について、肯定派は高校生が大学生より15ポイント近く低い数値となっている【図6-3-6】。

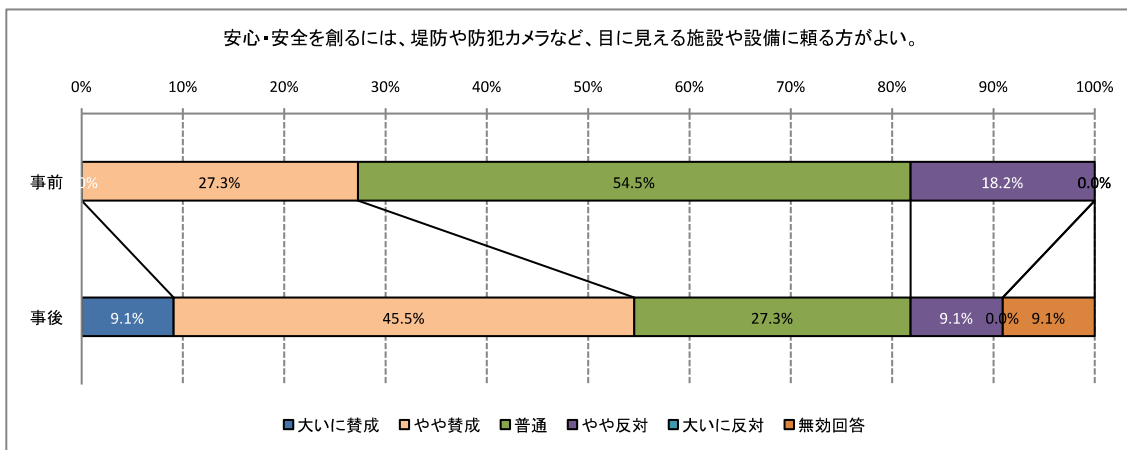


図 6-3-6 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい。

⑥ 「コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」

「大いに賛成」は9.1%から63.6%へと大幅に増加している。高校生の増加19.4ポイントに比べ54.5ポイントも変化している。事後では、「やや賛成」と合わせると「肯定派」は90%近くがコミュニティでの日常的な活動の重要性を感じていることが分かる【図6-3-7】。

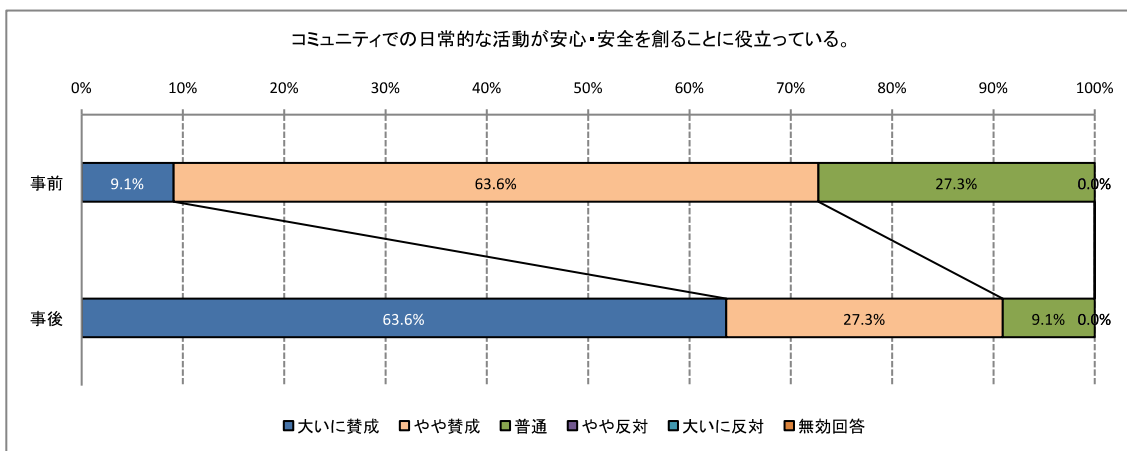


図 6-3-7 コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている。

⑦ 「行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」

「大いに賛成」は事前でも36.4%（高校生61.1%）であるが、事後では54.5%へと増加している。事後では、「やや賛成」と合わせると「肯定派」は100%に上っており、住民同士の助け合いの必要性が十分に理解されていることが分かる【図6-3-8】。

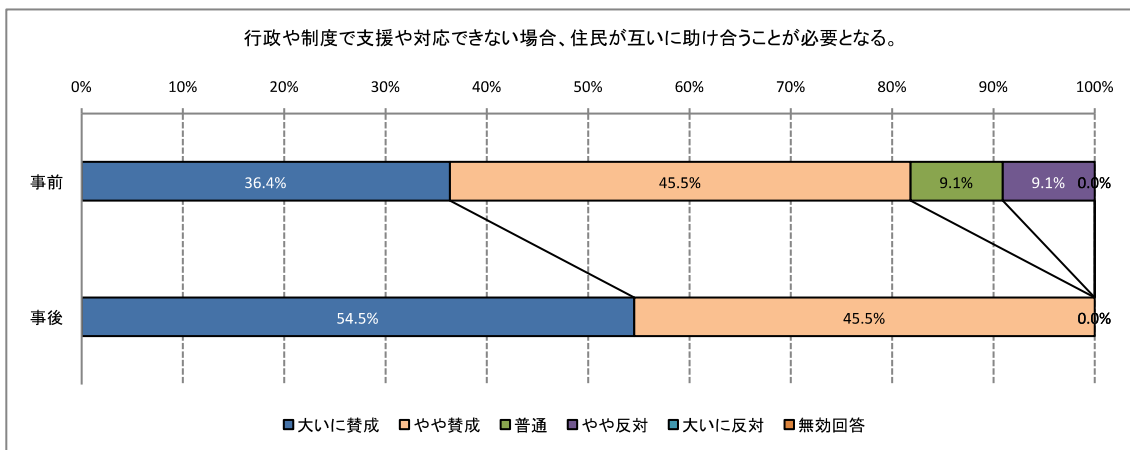


図 6-3-8 行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる。

⑧「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」

「肯定派」は事前の9.1%から事後の27.3%へと15ポイント近く増加している。これは高校生とほぼ同じ傾向である。一方、「否定派」は事前の54.5%から事後の27.3%へと25ポイント近く減少している。議論を経て、不便があっても安心・安全のためには致し方ないという認識が高まったことが分かる【図 6-3-9】。

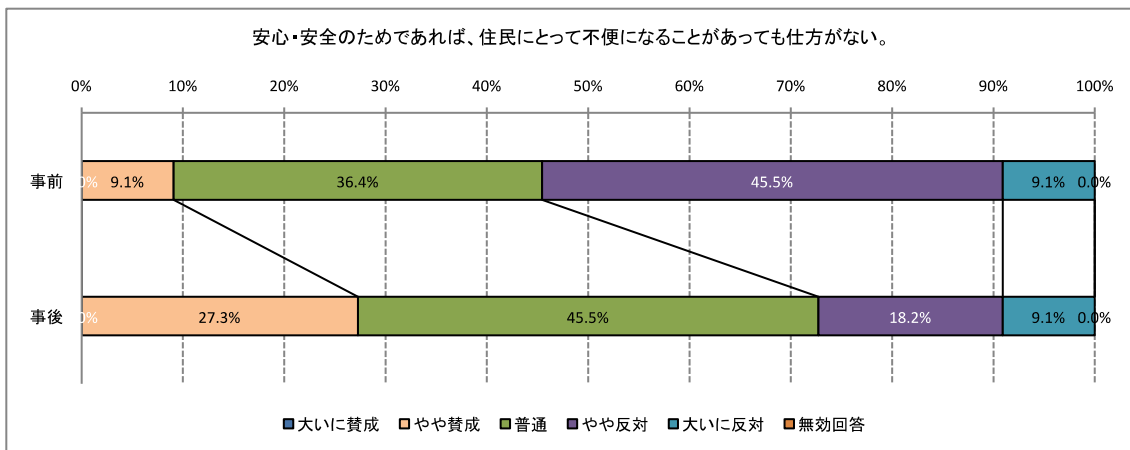


図 6-3-9 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない。

⑨「安心・安全を創るのは、地の人役割であり、風の人に関わらないものである」

「肯定派」は事前の0.0%から事後の18.2%へと増加している。一方、「否定派」は事前の81.8%から事後の63.6%へと約20ポイント減少しているものの、安心・安全を創るとき「地の人」も「風の人」も関係がないとの認識が多数派であることが分かる【図6-3-10】。

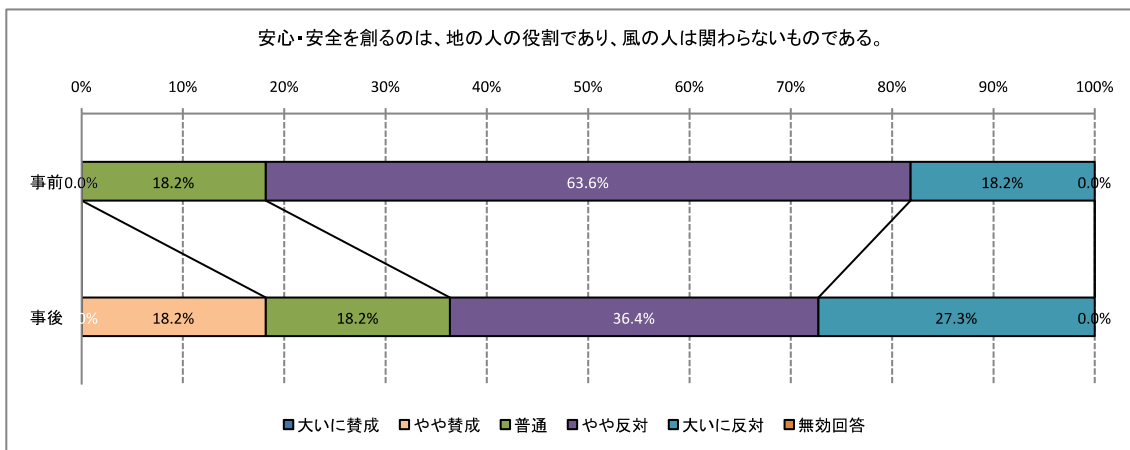


図 6-3-10 安心・安全を創るのは、地の人の役割であり、風の人は関わらないものである。

⑩「大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」

「大いに賛成」が9.1%から54.5%へと大幅に増加している。また、「肯定派」で見ると、事前の81.8%から事後の90.9%へと約10ポイント増加している。高校生の肯定派が、事後も50%に満たないことと比べると、大学生は大学が「安全・安心」のために果たすべき役割があると考えており、認識の開きが明確に表れている【図6-3-11】。高校生にとっては、高等教育機関としての大学のイメージがまだ掴みきれていないということが予測できる。

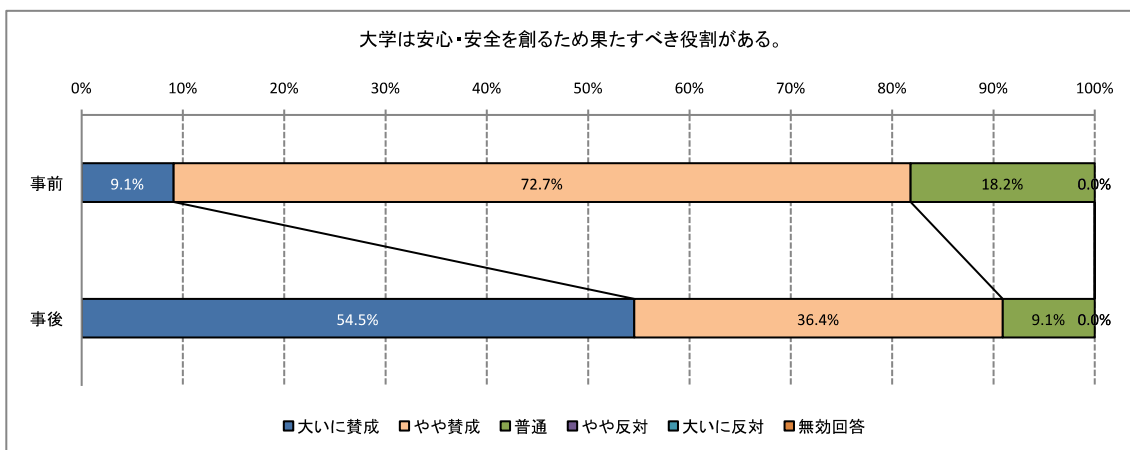


図 6-3-11 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある

2) 全体の考察

【図6-3-12】は、上で個別に考察した10項目について、「大いに賛成」を5、「やや賛成」を4、「普通」を3、「やや反対」を2、「反対」を1として平均を算出したものである。地域の安心・安全についての考え方について、熟議の前と後で目立った変化がみられるのは、「他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」(+1.0)。次いで、「人と人との

繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」「安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」が+0.73の変化が見られる。地域の安心・安全については、個々人の能力向上が必要であると同時に人と人の繋がりも重要であるが、自治体や政府の役割にも期待していることが伺われる。

一方、熟議の経験を通して、高校生の中なかで起こった最も大きな変化は地域の安心・安全のためには、「住民同士の熟議の必要性であること」について認識が高まったことである。また、コミュニティでの日常的な活動の重要性を感じるとともに、安心・安全のためには住民に不便になることを受け入れなければならないといった、「コミュニティの一員としての責任感」の必要性を再認識している（p.107【図5-3-12】参照）。全体として、大学生と高校生では、異なる変化が見られる。大学生の方が、視野がより広く、柔軟かつ多面的に事象を捉えられているということができよう。

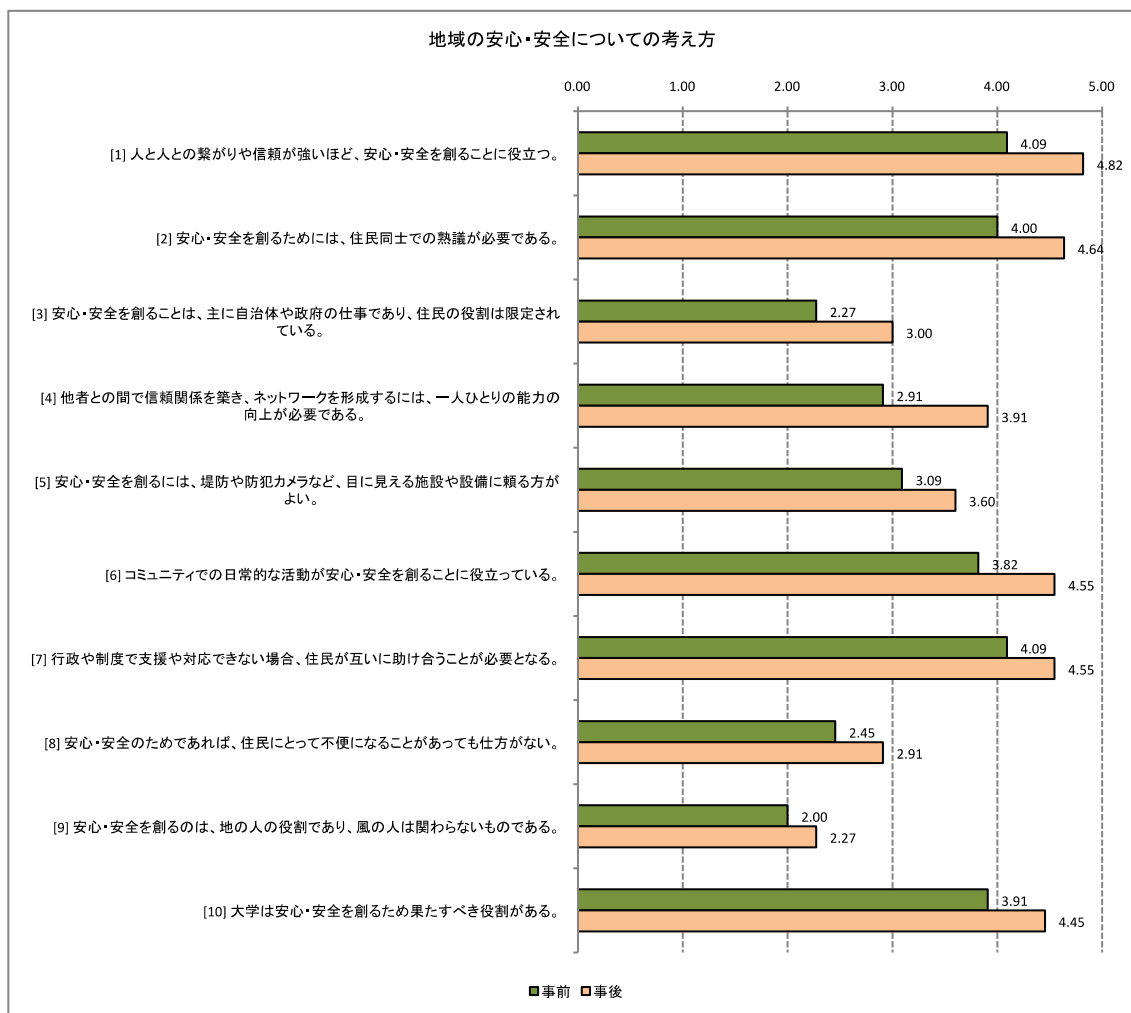


図 6-3-12 地域の安心・安全についての考え方（ポイント）

4. 大学生は「熟議」をどのように経験し、どう活かすのか

本節では、事後アンケートから、参加した大学生が熟議を通して学んだこと、経験したことを今後どう活かそうと考えているのかをみていく。

(1) 「熟議」の満足度

満足度は、「とても満足」が90.9%と高校生の80.6%より10ポイント高くなっており、全体として非常に高い。「まあ満足」の9.1%を合わせると、大学生全員が熟議の一連の経験と学びを充実感を持って捉えていることが分かる【図6-4-1】。

地域の人々や高校生との交流、テーマにしたがって課題を抽出するといった討議方法など、大学の正課授業では得られない体験から得たものが大きい様子が見られる。

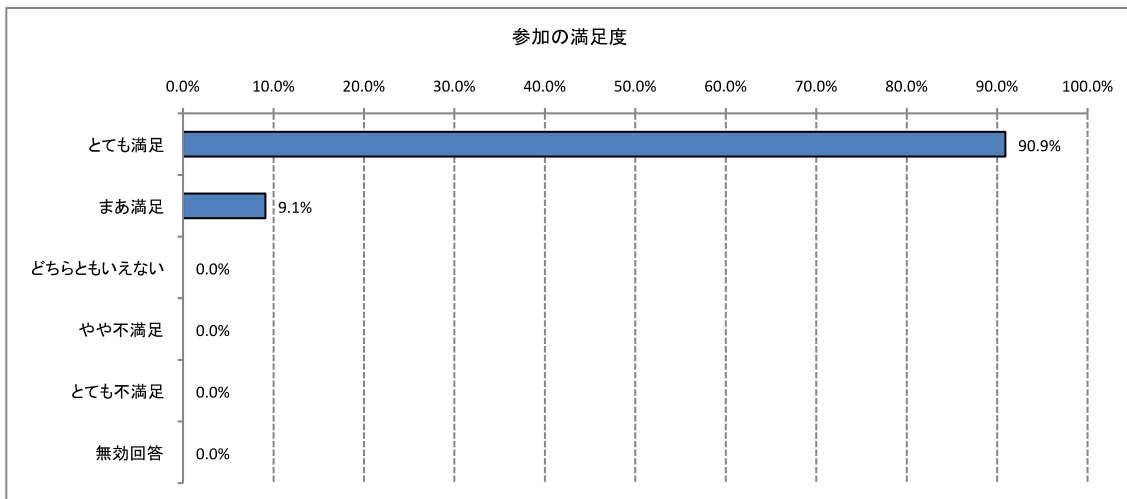


図 6-4-1 参加の満足度

(2) 「熟議」経験の活用

それでは、大学生はこの経験を今後の生活や学びに活かしていくことを考えているのだろうか。【図6-4-2】で、「熟議の経験を今後の活動で活かしたいか」について、「積極的に活かしたい」が63.6%と高校生の47.2%に比べて、15ポイント近く多い。「機会があれば是非活かしたい」についても36.4%となっており、合わせると100%となることから、熟議の成果を次につなげようとする大学生の強い意欲が感じられる。

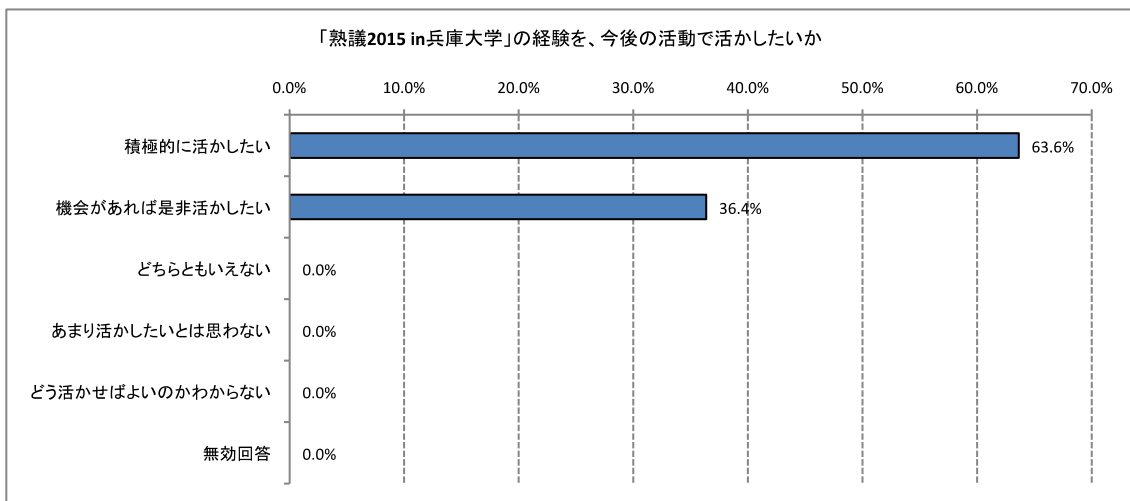


図 6-4-2 「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいか

(3) 「熟慮の段階」に関する意見

ここでは、大学生が熟議で経験したことのなかでも、とくに熟議の討議形態に焦点を当て、大学生が何を感じたのかについて見ていく。

熟議は地域の課題の抽出、共有、深化といったプロセスにおいて協働し、地域づくりやネットワークづくりにつなげていくことをめざしている。地域の人材を育成する兵庫大学において、学生がこのような熟議の経験を専門教育における学びに活かすだけでなく、地域の課題解決のための手法として身につけることは今後も多いに推進されるべきであろう。また、熟議での経験が今後の学生の行動にどのように影響を与えるかについても追跡的に把握していく必要がある。

① 「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」

まず、「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった」について5段階評価でたずねた。結果は、「非常に思う」が72.7%と高校生の33.3%をはるかに上回っている。「思う」が27.3%を合わせると、全員にとって「熟慮の段階」が議論の段階の準備として効果があったことを示している【図6-4-3】。

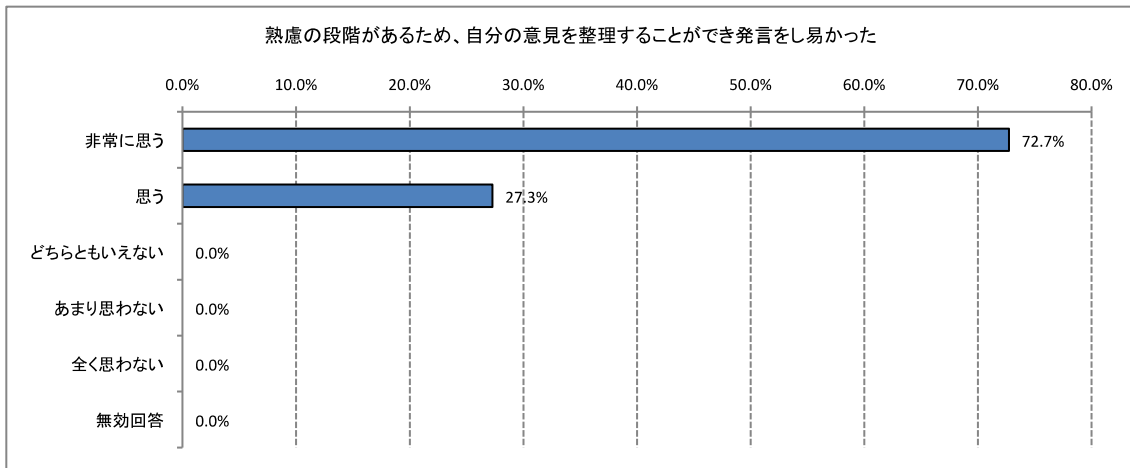


図 6-4-3 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった

②「熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」

それでは、熟慮の段階があることによる「他の人の意見についての理解」への影響はどうであっただろうか。「非常に思う」が45.5%、「思う」が45.5%と、合計では90.9%が熟慮の段階の重要性を実感する結果となっている【図6-4-4】。

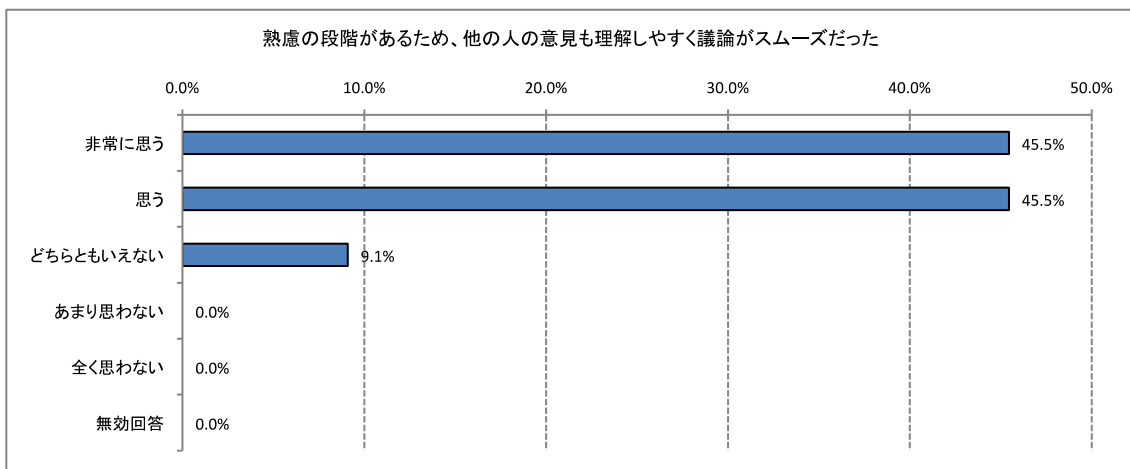


図 6-4-4 熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった

③「これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた」

熟慮の段階により、当日の議論を促進するために十分な「共通の基盤」ができていたか。これについては、「非常に思う」が54.5%、「思う」が45.5%となっている【図6-4-5】。合わせると大学生全員が話し合いのため共通の基盤ができていたと感じている。熟慮の段階として、事前アンケートが意見集約のツールとしてだけでなく、地域をめぐるテーマの範囲や方向性についての情報を確認したり、共有したりすることに役立っていることが予想される。また、ウェブ上で、共通の学習資料により、議論で必要となる用語表現や定義を学んだことの影響も見て取れる。

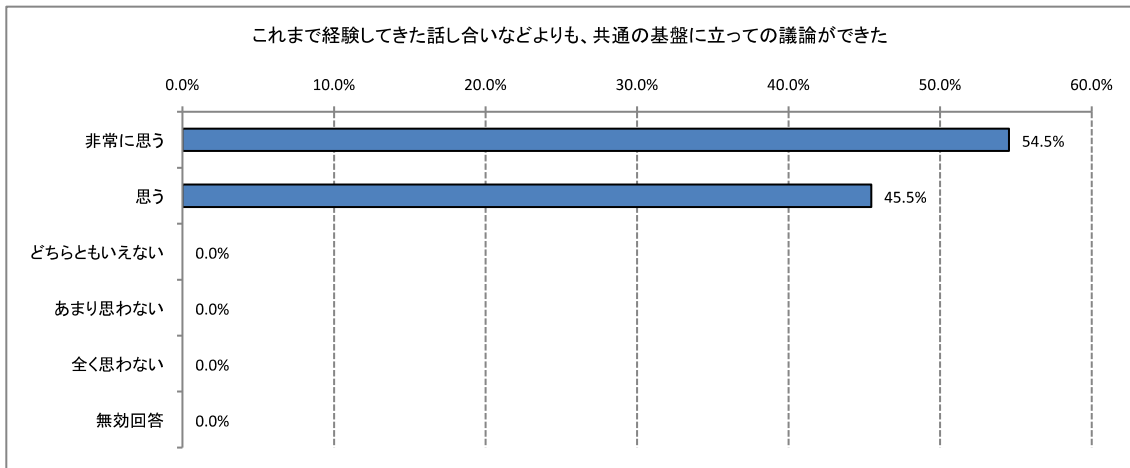


図 6-4-5 これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた

④「熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった」

つぎに、「加古川地域のちから」というテーマそのものについて、大学生がより関心を持つ機会となったのかどうかについてたずねた。「非常に思う」が63.6%と高校生の44.4%を20ポイント近く上回っている【図6-4-6】。「思う」の36.4%と合わせると全ての大学生が、「地域の課題とはなにか」「地域をどうしたらよいのか」といったテーマにより関心が高まったことが分かる。

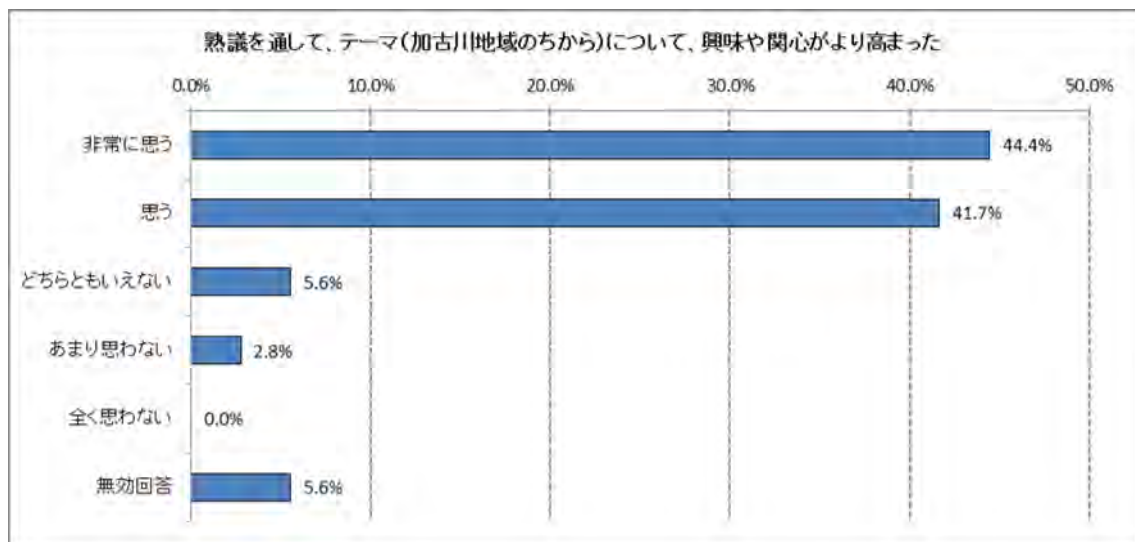


図 6-4-6 熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった

(4)「議論の段階」が促進する大学生の自己変化

それでは、熟議のプロセスのうち、実際の討議により多様な人々と意見を交わし、協働しながら課題に取り組む「議論の段階」は、大学生にどのような影響を与えたのだろうか。

①「議論の内容が充実しテーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった」

熟議に参加したことにより、テーマに関する知識を深める機会となったかについてたずねた。「非常に思う」が63.6%、「思う」が27.3%となっている【図6-4-7】。合わせると90%を超える大学生が、「地域のちから」に関する知識を深めたとしている。実際に議論をするなかで、安心・安全にも災害や事故だけでなく、食品や環境など幅広い領域があること、また、安心度・安全度を高めていくためにはさまざまな課題があることなどについて、しだいに理解が深められて行ったと思われる。

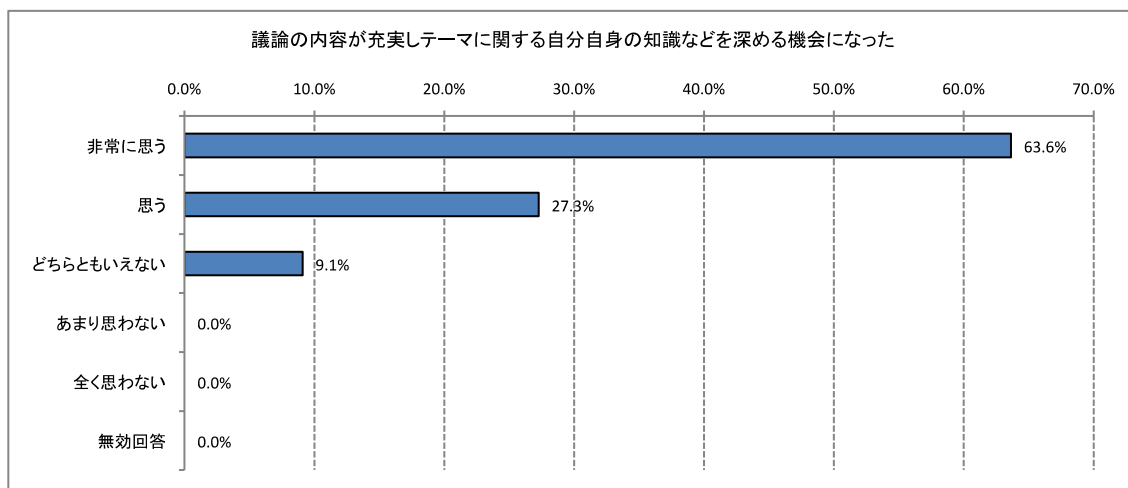


図 6-4-7 議論の内容が充実しテーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった

②「課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った」

つぎに、熟議に参加したことが、単に交流や討議それ自体を目的とするにとどまらず、地域の課題解決に向けて「自ら実行することの重要性」の気づきにつながっているかどうかについてたずねた。「非常に思う」が54.5%、「思う」が45.5%となっている【図6-4-8】。合わせると全ての大学生が、課題についての知識を深めるだけでなく、自ら実行していくことの重要性を自覚していることがわかる。この結果は、他者との議論、協働によって導かれ生み出された協働の成果ということができよう。

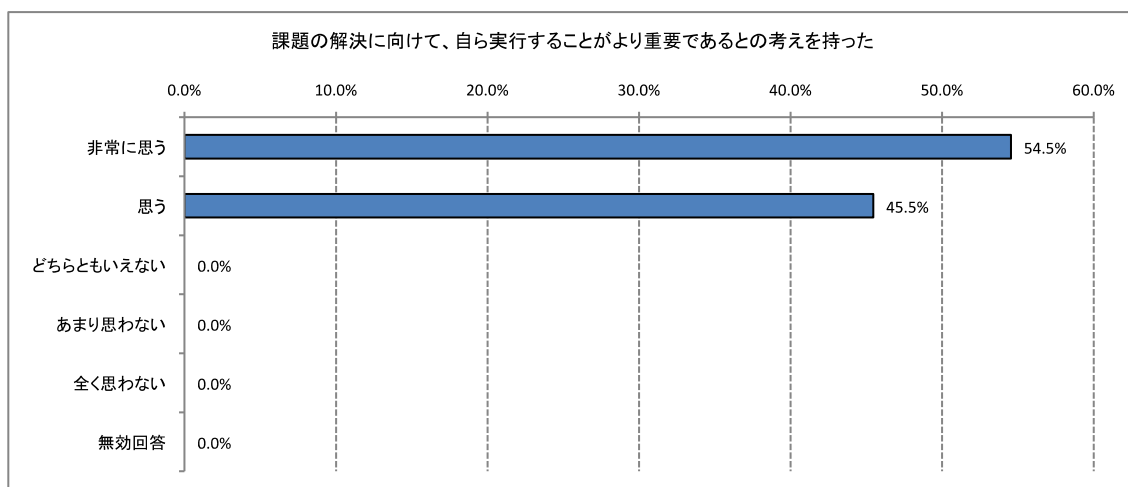


図 6-4-8 課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った

③「最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった」

さいごに、議論の段階の影響について、「最初に持っていた自分の意見が変化したか」尋ねた。「非常に思う」が45.5%と高校生の33.3%より12ポイント多い。また、「思う」が36.4%となっている【図6-4-9】。合わせると80%を超える大学生が、議論を経て、はじめに持っていた自分の意見に何らかの影響があったとしている。

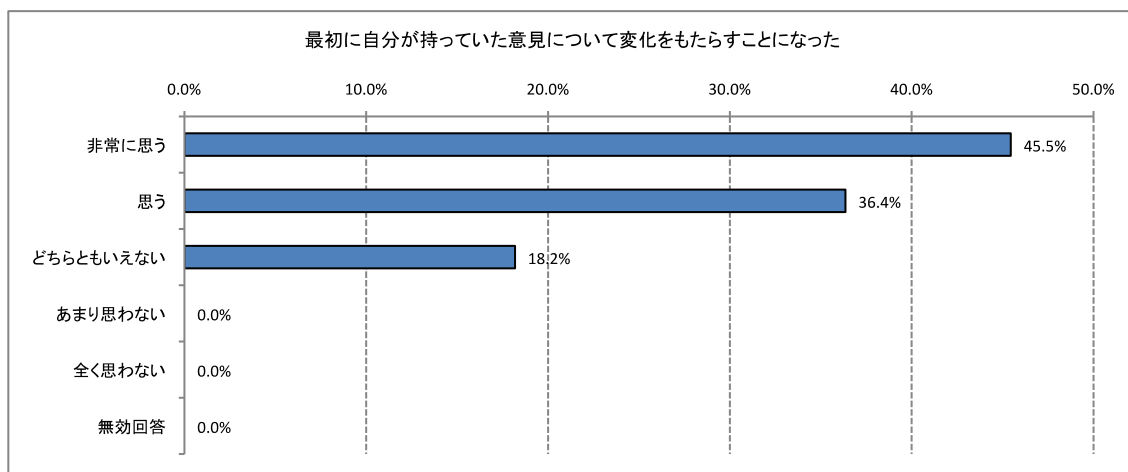


図 6-4-9 最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった

(5)「議論の段階」の成果

ここまで、大学生が熟議で経験したことのなかでも、とくに「議論の段階」について、知識を得て考え方が変化したり、行動することの大切さについての自覚が高まった様子を見てきた。それでは、大学生は具体的にどのような成果があったと感じているのだろうか。その他を含めて6項目について最も近いものを一つだけ選択してもらった【図6-4-10】。

その結果、最も多かったのは、「多くの人と交流することや話をする事ができた」が36.4%、「自分の意見を述べる事ができた」「どのように議論を進めるのか、理解することができた」がそれぞれ27.3%となっており、成果の実感は分散している。ワークショップに参加した大学生はそれぞれの期待に応じて成果を確認したと思われるがどのようになっているのだろうか。

事前の回答と事後の回答を照合してみると、事前に「他の人の意見をきくこと」への期待が大きかった者が、事後では「多くの人と交流することや話をする事」ができたことを成果として挙げている。また、事前に「どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい」とした者の多くが、「どのように議論を進めるのか、理解することができた」としている。その意味では期待通りであった者が11人中7人（63.6%）を占める結果となっている。

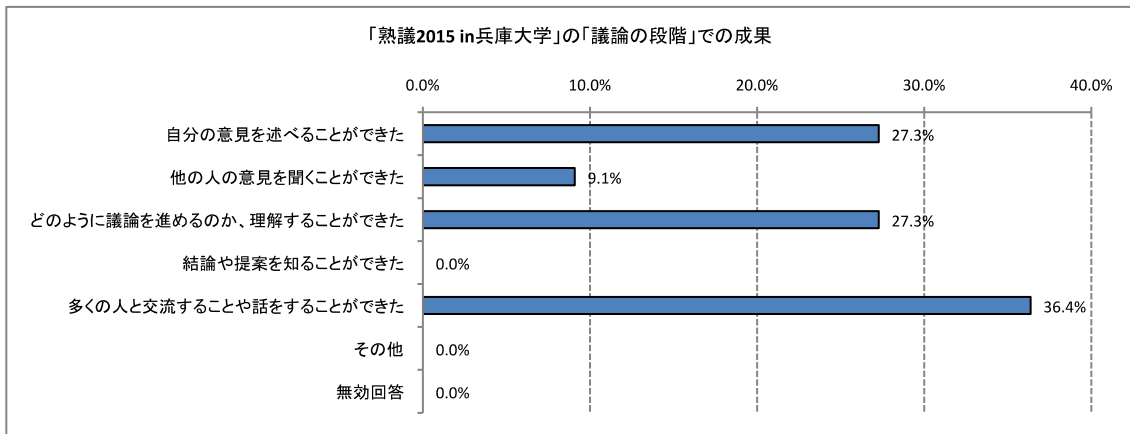


図6-4-10 「熟議2015 in兵庫大学」の「議論の段階」での成果

5. 「熟議」終了後のふり返りグループワークから

熟議が終わると、参加した大学生は振り返りのためのグループワークを行う。本節では、ファシリテーター12名とワークショップ参加者11名に分けて、グループワーク後に書かれた自由記述を対象とし分析する。話し合いの内容は、「意見を大いに出し合い、話したいことを全て話すことができたか」と「参加したメリット」についてである。以下では、それぞれについて、ファシリテーターとワークショップ参加者に分けてまとめる。

(1) テーブルでの議論について

①ファシリテーター

今回のファシリテーターは経験者が2名であり、はじめてファシリテーターを担当した者がほとんどである。しかし、全体として、下記の記述のまとめに見られるように、ある程度ファシリテーターの役割を果たせたという者が多い。また、どのようにしてそれができたのかを自己分析し、「表情や態度に気をつけ、話しやすい雰囲気作りや環境を整えることが大事だった」としている。一方、異なる年代の人々が集うテーブルで偏らずに意見を出してもらうことの難しさを感じている様子が見られる。

今後は、ワークショップの手法を大学生活、社会生活に役立てたいとする者もある。

〈ファシリテーターの役割・能力〉

- ・意見を出しやすい環境を整える、意見に共感する態度が必要
- ・意見を出してもらうために発言者の表情、態度を見ながら進める
- ・一人ひとりに視線を向けるよう努力した
- ・楽しい雰囲気を出すことはできた

- ・参加者へ疑問や意見などの返しをできた
- ・相手の意見をしっかりと聞きながらも、相手へ意見を返す技術が必要

〈上手くいかなかった点など〉

- ・参加者の他者の意見を聞く姿勢に助けられた
- ・議論を繋ぐことができなかつたことも多い
- ・高校生は遠慮している様子だった
- ・中高年の方の話に引き込まれてしまうこともあり、うまくファシリテートできないこともあった
- ・限られた時間で全員が納得のできる議論をするのはむずかしいと感じた

〈今後活かす〉

- ・ワークショップの手法は大学生活、社会生活に役立てたい

②ワークショップ参加者

ワークショップ参加者のほとんどが、他の人とのコミュニケーションや交流がうまく行き、意見を出すことができ、他者の意見も聴くこともできたとしている。また、テーブルのメンバーが雰囲気作りに協力し、話しやすい環境を作ることができていたとしている。全体として、議論の進め方に満足できている様子がうかがわれる。

〈意見を出すこと・他者の意見を聴くこと〉

- ・最初は緊張したが、だんだん意見を言えるようになった
- ・他の人の意見に耳を傾け、参考にすることができた
- ・様々な年齢の人と交流できて有意義だった
- ・いろいろな世代の方が意見を出すなかで、雰囲気もよくなかって意見が出しやすかった
- ・グループ全員がそれぞれの意見にうなずき、話しやすい環境を作ることができていた
- ・自分の意見を出すだけでなく、他の人の意見を聞き、それについての考えも発信できた

〈今後活かす〉

- ・このような行事に参加し、場数を踏むことで、積極的に意見を言えるようになると思う

(2) 参加したメリットについて

①ファシリテーター

ファシリテーターでは、様々な世代、職業・立場の人々の多様な価値観に触れることができ、学ぶことが多かったという感想が最も多い。また、テーブルの参加メンバーに配慮しながら、意見を引き出し、まとめる役割の大切さ・難しさを感じたが、一方で、人と話すことの楽しさも実感したようだ。

〈学び・気づき〉

- ・様々な世代の価値観に触れることができ、学ぶことが多かった
- ・年齢層や職業、立場のちがいによる意見の違いを経験できた
- ・意見を引き出しまとめる役割の難しさを感じ、今後のためになると思った
- ・周りの人への配慮の仕方などを学ぶ良い機会となった
- ・話し合いの場での時間管理の重要性を知ることができた
- ・人と話すことの楽しさ、大切さを実感した
- ・熟議は年齢とは関係なく、出された意見をきちんとまとめることが大切と学んだ

②ワークショップ参加者

各テーブルで議論を行った大学生は、参加したメリットとして、まず、自分自身の意見をしっかり言える機会となったことを挙げている。また、ファシリテーターと同様、世代や立場によって異なる考え・意見を聞いて、価値観の多様性を知ったとしている。熟慮の段階、議論の段階を通して、他者の意見も聴きながら、自分のなかの意見を引き出すことができ、考えを深められるとともに、これらのプロセスにより新しい価値観も持つこともできるとする意見も見られる。

〈知ったこと・気づき〉

- ・加古川の良いところも悪いところもよくわかった
- ・人前で話すことが苦手だったが、長時間テーブルを共にするなかで話せるようになった
- ・世代や立場によって異なる考え・意見を聞いて、価値観の多様性を知った
- ・これまで教育や地域のことなどについて、疑問に思っていたことを発言できた
- ・意思の共有ができたことが大事である
- ・自分だけの考えだと思っていたら、他の人も同じような考えをもっていて共有できたことがよかった

〈意見の共有からの学び〉

- ・自分のなかの意見を引き出すきっかけになった。そこから、考えを深めることが今後の課題と考えた
- ・他人の意見を聴くことで、自分のもっている考えを確認でき、新しい価値観をもつことができた
- ・結果よりもプロセスを大切にするワークショップから得た学びを今後活かしたい
- ・自分の意見や出された意見をまとめる力がついた
- ・相手に配慮した言い方を身につけられたので、思い切って自分の発言もできた

6. まとめ ～「熟議」の経験とその効果～

本章では、「熟慮の段階」「議論の段階」の前後に行った自己認識シートおよび事前事後アンケート、熟議終了後の事後研修の内容をもとに、熟議が大学生に与える影響について見てきた。本節では、これまでの分析を総括する。

(1) 熟議の方法の理解と未来像

まず、変化や効果などの影響を見る前に、どのような大学生が参加したのか把握する必要がある。議論に参加した大学生は、全員が「熟議」という言葉を今回の参加で始めて聞き、大学の教員に勧められて参加した者が約80%を占めている。

しかし、事前アンケートでは、ホームページの学習資料等を通じて、熟議の進め方やテーマについて「十分に理解できた」「大体理解できた」とする者が合わせて70%を超えている。また、「議論の段階」に対しては、「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」「どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい」とする者がそれぞれ36.4%となっている。

さらに、参加者が議論し、対策や方針を作成することの良い点として、70%を超える学生が「多様な考えを知る機会がある」こととしている。逆に、悪い点について、議論の前段階では、最も多い意見は「感情的な対立が残ってしまう」であった。

つぎに、大学生は日本の未来像についてどのように考えているだろうか。高校生と比較すると大学生は、人口減少と経済・財政について、より悲観的である。裏返せば、社会の実態について高校生より現実的な把握ができていとも解釈できよう。また、医療については期待が高校生に比べ、15ポイント以上高いのも特徴的である。その背景要因として、学生の専攻分野との関連性も考えられる。全般的に技術発展の分野では高校生と同様評価は高いが、環境については高校生より期待感が高い。大学生がより多くの情報や知識を裏付けとして判断をしているとも解釈できよう。

(2) 熟議による自己認識の変化

このような大学生が熟議を経験して、能力の自己評価ではどの項目に変化が見られたのだろうか。今回の熟議に参加した大学生は、事前と事後を比較して、まず全体で見ると、どの項目でも能力が伸びたと評価している。次に、項目ごとで見ると、実施前で自己評価が高い項目の第一位は「規律性」の3.74、第二位は「実行力」の3.61、第三位は「自主性」3.57である。

過去に遡って同データを見ると、2014年は第一位「規律性」、第二位「会話力」、第三位「自主性」「実行力」、2013年は第一位「規律性」、第二位「自主性」、第三位「会話力」となっている。まとめると、熟議に参加する大学生は、能力項目のうち、「規律性」について自己評価の高い者が参加し、そのほか、「自主性」「実行力」「会話力」に比較的自信があると言える。

それでは、事後にはこれらの能力についての自己認識はどのように変化しただろうか。増減を見ると、第一位は「運営力」の+1.09、第二位は「交渉力」+1.00、第三位は「計画力」+0.78である。熟議の成果として大学生が充実感を覚えている点は、異なる立場の人々が様々な意見や考えを出し合ったこと、それらを何らかのかたちでまとめられたことである。ここから、「違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力」の数値が伸びたと考えられる。また、参加した大学生には、これまで自分の意見をきちんと発言する機会が多いとは言えなかった者も見られる。議論のテーブルでは、人との関わりのなかで自分の意見が引き出されたり、明確になったりする経験をしたことから、「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く」交渉力の自己評価が高まったと思われる。

当然のことではあるが、能力変化については、果たした役割によって異なる傾向があることが予想される。ファシリテーターでは、第一位は「運営力」の+1.25、第二位は「計画力」「貢献性」+1.00、第三位は「交渉力」「会話力」+0.92であり、能力項目10項目の半分が過去には見られないほど高い変化率となっており、熟議のファシリテーター経験を通しての達成感、充実感などの効果が見て取れる。

一方、ワークショップ参加学生では、第一位は「交渉力」の+1.09、第二位は「対応力」+1.00、第三位は「運営力」+0.91となっている。これらの数値も例年のワークショップ参加者に比して高い変化率となっている。全体として、今年度の学生はワークショップの経験がない者が多かったことから、事前では熟議への期待が全般的に低めであった。事後での数値が全般的に高いのは、このギャップの反映とも考えられよう。

(3) 熟議テーマに関する変化

一方、テーマに関する認識や意見の変化は見られたのだろうか。詳しくは上に見たとおりであるが、以下では、(i)項目の一覧と賛否の増減について、「大いに賛成」における変化を大きな変化、「やや賛成」や「普通」における変化をそれに次ぐものとして考察する。また、事後の肯定率（「大いに賛成」「やや賛成」の合計）にも注目する。さらに、(ii)事後の変化について、大学生と高校生の比較を行う（「大いに賛成」を5、「やや賛成」を4、「普通」を3、「やや反対」を2、「反対」を1として平均を算出した数値を用いる）。

なお、テーマに関する質問項目の内容を以下に、模式図（図6-6-1）として示しているので参照されたい。

(i) 肯定派の増減を中心として

まず、①、②、⑥、⑦、⑩に見られるように、「おおいに賛成」が増加し、全体として90～100%の肯定率となっている項目がある。議論を経て、『安心・安全を創るためには、「人と人とのつながりや信頼」が重要であり、「住民同士の熟議」を行うとともに、コミュニティの日常的活動が必要である。』『また、行政や制度だけでなく、住民が互いに助け合うことが必要』であり、『大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある』と、しっかりと認識が固まったようだ。

また、⑧「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」については、「普通」が10ポイント近く増加しており、肯定・否定のどちらとも判断できないとの見解に落ち着いている。④「信頼関係、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」では、「大いに賛成」が25ポイント以上増加し、変化としては大きい結果となっている。

次に、肯定率の変化は見られても数値としては低い項目がある。たとえば、③、⑨である。「住民の役割」の重要性については、その限界を考えたか、自治体や政府の役割の重要性についての気づきであるのか、肯定率は高くなっているが、数値としては、36.4%にとどまっている。また、役割を担うのが「地の人か風の人か」についても、「地の人」の役割を改めて認識した様子が見られるが、肯定率は18.2%である。

さいごに、⑤「施設や設備に頼るだけではないけないこと」については、「やや賛成」が増加しているものの、肯定率が54.5%となっており、意見が分かれる結果となっている。熟議前後で変化は見られていないのは、議論のテーブルにおいて、そのような課題が取り上げられることが少なかったことが予想される。

①「人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕100.0%）

②「安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕90.9%）

③「安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕36.4%）

④「他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕63.6%）

⑤「安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい」

→「やや賛成」が増加。（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕54.5%）

⑥「コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕90.9%）

⑦「行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕100.0%）

⑧「安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」

→「大いに賛成」「やや賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕27.3%）

⑨「安心・安全を創るのは、地の人々の役割であり、風の人には関わらないものである」

→「やや賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕18.2%）

⑩「大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある」

→「大いに賛成」が増加（肯定派〔「大いに賛成」＋「やや賛成」〕90.9%）

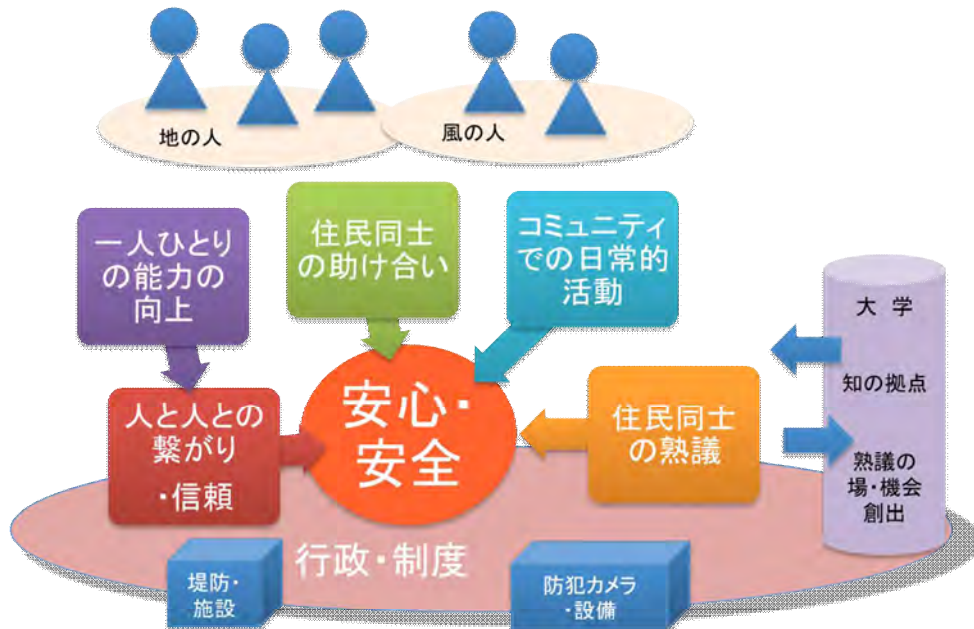


図 6-6-1 安全・安心をめぐる考え方を構成する要因間関係 (図 5-5-1 再掲)

(ii) テーマに関する考え方の変化 ～大学生と高校生の比較～

次のレーダーチャート【図6-2-2】は、「地域の安心・安全についての考え方」の各項目内容に対する肯定派に高い数値を否定派に低い数値を振って、項目ごとに回答者の数値を合計し平均を出したものである。ここでは、「事後の平均値」を大学生と高校生で比較する。一見してわかることは、大学生と高校生でほとんど同じ意見であるということである。ただし、「地域における大学の役割」については、両者で開きがある。大学が直接「地域の安心・安全」について何ができるのか、高校生の想像の範囲を超えていたことが予想される。一方、看護・医療・福祉、健康や栄養、教育・保育、経済といった専門分野で学ぶ大学生は、大学における教育研究がさまざまな領域で「安心・安全」に役に立つこと、大学の地域貢献分野の他の活動も含めて、地域のなかで果たすべき役割があることを、認識できているということであろう。

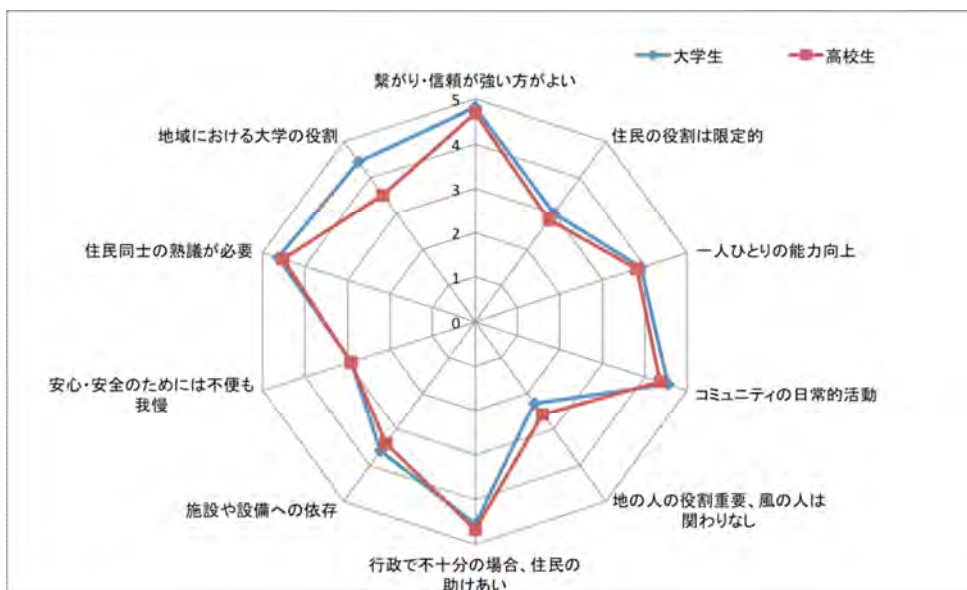


図 6-6-2 地域の安心安全についての考え方 (ポイント) の比較

(吉原恵子)

おわりに

今後の熟議の発展のために

1. 地域で考える安心・安全

加古川地域を考える熟議を行い、3年目を迎えた。当初の予定通りホップ、ステップ、ジャンプとして3年間の熟議を行った。この結果を踏まえつつ、「熟議 2015 in 兵庫大学」の成果をまとめる。

熟議により得られる成果を考えると、第一に、異なる種類、出自の参加者がそれぞれの持つ考えや経験を踏まえて、議論を行い、課題やその解法を見出すなど、ブレインストーミングとしての成果がある。参加者の意見を踏まえ、自らの意見を積み上げていくことなど、ワークショップのルールによって、より容易にその成果に達することができる。第二に、政策に対する意見集約や政策合意の側面がある。政策を集約する過程において、複数の政策の選択肢からどれかを選ぶ場合などにおいて、多様な参加者による十分な議論を経た結果として、より良い結果が得られる可能性がある。見解が分かれるなど、決断が容易ではない課題に適していると言え、日本のエネルギー政策を巡り行われた討議型世論調査⁵などはそうした点を重視する。

兵庫大学では、熟議の持つ双方の側面を踏まえ、これらを活かすために、1年目には、より広範囲で課題を見出す方向を、2年目にはその課題を踏まえ、見解が分かれるテーマを設定して考えを深める方法を採用した。その経験から、高校生を含む多様な参加者による議論、またファシリテーターによる誘導を避けるため、個々の課題について精通する専門家ではないファシリテーター（本学の場合、ワークショップに関する訓練を行った学生）を配置してのワークショップを基盤とする兵庫大学熟議手法では、第一の効用が大きいと判断され、3年目には、安心・安全を掲げその中の課題を見出し、多様な解決のための考え方が生み出される熟議を展開することになった。

ところで、2年目の熟議「熟議 2014 in 兵庫大学」では、安心・安全を課題に、具体的には身近な防災と防犯を考える機会とすることとし、異なる考え方による対立を明確にして熟議を行うことを試み、熟慮の段階で、より詳細なテーマに絞るという過程を導入した。防災に関しては、被災の可能性のある場合の判断における行政責任か自己責任かを、防犯に関しては、防犯カメラは必要か不必要かを問うた。結論は、前者では自己責任、自分の判断を重視し、後者では防犯カメラは必要、となった。この結論は、現代における、ある種の他者と自己への厳格さ、時には不寛容さの一面を示したものである。法を順守し、適切な判断力を有する善良な自立した市民を前提とし、そうした人々に囲まれることによる安心・

⁵ 2012年の「エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査」は、エネルギー・環境会議が6月29日に国民に提示した2030年までのエネルギーと環境に関する選択肢（3つのシナリオ）について、国民はどのような意見を持っているかを調査することを目的に行われた（『エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査 調査報告書』2012年8月）

安全という居心地の良さを享受したい希望を有している。一方で、自己責任の限界や社会の監視への批判も見られ、それを補う地域コミュニティへの期待もあって、続けて安心・安全を課題とする中にあって、地域を企画段階で取り上げる点は、第1章で述べた通りである。それが地域のちからを基盤として、安心・安全を考えることである。

(1) 安心・安全を熟慮する

まず熟慮の結果を振り返る。熟慮の段階では、安心・安全の基盤とする地域のちからを位置づけることから始まるが、世代を問わず、それは住民間でのコミュニケーションや行動する「ちから」に依拠するとの考えが非常に強い。また、課題として掲げる安心・安全については、相対的な概念として捉えている。すなわち、安全は「危険がない状況」であり、危険を段階的に減らすことにより相対的に安全が高まると考え、客観的な安全が高まることにより、主観的な安心が高まる、と位置付けている。絶対的な安全という概念が実は存在していないことは、想定外の事態により、絶対的な安全を前提に備えが十分でないことで生じた福島第一原子力発電所事故を見て広がった考え方である⁶。

そして、地域において安心・安全ではない具体的な事情を挙げると、共通して、交通事故の多発、犯罪率の高さと、自然災害があり、背景にはマナーや意識などの人的な要因、インフラの整備などの環境的な要因があるとされている。参加者の意識の中では、地域とは、自治会・町内会というエリアであり、身近な課題が重視された。そして、熟慮の段階で共通の課題があることは、議論を重ねる上での立脚点となりやすく、議論が大きな「逸れ」がなく導かれることを示している。そして、安心・安全が相対的に得られることを考えの前提とするならば、現状の課題に対しては、危険を減らすこと、つまり人的、環境的要因を改善することで解決できる。熟慮の場面で参加者は、解決のため公共事業の拡大、信号やガードレールなど交通安全に係る設備など環境的要因の改善が提示、地域のちからで示された、住民間のコミュニケーションや行動を重視し、「災害有事の際に共助ができる」「信頼関係を築く・つながりを持つ」地域を求めている。地域のちからがもたらす、第2章に示された「ソーシャルキャピタル」が安心・安全を向上させる認識を参加者が共通して持っている。もっとも、このことが将来にわたって相対的に安心・安全を高めていく、との観点の熟慮には至ってはならず、それは議論の機会に委ねることとなる。

(2) 議論の成果とは

熟慮の成果を基にしたの12のテーブルに分かれての議論では、前半で課題を抽出し、後半は解決策を考える。

⁶ 福島第一原子力発電所事故を踏まえての『平成24年版 環境・循環型社会・生物多様性白書』第2章 東日本大震災及び原子力発電所における事故への対応」の中で、原子力安全規制の転換の前提として、「自然災害や事故は起こり得るものであり、絶対的な安全というものが存在しないということを謙虚に受け止めることが重要です」と記載するなど、絶対的な安全の追及の困難さを示すなど、相対的な安全へと考え方の基本は変化している。

前半の課題抽出では、熟慮の段階にあった共通の認識、すなわちこの地域の具体的な、安心・安全に関することが議論の中心となった。それは、交通事故の多発、犯罪の発生率の高さ、そして自然災害である。繰り返しになるが、これらの認識は年齢を問わず共通するため、議論に参加もし易く、熟慮から議論へ持ち込む経路としては適切であった。

最初の交通事故については、日々、自転車などを利用する高校生・大学生も関心が強く、そうした経験を元に提出された課題には、道の狭さや歩車分離の未整備など環境的要因と、車の運転ルール、マナーの徹底など人的要因に関わることが示された。次の犯罪の発生率の高さについては、不審者から身を守る、被害に遭わないという課題が、また自然災害では、災害時対応やその際の被害の最小限化が課題とされ、いずれも、災害や事件の発生によって被害者や被災者になってしまう、あるいはその危険が相当に高まっている、との視点から抽出されている。その一方で、日頃より危険を少しずつ減じせしめ、安心・安全を高めるとの視点からは防犯力を高める、災害に備えるなどの課題も出されている。

以上の、身近で防犯、防災に関わる課題とは別に、地域に関する課題も出された。参加者が不安となる（安心できていないこと）課題は、防災、子育ての前提となる地域理解が不十分である点と、人々との「つながり」が必ずしも緊密ではないとされる点である。熟慮の段階で示したように、住民間でのコミュニケーションなどを、地域のちからと認識していることから、ソーシャルキャピタルの重要性は多くが共通に有している。そのため議論の中で、それらが不十分であったり、地域差もあつたりすることが理解され、課題となった。

この様に、議論の前半では、身近な、①交通・道路環境に関すること、②防犯に関すること、③自然環境・自然災害に関すること、及び地域に関連して、④自分の住む地域に関すること、⑤地域の「つながり」に関すること、⑥その他、の6点が課題の方向性として示された。

議論の後半ではこれら課題について、解決の方向を考えることになる。上述の、安心・安全に関わる課題毎に議論の成果を示す。

①交通のことでは、交通事故を防ぐ方策として、人的な要因に関わる交通ルールの徹底を図るため具体的に講演会の開催、自転車の免許制度の導入と取締りの強化と啓発、摘発の両方が、環境的要因の解決に歩車分離、交差点でのミラー設置の拡大などがあつた。人的な要因の解決においては、自己責任が重視される結論である。そして、地域のちからに関連しては、地域で危険な道を調べ、その情報を共有することが提言されている。②防犯に関して、まず身を守る、被害に遭わないという視点から、心構えなど人的な要因を課題の解決方法とする内容が多く出されている。心構えによって身を守る、というのはやはり自己責任論へと通じる考え方である。そして、近所への声掛けや地域住民によるパトロールなど、地域のちからを重視する点も議論され、結論となっている。③自然災害については、自分の命を自分で守るとの意識を重視することが挙げられている。地域のちからについては、日常的な近所づきあいや地域での高齢者など避難困難者の存在やハザードマップの確認など情報の地域での共有が提案されている。そして、地域に関連する課題、④及び⑤は、「自己・地域」としての提案がなされている。地域の活性化と自己を知ることの関係が議論され、地域にそれぞれの個人が関わることが重要とされている。

そのための日常的な近所づきあい、地域への行事やボランティア活動への参加が具体的に提案として示されている。さらに、世代間の継承にも触れられている。現時点での地域のちからを開拓することを、将来における安心・安全のための基盤としたい内容といえる。

このように、課題に対しての議論の成果として提示された解決策は、安心・安全のため、まず自己責任論に主を置いている。第3章に議論全体の意義として示された「地域住民あるいは個人ができることが非常に多い」という総括からも明らかである。報告書は、まずそうした意識を参加者が有していることの重要性を指摘する。重要なことは、議論の結果、地域のちからにも力点が置かれるようになった点である。議論を機会として、身近な安心・安全の課題についても、地域のちからが重要となることの理解が進んだといえる。

ところで、参加者の課題に対する認識や意識については、「熟議 2015 in 兵庫大学」の開始の前（事前アンケート）、そして終了後（事後アンケート）に行ったアンケート調査によっても明らかにされている。安心・安全についての10項目の事情に関する賛否を問い、数字が大きい程、肯定の意向が強くなるように結果をポイント化し、比較をした。結果を第4章に示しているが、熟慮と議論で得られた成果と対比しつつ参加者の意識を示すために取り上げる。

事前アンケートでは、「[1] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」及び「[7] 行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる」の項目でポイントが高かった。住民同士の助け合いやネットワーク、互惠性などソーシャルキャピタルが想定する地域のちからが、安心・安全に大きく寄与するとの認識を参加者が持っていることを示す。議論の成果として地域のちからを重視するようになった、というよりも元より土壌があった、といえる。昨年度「熟議 2014 in 兵庫大学」での結論にあった、自助を基盤とし公助を必ずしも重視していないが、しかしそれでは困難な課題を地域での共助に求める、という流れにある、といえる。

さて、事前と事後とでアンケートの結果を比較すると、「[2] 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である」、「[6] コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている」の項目で、ポイントの上昇幅が大きい。災害や犯罪など安心・安全を脅かす事態の生じる以前に、その危険を減らすため住民間での（そこには自己も含まれる）熟議や日常的な活動が重要との認識を持っている。このことは、課題の解決に示された提案、「自己・地域」、つまり自己を知ることが地域の活性化にもつながるといふ、自助のための地域、または地域での共助のための自立という考え方によるものといえる。

以上のように、安心・安全を創るためには、高校生や大学生、地域住民など参加者が、まず自己責任論を前提としている傾向のある一方で、地域のちからが何らかの役割を果たすことを熟議の前からも認識をしていた。熟慮と議論を通し、身近な安心・安全のための課題とその解決を考え、探った結果、自己責任論から導き出される自助を重視しつつも、公助との間を埋める必要があつて、その点にこそ地域のちからが発揮され、ちからを発揮するためにも、日常的な地域での活動が重要であることが結論として示されたのである。

2. 熟議手法の今後

熟議を継続してきた理由の一つには、熟議手法の発展と普及とがある。ワークショップ方式を基礎とする兵庫大学熟議手法の利点を踏まえ、今後の発展方向を考えることが、地域を考える熟議の3年目、最終年度のまとめには不可欠である。第4章で示したように、熟議の知名度は年々上昇しており、また熟議を様々な活動に生かしたいとの思いを持つ参加者も多い。特に、「市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである」については、過去3年間を含めて、ほとんどの参加者が賛成をしていたことを考えると、熟議をいかにして行政、あるいは地域での市民自らの活動の意思決定に取り入れることが課題となる。

(1) 活動に向けて

さて、①熟慮、②議論、③共有、④振り返り、⑤活動を一連とする兵庫大学熟議手法による数年間の熟議では、常に実現が困難であったことがある。それは、⑤活動である。そもそも、当該一連の熟議は兵庫大学が主催する事業であり、その結果は、例えば、首長からの諮問に対する答申の関係にある場合とは異なり、直ちに施策となって実施されたり、また直接の影響を与えたりすることは難しい。

熟議プロジェクトチームでの協議の中でも、熟議の成果をどのようにすれば残すことができるのか、すなわち、①政策提言として行政の活動に影響を与える、②自らが課題の解決に繋がる活動を行う、の2つの点を具体的にどのように実現をさせるかは、毎回のよう議論をされながら、しかし熟議という事業の範囲では実現の困難さが指摘されてきた。

①に掲げる、熟議の成果が政策提言として打ち出され、政策へ反映されることについては、制度的な裏づけがなく⁷、小規模での熟議であれば、影響力も十分ではないため、熟議の結論をもって政治を変化させることは難しい。そこで、首長を含む行政の関係者を参加者とすることで、議論の経緯が政策立案過程に何らかの影響を与えることができるとして、「熟議 2014 in 兵庫大学」からは加古川市との共催を実現し、「熟議 2015 in 兵庫大学」では、企画段階から加古川市職員を交え、行政が最も市民から知りたい、安心・安全に関わる事項はどのようなものか、などを検討してきた。直接的に政策に反映するルートを作ることができなくとも、関係者が知りたい情報を熟議から入手することで、何らかの変化をもたらす、と考えていた。

一方で、②に示す自らが課題解決のために主導的に活動するためには、主張と行動との間にあるギャップを埋める必要がある。行動を阻害するギャップには、大きくは、第一に、主張をすることが行動と同一視され、本来行動するための熟議であるにもかかわらず、熟議そのものが目的化していること、第二に、具体的にどうすればよいか判らないという手法の問題、そして第三に、「面倒くさいから」「お

⁷ ワシントン DC に本拠を置いていた非営利組織の AmericaSpeaks は、1995 年の設立以来、2014 年 1 月に閉鎖されるまで、延べ 13 万人以上、50 以上の大規模フォーラムを全米各地で開催してきた。中には、ニューヨークでのグランド・ゼロ跡地の開発に関するフォーラムもあり、こうした主要なフォーラムの場合 3,000 人～5,000 人が参加をする。主催者は行政機関や事業者であり、テーマに応じて同団体が熟議を運営し、結果を主催者にもたらす。主催者はこれを政策や事業に反映させる。つまり、一部ではあるがアメリカでは政策決定に熟議を導入する制度や取組もある。

金がかかるから」など、行動には手間と負担を要し踏み出せないことがある。第3章の議論の意義でも、「自分たちの力で実行可能なものであり、適切なきっかけがあり、歯車がうまく回ることによって持続できそうな取り組みも多い（略）課題は、適切なきっかけと歯車が回る仕組み」とあるように、議論の後に行動を結び付けることが課題である。第一の点は、先ずは参加することから始まる熟議では避けることができないが、兵庫大学熟議手法が活動までを含む内容であることを今後も丁寧に広げ、意識改革を進めなければならない。また第二の点については、大学の地域貢献の取り組みもその一助となるが、地域にあるNPOや社会福祉協議会、商工会議所など民間主体で、活動を主体とし、活動を支援する組織とも熟議の結果を踏まえ、活動したい参加者を結びつけることも考えられる。そして、第三の、参加者の行動へ踏み出すための、いわば「背中を押す」ためには、参加によって社会や政治が変化させうることを市民が理解する学習が不可欠である。

(2) 民主主義を守り発展をさせるために

熟議が今後とも継続されるためには、その意義として民主主義を支え、発展に資する存在であることを示さなければならない。憲法の前文には「そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する」とあり、代議制民主主義を基盤とする。熟議は代表者ではなく、国民一人ひとりが市民として議論をし、先に記したように政策に反映させることも企図する。直接民主主義を謳うのではなく、憲法に定める代議制民主主義を補完し、民主主義を保障する考え方になる。第4章に示したように、「熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である」に対して、肯定が85.7%を占めており、さらにその傾向は、熟議の回数を重ねるに従い年々と拡大をしている⁸。熟議が理解をされるに従って民主主義への寄与という点を参加者は評価をしていることになる。

さて、「熟議 2015 in 兵庫大学」で、その文脈にあって、特に注目したいのが、高校生・大学生とそれ以外の社会人との相違である。第4章にて示したように、「市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるか」の各項目において、「非常に思う」が高校生・大学生で高い傾向がある。若年者に熟議への強い期待がある。

また、若年者からの期待だけではなく、若年者の熟議「体験」が教育において重視される点にも注目をしたい。文部科学省が、大学、高等学校等に対し、「能動的学修(アクティブ・ラーニング)を促していく必要」を機会あるごとに示していることを背景とする。日本の教育で海外からの「遅れ」と認識されているのが、この点にあると考えられているからである。報告書の第5章では、高校生に対する熟議の影響やその「体験」の意義を分析しているが、結論として、熟議に参加した高校生は、そもそも「自主

⁸ 肯定するほど数値が上昇するようにポイント化した結果は次の通りである。

| | 「熟議 2012 in 兵庫大学」 | 「熟議 2013 in 兵庫大学」 | 「熟議 2014 in 兵庫大学」 | 「熟議 2015 in 兵庫大学」 |
|--|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| [5] 熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である | 0.853 | 0.922 | 0.826 | 1.169 |

性」「規律性」について自己評価の高いこと、そして熟議を経て、「計画力」「対応力」「思考力」の自己評価が向上しており、「限られた時間を有効に用いて、きちんとこれらの課題を理解し取り組ん」でおり、兵庫大学熟議手法が最も効果的に発揮されたと考えられる。また第6章では大学生を対象に、熟議を大学生の「汎用的能力」養成の手法として位置づけた分析を行い、高校生とは異なり、違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力について、自己評価を高めている。熟議がアクティブ・ラーニングの一環となっていることを示している。

さて、将来にわたっての熟議を考えるにあたり、若年者に対する教育的効果の高さ、若年者からの熟議に対する期待を無視することはできないであろう。日本の若年者の自己肯定感が諸外国と比して低いことは言われて久しく、同じく政治への参加意識も高いものではない⁹。前述のように、知識を行動に変化させるために「参加によって社会や政治が変化させうることを市民が理解する学習が不可欠である」ことを考え合わせるならば、若年者に

ほどそれが必要であり、かつ熟議により効果的に学習が可能であることが示されていることから、兵庫大学熟議手法を高校生など若年者に積極的に活用する必要がある。

2016年より、18歳からの選挙権が認められ、若年者と政治との関わり、または距離の様相が一変する。これまで教育の公平性の観点から、基本的に認めてこられなかった高校生の政治参加も変化する可能性がある。18歳以上の若年者が、インターンとして、ボランティアとして選挙事務所で活動することも十分に考えられる。教育において、政治参加に係る教育は今後の課題となるが、政治への参加は市民として認められることであり、そのことは、憲法第12条にあるように「国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない」のであって、教育という不断の努力を怠ることは民主主義の根幹を失う懸念を増大させる。

熟議は民主主義を保障する手段であることを踏まえ、熟議を通して若年者が社会に関わる、政治に関わる機会を増やすことが広く民主主義を守り発展させることに繋がることをそれに携わる経験から断言することができる。

(田端和彦)

⁹ 「日本の若者のうち、自分自身に満足している者の割合は5割弱、自分には長所があると思っている者の割合は7割弱で、いずれも諸外国と比べて日本が最も低い。」「やさしさ」「まじめ」といった点で自分に誇りを持っている若者の割合が高いものの、それらも含めすべての項目で諸外国の平均を下回っている。」「社会をよりよくするため、社会問題に関与したい」と思っている日本の若者の割合は4割強、同様に「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」と思っている割合は約3割となっており、いずれも日本が最も低い。」(平成26年版 子ども・若者白書「特集 今を生きる若者の意識～国際比較から見えてくるもの」、p.79～83)

資料編

「熟議 2015 in 兵庫大学」開催結果

1.日 時 . . . 平成 27 年 11 月 22 日（日）10：00～16：00

2.場 所 . . . 兵庫大学（加古川市平岡町新在家 2301）

3.主 催 . . . 兵庫大学・兵庫大学短期大学部

4.共 催 . . . 加古川市

5.参加者数

| | |
|--------------|--------------------------|
| ・一般参加者 | 77 人（内 学生 11 人、高校生 36 人） |
| ・傍聴参加 | 20 人 |
| ・学生ファシリテータ | 12 人 |
| ・司会者 | 1 人（参加者学生と重複） |
| ・記録係（職員） | 12 人 |
| ・登壇者 | 3 人 |
| ・メインファシリテーター | 1 人 |
| 合計 | 125 人 |

6. 熟議プロジェクトメンバー

田端 和彦 吉原 恵子 北島 律之 木下 幸文
森下 博 久井 志保 小林 洋司 岩崎 治夫 柏村 裕美

7. 後援

兵庫県、兵庫県教育委員会、高砂市、稲美町、播磨町、
加古川市教育委員会、高砂市教育委員会、稲美町教育委員会、
播磨町教育委員会、（公財）兵庫県生きがい創造協会、
神戸新聞社、BAN・BAN ネットワークス株式会社

8. 実施風景写真



主催者挨拶



アイスブレイキング



アイスブレイキング



地域の課題



WS



WSの様子

WS



WS



閉会

以上

当日速報

熟議2015 in 兵庫大学

加古川地域のちから ～安心・安全を創る～

自分たちが暮らしたい安心・安全な社会について意見を出します
その社会を実現するための課題に対する解決案を考えます



安心して暮らせる地域とは

～熟慮「Part3」の回答より～

Q: いま住んでいる地域に暮らすなかで、「安全でない」「安全が感じられない」と思った事からや経験がありますか。

A: 街灯が少ない。道が狭くガタガタ。交通マナーも悪い。空き巣や不審者の問題。

Q: 「安全でない」「安全が感じられない」事からや経験を改善したり、解決したりするには…

A: 交通量が多いのは、道路を拡張するか、別の道を確認する。安全教育の強化。地域で相互に見守る仕組みを作る。

Q: あなたにとって、「安心して暮らせる地域」とは…

A: 地域の人々が挨拶し合ったり、コミュニケーションや交流があり、助け合える地域。子どもたちが安心して遊べる地域。

熟議への期待

加古川市長 岡田康裕

兵庫大学「熟議」今年で4回目の開催となります。

熟議の中で、学生の皆様の柔軟な発想や地域の皆様の豊富な経験や知恵・知識から導き出される議論は、行政に多くのヒントを与えてくださる機会と考えております。本日、参加されている皆様にとって、まちづくりについて考える機会となり、「加古川地域のちから」がさらに盛り上がっていくことを期待しています。



「安全」と「安心」

安全

客観的事実
*科学的評価によって
もたらされる
*科学で証明される

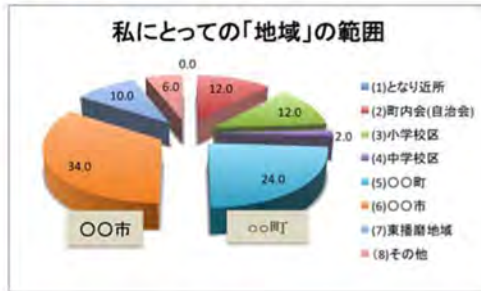
安心

主観的感情
*人それぞれによって
もたらされる
*自ら理解し・納得す
ることで得られる

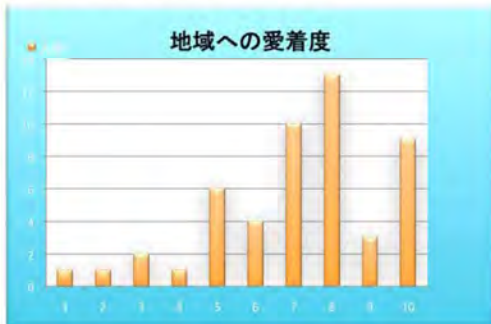
「安全が守られてはじめて安心が生まれる、安心できる」ということですね。



～熱慮「Part3」の回答より～



「地域」の範囲は、「〇〇市」と考える人が最も多く34.0%、第2位は「〇〇町」24.0%



「地域への愛着度」は、半数が「8」以上となっており、愛着度が高い参加者が多い

Q: 安心して暮らせる地域にするために「地域として」どんなことをしたらよいと考えますか？
A: 気楽に話し合いができる場所や機会が十分に確保されること。いざという時に助け合える土壌を作ること。

Q: 安心して暮らせる地域にするために「あなたなら」何をしますか？何ができますか？
A: 地域行事、地域活動へ積極的に参加する。ボランティアなどをして手伝いをする。

メイン・ファシリテーター山崎清治さん
 (NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長)
 昨年度は最終討論会のまとめ役をしていただきました。今回の熱慮では、アイスブレイクで雰囲気づくりをするとともに、各グループの議論を受けて、全体の進行をしていただきました。議論の結果を整理し、説明をしていただくことで、参加者全員が納得できるかたちで熱慮の成果がまとまりました。ありがとうございました。



テーマ1
 子どもが安全安心に生活するには？
 あいさつするよう指導。不審者メールがきたら集団下校させる。公園に若者がたまらないように。ご近所づきあい。

テーマ2
 防災力を上げるには？
 家の灯をつけておく。護身術を身につける。逃げる場所を見つけておく。学校での教育→自己防衛。当事者意識をもつ。

テーマ1
 不審者から身を守るには？

テーマ2
 なぜ事故(交通)が多いか？



テーマ1
 住みやすい街にするには？
 ・人が出会い、近づくための機会づくりが大切
 ・交通に対する設備の充実と個々人の注意を促す働きかけを工夫していくことが重要！

テーマ2
 災害時の被害を少なくするには？
 ・家族単位、地域単位の防災意識を向上させる場づくり。
 ・災害弱者をはじめとした住民の把握と情報の共有が大切。

テーマ1
 あなたの食べるものは安全ですか？

テーマ2
 生活環境は大丈夫ですか？



テーマ1
 自己愛を向上させるには？
 自分の長所、短所を知るとともに当事者意識を持つと共に、周囲の他者にも目を向け、あいさつをしたり視野を広げ、お互い様の気持ちでつながり合い助け合う。

テーマ2
 自分の地域を知っていますか？
 地域を知るにはゴミ出しやみんなでの清掃をしたり、地域や学校の行事、祭りに参加したり、あいさつをしたりして、お互いの顔がわかることが大切。地域について「発見」していく必要がある。

テーマ1
 災害時に備えて一人一人が優先的に何をすべきか？

テーマ2
 道路環境をよくするには？

(1)あいさつなど身近な活動 (2)道徳や防犯など教育 (3)街灯や情報共有など対策という三本柱を。

交通マナーを守る為の教育と事故情報の共有などの意識化と安全な道路や公共交通で車を減らすなど環境整備。

テーマ1
地域で安心して暮らせますか
→ 地域行事への参加。ボランティア精神をもつ。一人一人の関心。学校で話し合いの機会をもっと増やす。行政と地域の連携。

テーマ2
犯罪被害を減らすためには？
→ 地域の活動のひとつとしてパトロールの実施。自分を守るのは自分。人を大切にする。貧困者をつくらない。防犯対策をしっかり説明する。

テーマ1
交通事故を起こさないためには？
→ ・自分たち一人ひとりの交通に対する意識の改革が大切！
・LED や独自の標識をつくるといった交通に関わる設備の充実

テーマ2
災害にどう備えるか？
→ ・ITを利用した情報共有や非常用物質備蓄のPR活動の充実
・地域がまとまるためのしかけをつくる(住民による清掃活動など)



身を守る態度を基盤に国産重視で、個人も正しい知識を持つ。もちろん生産者の安全管理の体制にも関心を。

意識を向上させ、ため池を守るためにも地域コミュニケーション。災害情報を把握し身を守るためにも地域コミュニケーション。

テーマ1
治安を良くするためには？
→ 解決の手段として自分達で出来ること、地域で出来ること、行政で行うことが挙げられる。

テーマ2
自分の町のインフラは大丈夫ですか。
→ 治水対策や道路整備などハードに対する対策も必要だが、地域のつながりも必要ではないか？

テーマ1
交通ルールマナーを浸透させるには？
→ 利用客のマナー向上、歩道などのインフラ整備、罰則を強化することが解決の手段となる。

テーマ2
例えば地域力とは何か
→ 回覧板やハザードマップで情報を伝える一方で、地域について話し合うコミュニケーションが重要。



ハザードマップで地域の情報を得て対策を考える。避難場所を知って家族で共有し、待合せ場所を決定する。防災グッズ(非常用袋)を備えておく。

まず、道路や歩道を整備する。危ない箇所をチェックし行政に要請する。また、「危険」看板や街灯を設置する。一番大切なのは自分が交通ルール、マナーを守り、危険な場所は避けること。

テーマ1
地域のコミュニケーションを深めるには？
→ 基本となるのは「あいさつ」。加えて自治会や子ども会などの地域組織のつながり。情報告知の仕方の工夫やボランティアの活躍も必要。

テーマ2
安全な道を作るには
→ 交通ルールを守ったり、普段から危険を予測するなど「意識を高める」ことが大切。他に歩行者を別にする、道を明るくするなど必要。

テーマ1
近所付き合いのツールとして近所付き合いしてますか
→ 近所付き合いのツールとして、挨拶、祭、子ども会などが大切。いざという時、命を守ることにつながる。ただ大人と若者の認識の違いに注意。

テーマ2
加古川って安全なの？
→ 道を照らす、カメラの設置、情報の提供などハード的なもの、安心しきらない、家族で話す、周りに注意するなどソフト的なものが大切。



地域が育てる熟議

「加古川地域のちから」が素敵な「創る」を生みだす！

「熟議」のテーマは、2012年度は「地域における生涯学習社会の構築と大学・自治体の役割」でしたが、2013年度からは「加古川地域の未来について話をしよう！」を3年間のテーマとしました。昨年のサブテーマ「安心・安全を考える」を経て、今年のサブテーマは「安心・安全を創る」とし、このテーマでの最終年度になります。加古川市には、昨年度から共催としてご支援いただき、ありがとうございます。また、これまで、行政機関等、一般市民、



学長 三浦 隆則

地元の高校から多数のご参加を得ました。熟議が回を重ね、地域に根づくことができましたのも、ひとえに熟議に関心を持ち、参加し、支えてくださった地域の皆さまのおかげと感謝申し上げます。

今年は、熟議参加者 85 名のうち、高校生が 42 名、大学生が 23 名（ファシリテータ 12 名を含む）となり、若い力があふれる熟議となりました。今回も「加古川地域のちから」が発揮され、素敵な「創る」がたくさん生まれました。この成果が今後の地域の発展につながることを心から期待しています。



熟議の成果は毎年報告書にまとめられています。



高校生対象事前研修の様子

「熟議」を教育に活かす

主体的・協働的な学習、アクティブラーニングの取組みが求められているなかで、この「熟議」はまさにを得たものである。高校生にとって、世代を超えた様々な方の意見を聞き、自分の考えと照らし合わせる経験は大変有意義です。加古川南高校では、学校から地域・社会に出てサマワークやインターシップ等の事業に取り組んでいるが、この「熟議」型の活動を今後さらに積極的に取り入れていきたいと思う。

加古川南高等学校校長 小南克己

熟議でつながる地域の輪



【今年度の参加者】

- 地域の方々、加古川青年会議所、いなみ野学園生、他
- 加古川市、高砂市、稲美町、播磨町
- 高校生：加古川北高校、加古川西高校、加古川東高校、加古川南高校、松陽高校、高砂高校、高砂南高校、東播工業高校、播磨南高校、東播磨高校
- 大学生：兵庫大学・兵庫大学短期大学部
- 兵庫大学職員
- 兵庫大学・兵庫大学短期大学部 熟議プロジェクトチーム

兵庫大学・兵庫大学短期大学部
加古川市平岡町新在家 2301 <http://www.hyogo-dai.ac.jp>

※本紙は「速報」です。詳細は HP の報告書をご覧ください。
熟議専用 HP <http://www.hyogo-dai.ac.jp/hukuen/>

※11月22日当日に配布したものと字体等に一部異なる点がございます。

自己認識シート(事前評価)

| | | |
|-------|----|---|
| 学校名 | | |
| 科・コース | 学年 | 年 |
| 氏名 | | |

※下記に示された各能力に対し、今のあなたに当てはまると思われる「④レベルの欄」の1～5を○で囲んでください。

| ①能力 | ②能力の説明 | ④レベル | | | | |
|-----|---------------------------|----------|-------|-----|----------|-----------|
| | | かなり自信がある | 自信がある | ふつう | あまり自信がない | まったく自信がない |
| 自主性 | 物事に進んで取り組む力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 思考力 | 問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 実行力 | 目標に向かって行動する力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 対応力 | 状況を判断して関係や流れがうまくいくよう行動する力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 交渉力 | 人との間わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 会話力 | 相手と意思疎通(そつう)を図る力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 計画力 | 現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 規律性 | 社会のルールや人との約束を守る力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 運営力 | 違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 貢献性 | 社会の担い手として役割を自覚して、参画する力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

③「③」でできること」の具体例


自分の目標や課題を定め、進んで取り組むことができる
 物事に対して、興味や関心をもって意欲的に取り組むことができる
 困難なことでも前向きに取り組むことができる
 現状を正しく理解するための情報収集や分析ができる
 物事の原因と結果を区分したり、問題の背景を考えることができる
 問題を解決するために見通しをもって、順序立てて考えることができる
 自分の考えをもち、それらを確実に実行することができる
 設定した目標達成に向けて粘り強く取り組むことができる
 困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる
 相手やその場の状況を配慮しながら、柔軟に対応することができる
 自分の役割と他者の役割を的確に判断し、取り組むことができる
 物事が良い方向に流れるよう、まわりに働きかけることができる
 取り決めのための話し合いの場を持ち、合意を促すことができる
 協力することの意義や理由を、相手に対して明確に伝えることができる
 周囲の人に対して効果的に働きかける手段を活用できる
 自分の意見を具体的にわかりやすく伝えることができる
 相手の意見を丁寧に聞き、素直に受け止めることができる
 相づちや共感により、相手に話しやすい状況を作ることができる
 実現のために段階ことになすべきことを把握することができる
 作業の進捗を明らかにし、優先順位をつけて計画を立てることができる
 必要に応じて他者の意見も積極的に計画に取り入れることができる
 社会のルールやマナーの必要性を理解し、それらを守ることができる
 他者に社会のルールやマナー、また約束を守るように促すことができる
 異なる立場を理解しながら社会のためのルールや約束を結ぶことができる
 自分の意見を持ちつつも、他者の意見や立場も理解することができる
 チームの目的を明確にして、メンバーに働きかけることができる
 異なる立場の人々とも力を合わせて物事を達成することができる
 地域や社会に参画することの意義や役割について理解している
 地域や社会に参画して、自分の役割を果たそうとする意志がある
 地域や社会の担い手として、使命感をもった取り組みができる

熟議の進め方



熟議 2015

in 兵庫大学



- ・熟議とは熟慮して議論することです。



- ・身近なことについて、市民自らが決める「熟議」が必要になりました。



投票により政治を決定する仕組み。


熟議により身近なことについて決定する仕組み。




- ・世界のいろいろなところで熟議が行われています。



Citizen's Jury (オーストリア) PLANUNGSZELLE (ドイツ) 21世紀のタウンミーティング (USA)




- ・独自の「兵庫大学熟議方式」を開発しました。




- ・「兵庫大学熟議方式」は5段階で構成されます。


①熟慮 → ②議論 → ③共有 → ④振り返り → ⑤活動




- 「熟慮」：事前学習でテーマについて認識を持ちます。




- 「議論」：互いの認識を出し合い議論をします。




- 「共有」：議論の後、全員の議論や結論を共有します。



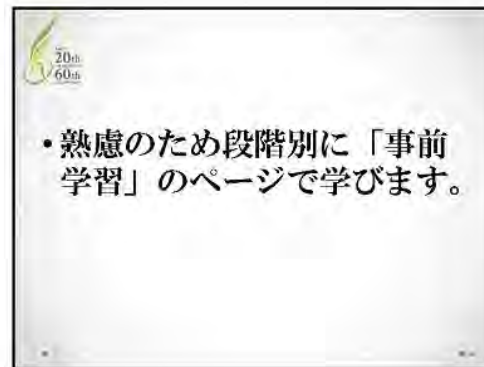
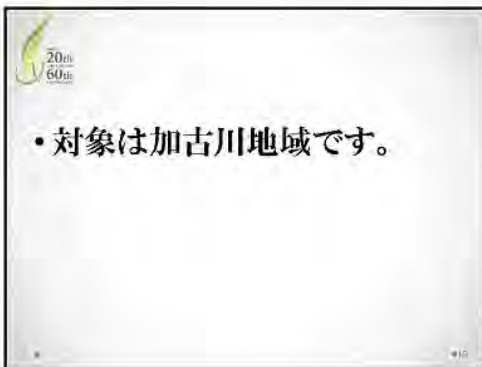
- 「振り返り」：自分のしたことへの仲間づくりと成長を振り返ります。



- 「活動」：熟慮の成果を踏まえ今後、活動しましょう。



- テーマは「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」です。



熟慮の段階（事前学習の進め方）




熟慮の段階

さあ「事前学習」をはじめましょう！




画面操作の仕方


- ・「進む」を押すと、1画面進みます
- ・「戻る」を押すと、1画面戻ります
- ・「<<」を押すと、一番最初の画面に戻ります
- ・「>>」を押すと、一番最後の画面に進みます
- ・次のスライドに進んだら▶ボタンを押して、音声を再生してください
- ・途中で止める場合には||を押してください



「熟慮Part1」から「熟慮Part3」まで、
時間のあるときに少しずつ
学習をすすめましょう！





考えていることを言葉にしたり、
書いたりすることで、提案や
アイデアがどんどん出てくるかも
しれませんね




入力フォームの送信方法

1. 入力フォームに考えたことを入力してください
2. 「確認」ボタンを押してください
3. 確認画面が出たら、送信する内容がそれによいか確認してください
4. 内容がそれによければ、「送信」ボタンを押してください




事前学習の進め方

- 熟慮の本番に向けて、事前の学習をしておきましょう！
- ここでは、学習の進め方を説明します。




事前学習の構成

- ・事前学習は「熟慮Part1」「熟慮Part2」「熟慮Part3」に分かれています
- ・各スライドを順番に開いて、音声を聞きながら指示通りに学んでいきます



シンキング・タイムと入力フォーム

- ・それぞれのPartで、「シンキング・タイム」があります
- ・この画面が出てきたら、しっかり考えましょう。そして、入力フォームに記入して下さい




事前学習の進め方の説明

このスライドで終わりです
「熟慮Part1」に進んでください

「熟慮Part1」を押すと
熟慮Part1の回答フォームへのボタンが出てきます。

スライド画面と回答入力画面を並べて
学習を進めて下さい。





熟慮「Part1」


ウォーミングアップ
肩慣らしをしましょう！



1

学習の仕方


- スキップせずに
- 順番にクリックして
- ステップを踏んで
- 熟慮を進めていきましょう！



1

テーマの確認

- あらためて今回の
熟慮のテーマ
を確認しましょう！



2




加古川地域のちから ～安心・安全を創る～



3

加古川地域って？


今回の熟慮で
加古川地域とは
加古川市、高砂市、
稲美町、播磨町
のことです。



4


加古川地域の「ちから」って？

- 元気を出すこと、元気が出ること
- お互いに助け合うこと
- 一人ひとりががんばること
- 財力があること
- 企画力や創造力があること
- 変化を生み出すこと



5

加古川地域の「ちから」って？
あなたにとって、
地域の「ちから」とは
なんでしょう？


6 


シンキング・タイム
(考え中...)
↓
⌘1分経過したら自分の考えを
書いてみましょう

7 

〔回答1〕


- 地域の「ちから」とは...
(1)だれが、
(2)いつ、
(3)どのように、
(4)なにををする

8 

Part1のまとめ

今回のテーマと目的は、
自分たちが暮らしたい
地域を創っていくために...

↓
世代を超えて
アイデアを出し合う

9 

熟慮Part1

このスライドで終わりです
「熟慮Part2」に進んでください



10

熟慮の段階（熟慮 Part2）



熟慮「Part2」


熟慮で使う言葉や用語を
頭に入れておきましょう！



熟慮をはじめるまえに

基本用語を
押さえて
おきましょう！



1



たとえば...

**「安全」とはどんな
ことか、
自分の言葉で説明
してみましよう！**


2



シンキング・タイム
(考え中...)

※1分経過したら**自分の考えを**
書いてみましょう


3



〔回答2〕

• 「安全」とは、
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○


4



安全の定義



- 「危険がなく安心なこと」
(大辞泉)
- 「危険がなく安心なさま」
(大辞林)
- 「安らかで危険のないこと」
(広辞苑)

5



ポイント整理


- **安全**とは、.....
- だいたい「**危険**がない」
- 「**損**をする可能性が低い」
- 「**損**をする可能性がない」
- ...**危険**がない・**損**をすることがない**状態**のことですね。


6

もうちょっと考えてみましょう！


- それでは、**危険**とは、
どんな**危険**でしょう
- それでは、**損**とは、
どんな**損**でしょう



7



シンキング・タイム
(考え中...)



⌘1分経過したら**自分の考え**を
書いてみましょう



8

〔回答3〕


- **危険**がない・**損**をすることがない**状態**とは、

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○


○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○



9

危険とは、どんな危険でしょう


- 命の危険...事故、災害
- 経済上の危険...詐欺、リストラ
- 医療の危険...薬の危険、伝染病の危険、医療ミス
- 食品の危険...有害な添加物？食品偽装
- 暴力による危険...犯罪、武力攻撃、兵器
- 環境汚染による危険...放射性物質
- IT環境における危険...個人情報漏洩、詐欺、
-
-



10

つぎに...

「安心」とはどんなことか、
自分の言葉で説明
してみましょう！



11



シンキング・タイム
 (考え中...)

 ⌘1分経過したら**自分の考え**を
 書いてみましょう

12 


〔回答4〕

• 「安心」とは、
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

13 


安心の定義

- 「気にかかることなく**心が落ち着いて**いること。また、そのさま。」(大辞泉)
- 「**心が安らかに**落ち着いていること。不安や心配がないこと。また、そのさま。」(大辞林)
- 「心配・不安がなく、**心がやすらぐ**こと。また、安らかなこと。」(広辞苑)

14 

ポイント整理


安心とは、.....
 「**心が落ち着いている**」
 「**心が安らかなこと**」
 「**不安がないこと**」
 ...そんな**気持ち**のことですね

15 


安全と安心

ここまで「安全」と「安心」について考えてきました

- 「安全」と「安心」は、似ている言葉で、「安全安心」とひとつの言葉として使ったりしますね
- 「交通**安全**」とはいいませんが、「交通**安心**」とはいいません
- 「ひと**安心**」とはいいませんが、「ひと**安全**」とはいいません

16 

それでは
「安全」と「安心」は
 どちらがうのでしょうか


17 


シンキング・タイム
 (考え中...)

 ※1分経過したら**自分の考え**を
 書いてみましょう

18 


〔回答5〕
 ・「安全」とは、
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ・「安心」とは、
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ・こんなところが違う
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

19 


安全と安心の違い


| | |
|---|---|
| <p>安全</p> <p>科学的評価に よってもたらされる 「科学で証明される 客観的事実」</p> | <p>安心</p> <p>人それぞれによって もたらされる 「自ら理解し・納得す ることで得られる 主観的感情」</p> |
|---|---|

参考URL: 「安全」と「安心」の違い 大野智<http://apital.asahi.com/>

20 


安全と安心



21 

Part2のまとめ

- ・「**安全な状態**があって、**安全**が守られて」はじめて
- ・「**安心**が生まれる、**安心**できる」ということですね。

22 

熟慮Part2
 このスライドで終わりです
 「熟慮Part3」に進んでください



23

熟慮の段階（熟慮 Part3）



熟慮「Part3」

さて、事前学習の本番です。
しっかりと考えましょう！




記憶をたどってみよう！

Q1:いま住んでいる地域に暮らすなかで、「安全でない」「安全が感じられない」と思った事がらや経験がありますか。

▶▶▶いくつでも挙げてください。

1




〔回答6〕

Q1:「安全でない」「安全が感じられない」と思った事がらや経験について書いてください。

💡(1) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

💡(2) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

2




自分から提案してみよう！

Q2:「安全でない」「安全が感じられない」と思った事がらや経験を改善したり、解決したりするにはどうしたらよいでしょう。

▶▶▶意見やアイデアを出してください。

3




〔回答7〕

Q2:「安全でない」「安全が感じられない」ことに対する解決方法や対策案を書いて下さい。

💡(1) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

💡(2) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

4




あなたにとって地域とは？

Q3:ところで、「あなたが住んでいる地域」と言えば、どのような範囲ですか。ひとつだけ○をつけて下さい。

(1)となり近所の範囲 (2)町内会(自治会)の範囲
(3)小学校区の範囲 (4)中学校区の範囲
(5)○○町の範囲 (6)○○市の範囲
(7)東播磨地域
(8)その他()

5



〔回答8〕

Q3:ところで、「あなたが住んでいる地域」と言えば、どのような範囲ですか。選択肢からひとつ選んでください。



回答番号()
※「その他」の場合()

6



あなたは、「あなたの地域」が好きですか？

Q4:今住んでいる地域への「愛着度」はどのくらいですか？尺度の数値をひとつだけ選んで回答して下さい。

慣れ親しんでいる場所(地元・ふるさと)

生活するための場所・特に理由がない

愛着度 (値) 10-9-8-7-6-5-4-3-2-1 (弱) 愛着度

7



〔回答9〕

Q4:今住んでいる地域への「愛着度」はどのくらいですか？尺度の数値をひとつだけ選んで回答して下さい。



回答番号()

8



安心して暮らせる地域とは？

Q5:あなたにとって、「安心して暮らせる地域」とはどのようなものですか？

回答例:〇〇がある地域
:〇〇がない地域
:〇〇ができる地域
:〇〇に対応できる地域 など

9



〔回答10〕

Q5:あなたにとって、「安心して暮らせる地域」とはどのようなものですか？



(1)〇〇〇〇〇〇〇〇〇のような地域であってほしい



(2)〇〇〇〇〇〇ができる地域であってほしい

10



安心して暮らせる地域にするためには？

Q6:「安心して暮らせる地域」にするためには...

- (1)地域としてどんなことをしたらよいと考えますか？
- (2)また、あなたなら何をしますか(何ができますか)？

11



〔回答11〕

Q6:「安心して暮らせる地域」にするためには...

- 💡 (1) 地域としてどんなことをしたらよいと考えますか？
- 💡 (2) また、あなたなら何をしますか(何ができますか)？

12

熟慮Part3

このスライドで終わりです

すべての事前学習が終わりました
お疲れさまでした！

13

「熟議 2015 in 兵庫大学」参加者・アンケート

この調査は記名式のアンケート調査です。「熟議 2015 in 兵庫大学」の開催に先立ち、テーマである「加古川地域のちから」に関する考え方、熟議についての認識などを確認するために行います。ご回答は選択肢の番号を右欄に記入するか、指示に従い、直接、記入してください。

なお、当該調査票は兵庫大学にて厳重に保管し、統計的に処理をした結果のみを公表する予定です。調査票にご記入頂くお名前等は熟議の後に行う予定のアンケートとの照合を図るためであり、これらを他の用途に用いることはございません。ご理解の上、ご回答をお願いいたします。

当該アンケートの回答期限は平成 27 年 11 月 10 日(火)です。返信用封筒にてご回答ください。ご多忙のおり、ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いたします。

1. 下記の欄に、あなたのお名前を下記にご記入ください。

| | |
|-----|--|
| お名前 | |
|-----|--|

2. 学校生活や社会経験の中で、ワークショップや市民会議、グループ討議など「参加者が議論し、対策や方針を作成する」というご経験はありましたか。1つ選び、右欄に番号を記入してください。

- ① 現在も多くの機会に経験をする（年間5回以上が目安）
- ② 機会は少ないが、現在でも経験をする
- ③ 以前には経験をしたことがあるが最近はない
- ④ これまでほとんど経験をしたことがない

3. 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法について、ご経験を踏まえ良い点と悪い点を次の一覧より1つずつ選び、それぞれ右欄に番号を記入してください。なお、良い点、悪い点がない場合、それぞれの欄は空白のままにしてください。

- 〈良い点〉
- ① 多様な考えを知る機会がある
 - ② 少数意見も平等に扱われる
 - ③ 決定した後の行動が容易である
 - ④ 参加者の満足度が高い
 - ⑤ わからない
 - ⑥ その他 ()

- 〈悪い点〉
- ① 時間や労力がかかりすぎて非効率
 - ② 議論だけではまとまらず決められない
 - ③ 立場が上の人の意見に影響されやすい
 - ④ 感情的な対立が残ってしまう
 - ⑤ わからない
 - ⑥ その他 ()

4. この設問は社会人の方のみご回答ください。学生、高校生は、設問 5 にお進みください。
 グループ討議などグループで活動する場合、参加者が身につけておくべき資質は何でしょうか。例に従い、その重要度を5段階で評価をしてください。

| | 非常に 重要 5 | 4 | 3 | 2 | 1 全く重要 ではない |
|---------------------|----------------|---|---|---|-------------------|
| 【例】 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ①物事に進んで取り組む自主性 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ②要点を把握し論理的に考える思考力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ③目標に向かって行動する実行力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ④状況に合わせて適切に対応する能力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑤人に働きかけ行動を促す交渉能力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑥相互理解のためのコミュニケーション力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑦課題解決をはかるための計画性 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑧規律を守ること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑨チームをまとめ適切に運営する能力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑩チームに参画する貢献性 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

5. 「熟議 2015 in 兵庫大学」への参加の以前から、熟議という言葉をご存知でしたか。

- ① 熟議の内容を含めよく知っていた
 ② 言葉では聞いたことがあった
 ③ 今回初めて知った

6. 「熟議 2015 in 兵庫大学」に参加しようと思われたのはなぜですか。次より2つ以内で選び右欄に番号を記入してください。

- ① 市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから
 ② 「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」というテーマに関心があるから
 ③ 大学が主催する事業に参加したいから
 ④ 地域での活動全般に関心があるから
 ⑤ 学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから
 ⑥ 特に強い理由はないが、なんとなく参加をと思ったから
 ⑦ その他（

7. 「熟議 2015 in 兵庫大学」の資料や説明、ホームページ等をご覧になり今回の熟議の進め方についてご理解をいただけたでしょうか。1つ選び右欄に番号を記入してください。

- ① 十分に理解することができた
- ② 大体は理解することができた
- ③ あまり理解することができなかった
- ④ ほとんど理解することができなかった

8. 「熟議 2015 in 兵庫大学」での「議論の段階」において、あなたはどのことに最も大きな期待を持っておられますか。下記から1つ選び右欄に番号を記入してください。

- ① 自分の意見を述べる機会があることへの期待が大きい
- ② 他の人の意見を聞くことへの期待が大きい
- ③ どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい
- ④ 結論や提案がどのようなものになるのか、結果の期待が大きい
- ⑤ 多くの人と交流したり話をすることへの期待が大きい
- ⑥ その他（

テーマの「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」について伺います。

9. ホームページでの学習資料などをご覧になり、テーマについて十分に熟慮され、ご自身としてテーマについての理解が深まりましたか。

- ① 十分に理解することができた
- ② 大体は理解することができた
- ③ あまり理解することができなかった
- ④ ほとんど理解することができなかった

10. 今から35年後の、2050年において、次の項目に関連して、安心・安全は向上していると思いますか、それとも低下していると思いますか。5段階で評価をしてください。

| | | 向上 ← | ↔ | | | | | → 低下 | | | |
|--------|--------------------------|------|---|---|---|---|---------------------------|------|--|--|--|
| | | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | | | | | |
| 人口減少 | 人口は維持され安全な国土が保全される | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 人口減少により人がすまない地域が荒廃する | | | | |
| 医療 | 医療の発達で健康不安や介護の不安は減る | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 支える人が不足し医療・介護領域で不安が増す | | | | |
| 都市 | コンパクトなまちで生活への不安は小さくなる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 道路や橋の補修が困難で安全を維持できない | | | | |
| コミュニティ | コミュニティ活動が活発化し安心な生活の基盤になる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 格差の拡大でコミュニティが分断され社会的排除が進む | | | | |
| 経済・財政 | 財政的な余裕から安心・安全への投資が継続する | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 長期低迷が続き財政が破綻する | | | | |
| 技術発展 | 安全や安心のための技術発展が進む | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 危険な技術への傾斜により生命が脅かされる | | | | |

| | | | | | | | |
|-----------|-----------------------|---|---|---|---|---|------------------------|
| 人工知能・ロボット | ロボットが人を支える役割を果たし安心が増す | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 仕事を奪われ生活することへの不安が増す |
| 災害 | 災害の予測精度が上がり安全性が向上する | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 災害に備えるだけの財政的、人的余裕がない |
| 環境 | 優れた環境が維持され安全な生活が可能になる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 汚染が進み、安心して生活するにも費用がかかる |

11. 安心・安全を創ることについて、下記のような考え方についてあなたは、賛成ですか、それとも反対ですか。あてはまるもの1つに○をつけてください。

| | | 大いに賛成 | やや賛成 | 普通 | やや反対 | 大いに反対 |
|----|--|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1 | 人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ。 | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 2 | 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である。 | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 3 | 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている。 | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 4 | 他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である。 | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 5 | 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい。 | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 6 | コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている。 | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 7 | 行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる。 | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 8 | 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない。 | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 9 | 安心・安全を創るのは、地の人 [※] の役割であり、風の人は関わらないものである。 | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 10 | 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある。 | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> | <input type="radio"/> |

※「地の人」とは地域活動を支える基礎になる人々で、長く住み、地域にネットワークを持って活動し、地域の変化にも敏感である。地の人には、長い歴史と伝統が蓄積されており、それらを熟知している強みを持つ。また「風の人」とは外から地域に文化をもたらし、考え方をもち活動をする人々で、外から地域に來訪し、その地に離れている。外にある変化を捉え、その地域にある頑なな考え方や心情をときほぐす役割を果たす。

12. あなたのご所属先について1つ選び、右欄に番号を記入してください。

- ① 高等学校（高校生） ② 大学（大学生） ③ 民間企業
 ④ 自治体・政府（公務員） ⑤ NPO・各種団体 ⑥ その他（ ）
 ⑦ 無職

今井 俊介

元裁判官、現弁護士
元兵庫大学教授

I 「割れ窓理論」をご存知ですか

地域社会・コミュニティは脆弱化し、集団が分散し、これが安全性の崩壊へと導いています。最近の刑事学の関心は、今までの原因論（異常人格・劣悪境遇追求）から機会論（環境犯罪論）へ移行しています。「人間」もさることなく、それ以上に犯罪が行われた「場所」に関心が向いています。「機会無ければ犯罪なし」「どういう場所で犯罪が起きるか」ということです。すなわち犯人の処遇（原因の除去）から予防（物的・人的環境の改善）へと関心が移っています。犯罪者から被害者へと視座が転換していると言っても過言ではありません。

こうしたなかでクローズアップされたのが「割れ窓理論」といわれるものです。

地域の一軒の家の窓ガラスが割れていてそれが何日間か修繕されずに放置されていたとします。このような地区は良い意味での住民の縄張り意識、当事者意識が低く、秩序維持に無関心の場合が多いです。犯行の機会を求めて移動している犯罪者から安全性の意識の希薄性に目をつけられ、危害が発生し拡大します。わずか一枚の窓ガラスから地域共同体の崩壊に繋がる恐れが出てきます。悪を導く小さな芽を早期に、地域挙げて摘んでおく。これこそ犯罪から身を守るイロハです。警察・学校・地域等と情報を共有化し良い意味での小さなおせっかいを積み重ね、地域全体を清潔にすることが必要です。一枚の割れ窓を修理せず放置しておくことが、犯罪者に絶好の機会を与えることになるのです。悪いのは犯人だけではなく、このような機会を作り、またそれを放置し、見逃していた我々被害者も悪いのです。

今井 俊介

元裁判官、現弁護士
元兵庫大学教授

Ⅱ加古川市に「刑務所」があるのを御存知ですか

加古川市には、犯罪傾向の進んでいない受刑者を収容する一般区と交通事犯の受刑者を収容する交通区からなる刑務所があり、特に後者は東の市原刑務所に対比し西の「交通刑務所」として知られています。

古く江戸時代、人足寄場といわれる無宿者・前科のある者・自由刑の受刑者などを収容している施設がありました。

江戸には大火が多発したものの、人足寄場は厳重に管理・施錠されているためその都度収容者に多数の死傷者がでました。

あるとき牢の最高責任者（石出帯刀）が、災害時独断で、囚人たちに「戻れば罪一等を減ずる 戻らなければ死罪」という条件で一時釈放しました。多数の囚人が社会へ出て、驚いた市民と衝突し混乱したもののおおむね好評でありました。これは切放（きりはなち）と呼ばれ、後日監獄法（旧）に立法化され今日に至っています。関東大震災、太平洋戦争のころよく実施されたようです。これをさらに明確にし発展させた法律が「刑事収容施設及び被収容者の処遇に関する法律」といわれるものです。これによると

施設の長は①地震・火災等の災害の際被収容者を安全な場所に護送することができる。②それができないときは施設から解放する（被収容者は安全な場所を求めて独自に行動しなければならない）。③解放された被収容者は必要がなくなればすみやかに指定された場所に戻らなければならない（出頭・不出頭の効果は定められていない）。とされています（同法83条）。最近では東日本大震災の時実施されました。

あくまでも実現しないことを望みますが、もし加古川刑務所に非常事態が発生すれば、受刑者服を着た受刑者たちが加古川市内周辺を安全な場所を求めて移動するということが起こりえます。

しかし上記のとおりこれは法律に根拠を置くもので（脱走ではない!）、刑務所のある街の宿命ともいえます。受刑者の持つ人権をしっかり理解し、極度に恐れたり、危害を加えたりしないようにして欲しいと思います（東播磨地域の住民として頭の片隅に入れておいて下さい）。

資料集 加古川地域のちから～安心・安全を創る

テーマの「加古川地域のちから～安心・安全を創る」を熟慮する上で、重要と思われる点、また安心・安全を創ることを熟慮するために要する、加古川地域を中心としての、基礎的な状況について理解を深めるために資料を提示します。
参考のためのページは、**関連リンク集**にも提示されています。

目 次

1.加古川地域の安心・安全について

- (1) 現在の安心・安全 2
 - ①交通事故の現状 2
 - ②犯罪の現状 4
 - ③災害の現状 5

- (2) 将来の安心・安全
 - ①災害の発生 7
 - ②加古川地域の被害 9
 - ③その他の災害 10

- (3) 将来の生活での安心・安全 11
 - ①人口の減少と高齢化 11
 - ②インフラストラクチャーの老朽化 13

2.「加古川地域のちから」について

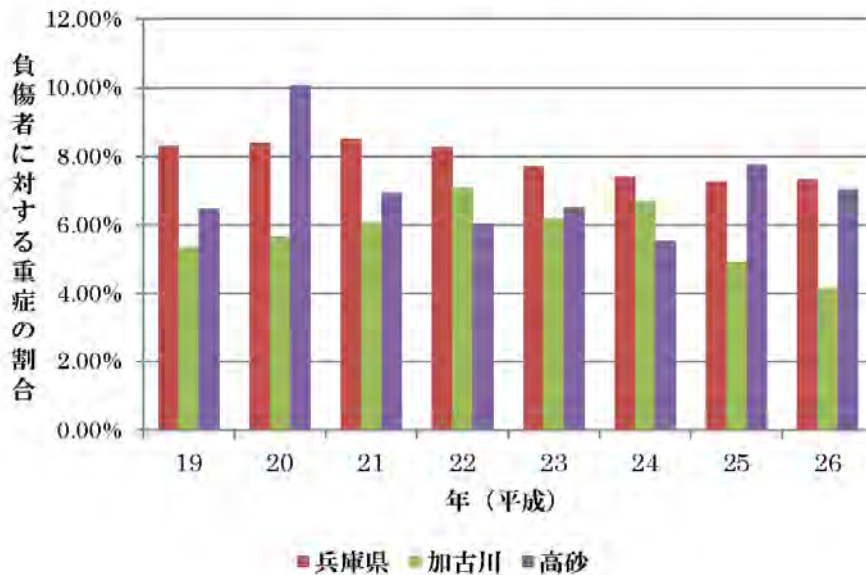
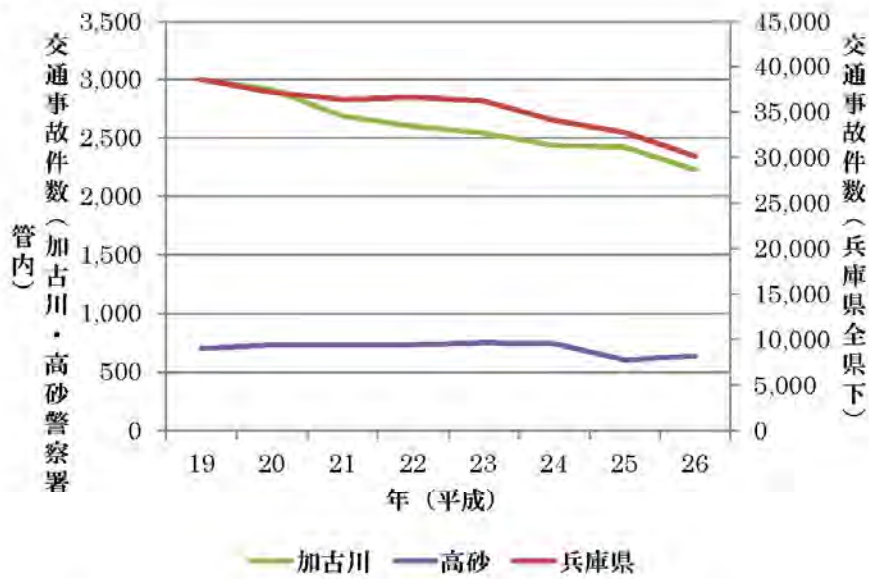
- (1) 外形的なちから 17
 - ①財政状況 17
 - ②働く場所の集積 19

- (2) ソーシャル・キャピタル 20
 - ①ソーシャル・キャピタルとは 20
 - ②住民の特徴 21

1.加古川地域の安心・安全について

(1) 現在の安心・安全

①交通事故の現状



加古川警察署管内の交通事故件数は、平成 19 年に 2,991 件から、減少傾向にあり、平成 26 年には、2,226 件にまで減少をしています。兵庫県全体でも減少傾向にありますが、高砂警察署管内では、平成 24 年までやや増加の傾向にありました。

交通事故の特徴を示すために、次に、負傷者数に占める重傷者の割合を示します。加古川警察署管内の事故は、重傷者の割合は兵庫県全体と比べ小さい傾向があります。所管する高速道路が少なく大規模な交通事故が少ないことが理由として考えられます。

加古川警察署管内、高砂警察署管内での、平成 27 年 1 月～9 月の交通事故の状況は次の通りです。車両同士の事故が加古川署管内では全体の 2/3 を、高砂署管内では 1/2 を占めています。

| | | 加古川警察署管内(27年9月) | | | 高砂警察所管内 (27年9月) |
|--------|-----|-----------------|------|----|--------------------|
| | | 件数 | 負傷者 | 死者 | 件数 |
| 人対車両 | 横断中 | 61 | 62 | 1 | 29 |
| | その他 | 57 | 57 | 2 | |
| 自転車対車両 | 出会頭 | 263 | 267 | 1 | 132 |
| | その他 | 130 | 131 | 1 | |
| 車両相互 | 追突 | 391 | 524 | 0 | 131 |
| | 出会頭 | 326 | 401 | 0 | 79 |
| | その他 | 270 | 321 | 0 | 70 |
| 車両単独 | | 26 | 24 | 3 | 24 |
| 列車 | | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 合計 | | 1,542 | 1787 | 8 | 466 |

同じ統計を用い、事故に遭った側（交通弱者）の事情は下記の通りです。高齢者が被害に遭う事故は、加古川署管内では 1,524 件中 428 件で 28.0%、高砂署管内では 466 件中 141 件で 30.3%となり、その割合はと高いことが明らかになります。

| | 加古川警察署管内(27年9月) | | | 高砂警察所管内(27年9月) | | |
|------------|-----------------|-----|----|----------------|-----|----|
| | 件数 | 負傷者 | 死者 | 件数 | 負傷者 | 死者 |
| 歩行者 | 118 | 119 | 3 | — | — | — |
| 自転車 | 403 | 408 | 2 | 141 | 142 | 0 |
| 原付・自動二輪 | 295 | 305 | 1 | — | — | — |
| 子ども(15歳以下) | 92 | 96 | 0 | — | 60 | — |
| 高校生 | 91 | 97 | 1 | — | 17 | — |
| 高齢者 | 428 | 489 | 4 | 141 | 106 | 0 |

詳しい情報を見たい方は、兵庫県警察本部、または加古川警察署、高砂警察署のホーム

ページをご覧ください。

- <https://www.police.pref.hyogo.lg.jp/sonota/toukei.htm> (兵庫県警各種統計)
- <https://www.police.pref.hyogo.lg.jp/ps/30kakogawa/index4.htm> (加古川警察署統計・マップ)
- <http://www.police.pref.hyogo.lg.jp/ps/31takasago/index4.htm> (高砂警察署統計・マップ)

②犯罪の現状

| | 加古川 | | | | 高砂 | | | |
|-----------|-------------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|------------|------------|
| | 25年 12月末 | 26年 12月末 | 26年 8月末 | 27年 8月末 | 25年 12月末 | 26年 12月末 | 26年 8月末 | 27年 8月末 |
| 刑法犯総数 | 4,567 | 3,865 | 2,605 | 2,330 | 1,157 | 1,115 | 776 | 597 |
| 街頭犯罪・侵入犯罪 | 3,077 | 2,517 | 1,716 | 1,431 | 830 | 778 | 558 | 391 |

| | 稲美町 | | | | 播磨町 | | | |
|-----------|-------------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|------------|------------|
| | 25年 12月末 | 26年 12月末 | 26年 8月末 | 27年 8月末 | 25年 12月末 | 26年 12月末 | 26年 8月末 | 27年 8月末 |
| 刑法犯総数 | 387 | 260 | 187 | 142 | 345 | 321 | 217 | 179 |
| 街頭犯罪・侵入犯罪 | 238 | 139 | 108 | 72 | 237 | 223 | 159 | 130 |

加古川地域の各市町別の刑法犯総数について、加古川市は25年、26年では15%、25年と26年の同期間比で10%減少をしています。全ての地域で犯罪件数は減少傾向にあります。兵庫県全体を見ても、平成26年中の刑法犯は、64,911件で、前年の70,532件に比べて8.0%減少しています。また、街頭犯罪・侵入犯罪が刑法犯の2/3を占めています。

では、犯罪の特徴を明らかにするために、その詳細を示してみましよう。

| | 加古川 | | | | 高砂 | | | |
|--------|-------------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|------------|------------|
| | 25年 12月末 | 26年 12月末 | 26年 8月末 | 27年 8月末 | 25年 12月末 | 26年 12月末 | 26年 8月末 | 27年 8月末 |
| 路上強盗 | 5 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| ひったくり | 14 | 10 | 6 | 14 | 2 | 3 | 3 | 7 |
| 車上ねらい | 345 | 239 | 165 | 196 | 93 | 71 | 46 | 45 |
| 部品ねらい | 296 | 167 | 111 | 88 | 55 | 50 | 29 | 28 |
| 自動車盗 | 37 | 29 | 18 | 7 | 15 | 7 | 5 | 6 |
| オートバイ盗 | 158 | 130 | 82 | 34 | 41 | 49 | 43 | 21 |
| 自転車盗 | 1,272 | 1,127 | 805 | 507 | 305 | 274 | 187 | 133 |
| 空き巣 | 106 | 105 | 48 | 69 | 29 | 30 | 24 | 23 |
| 忍込み | 33 | 36 | 26 | 59 | 18 | 18 | 15 | 1 |

| | 稲美町 | | | | 播磨町 | | | |
|--------|-------------|-------------|------------|------------|-------------|-------------|------------|------------|
| | 25年 12月末 | 26年 12月末 | 26年 8月末 | 27年 8月末 | 25年 12月末 | 26年 12月末 | 26年 8月末 | 27年 8月末 |
| 路上強盗 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| ひったくり | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 3 |
| 車上ねらい | 73 | 25 | 20 | 17 | 25 | 23 | 16 | 14 |
| 部品ねらい | 27 | 12 | 8 | 2 | 35 | 30 | 22 | 18 |
| 自動車盗 | 14 | 7 | 4 | 1 | 7 | 2 | 2 | 0 |
| オートバイ盗 | 14 | 4 | 4 | 3 | 14 | 4 | 4 | 3 |
| 自転車盗 | 10 | 12 | 9 | 4 | 58 | 70 | 52 | 28 |
| 空き巣 | 10 | 8 | 7 | 5 | 14 | 10 | 6 | 6 |
| 忍込み | 1 | 7 | 6 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 |

特に加古川市は、自転車盗が多いことがわかります。稲美町や播磨町は車上ねらいなど、自動車を対象とする犯罪が多くなっています。重大な犯罪で報道されることもありますが、加古川地域では、自転車や自動車を対象とする路上での窃盗などの軽犯罪が多いとおもわれます。なお、詳しい情報を見たい方は、兵庫県警察本部のホームページをご覧ください。

③災害の現状

穏やかな瀬戸内海に面する加古川地域は、一般には自然災害が少ない、と認識をされているようです。しかし、梅雨前線に伴う豪雨による土砂災害、台風に伴う高潮、洪水などにも見舞われた過去があります。

現在、各地域では、ハザードマップを作製し、公開しています。ハザードマップは、過去の災害や地形などを元にして、自然災害による被害を予測し、その範囲を地図化したものです。予測される災害の発生地点、被害の拡大範囲および被害程度、さらには避難経路、避難場所などの情報が図示されます。ハザードマップは、津波や災害別に作成されているケースもあります。次ページの図は、加古川の浸水想定区域図になります。



加古川地域の市町のハザードマップは、下記のページを参考にしてください。

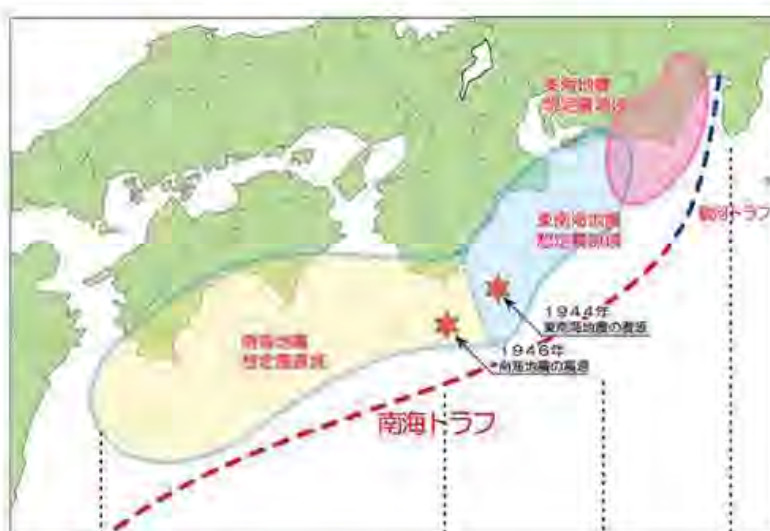
- <http://www.hazardmap.pref.hyogo.jp/> (兵庫県)
- <http://www.city.kakogawa.lg.jp/hp/hazardmap/index.html> (加古川市)
- <http://www.city.takasago.hyogo.jp/index.cfm/16,0,152,823,html> (高砂市)
- http://www.town.hyogo-inami.lg.jp/category_list.php?frmCd=1-2-8-2-0 (稲美町)
- http://www.town.harima.lg.jp/kurashi/kurashi_bosai/kurashi_bosai_bosai/kurashi_bosai_bosai_bosaimap.html (播磨町)

(2) 将来の安心・安全

①災害の発生

最も懸念されます、南海トラフ周辺を震源とする地震（南海地震、東南海地震、東海地震）の、今後 10, 30, 50 年以内の地震発生確率は次の通りです。これらはプレート境界においてほぼ一定期間で発生すると見込まれる巨大地震です。そのため、過去の地震発生状況からその周期を割り出し、現在のひずみ具合を調査することで発生する確率を計算することができます。

表から、少なくとも 30 年以内では、70%の確率で発生する、と考えられています。



| 領域または地震名 | 長期評価で予想した地震規模（マグニチュード） | 地震発生確率 | | | 地震後経過率（注2） | 平均発生間隔（上段） |
|----------|------------------------|--------|-------|-------|------------|----------------------------|
| | | 10年以内 | 30年以内 | 50年以内 | | 最新発生時期（下段：ホアッ過程を適用したものを除く） |
| 南海トラフ | M8～M9 クラス | 20%程度 | 70%程度 | 90%程度 | 0.78 | 次回までの標準的な値 88.2年 |
| | | | | | | 69.0年前 |

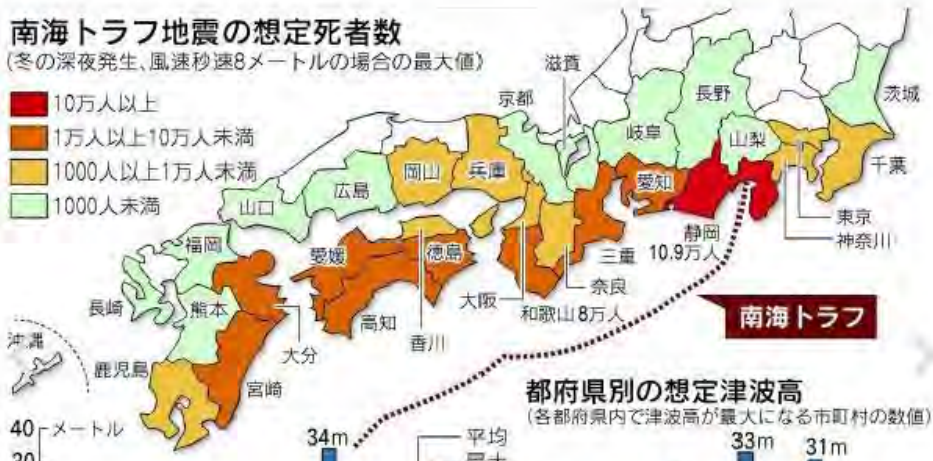
地震調査研究推進本部事務局(文部科学省研究開発局地震・防災研究課)

それらが連動して発生する可能性もあり、その場合は、地図のように関東から九州にかけての広い範囲で多大な被害が発生すると見込まれます。

南海トラフ地震の想定死者数

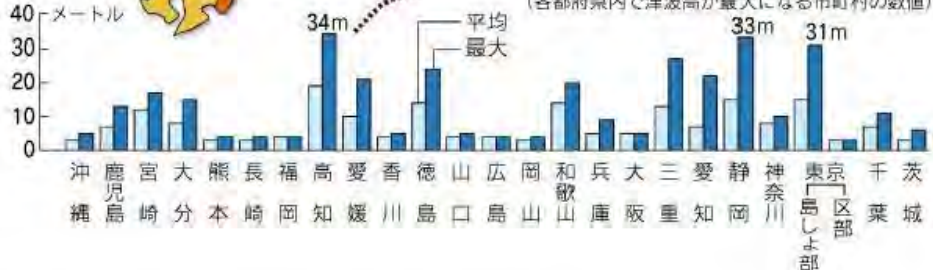
(冬の深夜発生、風速秒速8メートルの場合の最大値)

- 10万人以上
- 1万人以上10万人未満
- 1000人以上1万人未満
- 1000人未満



都府県別の想定津波高

(各都府県内で津波高が最大になる市町村の数値)



経済的被害

| | 想定東海地震、東南海地震、 南海地震の震源域が同時に 破壊される場合 | (参考) 東南海地震、南海 地震の震源域が同時に破壊 される場合 | (参考) 想定東海地震 |
|---|--|--|--------------|
| 直接被害 (個人住宅の被害、企業施設の被害、 ライフライン被害等) | 約4.0兆~約6.0兆円 | 約2.9兆~約4.3兆円 | 約1.9兆~約2.6兆円 |
| 間接被害 | 約1.3兆~約2.1兆円 | 約9兆~約1.4兆円 | 約7兆~約1.1兆円 |
| 生産停止による被害 | 約5兆~約8兆円 | 約4兆~約5兆円 | 約3兆円 |
| 東西幹線交通寸断による被害 | 約0.5兆~約2兆円 | 約0.3兆~約1兆円 | 約0.5兆~約2兆円 |
| 地域外等への波及 | 約7兆~約1.1兆円 | 約5兆~約8兆円 | 約4兆~約6兆円 |
| 合計 | 約5.3兆~約8.1兆円 | 約3.8兆~約5.7兆円 | 約2.6兆~約3.7兆円 |

より詳しい資料が必要な方は、下記をご参照ください。

- <http://www.jishin.go.jp/> (地震調査研究推進本部)
- <http://www.jma.go.jp/jma/menu/menuknowledge.html> (気象庁)
- <http://www.bousai.go.jp/jishin/index.html> (内閣府防災情報)

②加古川地域の被害

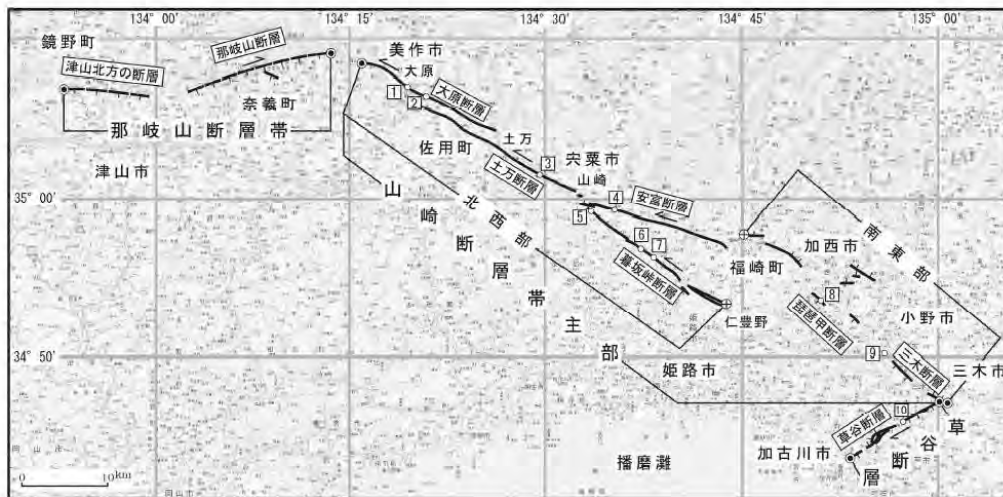
南海トラフを震源とする巨大地震とそれに伴う津波が発生した場合の、加古川地域の被害想定結果は次の通りです。

| | 加古川市 | 高砂市 | 稲美町 | 播磨町 |
|--------------|--------|--------|--------|--------|
| 震度（最大面積を占める） | 震度 6 弱 | 震度 6 弱 | 震度 6 弱 | 震度 6 弱 |
| 最大津波水位（m） | 2.2 | 2.3 | | 2.2 |
| 全壊棟数 | 3314 | 1422 | 230 | 354 |
| 半壊棟数 | 16,558 | 8381 | 1,744 | 1,685 |
| 死者数（冬 18 時） | 212 | 171 | 14 | 18 |
| 負傷者数（冬 18 時） | 2,357 | 1,240 | 337 | 238 |

詳細な内容については、下記のページから取得することができます。

○ <https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk38/jishintsunamihigaisoutei.html>（兵庫県／防災）

南海トラフを震源とする巨大地震以外にも加古川地域を通るような断層もたらす自身の危険性もあります。東日本大震災と同様のトラフ型の地震ではなく、阪神・淡路大震災のような直下型の断層が加古川地域にあります。それは山崎断層帯にある草谷断層で、三木市から加古川市にかけて分布する、長さ 13km の断層です。



山崎断層（主部）の活動頻度は 1800～2000 年であり、歴史に残る最新の活動が 868 年の播磨国地震であることから、今後 30 年以内の地震発生確率は 0.09%～1.0%です。また

加古川地域直下にある草谷断層では、6500年程度が活動頻度され、30年以内の地震発生確率はほぼ0.0%です。とはいえ、直下型地震ですので、その被害は相当に大きいと考えられます。下表がその予測です。

| | 加古川市 | 高砂市 | 稲美町 | 播磨町 |
|--------------|---------|--------|--------|--------|
| 震度（最大面積を占める） | 震度7 | 震度7 | 震度6強 | 震度6強 |
| 全壊棟数 | 121,882 | 45,825 | 17,010 | 12,800 |
| （全壊率） | 9.69 | 11.5 | 3.48 | 6.23 |
| 死者数（午前5時） | 748 | 331 | 38 | 51 |
| 負傷者数（午前5時） | 4,288 | 1,732 | 301 | 423 |

詳細な内容については、下記のページから取得することができます。

- <https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk38/jishinhigaisoutei.html>（兵庫県／防災）

③その他の災害

安心・安全を脅かすのは自然災害だけではなく、人的な災害も存在します。

加古川地域には、沿岸地域に各種の大型工場が林立しており、コンビナート災害を含む工場災害や環境汚染などが懸念されます。工場災害などは人のミスで生じるものや、意図的な妨害（サボタージュ）、経済至上主義から安全への配慮がなされていないことなど、人が関わって発生します。これらが人的災害です。安心・安全のために工場の周囲に緩衝帯を設けたり、自治体や住民との間で安全協定が結ばれたりもします。また、人的災害には、テロリズムも含まれます。その他、国外から人や家畜に有害で危険をもたらすウイルスや病原菌、生物が持ち込まれることも、人の手を介する人的災害といえるでしょう。

さらに、技術の発達により、安心・安全が増す一方で、その逆も存在します。ICT（情報通信技術）により、便利になった半面、プライバシーの保護などが、故意にではなくても破られることがあり、私たちの生活の安心・安全を脅かしています。これも新たな人的災害といえるでしょう。

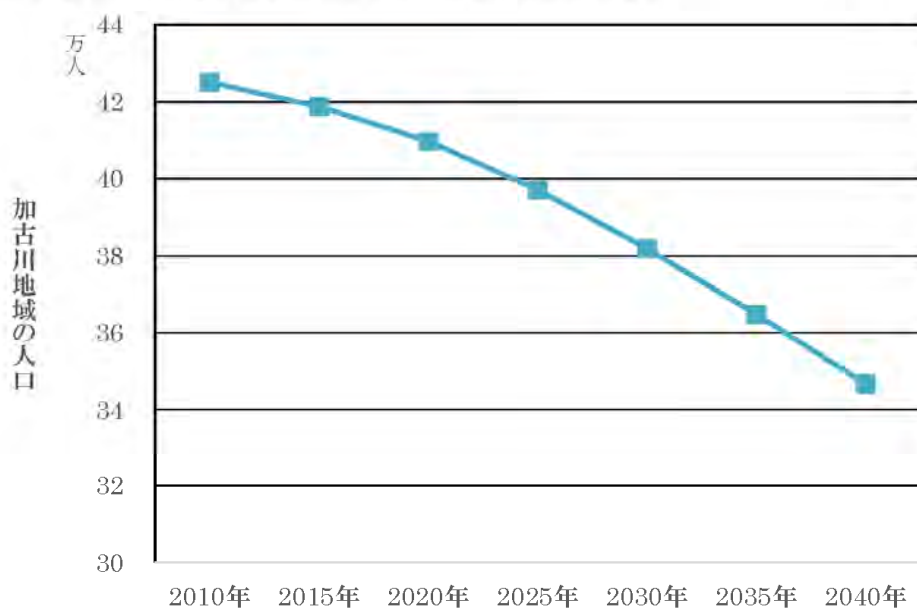
他にも事例を知りたい方は、次のようなページを参照されてはいかがでしょうか。

- <http://www.sozogaku.com/flkd/>（失敗知識データベース）
- <http://www.npa.go.jp/cyber/deai/index.html>（警視庁サーバー犯罪対策）
- <https://www.seirogan.co.jp/fun/infection-control/infection/pandemic.html>（大幸薬品健康情報局）
- <http://www.mhlw.go.jp/kinkyu/j-terr.html>（厚生労働省「国内の緊急テロ対策関係」ホームページ）

(3) 将来の生活での安心・安全

①人口の減少と高齢化

日本に居住される方の人口の減少が懸念されています。加古川地域の人口の予測は次の通りです。2040年には、加古川地域の人口は現在よりも8万人も減少する、という予測が出ています。これは現在6人の中で1人減ることになります。



国立社会保障・人口問題研究所

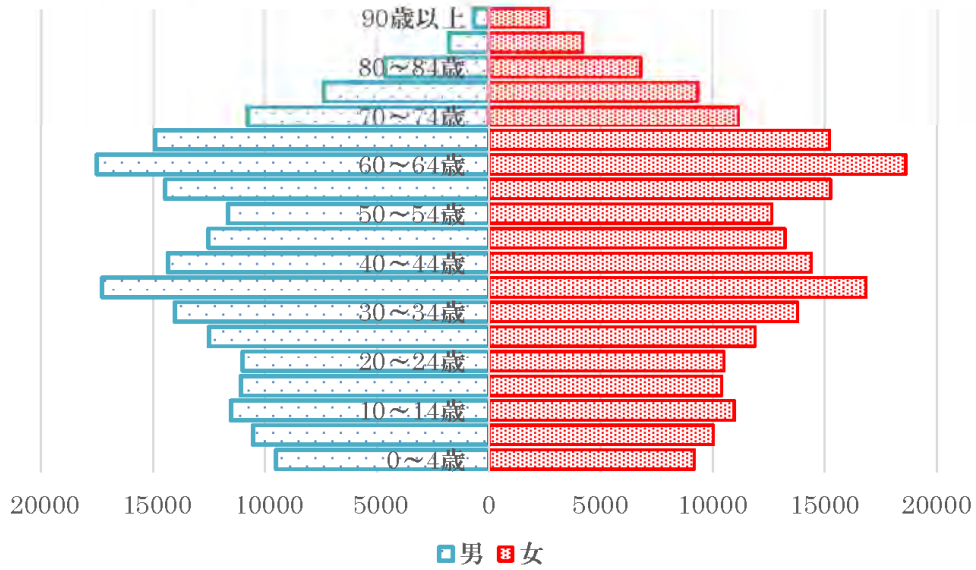
| | 2010年 | 2015年 | 2020年 | 2025年 | 2030年 | 2035年 | 2040年 |
|-------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 加古川市 | 266,937 | 264,051 | 259,251 | 252,186 | 243,508 | 233,546 | 222,976 |
| 高砂市 | 93,901 | 92,201 | 90,010 | 87,050 | 83,529 | 79,619 | 75,518 |
| 稲美町 | 31,026 | 29,963 | 28,815 | 27,387 | 25,746 | 23,974 | 22,193 |
| 播磨町 | 33,183 | 32,525 | 31,678 | 30,509 | 29,124 | 27,599 | 26,045 |
| 加古川地域 | 425,047 | 418,740 | 409,754 | 397,132 | 381,907 | 364,738 | 346,732 |

いずれの市町とも人口は減少する傾向にあります。現在、いずれの市町も、まち・ひと・しごと総合戦略を立案、人口の減少を食い止めるような政策を考えています。

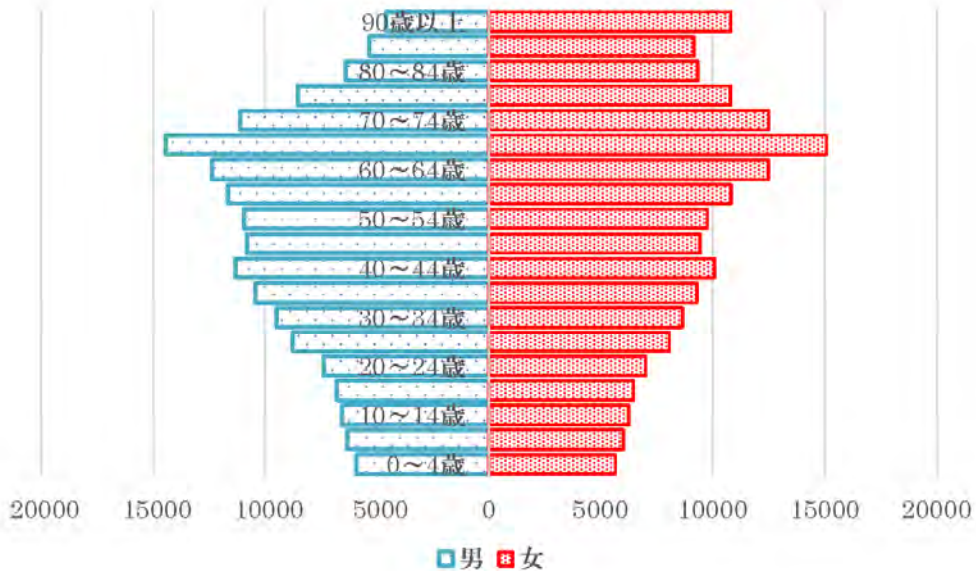
もう一つの問題は、高齢化です。2010年と2030年の加古川地域の人口ピラミッドを示しておきます。

2010年では、団塊の世代が高齢者となりますが、30年後の2040年には、団塊の世代の子どもの世代（団塊ジュニア）が高齢者になります。2040年の人口ピラミッドが「壺型」であることに注目してください。高齢者が、幼少の方よりも多い時代が到来します。

2010年



2040年



人口が減少する場合、対人サービス（教育、医療、福祉など）を担う人材が不足する他、道路や橋など、インフラストラクチャーを維持するための人材も不足することになります。その場合、道路の陥没や橋の崩落などの事故の危険性が拡大します。また大きな災害からの復興が遅れたり、救援のためのボランティアなども少なくなったりする可能性があります。人口は安心、安全を確保するために必要な要素であったりします。

人口問題について、さらに詳しい状況は、下記のページをご覧ください。

○ <http://www.ipss.go.jp/index.asp>（国立社会保障・人口問題研究所）

②インフラストラクチャーの老朽化

インフラストラクチャー（インフラ）とは、社会資本と訳されます。道路や橋梁、公園、鉄道、上下水道など、経済活動や私たちの生活、つまり社会にとって欠かすことのできない設備や施設のことをいいます。

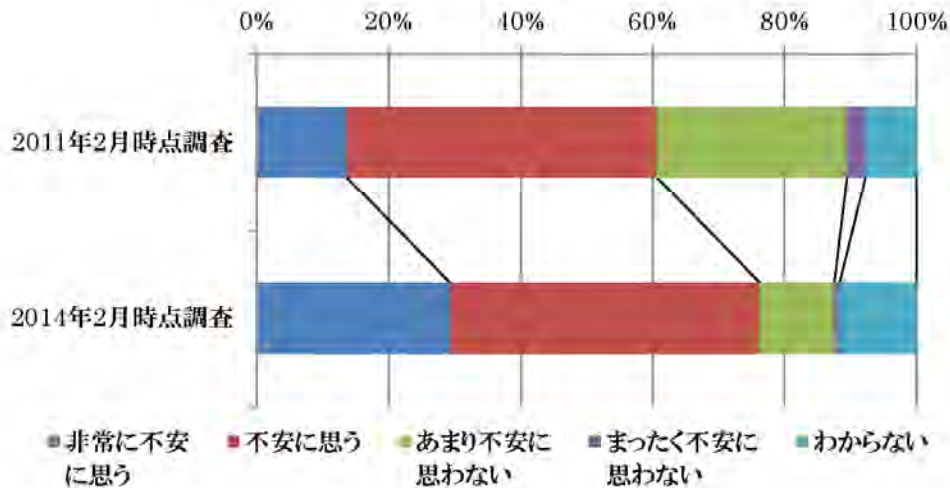
このインフラの老朽化が課題となっています。下の写真は、大惨事となった2012年12月の中央道笹子トンネル(山梨県大月市)の天井板崩落事故の写真です。高度経済成長期に建設された道路、橋梁などの老朽化への懸念が現実のものとなったのです。



国土交通省 中央自動車道笹子トンネル天井板の落下事故について
(第42回基本政策部会資料抜粋 (2013年2月6日))

今、インフラについての関心も高まっています。インフラの老朽化についての国土交通省のアンケート結果を示しておきます。3年間で、非常に不安と思う人が2倍以上に増加をしています。安心、安全ではない、と思う人が増えているのです。

老朽化が進行するなかで社会インフラの今後について不安に思う程度



(平成 25 年版 国土交通白書)

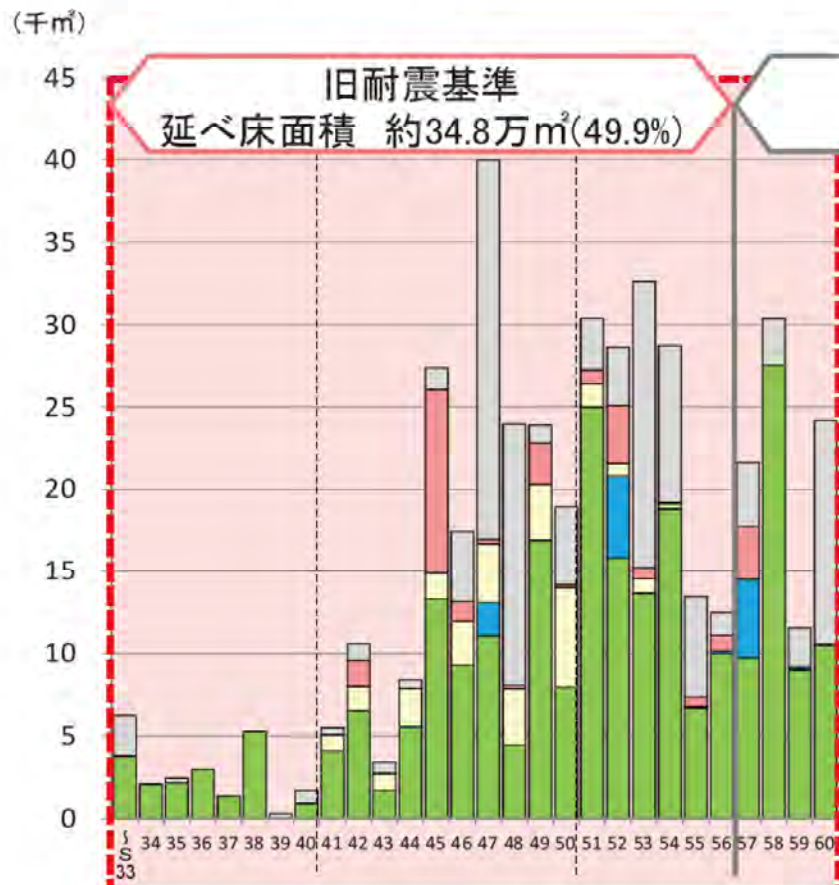
建設後 50 年以上経過する社会資本の割合

| 種類 | 対象 | 2013 年 3 月 | 2023 年 3 月 | 2033 年 3 月 |
|-----------------------|---|------------|------------|------------|
| 道路橋 (橋長 2m 以上) | 40 万の橋 (全体では 70 万の橋があるが 30 万橋は建設年度が不明) | 約 18% | 約 43% | 約 67% |
| トンネル | 約 1 万本 (約 250 本は建設年度が不明のため、除く) | 約 20% | 約 34% | 約 50% |
| 河川管理施設 (国管理の水門等) | 1 万か所。(このうち 1000 箇所は建設年度が不明であるが、50 年以上経過していることが明らか。) | 約 25% | 約 43% | 約 64% |
| 下水道管きょ | 総延長約 45 万 km。(建設年度が不明な 1.5 万 km を含むが明らかに 30 年以上を経過しており、これを案分した) | 約 2% | 約 9% | 約 24% |
| 港湾岸壁 (水深 -4.5m 以深) | 約 5000 施設。(建設年度が不明な 100 施設を除く) | 約 8% | 約 32% | 約 58% |

インフラについては、建設後 50 年程度で、老朽化が進み、維持が難しくなると言われます。上の表は日本全体での、建設後 50 年を経過するインフラがどの程度あるかを示しています。相当の量のインフラが老朽化し、維持が難しくなることが予想されます。

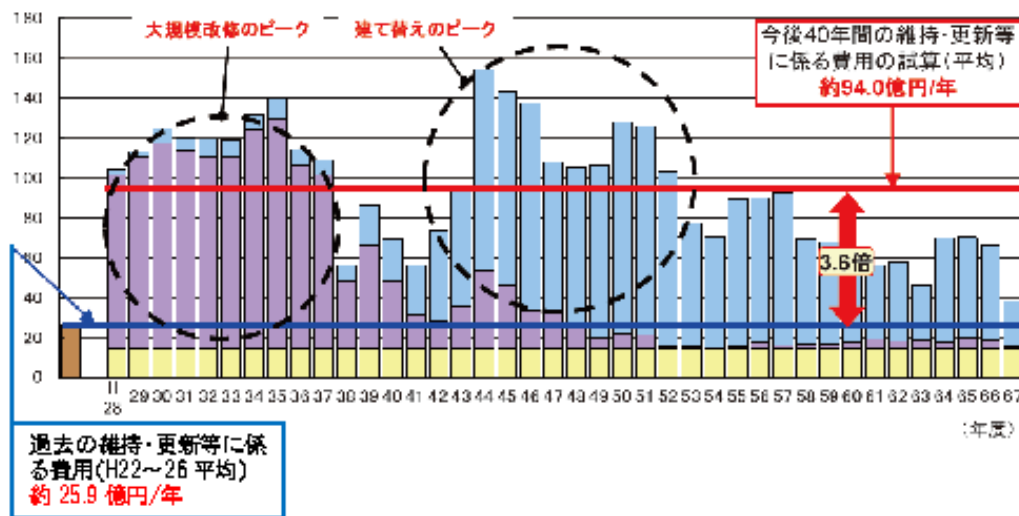
これは、加古川地域でも同様です。加古川地区は、高度成長期に工業都市として発展し

たこともあり、人口が急増する昭和40年代から、市民向けの公的な建物が数多く建設されました。下記図は加古川市での昭和60年までの公共施設の建設状況です。全体の公共施設の2/3を占めています。これらが建設後30年以上を経過しています。今後、維持にもお金がかかります。



■学校教育施設 ■市営住宅 ■行政系施設 ■スポーツ・レク施設 ■その他
(加古川市の公共施設等を取り巻く現状と課題)

加古川市では、今後、これまで建設された公共施設の維持経費に、従来の4倍近い金額を要すると試算をしています。実際には、それ以前に、維持、管理のための方法がとられたり、一部の施設やインフラを取り壊してこれ以上のコストがかからないようにしたりすると思われます。取り壊されたインフラや設備が、地域の安全にとって課題となることも懸念されるのです。



(加古川市の公共施設等を取り巻く現状と課題)

さらに詳しいことを知りたい方は、下記のページや資料をご覧ください。

- <http://www.mlit.go.jp/statistics/file000004.html> (国土交通白書のページ)
- http://www.city.kakogawa.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/3/genjyotokada_i.pdf (加古川市の公共施設等を取り巻く現状と課題《PDF ファイル》)
- http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/point/sosei_point_mn_000003.html (国土交通省 社会資本の老朽化対策に関する国土交通省の主な取組)
- http://www.zenken.com/kensyuu/kousyuukai/H26/609/609_tanaka.pdf (道路の老朽化対策の本格実施について《PDF ファイル》)

2. 「加古川地域のちから」について

加古川地域のちから、というテーマですが、「ちから」=Power とは、モノを動かす原動力であり、環境や他者へ働きかける力と考えることができます。加古川のちから、とは加古川（地域）が持つ、加古川地域を変革するための影響力ということもできます。主として市民が加古川地域をよりよくするために、つまり内への方向への影響力を想定しています。その源泉として具体的には、地域に存する NPO やボランティアなどの組織、人材などの地域の資源、いわゆるソーシャル・キャピタルとされるネットワークや互恵に基づく関係、「ちから」を発揮するために必要な金融や制度、機関などが考えられます。それらをいかに組み合わせ、実現可能な方法を導き出すのが熟議に期待されると思われま

(1) 外形的なちから

① 財政状況

平成 26 年度の決算（最新のデータ）に基づく、加古川地域の市町の財政状況を示しておきます。加古川地域の自治体の場合、比較的堅調な財政を維持しています。

（金額：100 万円）

| | 歳入総額 | 歳出総額 | 基金残高 | 財政調整基金 | 地方債現在高 |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 加古川市 | 78,478 | 77,689 | 18,282 | 5,344 | 77,723 |
| 高砂市 | 35,996 | 34,717 | 4,993 | 2,646 | 33,736 |
| 稲美町 | 10,054 | 9,460 | 4,264 | 2,442 | 8,469 |
| 播磨町 | 11,227 | 10,315 | 7,032 | 4,704 | 8,264 |

(%)

| | 経常収支比率 | 実質公債費比率 | 将来負担率 |
|------|--------|---------|--------|
| 加古川市 | 91.1 | 5.9 | -1.5 |
| 高砂市 | 86.4 | 9.6 | 76.3 |
| 稲美町 | 86.0 | 7.5 | 11.8 |
| 播磨町 | 91.4 | 2.7 | -146.5 |

歳入は、それぞれの自治体の 1 年間の収入になります。ここでは、一般会計という、いわゆる市役所や町役場のしごとの中核となる事業に必要なお金に関する部分を対象にしています。加古川市は 780 億円もの仕事をしていることがわかります。皆さんへの税金や公債という借金、さらに国や県からの支出金を積み上げたものが歳入になります。逆に、歳出は 1 年間の支出になります。基金、というのは貯蓄です。基金にもいろいろ種類があるのですが、財政調整基金は、家計簿での普通預金のようなもので、税金などの収入が足り

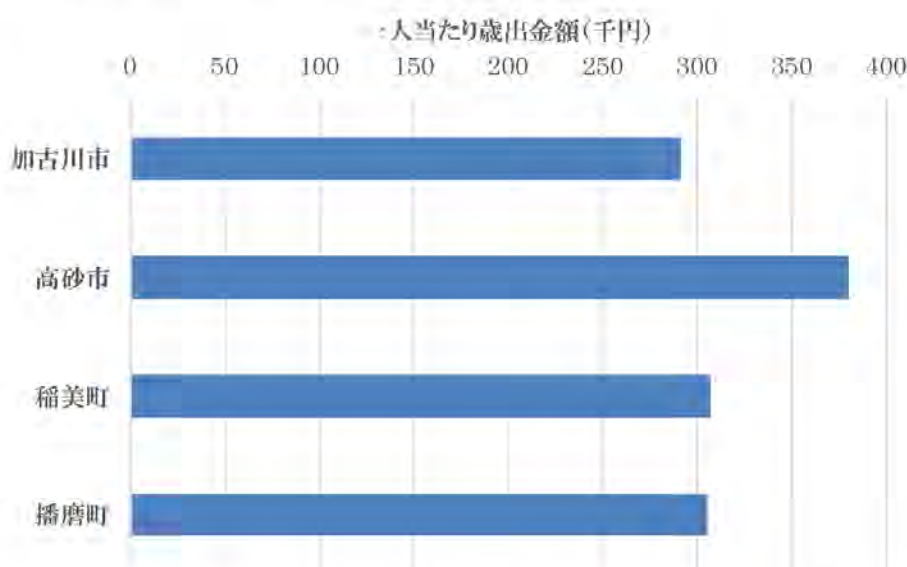
ない場合、これを取り崩してお金を賄います。**地方債**は借金に相当するものです。

これらの数字から作成した指標が二段目の表です。

経常収支比率は、経常的経費に経常一般財源がどの程度充てられているかを示した比率です。経常的経費は家計での必要経費（例えば家賃や光熱水費、食費など）です。経常一般財源というのは、臨時収入以外で入ってくるお金、ということです。この割合が低ければ、臨時の支出があっても柔軟に対応できることとなります。90%であれば十分とされますので、加古川地域の市町は柔軟に対応できるだけの財政状況といえます。

次に、**実質公債費比率**ですが、毎年、実際に返さなければならない元利償還金が、標準財政規模と呼ばれる通常水準の行政活動を行う場合に必要な金額に対する割合です。家計で例えれば、毎年の借金返済額が普通の家庭での家計の規模に対する割合を示しています。つまり、これが大きければ、借金返済が大変、ということになります。国では、これが25%を超えれば、財政再建のための計画策定を行わなければならない、と定めています。加古川地域で一番高い高砂市も9.6%ですから、過大な借金返済となっておりません。

将来負担率は、家計では、全ての借金の総額や必ず出て行くであろう金額から預貯金を差し引いた、実質的な借入額を先ほどの普通の家庭での家計の規模で割ったもので、将来どうしても必要になる返済が家計にとってどれだけ重圧になるかを示すものです。これが350%を超えれば赤信号です。加古川地域は、播磨町がマイナスの数字を示すなど、赤信号には相当に遠いことがわかります。



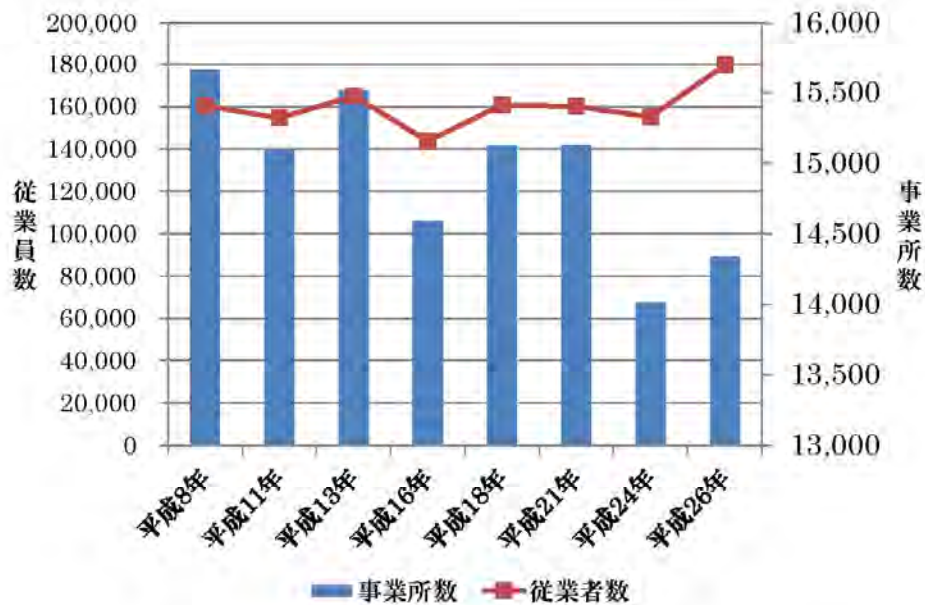
一人当たりの歳出総額は、高砂市がやや高く、38万円あまりですが、加古川市、稲美町、播磨町は30万円程度、となっています。

現在は、ますます良好といえる加古川地域の市町の財政状況です。しかしこれがこのま

ま将来も継続する保証はありません。市民がこれからもお金の使い道をチェックする姿勢が必要になります。

○ https://web.pref.hyogo.lg.jp/pa05/pa05_000000120.html（県内市町の財政状況）

②働く場所の集積



働く場所として、事業所数と従業者数の推移を示します。加古川地域の事業所数は、やや減少傾向にありますが、従業者数は必ずしも減少しておらず、比較的雇用としては恵まれていると考えられます。これは兵庫県全体でも同じ傾向が見られます。

産業分類別の推移を示しておきます。

加古川地域の産業構造では、第3次産業が中心となる傾向が見られます。しかしながら、製造業を中心として、第2次産業が盛んであることも特徴と言えるでしょう。これは製造業が多く集積をしているためです。比較のために、平成24年度の兵庫県の産業構造を示しておきます。

製造業は、サービス業全般と比べますと生産性が高い（従業員一人あたりの付加価値額が高い、という意味になります）ことが知られています。そのため、所得面でも有利とされます。雇用の面ではちからがあるのかもしれませんが。



データの詳細は、下記のページをご参照ください。

○ https://web.pref.hyogo.lg.jp/stat/cate3_708.html (兵庫県統計、経済センサス)

(2) ソーシャル・キャピタル

① ソーシャル・キャピタルとは

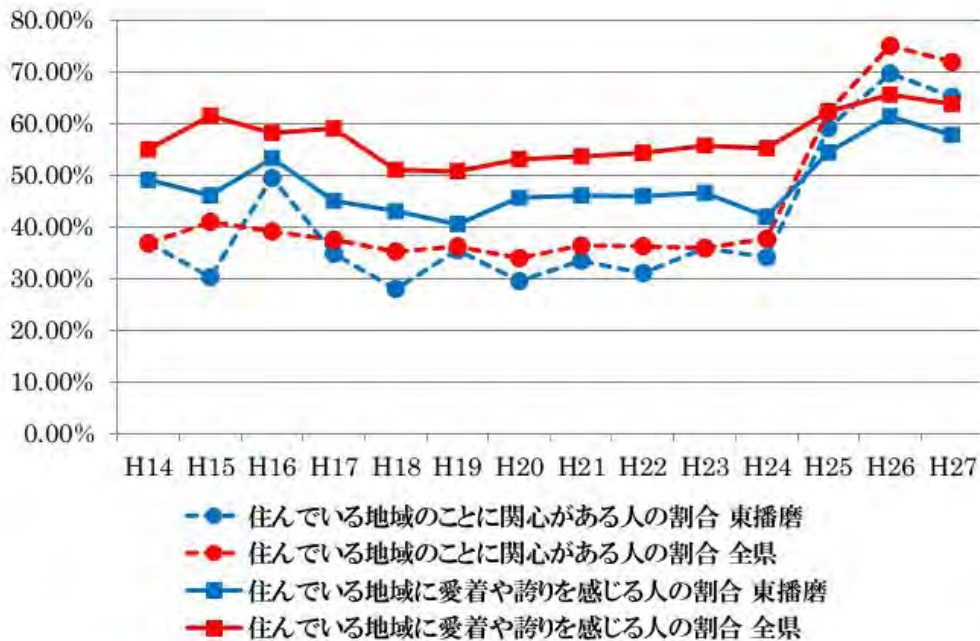
ソーシャル・キャピタルは、アメリカの政治学者バットナムにより定義されました。これは、人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴とされます。つまり、ソーシャル・キャピタルが高い地域、例えば、信頼性が高い地域で商売をする場合、騙される不安が少ないため、それに備えるコストが不要になります。そのため、信頼がない地域と比べて効率性が上がることとなります。

各構成要素における個別指標

| 構成要素 | (サブ指標) | 採用する個別指標 |
|------------|--|--|
| I. つきあい・交流 | (近隣でのつきあい) | (i) 隣近所とのつきあいの程度 (ii) 隣近所とつきあっている人の数 |
| | (社会的な交流) 単純平均値を算出 ↓ つきあい・交流指数 | (iii) 友人・知人とのつきあいの頻度 (iv) 親戚とのつきあいの頻度 (v) スポーツ・趣味・娯楽活動への参加状況 |
| II. 信頼 | (一般的な信頼) | (VI) 一般的な人への信頼 |
| | (相互信頼・相互扶助) 単純平均値を算出 ↓ 信頼指数 | (VII) 近所の人々への信頼度 (VIII) 友人・知人への信頼度 (IX) 親戚への信頼度 |
| III. 社会参加 | (社会活動への参加) 単純平均値を算出 ↓ 社会参加指数 | (X) 地縁的な活動への参加状況 (xi) ボランティア活動者率 (xii) 人口一人当たり共同募金額 |

(出典：平成 19 年度版国民生活白書)

②住民の特徴



ここからは兵庫県豊かさ指標と呼ばれる、住民へのアンケート調査を元に、加古川地域の住民の特徴、ソーシャル・キャピタルの状況を明らかにします。ただ、統計は東播磨地

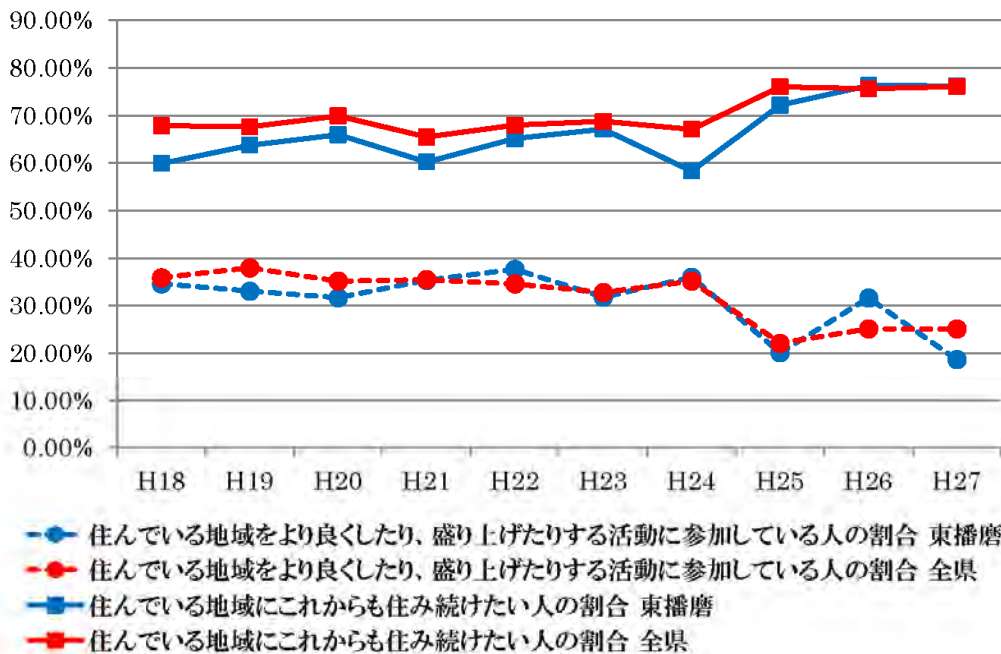
域を対象としていますので、加古川地域である、加古川市、高砂市、稲美町、播磨町の他、明石市も含まれます。

最初は地域への関心や愛着を持つという項目です。地域と自分との関係です。

東播磨地域では、住んでいる地域のことに関心がある人の割合は、平成 24 年度までは、40%を下回っています。同様に全県の場合と同様の傾向を示しています。

次に、住んでいる地域に愛着や誇りを感じる人の割合については、東播磨地域では、平成 24 年度までは 50%を下回っています。また、東播磨地域は兵庫県よりもその割合が低くなっています。

地域への関心、愛着は地域の安心や安全と関係があります。地域に関心がなければ、地域を観察して危険を見出す機会が減少するためです。

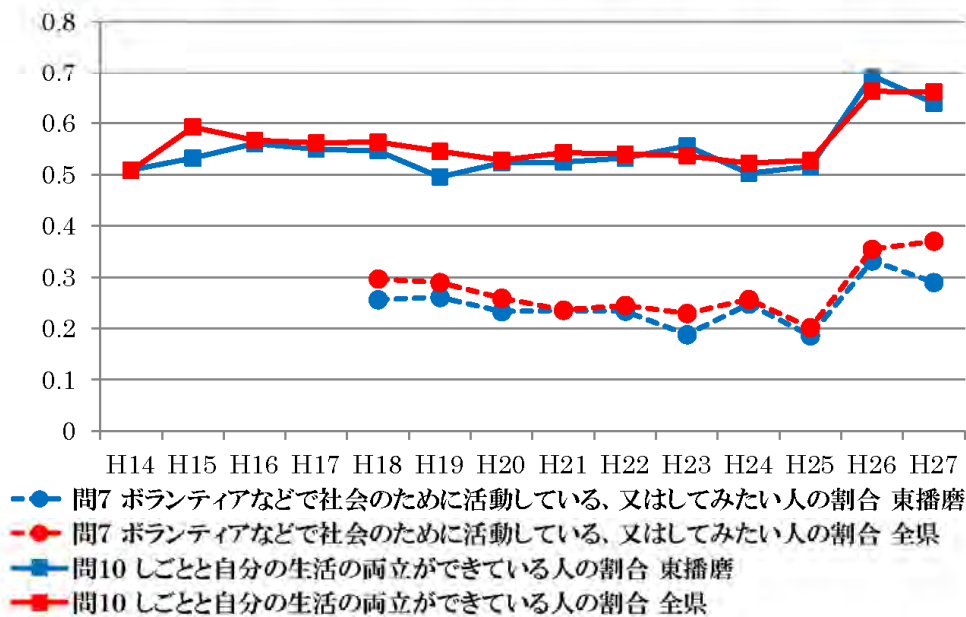
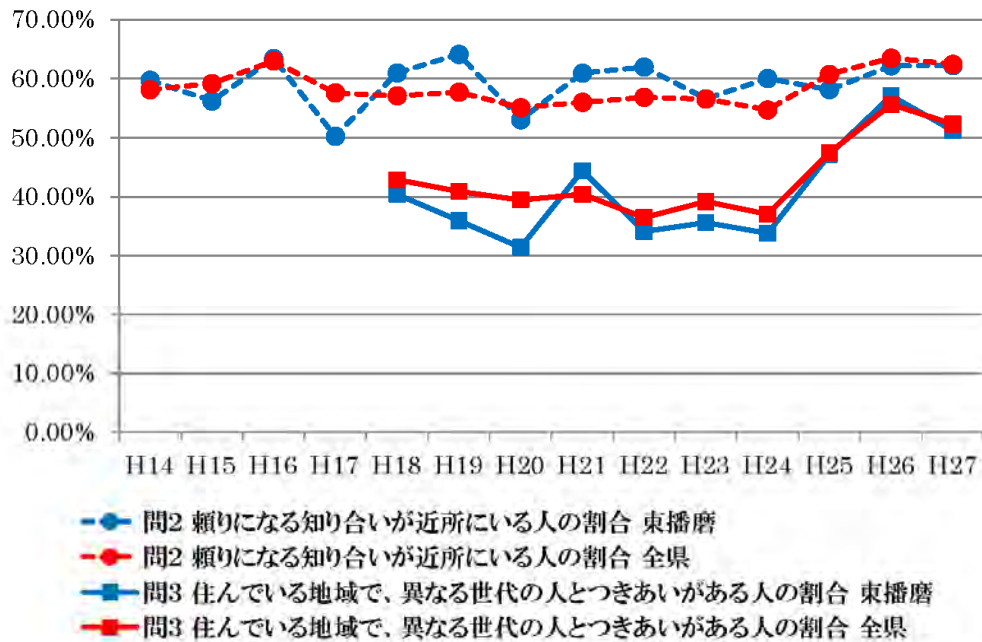


この地域に住み続けたい、という方は多いようです。しかし、その一方で、活動をしている人の割合は小さい、という結果が得られました。住み続けるためには、いろいろと活動をして欲しいのですが、その割合は低下する傾向にあるようです。ただし、これは東播磨だけではなく、全県下とほぼ同様の傾向とも思われます。

次に、地域における他者との関係を図に示します。

近所に頼りになる人がいる、つまり近所づきあいが盛んである、信頼があるという回答は 6 割程度を占めています。これは東播磨、全県下とも同様の傾向を持っています。

また異なる世代の人との付き合いがある人の割合は、平成 24 年度から上昇する傾向が見られます。幅広く地域での関係を深めようとしているのかもしれませんが。



自分の生活においてバランスがとれている（ワークライフバランスと呼びます）割合は高いのですが、ボランティア活動に勤しむ方は少ないようです。仕事以外にも社会に役立つことも人生のバランスには必要になります。

ボランティアで社会のために活動している人、またしてみたい人の割合は平成 26 年度から上昇する傾向にあるようです。ただ、東播磨地域の場合、その比率は全県下よりも低いことがわかります。

このように、ソーシャル・キャピタルの観点から東播磨のちからを考えて頂くことも大事ではないでしょうか。

以上の内容について、より詳細な情報が欲しい方は、下記のページをご覧ください。

- <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000011w0l-att/2r98520000011w95.pdf> (厚生労働省資料「ソーシャル・キャピタル」《PDF ファイル》)
- https://web.pref.hyogo.lg.jp/pref/cate3_638.html (「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査)

高等学校における熟議に関する授業

授業のねらい

グループでの話し合いから、新たな知見を作り上げていく過程を学ぶことにより、「熟議 2015 in 兵庫大学」での議論の円滑な進行を可能にするとともに、市民の一人として議論に加わることの意義を踏まえ、もって熟議の有用性についても理解を深める。

授業内容

| タイトル | 内容 |
|------------|--|
| 熟議とはなにか | <p>【概要】「熟議 2015 in 兵庫大学」についての説明と民主主義国家におけるの熟議の意義を学びます。</p> <p>【取り上げる項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 熟議の定義（熟慮して議論をすること）の説明。 ・ 兵庫大学での熟議の様子やその成果に関する提示。 ・ 議会制民主主義を補完する熟議の意義と役割についての解説。 |
| ワークショップの役割 | <p>【概要】ワークショップがどのような場面で採用されているか、具体的な進め方について学びます。</p> <p>【取り上げる項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ワークショップの種類や意味。「モノ」を作り上げる機会であること。 ・ ディベートとの違いやワークショップ形式として、話し合いながら結論を導き出すことの意味。 ・ KJ 法とその応用。 ・ ファシリテーターの役割。 |
| ワークショップ実践 | <p>【概要】グループに分かれてワークショップを実践しましょう。ファシリテーターは教員が務めます。</p> <p>【取り上げる項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ アイスブレイキングを兼ねてのグループ分け。（※グループが一つの場合はアイスブレイクのみ） ・ テーマについて、各自での考察。 ・ 考察したことをポストイットに、1つの項目を1枚に記載。 ・ 発表しながら模造紙に貼付。 ・ ファシリテーターの指示により、意見を集約。 ・ まとまった意見を発表。 |

準備物

ワークショップを行うための一式。（※兵庫大学で準備）

平成 27 年 10 月 31 日

「熟議 2015 in 兵庫大学」事前の学習

日 時：平成 27 年 10 月 31 日 14 時～15 時 30 分
会 場：兵庫大学エクステンション・カレッジ 104 教室
講 師：田端和彦（兵庫大学生涯福祉学部教授／エクステンション・カレッジ長）

本日の予定

1. 自己認識シートの作成
2. 熟議とは何か
3. ワークショップの役割
4. ワークショップ実践

1. 自己認識シートの作成

自己認識シートは、10 の能力についての自分で評価する方法です。

それぞれの能力について、自信があるかどうかで判断をします。自己認識シートには「できること」の 3 つ具体例が示されています。3 つは上から順により難しい内容になっています。学校生活、日常生活を振り返り、できることに左の四角欄に✓を入れてみてください。

もし、3 つ全てに✓が入っていれば、それは「かなり自信がある」といっているのではないのでしょうか。このように、経験から自分の能力を振り返ってください。

2. 熟議とは何か

今日は、熟議型民主主義、という言葉もあわせて覚えてください。18 歳になると選挙権を持つことになります。これは政治への参加を意味します。投票により選ばれた代表者が議論をして国民や住民に影響がある法律や予算を決定します。しかし、これだけでは身近な希望や利害を調整することができない場合も多くあります。そこで、関係者が集まって議論をする場が、議会制民主主義を補完するために必要になってきました。それが熟議型民主主義の考え方です。

兵庫大学の熟議は熟議型民主主義に基づいて実施されます。

3. ワークショップの役割

ワークショップは、働きモノを作る場になります。何を作るのか、といえば議論をまとめて結論を作っていきます。協力をして結論や提言を作成するために議論をしましょう。

議論を進めやすくするために様々な工夫が行われます。その一つが、KJ 法の応用になります。

4.ワークショップの実践

最初に、自己紹介用の三角名札を作成します。
名前と自分の好きな食べ物を書いてください。

①アイスブレイキング（自己紹介を兼ねて行います）

- (1)名前と自分が好きな食べものを、なぜ自分が好きか理由を述べて紹介しましょう。
- (2)時間は1分間です。
- (3)自己紹介をしているときはしっかりと聞いてください。
- (4)最後に質問をします。

②概要説明

議論をする課題を説明します。課題は、「自分の身の回りで感じる危険」です。

身の回りで感じる危険はどのようなものか、それを出します。整理をして課題と思う危険性を一つ選び、少しでも減らすためにどうすればよいか、を話し合います。

まず、目の前の模造紙を半分に折ってください。

③表明

今回はポストイットを使って KJ 法を応用した方法で行います。最初に、自分が感じたことがある危険を1項目、1枚のポストイットにマジックペンを使い書いてください。今回は、一人5枚以上書きましょう。書いた後、それを表明しながら、テーブルの上の模造紙の半分側に貼り付けていきます。

④意見交換

ポストイットの利点は、はがせることです。表明されたポストイットを眺めながら、これはどの意見に近いかなど意見交換をしながら、ポストイットの集団を作っていきます。

ポストイットの集団ができれば、マジックペンで囲み、その上にタイトルをつけましょう。

そして、課題となる「自分の身の回りで感じる危険」をまとめましょう。

少しでも危険を減らすためにはどうすればその解決の方法を考えていきます。

⑤表明（Part.2）

今度は、危険を減らすためにどうすればよいか、自分で考えた方法を1項目、1枚のポストイットにマジックペンを使い書いてください。書いた後、それを表明しながら、テーブルの上の模造紙の残り半分側に貼り付けていきます。

⑥意見交換（Part.2）

表明されたポストイットを眺めながら、これはどの意見に近いかなど意見交換をしながら、ポストイットの集団を作っていきます。

ポストイットの集団ができれば、マジックペンで囲み、その上にタイトルをつけましょう。そしてその集団同士を結びつけていくと、解決策が見えてきませんか？

「熟議 2015 in 兵庫大学」参加者・アンケート

長時間の熟議での議論、お疲れ様でした。

この調査は記名式のアンケート調査です。閉会後にご記入頂き、会場の出口に用意しております回収箱にお入れください。

アンケートは「熟議 2015 in 兵庫大学」の後、テーマである安全・安心に対する考え方や熟議に対する印象がどのように変化をしたのかを確認し、今後の本学での事業に活用するとともに、地域に関する政府、自治体への提言等に活用することをめざしております。ご回答は選択肢の番号を右欄に記入するか、欄に記述をしてください。

なお、当該調査票は兵庫大学・兵庫大学短期大学部にて厳重に保管し、統計的に処理をした結果のみを公表する予定です。調査票にご記入を頂くお名前等は事前に行いましたアンケートとの結合を図るためであり、お名前を他の用途に用いることはございません。ご理解の上、ご回答についてお願いいたします。

1. お名前を下記にご記入ください。

| | |
|-----|--|
| お名前 | |
|-----|--|

ここからは「熟議 2015 in 兵庫大学」に対しての皆様のご意見等について伺います。

2. 参加されて満足でしたか。1つ選び、右欄に番号を記入してください。

- ① とても満足
- ② まあ満足
- ③ どちらともいえない
- ④ やや不満足
- ⑤ とても不満足

3. 「熟議 2015 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいと思われますか。1つ選び右欄に番号を記入してください。

- ① 積極的に活かしたい
- ② 機会があれば是非活かしたい
- ③ どちらともいえない
- ④ あまり活かしたいとは思わない
- ⑤ どう活かせばよいのかわからない

4. 「熟議 2015 in 兵庫大学」は、これまでご経験のあった話し合いやワークショップなどと比べどのように思われましたか。それぞれの設問について、1つに○を付けてください。

| | | 非常に思う | 思う | どちらともいえない | あまり思わない | 全く思わない |
|---|--|-------|----|-----------|---------|--------|
| 1 | 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった | 5 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| 2 | 熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった | 5 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| 3 | これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた | 5 | 4 | 2 | 1 | 1 |
| 4 | 熟議を通して、テーマ（加古川地域のちから）について、興味や関心がより高まった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5 | 議論の内容が充実しテーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6 | 課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7 | 最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

5. 「熟議 2015 in 兵庫大学」のように市民の行う熟議は、現在の行政でどのように役立つとお考えになりますか。それぞれの設問について、1つに○を付けてください。

| | | 非常に思う | 思う | どちらともいえない | あまり思わない | 全く思わない |
|---|---|-------|----|-----------|---------|--------|
| 1 | 市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである | 5 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| 2 | 熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3 | 熟議の後に調査を行うことで、政策について人々の意向（民意）を知ることができる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4 | 互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5 | 熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

6. 「熟議 2015 in 兵庫大学」の議論の段階で、あなたにとってはどのような成果がありましたか。最も近いものを下記から1つ選び右欄に番号を記入してください。

- ① 自分の意見を述べる事ができた
- ② 他の人の意見を聞く事ができた
- ③ どのように議論を進めるのか、理解する事ができた
- ④ 結論や提案を知ることができた
- ⑤ 多くの人と交流することや話をする事ができた
- ⑥ その他（

7. この設問は社会人の方のみご回答ください。学生、高校生は、次のページにある設問8にお進みください。 熟議での議論を踏まえ、議論を円滑に進めたり、結論を導いたりするために必要と思われる下記の資質それぞれの重要度について、5段階で評価をしてください。

| | 非常に重要 5 | 4 | 3 | 2 | 1 全く重要ではない |
|---------------------|------------|---|---|---|---------------|
| 【例】 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ①物事に進んで取り組む自主性 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ②要点を把握し論理的に考える思考力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ③目標に向かって行動する実行力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ④状況に合わせて適切に対応する能力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑤人に働きかけ行動を促す交渉能力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑥相互理解のためのコミュニケーション力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑦課題解決をはかるための計画性 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑧規律を守ること | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑨チームをまとめ適切に運営する能力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑩チームに参画する貢献性 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

8. テーマである地域の安心・安全についての、下記のような考え方についてあなたは、賛成ですか、それとも反対ですか。あてはまるもの1つに○をつけてください。

| | | 大いに賛成 | やや賛成 | 普通 | やや反対 | 大いに反対 |
|----|--|-------|------|----|------|-------|
| 1 | 人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2 | 安心・安全を創るためには、住民同士での熟議が必要である。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3 | 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている。 | 6 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4 | 他者との間で信頼関係を築き、ネットワークを形成するには、一人ひとりの能力の向上が必要である。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5 | 安心・安全を創るには、堤防や防犯カメラなど、目に見える施設や設備に頼る方がよい。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6 | コミュニティでの日常的な活動が安心・安全を創ることに役立っている。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7 | 行政や制度で支援や対応できない場合、住民が互いに助け合うことが必要となる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8 | 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9 | 安心・安全を創るのは、地の人 [※] の役割であり、風の人 [※] は関わらないものである。 | 6 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10 | 大学は安心・安全を創るため果たすべき役割がある。 | 6 | 4 | 3 | 2 | 1 |

※「地の人」とは地域活動を支える基礎になる人々で、長く住み、地域にネットワークを持って活動し、地域の変化にも敏感である。地の人には、長い歴史と伝統が蓄積されており、それらを熟知している強みを持つ。また「風の人」とは外から地域に文化をもたらし、考え方をもち活動をする人々で、外から地域に訪れ、その地に魅かれている。外にある変化を捉え、その地域にある頑なな考え方や心情をときほぐす役割を果たす。

ネット学習による「熟慮」について、今後の改善のため「使いやすさ」「理解しやすさ」などのご感想をお書きください。

今回の熟議についてお気づきの点、ご意見等ご自由にお書きください。

自己認識シート(事後評価)

| | | |
|-------|----|---|
| 学校名 | | |
| 科・コース | 学年 | 年 |
| 氏名 | | |

※下記に示された各能力にに対し、今のあなたに当てはまると思われる「④レベルの欄」の1～5を○で囲んでください。

| ①能力 | ②能力の説明 | ④レベル | | | | |
|-----|----------------------------|----------|-------|-----|----------|-----------|
| | | かなり自信がある | 自信がある | ふつう | あまり自信がない | まったく自信がない |
| 自主性 | 物事に進んで取り組む力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 思考力 | 問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 実行力 | 目標に向かって行動する力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 対応力 | 状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 交渉力 | 人との間わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 会話力 | 相手と意思疎通(そつう)を図る力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 計画力 | 現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 規律性 | 社会のルールや人との約束を守る力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 運用力 | 違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 貢献性 | 社会の担い手として役割を自覚して、参画する力 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

③「できること」の具体例

自分の目標や課題を定め、進んで取り組むことができる
 物事に對して、興味や関心をもって意欲的に取り組むことができる
 困難なことでも前向きに取り組むことができる
 現状を正しく理解するための情報収集や分析ができる
 物事の原因と結果を区分したり、問題の背景を考慮することができる
 問題を解決するために見通しをもって、順序立てて考えることができる
 自分の考えをもち、それらを確実に実行することができる
 設定した目標達成に向けて粘り強く取り組むことができる
 困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる
 相手やその場の状況を配慮しながら、柔軟に対応することができる
 自分の役割と他者の役割を的確に判断し、取り組むことができる
 物事が良い方向に流れるよう、まわりに働きかけられることができる
 取り決めのための話し合いの場を持ち、合意をめざすことができる
 協力することの意義や理由を、相手に対して明確に伝えることができる
 周囲の人に対して効果的に働きかける手段を活用できる
 自分の意見を具体的にわかりやすく伝えることができる
 相手の意見を丁寧に聞き、素直に受け止めることができる
 相づちや共感により、相手に話しやすい状況を作ることができる
 実現のために段階ごとに必要なことを把握することができる
 作業の過程を明らかにし、優先順位をつけて計画を立てることができる
 必要に応じて他者の意見も積極的に計画に取り入れることができる
 社会のルールやマナーの必要性を理解し、それらを守ることができる
 他者に社会のルールやマナー、また約束を守るように促すことができる
 異なる立場を理解しながら社会のためのルールや約束を結ぶことができる
 自分の意見をもちつつも、他者の意見や立場も理解することができる
 チームの目的を明確にして、メンバーに働きかけられることができる
 異なる立場の人々とも力を合わせて物事を達成することができる
 地域や社会に参画することの意義や役割について理解している
 地域や社会に参画して、自分の役割を果たそうとする意志がある
 地域や社会の担い手として、使命感をもった取り組みができる

学生事後研修資料

熟議終了後の学生同士のグループワーク

| | | | |
|------|--|----|--|
| 学籍番号 | | 氏名 | |
|------|--|----|--|

熟議への参加、ご苦労様でした。これから振り返りのためのグループワークを行います。ワークショップ方式で話し合いをしましょう。

話し合う内容

①グループでは意見を大いに出し合い話したいことを全て話すことができましたか

②参加したメリットはどこにありましたか

グループワークとその発表の終了後、裏面のアンケート調査にお答えください。

加古川地域のちから～安心・安全を創る～

－「熟議 2015 in 兵庫大学」報告書－

発行日 2016年3月

発行 兵庫大学・兵庫大学短期大学部

〒675-0101

兵庫県加古川市平岡町新在家 2301 番地

TEL 079-427-5111

編集 兵庫大学熟議プロジェクトチーム

印刷 株式会社 大伸

ISBN978-4-9906842-3-5